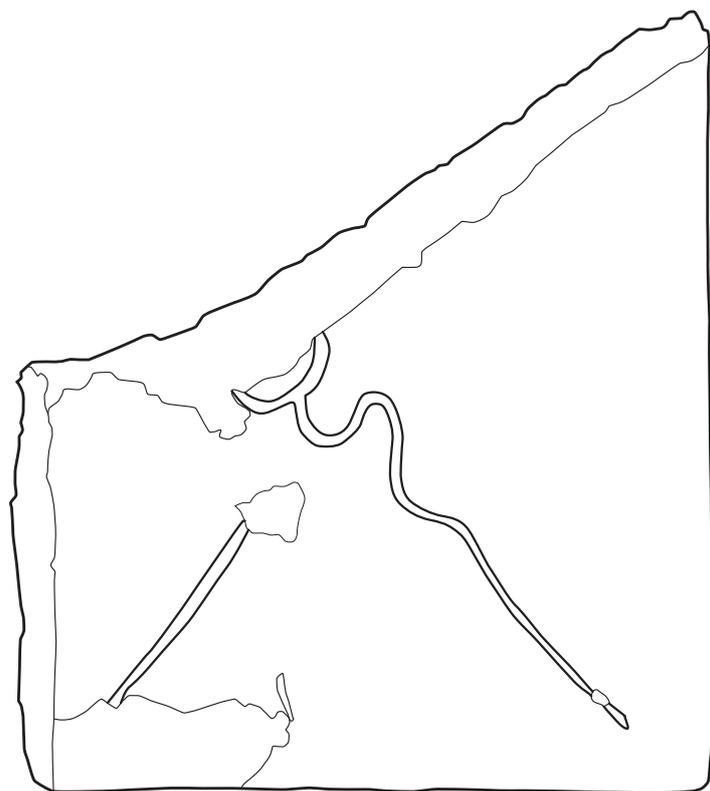


名古屋城調査研究報告9
埋蔵文化財調査報告書6

名勝名古屋城二之丸庭園 発掘調査報告書

第7次・第8次

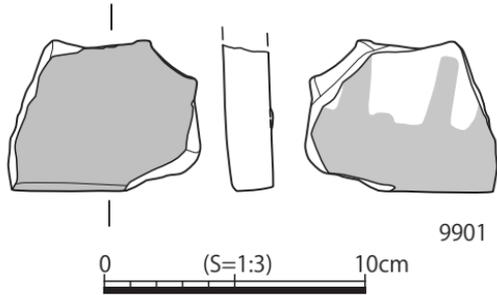


2024

名古屋城調査研究センター

正誤表

以下を(4)外縁調査区2 出土遺物(78ページ)に追加

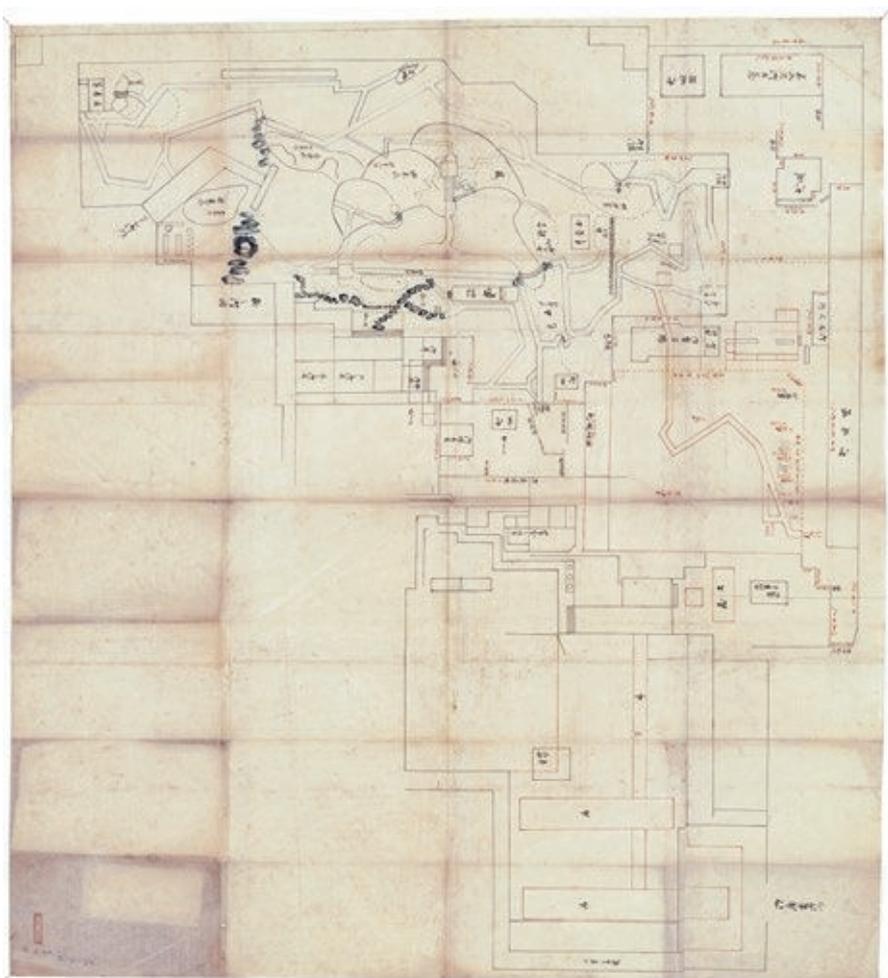


9901は20層から出土した施釉された平瓦である。残存する凹面全体と凸面前方部、前端部に銅緑釉が施釉されている。前端部は面取りされている。凹面の一部には布目痕が確認できる。胎土は灰白色で瀬戸・美濃製の陶器の胎土に類似している。

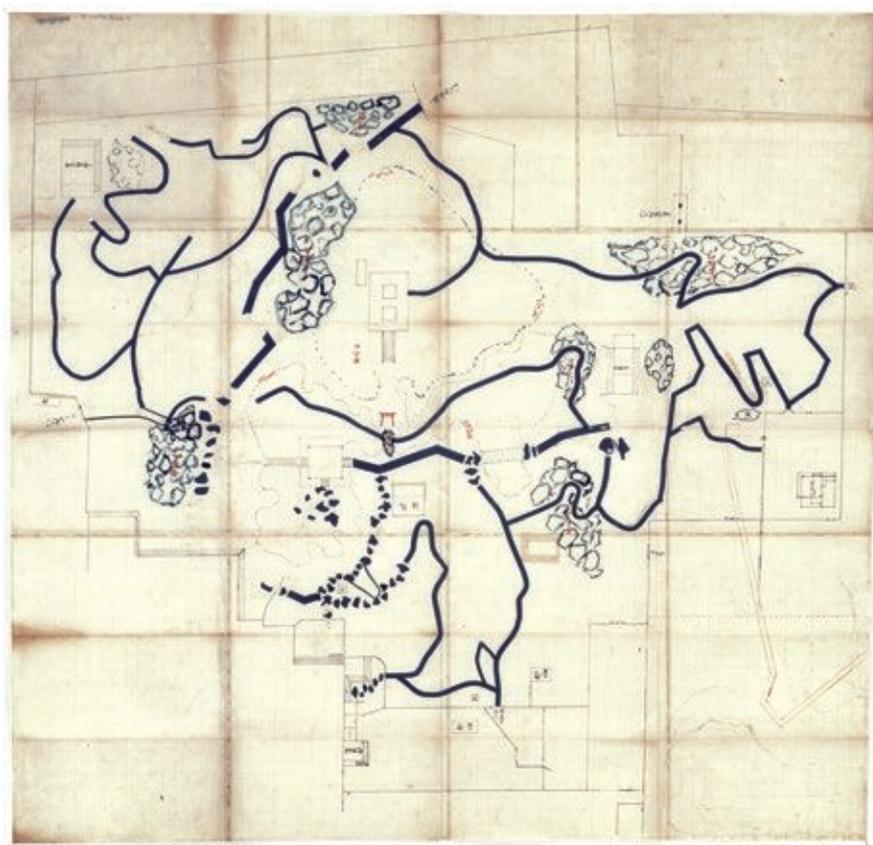
NO.	検出地点	種別	法量(mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
9901	20層	平	(70)	—	(56)	19	107	—	灰白色 灰白色	—	瀬戸・美濃	17世紀	銅緑釉が施釉されている



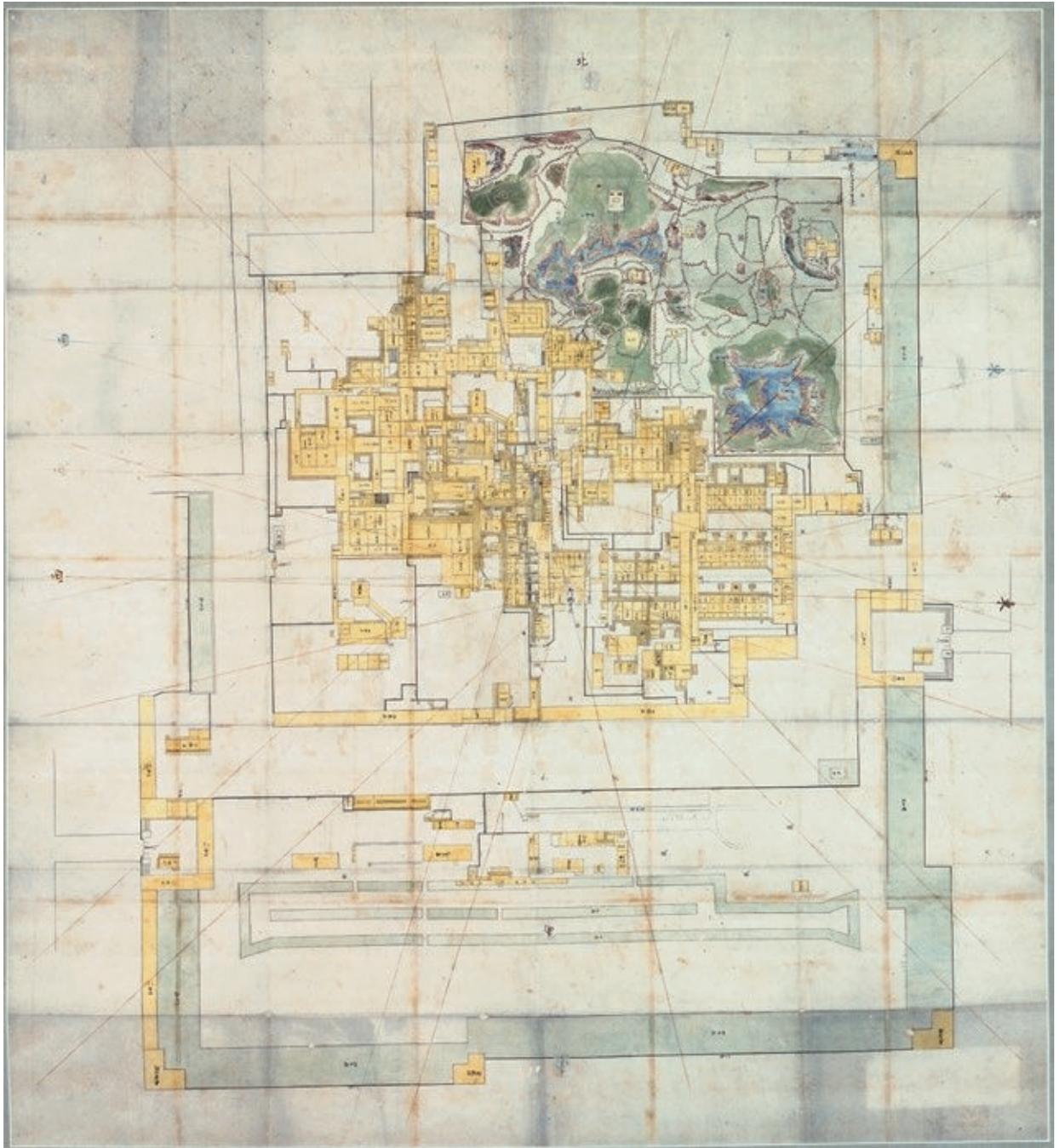
御城御庭絵図（名古屋市蓬左文庫蔵）



御城二之丸之図
(名古屋市蓬左文庫蔵)



二之丸御庭道及踏石図
(名古屋市蓬左文庫蔵)



御城二之丸図（名古屋城総合事務所蔵）



第7次 庭園調査区1 全景
1区 南から



第7次 庭園調査区1 タタキ面
1区 西から



第7次 庭園調査区1 全景
2区 南から



第7次 庭園調査区2
全景 西から



第7次 庭園調査区2
全景 北から



第8次 御殿調査区 全景 西から



第8次 庭園調査区 全景 西から



第8次 外縁調査区1 全景 南から



第8次 外縁調査区3 全景 南から



第8次 外縁調査区4 全景 南西から



第8次 外縁調査区2 全景 南から



第8次 外縁調査区5 東側 南から



第8次 外縁調査区6 全景 東から



第8次 外縁調査区7 全景 西から



第8次 外縁調査区9 全景 東から



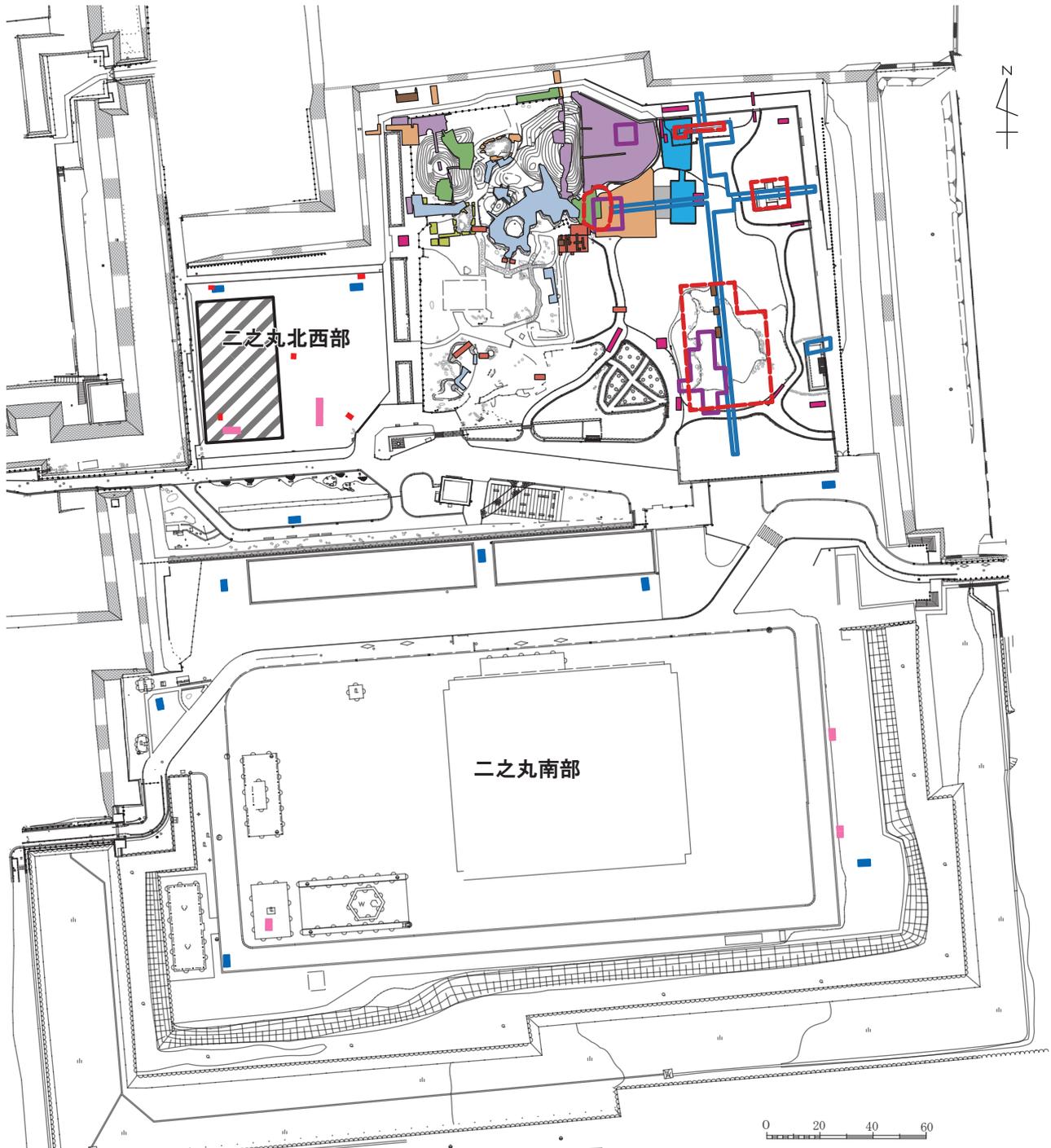
第8次 外縁調査区9 中央 北から



第8次 外縁調査区10 北側 北から



第8次 外縁調査区10 南側 北から



「二之丸地区」発掘調査地点

- ▨ 【試掘】2004年度(平成16) ※
- 【試掘】2008年度(平成20)
- ③⑥ 名古屋城二之丸地区試掘調査報告書第1次・第2次調査
- 2018～2019年度(平成30年度～令和元)
- ③⑨ 特別史跡名古屋城未告示地区(二之丸)発掘調査報告書
- 2020～2021年度(令和2年度～令和3)

※この範囲に12ヵ所(1×1m)のトレンチを設定した。

二之丸庭園発掘調査地点

- ①1974年度(昭和49)
- ①1976年度(昭和51)
- 1977年度(昭和52)
- ③⑩ 名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第1次～第3次
- 2013年度(平成26)(第1次)
- 2014年度(平成26)(第2次)
- 2015年度(平成27)(第3次)
- ③⑭ 名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第4次～第6次
- 2016年度(平成28)第4次
- 2017年度(平成29)第5次
- 2018年度(平成30)第6次
- 本報告書
- ③⑰2019年度(令和元)第7次
- ③⑱2020年度(令和2)第8次
- ③㉑2021年度(令和3)第9次
- ④㉒2022年度(令和4)第10次

例 言

- 1 本書は名古屋市中区二の丸に所在する名勝名古屋城二之丸庭園（以下、二之丸庭園という）で実施した第7次及び第8次発掘調査の報告書である。
- 2 調査は『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』（2018）及び『名勝名古屋城二之丸庭園保存管理計画書』（2013）に基づいて行った。発掘調査及び整理作業は名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター（以下、名古屋城調査研究センターという）が実施した。
- 3 調査の体制は次の通りである。

[発掘調査]

【第7次調査（2019年度）】

調査期間：2019年12月12日～2020年3月27日

調査担当：佐藤公保、木村有作、花木ゆき乃

排土工事：岩間造園株式会社 測量：株式会社パスコ

【第8次調査（2020年度）】

調査期間：2021年1月13日～2021年3月23日

調査担当：佐藤公保、花木ゆき乃、高橋圭也

排土工事：有限会社角田造園 測量：株式会社イビソク

[整理作業]

整理期間：2021年7月～2023年7月

整理担当：高橋圭也、花木ゆき乃、大西健吾
- 4 第7次調査の遺構写真は佐藤、木村、花木が、第8次調査の遺構写真は佐藤、花木、高橋が撮影した。遺物写真は高橋が撮影した。
遺物の実測、トレース、採拓の一部は大西、高橋が行い、一部は国際文化財株式会社に委託した。遺物の分類と計量は高橋が行った。
自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 5 本書の執筆は次の通り。第1章第2節は今和泉大（名古屋城調査研究センター）、第3章第3節 第4節 第4章第3節（3）遺構部分は花木、第4章第3節（2）の珪藻分析は野口真利江（株式会社パレオ・ラボ）、花粉分析は森将志（株式会社パレオ・ラボ）、タタキの成分分析は藤根久、米田恭子、竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が執筆した。上記以外は高橋が執筆した。編集は高橋が担当した。
- 6 本調査における出土遺物、写真、実測図等は名古屋城調査研究センターが保管している。

7 本調査において次の機関並びに個人から御協力、御教示を得た。記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略、2023年4月時点)

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	座長	瀬口哲夫 (名古屋市立大学名誉教授)
	副座長	丸山宏 (名城大学名誉教授)
	構成員	赤羽一郎 (前名古屋市文化財調査委員会委員長・ 元愛知淑徳大学非常勤講師)
	構成員	小濱芳朗 (名古屋市立大学名誉教授)
	構成員	高瀬要一 (公益財団法人琴ノ浦温山荘園代表理事)
	構成員	麓和善 (名古屋工業大学名誉教授)
	構成員	三浦正幸 (広島大学名誉教授)
	構成員	藤井讓治 (京都大学名誉教授)

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議	庭園部会	
	座長	丸山宏 (名城大学名誉教授)
	副座長	仲隆裕 (京都芸術大学教授)
	構成員	栗野隆 (東京農業大学教授)
	構成員	高橋知奈津 (奈良文化財研究所)

北林千明、水野信太郎、愛知県埋蔵文化財調査センター、INAXライブミュージアム、瀬戸市文化振興財団、東京都埋蔵文化財センター、徳川美術館、名古屋市教育委員会、博物館 明治村、文京区教育委員会

凡 例

- 1 本書において調査区を御殿、庭園、外縁に区分した。位置は図12に示した。
- 2 本書の水平基準は標高を表し、東京湾平均海面 (T.P) を使用した。
- 3 方位は座標北であり、座標は世界測地系第7系を使用した。
- 4 本書における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2016) による。
- 5 遺構略記号は文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』(2016) による。遺構番号は調査次ごとに付して一覧化した。本文には近世又は近代に構築されたと考えられる遺構と掲載遺物が出土した遺構を中心に記載した。
- 6 遺物の観察は出土遺物全てを対象にしたが、図化及び詳細な観察記録の作成は遺跡の評価に関わる遺物のみに行った。
抽出した遺物は調査年次に関わらず通し番号を振った。
- 7 遺物の分類は以下の通り。
種別は土器、須恵器、山茶碗、陶器、磁器、炆器、瓦類、レンガ・土類、金属製品、ガラス製品、石

油製品、自然遺物に分類した。レンガ・土類はレンガ、タタキ、モルタル、コンクリートを含む。土器、須恵器、山茶碗、陶器、磁器、炆器（以下、土器・陶磁器類という）とガラス製品、石油製品は形状から碗類、蓋類、皿類、鉢類、水柱類、鍋類、その他に分類した。

瓦類は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦に分類し、それ以外を道具瓦とした。個別の名称が明らかな道具瓦はその名称を記載した。平瓦と棧瓦の区別ができない瓦類と瓦当部の存在が確認できない平瓦を（平）と表記した。また、瓦当部の存在が確認できない丸瓦を（丸）と表記した。

金属製品は建物部材、その他に分類した。

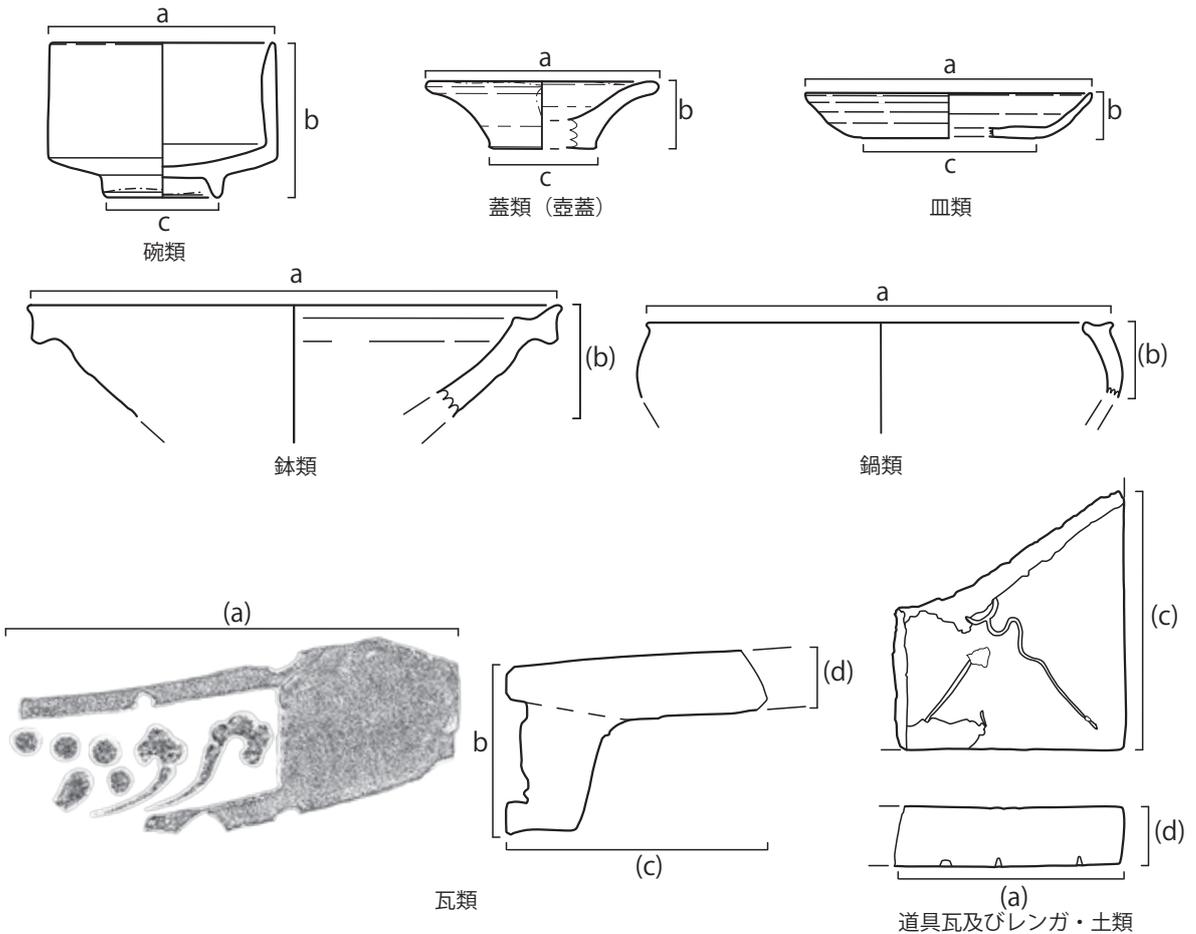
遺物の計測部位は下の図の通り。

- 8 遺構・遺物実測図の縮尺は各図中に示した。
- 9 本書での写真図版の縮尺は任意である。

遺物計測箇所

土器・陶磁器類は計測箇所は口縁径を a、高さを b、底径を c で示した。鉢類と鍋類は底径が残存している個体が出土しなかったため省略した。完全に残存していない箇所は () をつけて区別した。

丸瓦、平瓦、棧瓦は瓦当幅を a、瓦当高を b、長さを c、瓦当を除く厚さの最大値を d とした。軒丸瓦は a と b が近接する値となるため、原則 b を省略した。道具瓦及びレンガ・土類は幅を a、長さを c、高さを d とし、それ以外の箇所で計測を行った遺物ごとに明記した。



トーン凡例

- | | | | |
|-----|-------|-------|---------------------|
| 遺構図 | ■ タタキ | 遺物実測図 | ■ 釉薬 (瓦類に施釉されている場合) |
| | □ 礫敷 | | |

目 次

第1章 遺跡をとりまく環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 名古屋城二之丸の歴史的環境	2
第2章 既往の調査	
第1節 名古屋城の既往の調査	7
第2節 二之丸庭園の既往の調査	11
第3章 調査について	
第1節 調査に至る経緯	19
第2節 調査の目的	20
第3節 調査の方法	20
第4節 調査の経過	21
第5節 調査区設定の目的	21
(1) 第7次調査区	21
(2) 第8次調査区	22
第4章 調査成果	
第1節 基本層序	26
第2節 出土遺物の概要	27
第3節 遺構と遺物	28
第7次調査（2019年度）	
(1) 庭園調査区1	28
(2) 庭園調査区1の自然科学分析	35
(3) 庭園調査区2	45
(4) 外縁調査区	51
第8次調査（2020年度）	
(1) 御殿調査区	59
(2) 庭園調査区	63
(3) 外縁調査区1	71
(4) 外縁調査区2	73
(5) 外縁調査区3	78
(6) 外縁調査区4	81
(7) 外縁調査区5	84
(8) 外縁調査区6	87
(9) 外縁調査区7	91
(10) 外縁調査区8	94

(11) 外縁調査区9	97
(12) 外縁調査区10	101
(13) 庭園出土の敷瓦	106
第5章 総括	113
第1節 発掘調査の総括	113
第2節 遺構の年代及び性格の比定	113
図版1～9	
報告書抄録	

表 目 次

表1 二之丸関連年表	6	表25 御殿調査区瓦類観察表	62
表2 発掘調査一覧	8	表26 庭園調査区土器・陶磁器類観察表	70
表3 二之丸調査区一覧	16	表27 庭園調査区瓦類観察表	70
表4 発掘調査工程	21	表28 庭園調査区レンガ・土類観察表	70
表5 整理作業工程	21	表29 外縁調査区1土器・陶磁器類観察表	75
表6 第7次調査遺構一覧	22	表30 外縁調査区1瓦類観察表	75
表7 第8次調査遺構一覧	24	表31 外縁調査区1レンガ・土類観察表	75
表8 庭園調査区1土器・陶磁器類観察表	35	表32 外縁調査区2土器・陶磁器類観察表	78
表9 庭園調査区1瓦類観察表	35	表33 外縁調査区2レンガ・土類観察表	78
表10 堆積物の特徴	35	表34 外縁調査区3土器・陶磁器類観察表	79
表11 堆積物中の珪藻化石産出表	38	表35 外縁調査区3瓦類観察表	79
表12 分析試料一覧	38	表36 外縁調査区4土器・陶磁器類観察表	84
表13 分析試料の詳細	39	表37 外縁調査区4瓦類観察表	84
表14 タタキ胎土中の粘土の微化石類と砂粒組成の特徴	40	表38 外縁調査区6土器・陶磁器類観察表	90
表15 タタキ胎土中の粘土および砂粒組成の特徴	40	表39 外縁調査区6レンガ・土類観察表	90
表16 岩石片の起源と組み合わせ	40	表40 外縁調査区7土器・陶磁器類観察表	94
表17 各ポイントの蛍光X線分析結果	41	表41 外縁調査区7瓦類観察表	94
表18 X線回折分析による検出鉱物一覧	41	表42 外縁調査区8土器・陶磁器類観察表	97
表19 庭園調査区2土器・陶磁器類観察表	51	表43 外縁調査区8瓦類観察表	97
表20 庭園調査区2瓦類観察表	51	表44 外縁調査区9土器・陶磁器類観察表	100
表21 庭園調査区2金属・ガラス観察表	51	表45 外縁調査区9瓦類観察表	100
表22 弾頭出土地点	56	表46 唐草文施釉敷瓦一覧表	109
表23 外縁調査区土器・陶磁器類観察表	58	表47 近世遺構一覧表	116
表24 外縁調査区瓦類観察表	58	表48 近代遺構一覧表	117

図 版 目 次

図1 名古屋市域地形図 …………… 1	図31 御殿調査区平面図及び断面図……………61
図2 名古屋城曲輪配置図 …………… 1	図32 御殿調査区遺物実測図……………62
図3 17世紀前葉～中葉の境界（推定）…………… 3	図33 庭園調査区平面図及び断面図その1 ……66
図4 文政元年（1818）頃の境界（推定）…………… 3	図34 庭園調査区断面図その2 ……………67
図5 天保13年（1842）頃の境界（推定）…………… 3	図35 庭園調査区遺物実測図その1 ……………67
図6 名古屋城内発掘調査地点 …………… 7	図36 庭園調査区遺物実測図その2 ……………68
図7 名勝範囲 既往の調査位置図 ……………13	図37 庭園調査区遺物実測図その3 ……………69
図8 調査位置図拡大図1……………14	図38 外縁調査区1平面図及び断面図 ……………74
図9 調査位置図拡大図2……………15	図39 外縁調査区1遺物実測図 ……………75
図10 調査位置図拡大図3 ……………16	図40 外縁調査区2平面図及び断面図 ……………77
図11 史跡名勝指定範囲図……………19	図41 外縁調査区2遺物実測図 ……………78
図12 調査区位置図……………25	図42 外縁調査区3平面図及び断面図 ……………80
図13 基本層序模式図及び二之丸東西ライン柱状図…26	図43 外縁調査区3遺物実測図 ……………80
図14 出土遺物構成図……………27	図44 外縁調査区4平面図及び断面図 ……………83
図15 庭園調査区1配置図 ……………28	図45 外縁調査区4遺物実測図 ……………84
図16 庭園調査区1 1区平面図及び断面図…………31	図46 外縁調査区5平面図及び断面図 ……………86
図17 庭園調査区1 2区・3区平面図及び断面図…32	図47 外縁調査区6平面図及び断面図 ……………89
図18 庭園調査区1 1区・2区・3区断面図…………33	図48 外縁調査区6遺物実測図 ……………90
図19 庭園調査区1遺物実測図 ……………34	図49 外縁調査区7平面図及び断面図 ……………93
図20-1 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 ……42	図50 外縁調査区7遺物実測図 ……………94
図20-2 花粉分析のプレパラート写真 ……………42	図51 外縁調査区8平面図及び断面図 ……………96
図20-3 タタキとその胎土中の粒子の偏光顕微鏡写真…43	図52 外縁調査区8遺物実測図 ……………97
図20-4 元素マッピング分析結果 ……………44	図53 外縁調査区9平面図及び断面図 ……………99
図21 庭園調査区2石B実測図 ……………47	図54 外縁調査区9遺物実測図 …………… 100
図22 庭園調査区2遺物実測図 ……………47	図55 外縁調査区10平面図及び土層注記………… 104
図23 庭園調査区2平面図 ……………48	図56 外縁調査区10断面図…………… 105
図24 庭園調査区2断面図その1……………49	図57 文様区名称…………… 106
図25 庭園調査区2断面図その2……………50	図58 0516実測図…………… 107
図26 外縁調査区平面図及び断面図その1 ……54	図59 中心文様分類…………… 108
図27 外縁調査区断面図その2 ……………55	図60 全国出土唐草文敷瓦その1 …………… 110
図28 外縁調査区断面図その3 ……………56	図61 全国出土唐草文敷瓦その2 …………… 111
図29 外縁調査区遺物実測図その1 ……………56	図62 近世遺構集成…………… 119
図30 外縁調査区遺物実測図その2 ……………57	図63 近代遺構集成…………… 120

写 真 目 次

写真1	2区 景石C 南から	30	写真6	SK47 北から	97
写真2	1区 景石I 東から	30	写真7	SK49及び石50 南から	100
写真3	SS3及びSX4 北から	62	写真8	匝円礫敷 北から	103
写真4	SS29 北東から	82	写真9	SS52 北から	103
写真5	SS43及び管37（調査区西側）西から	92			

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

名古屋市は本州中央部の濃尾平野に位置し、伊勢湾に南面して緩やかな東高西低の地勢にある。市域の北から南にかけては庄内川・矢田川が、東から南にかけては山崎川・天白川・扇川が流れ、伊勢湾に注ぐ。また市の中心部には、名古屋城築城に際して開削された堀川が、台地部の西裾に沿って南北に通じている。

地形は、大きく丘陵・台地・低地の3つに分けることができる。丘陵は名古屋市北東部の北から順に竜泉寺丘陵、東山丘陵、鳴海丘陵、有松丘陵である。名古屋市域では標高30～110mあり、犬山市付近から知多半島まで続く尾張丘陵の一部である。

台地は市域中心部にある。熱田台地（熱田面）と守山台地（守山面）があり、両者に挟まれた凹地を大曾根凹地（大曾根面）と呼ぶ。熱田台地は6～9万年前に海底堆積物が隆起してできた洪積台地である。名古屋城はこの熱田台地の北西端に位置している。熱田台地は、名古屋城付近から熱田神宮付近までの南北15km程度、東西は広いところで3km程度の細長い台地である。西面と北面が断崖になっており、断崖の下には低地が広がる。低地の西側には庄内川が流れる。一方、南と東は平坦な地形で城下町の建設に適していた。台地の南端には熱田神宮とその門前町や港、東海道が位置した。

低地は木曽川や庄内川が運んできた土砂が堆積してできた沖積低地である。近世以降に埋め立てが行われ、南へ拡大している。

名古屋城（図2）の中心部は本丸、二之丸、西之丸、御深井丸からなり、各曲輪の標高は12～15mである。北と西が段丘崖に面し、低地との比高は約10mである。南と東は三之丸を経て熱田台地が続く。本丸、二之丸、西之丸、御深井丸は直線的な曲輪で、各曲輪や馬出は土橋によって接続されている。出入口は柵形や食い違いを用いて防御がなされている。三之丸は名古屋城の中心部の南東に位置し、二之丸と西之丸とは堀を挟んで隣接している。名古屋城北側の低地には新御殿と下御深井御庭が造られ、名古屋城と一体的な施設であった。

今回調査を行った二之丸は本丸の東側にある。二之丸の西は本丸大手馬出を通じて本丸、西之丸と接続している。北は本丸搦手馬出を通じて本丸、御深井丸と接続している。二之丸には二之丸御殿と御殿に付随する二之丸庭園の他に向屋敷や馬場が存在した。庭園は二之丸北部に位置しており、名勝に指定されている。

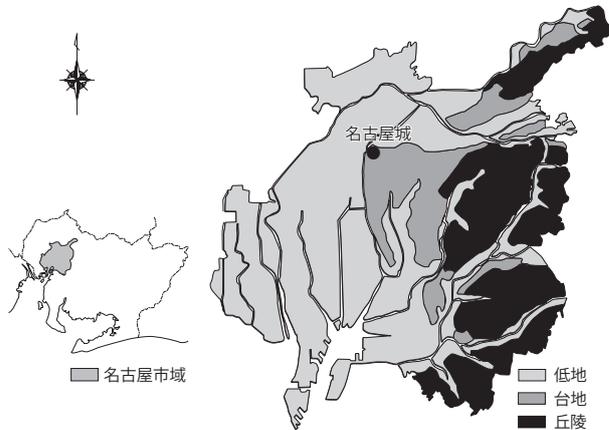


図1 名古屋市域地形図

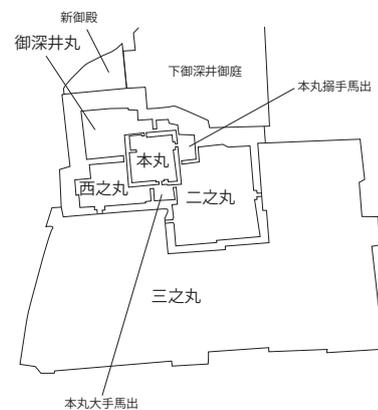


図2 名古屋城曲輪配置図

第2節 名古屋城二之丸の歴史的環境

1. 概要

名古屋城は濃尾平野を望む熱田台地の北西端に、徳川家康によって慶長15年（1610）に築城が開始された。この内、二之丸は天守の所在する本丸の内堀を挟んで東側に造営された。二之丸周辺には、かつて今川氏や織田氏が拠点とした那古野城が存在したとされるが、この頃までには廃城となっていた。

江戸時代を通じて、二之丸北部から中央部にかけては、二之丸御殿とそれに付随する庭園が存在した。この内、御殿は二之丸中央部に所在した。この区画には、築城直後は平岩親吉（1542～1611）の屋敷が存在したとされるが、後に二之丸御殿が築造され、元和3年（1617）には作事が完了した。初代尾張藩主の徳川義直（1600～50）は、元和2年（1616）の入部以来、本丸御殿を日常的な居所としていたが、元和6年（1620）に二之丸御殿に移った。以後、同所が藩主代々の在国中の居所となり、尾張藩の施政の場となった。また、幕閣や親族らが名古屋城へ立ち寄り際などには、対面・饗応の場ともなった。

この御殿には、「中御座之間」をはさむ北・南の一角に庭園が造営された。この内、南側の御庭は、御殿の建物に囲まれた小規模の庭園であった。他方、北庭は二之丸北辺の土堀まで広がりを持つ庭園で、寛永年間（1624～44）には完成したとされる。以後、二之丸庭園はこの北庭を中心に展開していく。この北庭には、東西に広がる池が中央に位置し、当初池の北東から東にかけては「御祠堂」・「金声玉振閣」といった建物が構えられた。池の北側には築山が築かれ、西側には矢場や花壇が設けられ種々の植栽が空間を占めたとされる。

この庭園は文化・文政年間（1804～30）、10代藩主・斉朝の代に大きく改造され、回遊式庭園に姿を変えた。まず庭園の規模が東・南東へ拡張され、「風信」・「余芳」をはじめ多くの茶亭が造られた。また、桜・梅・松・椿などの樹木や色彩豊かな花、池・築山などが造営されたことが古絵図等からうかがえる。花見の季節には家臣に対して庭園の拝見が度々許可され、茶亭で料理が振る舞われるなど、藩主・家臣間の交流の空間としても活用された。また嘉永元年（1848）には、美濃高須藩主・松平義建（のちの14代尾張藩主・慶勝の実父）が二之丸御殿・庭園を訪れ、「風信」・「余芳」といった茶亭や「東御泉水」・「鹿山」といった池・築山を遊覧し、茶亭「霜傑」で煎茶と菓子のもてなしを受けたことがわかっている。

一方、二之丸の南部は、築城当初は付家老の成瀬・竹腰両家の屋敷が所在した。その後、1663年（寛文3）に両家が三之丸に屋敷地を拝領し居を移すと、この地には「馬場御殿」「向御屋敷」などと呼ばれる御殿が建てられ、馬場・矢場等が設けられた。その後は、江戸時代を通じて藩士の鍛錬の場となり、ときに藩士の武芸稽古が藩主の上覧に供されることもあった。

明治になると、二之丸は陸軍省所管となり、二之丸にあった建造物は破却されていった。明治6年（1873）には二之丸御殿が取り壊され、その跡地に兵舎が建設された。また、これに先立つ明治4年（1871）には、庭園内の茶亭「風信」・「余芳」が民間に売却された。これ以降、軍関連施設の建設は続き、終戦時には二之丸地区内に50棟を超える建物が存在していたとされる。このようにして江戸時代の施設・構造物は姿を消し、二之丸の様相は大きく変貌した。但し、二之丸庭園の北西に位置する北庭、栄螺山等については一部に手が加えられたものの、形態等は江戸時代の元の姿を留めたと考えられ、北庭の南にあった将校集会所の裏庭として利用された。また明治12～13年（1879～1880）には、吉田昭和の指揮のもと、将校集会所

周辺の庭が整備され、北庭の池底も修理された。

終戦を迎え、多くの陸軍の施設は除去され、一部が名古屋大学等の校舎や学生寮として利用された。1960年代以降に公園整備に伴う造成が始まると、こうした建物は除却され、昭和の発掘調査の成果を基に二之丸は現在見られる姿となった。

2. 二之丸御殿・庭園の境界の変遷

二之丸は江戸時代を通じて建物や塀、植栽などの改変が頻繁に行われた。そうした機会に御殿・庭園の境界も変遷していったが、現存する史資料から推定される各時期の境界を示すと、図3～図5のようになる。図3～図5はそれぞれ、17世紀前葉～中葉、文政元年（1818）頃、天保13年（1842）頃の二之丸御殿・庭園の境界（推定）を示した図である。主に、図3は『尾州二之丸御指図』（徳川林政史研究所蔵）・『中御座之間北御庭惣絵』・『金城温古録』（名古屋市蓬左文庫蔵）、図4は『御城二之丸之図』（巻頭2）・『二之丸御庭道及踏石図』（巻頭2）・『金城温古録』（名古屋市蓬左文庫蔵）、図5は『御城二之丸図』（巻頭3）（名古屋城総合事務所蔵）・『金城温古録』（名古屋市蓬左文庫蔵）を基に推定した。

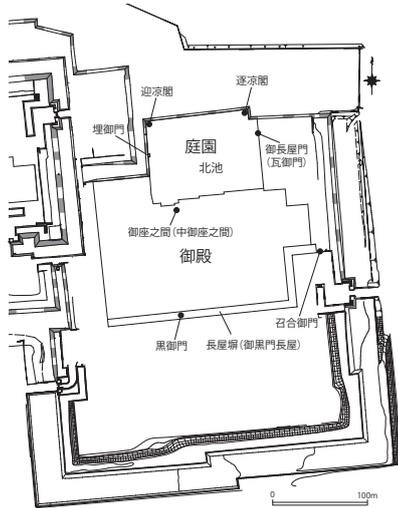


図3 17世紀前葉～中葉の境界（推定）

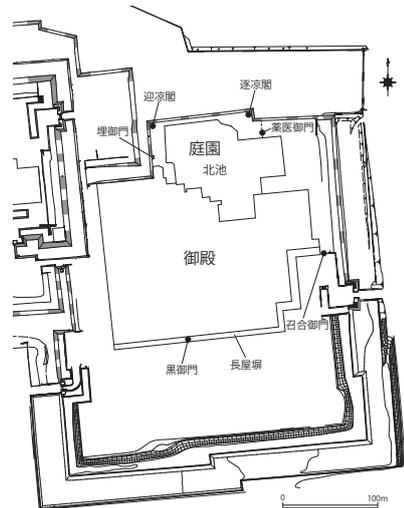


図4 文政元年（1818）頃の境界（推定）

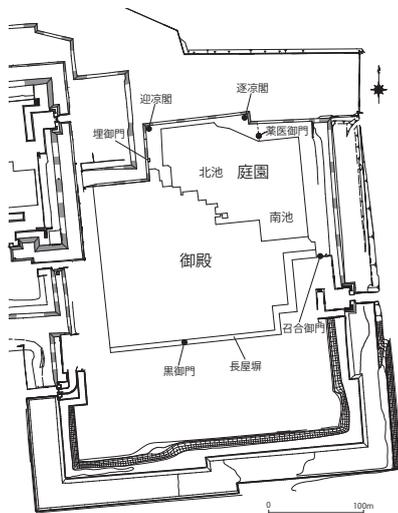


図5 天保13年（1842）頃の境界（推定）

御殿の境界については、西境界は江戸時代を通じて図3～図5のようにほぼ変わらなかったと考えられる。南境界については、御殿南西部から南東部の召合御門までを囲う長屋塀が御殿築造当初から存在したと考えられるが、寛文3年(1663)10月から「御黒門長屋」の作事がなされ、南へ15間張り出す形で移転された(図3から図4の位置へ)。「召合御門」以北の東境界については、御殿東部に位置した長局等の建物の改変により、その都度変化していったと考えられる。北境界については、時代が下るにつれて庭園が南東へ拡大していくことに伴い、図3～図5のような変化が確認される。

他方、庭園の境界については、まず図3段階では、二之丸の北・西の各城壁がその北境界・西境界であったと推測される。その後図4段階までに、これらの城壁の内側にさらに高塀が築かれ、庭園本体とその外側の外縁が分け隔てられる空間構造となった。南境界については、17世紀前葉～中葉は御殿「中御座之間」とその東に続く土蔵群がそれに該当した。その後、図4までに南境界の東側が南方へ拡大していることがうかがえる。東境界については、図3段階では「逐涼閣」南東に位置した「御長屋門」(「瓦御門」とも)から南へ長廊下が続く、南境界にあたる土蔵群へ接続していた。その後、図4までにやや東へ拡大し、高塀が築かれた。そして、図5段階にはさらに東側へ拡張し、南境界の東側も南東方向へ広がることとなった。

3. 二之丸御殿・庭園・外縁の空間内部の変遷

二之丸御殿：御殿西部から中央部にかけては表・中奥・勝手向の建物が空間を占めたのに対し、東部は奥(内証部)の建物が空間を占めた。御殿西部から中央部については、建物・部屋の小規模な増改築・配置替え等が頻繁に行われたことは推測されるが、主要な建物・部屋は江戸時代を通じて同じ場所に位置したと考えられる。すなわち、南東から北西にかけて「御玄関」・「御広間」・「御書院」が雁行状に連なり、「御広間」の東側(「御書院」の北側)に「御夜居之間」・「長囲炉裏之間」が順に連結して位置した。その東側には、「御右筆部屋」といった役人らの御用部屋や「下御台所」など勝手向の建物・部屋が連なった。「御夜居之間」以北には、図3段階では「上御料理間」が、図5段階では「御焼火之間」が接続して存在した。その北西には「御数寄屋」等の建物・部屋が所在し、庭園・外縁との境界付近には、図3段階は「御木蔵」が、図5段階では御小納戸の御用部屋等が並んだ。「御夜居之間」の北東には、江戸時代を通じて、藩主の居所である「御座之間」(「中御座之間」)が位置し、江戸時代中期までにはさらにその北東に「梅之御間」・「桜之御間」が増築された。

他方、御殿東部を占める奥向の建物は、江戸時代を通じて幾度もの改変を経たことが文献・絵図などからうかがえる。特に、奥勤めの女中が居住する長局は頻繁に改変された。確認できる改変について言及すると、17世紀後半には、長局が南北2棟から東西に伸びる1棟に建て替えられたことがわかる。その後、文政元年(1818)から文政3年(1821)頃までの間に、同区画に存在した長局南北2棟が南西部(奥部玄関の西側)に移転し、その跡地に庭園が拡張された。また、天保11年(1840)から天保13年(1842)の間に二之丸御殿の改修が行われ、長局は二之丸御殿南東隅の長屋塀の真横に移転された。

二之丸庭園：庭園(北庭)については、図3段階では先述の通り、東西に広がる池が中央に位置し、池の北東から東にかけて「御祠堂」・「金声玉振閣」といった建物が構えられた。池の北側には築山が築かれ、西側には矢場や花壇が設けられ種々の植栽が空間を占めたとされる。北境界土塀の東端には「逐涼閣」、西端には「迎涼閣」と称される楼閣が建てられた。

庭園は、文化・文政年間、10代藩主・斉朝の代に大きく改造され、回遊式庭園に姿を変えた。この改造過程で、特に文化10年（1813）から文化14年（1817）頃までの間に、「新御席」・「風信」*・「玉壺亭」（後の「余芳」の場所とされる）・「多春園」・「植木屋」などと呼称される多くの茶亭・植栽空間が造られた。

文政元年（1818）から文政3年（1820）頃までの間には、先述の通り、二之丸御殿北東部の長局が南東へ移転し、その跡地に庭園が拡張された。この跡地には築山が造営され、その後文政6年（1823）までの間に南池（東御泉水）が整備されたと考えられる。このほか、文政4年（1821）までには茶亭「霜傑」が、文政6年（1823）から文政10年（1827）の間には、茶亭「余芳」が建造されたと考えられる。

外縁：図4・図5に見られるような、二之丸御殿・庭園を南東隅から北西にかけて圍繞する区画を、ここでは外縁として説明する。なお、江戸時代にはこの外縁の一部も「御庭」空間として認識されていたことがうかがえるが、以下では便宜上、庭園本体と区別して叙述する。

先述の通り、庭園の北・西の各境界は、当初二之丸の城壁と一致していたが、19世紀初頭までのどこかの段階でその内部に高塀が築かれ、庭園本体・外縁と区切られるようになったと考えられる。外縁空間は、図4・図5段階では「薬医御門」がその東側・西側を分かち境門として存在した。「薬医御門」の位置あたりには、図3段階では「御長屋門」があったと推測されるが、両者の連続性は不詳である。

「薬医御門」の西側の空間を見てみると、少なくとも図4段階には北西部（「迎涼閣」南側）に「御土蔵」が2棟（内1棟は「御文庫」として使用）あり、図5段階でも変わらず確認される。また、その南側には江戸時代を通じて「埋御門」があり、二之丸の北対岸に位置する下御深井御庭との行き来の際などに利用された。

庭園の東境界より東側（「薬医御門」より東側）は、当初「御花島御構」「丑寅御構」などと称された区画で、図3段階では「御鳥部屋」・「御くちやく部や」・「もみ蔵」等の建造物が存在した。その後、庭園の東境界が東側に拡大した図4段階では、北東隅に「御土蔵」（「不入火御土蔵」）・「御花壇」が、その南側に「御厩」・「御稽古場」が、東御土居の麓には南北に通る「御馬場」が存在した。この内、「御馬場」は文政3年（1820）に除却され、「下御深井松山の西」へ移されたと伝わる（「金城温古録」）。その後、天保14年（1843）春に元の所在地である外縁東に再建された。図5段階では、外縁北東隅に「御土蔵」（「不入火御土蔵」）が、東御土居の麓に「御稽古場」が確認される。

また、いずれの時期においても南東端に「召合御門」があり、外縁部の出入り口となっていた。

*『御城御庭絵図』での描かれ方から5畳であったと推定される。

表1 二之丸関連年表

年代		藩主・管理者	変遷
織豊期	天正8年以降	1580以降	-
			現在の二之丸周辺にあったとされる那古野城が廃城となる
江戸期	慶長15年	1610	初代藩主 義直 徳川家康による名古屋城築城の開始（『当代記』）
	慶長17年	1612	名古屋城天守完成 （正月27日 家康、二之丸の平岩親吉邸空館に止宿） 本丸御殿建築開始（『当代記』）
	慶長19年	1614	（10月 大坂冬の陣） 旧南御庭完成（御宿館の庭か）
	慶長20年	1615	本丸御殿完成 （4月9日 家康名古屋城に到着） （4月12日 義直・春姫婚儀） （5月 大坂夏の陣/ 義直出陣） （8月 家康、名古屋城に逗留）
	元和元年		
	元和2年	1616	（4月17日 家康逝去） 義直が尾張に正式に入国、駿府城から名古屋城に移居（『敬公實録』）
	元和3年	1617	二之丸御殿完成（『敬公實録』『事蹟録』『金城温古録』）
	元和6年	1620	この頃、義直が二之丸御殿に移る（以後、歴代藩主が居住）（『敬公實録』『金城温古録』） 「中御座之間北御庭」造営開始か
	寛永5年	1628	この頃「中御座之間北御庭」完成か （『事蹟録』『二之丸作事この頃すべて終了』、『中御座之間北御庭惣絵』）
	慶安4年	1651	二代藩主 光友 二之丸御殿に御祠堂、庭園に聖堂を建立（『敬公實録』）
	（不明）		四達堂周辺の改修（渡り廊下の撤去等）（『尾州御城絵図』）
	寛文4年	1664	権現山に熊野社と愛宕社を勧請（『金城温古録』『北御庭古図』）
	享保9年	1724	六代藩主 継友 聖堂を除却し法蔵寺へ下賜（『金城温古録』）
	文化10～14年頃	1813～1817頃	十代藩主 齊朝 庭園東側の丑寅御構方向に庭園を拡張し、新御席、風信、玉壺亭、多春園、植木屋を設ける（『尾州御留守日記』『御城二之丸之図』）
	文政元～3年頃	1818～1820頃	二之丸御殿の長局を移転し、跡地に庭園を拡張（『尾州御留守日記』）。 南池（東御泉水）もこの時期に整備されたか。
	文政3年	1820	馬場を下御深御庭の「桜花壇之内」に移転（『金城温古録』）
	文政4年	1821	10月に霜傑で菊花鑑賞の記録がある（『尾州御留守日記』）。 この頃までに庭園はひと通りの整備が完了か。
文政5年	1822	旧南御庭除却（能舞台を移設し時石の庭に）（『金城温古録』）	
文政6年頃	1823頃	聖堂除却（寛保3年建立か）（『金城温古録』）	
文政6～10年	1823～1827	余芳を設ける	
文政10年	1827	齊朝隠居に伴い下御深井西に新御殿を造営	
天保11～13年	1840～1842	十二代藩主 齊荘 二之丸御殿改修（長局を移転）（『金城温古録』）	
天保14年	1843	二之丸庭園の外縁線に馬場を再建（『金城温古録』『御城図面』）	
明治期 ～ 現代	明治4年	1871	十六代 義宜 余芳と風信を民間に売却（『御弘物入札綴』）
	明治6年	1873	陸軍省所管 二之丸御殿取り壊し、兵舎を建設
	明治12～13年頃	1879～1880頃	吉田紹和の指揮のもと、将校集会所周辺の庭を整備するとともに、池底の修理を行う（『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告 第十一』） 吉田紹和によって北庭の池底の修理を行い三和土とし、池水をためる（明治12年・『名古屋城調査資料1 史跡名勝二之丸庭園』） 池底の三和土は、水を溜めて鯉を飼うために、陸軍が行う（明治13年・同上）
	明治24年	1891	10月 濃尾地震発生 北園池の池底に亀裂生じたか（『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告 第十一』）
	昭和20年	1945	（天守焼失・太平洋戦争終結） 二之丸が大蔵省（現財務省）所管となる
	昭和23年	1948	名古屋大学が旧兵舎を学舎として利用
	昭和24年	1949	11月 旧兵舎を利用して名古屋学生会館が設立される
	昭和28年	1953	二之丸北部が名古屋城二之丸庭園として名勝（国）に指定（3月31日） 文部省が北御庭園池底を改修（～昭和30年）
	昭和34年	1959	（再建天守閣竣工）
	昭和38年	1963	東鉄門を本丸へ移築
	昭和39年	1964	西鉄門の解体 愛知県体育館竣工 名古屋大学が城外に移転
	昭和40年	1965	名古屋市 管理団体に名古屋市を指名
	昭和41年	1966	名勝指定範囲 二之丸庭園の整備（東入口・境界庭園など）
	昭和42年	1967	文部省所管 平成13年～ 名勝名古屋城二之丸庭園一般初公開 二の丸広場の整備
	昭和43年	1968	文部科学省所管 外縁西部の牡丹花壇整備
	昭和44年	1969	名勝指定範囲外 二の丸茶亭竣工
	昭和48年	1973	大蔵省所管 平成13年～ 名古屋学生会館（西側棟）焼失
昭和49年	1974	財務省所管 名古屋学生会館（東側棟）が焼失し、跡地を二之丸東庭園として整備することを条件に、 二之丸国有地の無償貸付が決定	
昭和52年	1977	二之丸を特別史跡に追加指定（答申・未告示）	
平成30年	2018	2月13日 二之丸庭園全域を名勝追加指定	

第2章 既往の調査

第1節 名古屋城の既往の調査

名古屋城では特別史跡及び名勝区域内で主に整備のための現況把握を目的とした発掘調査が行われている。特別史跡内では本丸御殿復元、搦手馬出石垣積み直し、西之丸整備等の史跡整備に先立つ調査が断続的に行われている。また、二之丸のうち名勝に指定されていない地区では平成30年度（2018）から令和3年度（2021）にかけて整備に先立ち遺構の残存状況を確認する試掘調査が行われた。

外堀を除く三之丸は特別史跡に指定されていないが、名古屋城三之丸遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地として開発に先立つ発掘調査が行われている（図6・表2）。二之丸における発掘調査位置は巻頭8と図7～10に示した。表2網かけ部分の詳細は本章第2節に記載した。

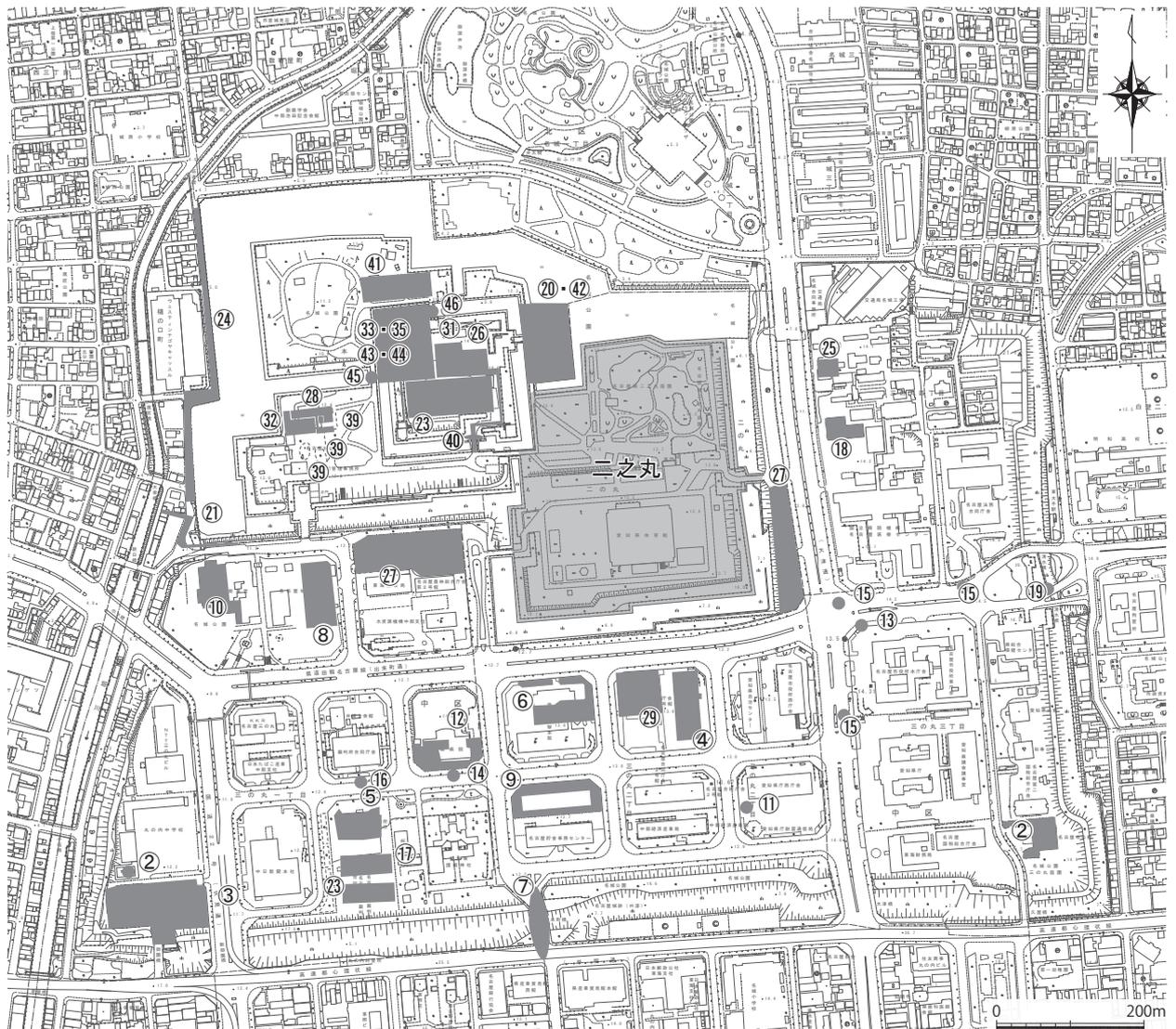


図6 名古屋城内発掘調査地点

表2 発掘調査一覧

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
①	名古屋城二之丸庭園	1976～1977	名古屋市教育委員会	『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』(1976)	第2節 二之丸庭園の既往の調査を参照
②	名古屋市公館地点(1次・3次) 丸の内中学校地点(2次)	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡―1,2,3次調査の概要』(1989)	近世の武家屋敷地の街路、区画溝、屋敷地境、門、廃棄土坑などを確認。 南土居筋、東土居筋を確認
③	愛知県図書館地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』(1990)	弥生中期～平安時代の竪穴住居群、墳丘墓、遺物等を確認 戦国時代の溝を確認 近世の武家屋敷に関連すると思われる溝、井戸、建物基礎、廃棄土坑、地下室などを確認 西土居筋、御園門内側の「内片端」広場を確認
④	名古屋第一地方合同庁舎地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』(1990)	那古野城に関連すると思われる溝・井戸・柵列・堀等の遺構を確認 近世の武家屋敷の溝、井戸、礎石建物、廃棄土坑などを確認
⑤	名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎地点	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』(1992)	奈良～平安時代の柱穴、土坑を確認 戦国時代の大溝などを確認 近世の武家屋敷に関連する土坑、ピット、井戸、溝などを確認
⑥	愛知県警察本部地点	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』(1993)	戦国時代の堀(溝)などの遺構を確認 江戸時代の武家屋敷の溝、井戸、柵列、土坑、屋敷地境、石列、建物跡などを確認 江戸時代の遺構群が整地層の上面から検出されたことにより、築城時に計画的な整地が行われたことが判明
⑦	本町門	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町門跡発掘調査概要報告書』(1992)	本町門の堀跡を確認
⑧	中部電力地下変電所地点	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書―遺構編・遺物編』(1994)	那古野城期の屋敷区画、道路など 将軍家「御霊屋」関係の遺構・遺物 陸軍病院関係の遺構・遺物
⑨	愛知県三の丸庁舎地点	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』(1995)	古墳時代、戦国時代、江戸時代の遺構・遺物を確認 江戸時代の武家屋敷に関連すると思われる土坑、溝、井戸、建物跡、掘り込みなどを確認
⑩	名古屋市能楽堂地点	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』(1995)	室町時代の土坑墓群を確認 戦国時代の那古野城関連遺構群を確認 近世の武家屋敷の井戸、土坑、溝を確認
⑪	無線統制室地点	1995	愛知県教育委員会	『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1997)	江戸時代の武家屋敷の溝、柵列(塀)、土坑などを確認
⑫	名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』(1997)	中世、近世の遺構・遺物を確認 近世の溝状遺構、道跡、塀(柵)状遺構、井戸、土坑などを確認
⑬	地下鉄出入口地点	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書』(1999)	戦国時代の那古野城に関連すると思われる溝などを確認 江戸時代の武家屋敷の土坑、柱穴、溝などの遺構を確認
⑭	下水道管築造地点	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』(2000)	江戸時代初期の地割に関係すると思われる溝や土坑などを確認

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
⑮	NTT電話工事地点	2000	(株) 西日本電信電話 名古屋支店	『名古屋城三の丸遺跡—平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2001)	江戸時代の武家屋敷に関連すると思われる廃棄土坑、溝などを確認
⑯	ガス管埋設工事地点	2001	(株) 東邦ガス	『名古屋城三の丸遺跡—ガス管埋設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2002)	奈良・平安時代の竪穴住居を確認 近世では、断面観察により中小路の一部を確認 熱田層が確認されず、名古屋城築城に際し、三之丸一体で大規模な造成が行われたと推察された
⑰	地方簡易裁判所庁舎地点	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅵ』(2003)	那古野城関連の遺構と思われる戦国時代の溝などを確認 近世の武家屋敷の溝、井戸、土坑、掘り込みなどを確認
⑱	国立名古屋病院地点	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』(2005)	古墳時代から古代の集落遺構を確認 那古野城に関連すると思われる遺構を確認 江戸時代の庭園遺構、屋形に関する遺構群を確認 近代の名古屋陸軍病院の遺構を確認
⑲	東清水橋東交差点地点	2002	名古屋市教育委員会	『愛知県埋蔵文化財情報19』(2004)	三の丸東柵形付近の状況確認
⑳	名古屋城本丸搦手元御春屋門	2003・2005	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書』(2006)	近世の石垣、溝、ピット等を確認 本丸搦手馬出の修復が繰り返していることが判明
㉑	名古屋城巾下門跡	2003	名古屋市上下水道局水道本部	『名古屋城跡巾下門跡発掘調査報告書—西区樋ノ口町地内400号排水管布設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書一』(2004)	戦国時代の整地面を確認 江戸時代の溝、土坑などを確認
㉒	地方簡易裁判所合同庁舎地点	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』(2008)	那古野城に関連する中世・戦国期の堀、溝等を確認 近世の武家屋敷に伴う溝、井戸、土坑・ピットなどにより、屋敷表の範囲及び道の一部が判明 近代の旧陸軍関連遺構である防空壕跡などを確認
㉓	名古屋城本丸御殿	2006～2008	名古屋市教育委員会 名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書—第1,2,3,4次調査—』(2009)	本丸御殿跡の礎石、及び雨落溝、井戸、防火水槽、暗渠柵などの排水施設を確認
㉔	樋ノ口町線地点	2009～2011	名古屋市緑政土木局	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(2011)—市道樋ノ口町線整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録一』(2011)	江戸時代の巾下水道に関わりのある木樋、木桶、木柵などを確認。辰之口大樋脇に敷設されている石畳の一部を確認
㉕	名古屋医療センター職員宿舎地点	2011	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡—職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書一』(2011)	近世の土杭、区画溝を確認
㉖	名古屋城本丸御殿	2012	名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書—第5,6,7,8次調査—』(2012)	本丸御殿跡に関するカマド遺構、茶台蔵の礎石、本丸南柵形の石垣・暗渠溝などを確認
㉗	名城公園宿泊所、二之丸東駐車場地点	2014	名古屋城総合事務所	『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』(2015)	近世の土杭、柱穴が確認 近代の兵舎跡と思われる石積遺構、礎石溝、コンクリート建物跡、貯水槽などを確認

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
⑳	名古屋城西之丸四番蔵	2014	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書（名古屋城西之丸）』（2016）	大正時代御大礼に伴う整地層の確認 明治時代獄舎跡瓦片大量廃棄の痕跡 江戸時代初期土坑、戦国時代大溝などを確認
㉑	名城東小公園地点	2015～2016	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査（中央新幹線「名城非常口」地点）』（2017）	江戸時代屋敷地、道路跡、那古野城期の大溝など確認
㉒	名勝名古屋城二之丸庭園笹巻山・栄螺山・多春園・御文庫・二子山・権現山・兵舎跡・余芳・外縁	2013～2015	名古屋城総合事務所	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書（第1次～第3次）』（2017）	10代藩主徳川齊朝により文政期に改変、整備された二之丸庭園に関わると考えられる御茶屋や石組、礎石列、池跡などを確認
㉓	名古屋城本丸御殿地点	2015	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書—第9次調査—』（2017）	本丸表門枳形石垣の北側で石垣構築の掘方を確認
㉔	名古屋城西之丸三番蔵	2016～2017	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡西之丸（第2次）』（2018）』	近世初頭築城期の盛土、近世後期の石組み水路、近代陸軍・離宮期の遺構を検出。戦国期以前の遺構・遺物も確認
㉕	名古屋城本丸内堀・小天守	2017～2018	名古屋城総合事務所	『特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書』（2019）	内堀にて戦災の痕跡を確認 大天守台西面南隅、小天守台南面にて根石を確認
㉖	名勝名古屋城二之丸庭園栄螺山・北園池・風信・笠巻山・植木屋・前庭・旧将校集会所跡・枯池・外縁	2016～2018	名古屋城総合事務所	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』（2020）	第2節 二之丸庭園の既往の調査を参照
㉗	名古屋城本丸内堀	2019～2020	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書』（2023）	内堀にて石垣根石付近で地形根切りと見られる痕跡および、大天守台西面では石垣面に直行する2条の石列とその周辺に礫群を検出した。
㉘	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・向屋敷・馬場	2018～2019	名古屋城調査研究センター	『名古屋城二之丸地区試掘調査報告書』（2021）	御殿の一部と考えられる礎石を検出 近世面で溝、土坑を検出
㉙	名勝名古屋城二之丸庭園	2019～2020	名古屋城調査研究センター	本報告書	
㉚	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・馬場	2020～2021	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡未告示地区（二之丸）発掘調査報告書 第3次・第4次』（2023）	近世の馬場に伴うと考えられる石組溝を検出 礫敷の土坑を検出
㉛	名古屋城西之丸	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理中	
㉜	表二之門附属土塀	2019～2022	名古屋城調査研究センター	『名古屋城表二の門試掘調査報告書 第1次・第2次調査』（2023）	雁木の基底部を検出。 石垣面で雁木に伴う加工痕を検出。
㉝	名古屋城御深井丸・小天守	2020	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡御深井丸発掘調査報告書』（2024）	近世の水路と見られる石列を一例検出した。 名古屋空襲により焼損した金具類が多数出土
㉞	名古屋城本丸搦手境門	2022	名古屋城調査研究センター	整理中	
㉟	名古屋城本丸天守穴蔵石垣	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理中	

NO	地点名	調査年	調査主体	報告書等	主な成果
④④	名古屋城本丸天守穴蔵石垣背面	2022	名古屋城調査研究センター	整理中	
④⑤	名古屋城鶴の首(小天守西)水堀側石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理中	
④⑥	名古屋城不明門北土橋石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理中	
④⑦	名勝名古屋城二之丸庭園 東庭	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理中	

第2節 二之丸庭園の既往の調査

最初期の発掘調査

二之丸庭園は戦後に北庭が先行して公開され、名古屋大学や学生寮が城外に移転した昭和49年（1974）に東庭と南庭の整備が計画された。整備に伴い昭和50年（1975）に二之丸庭園における最初の「発掘調査」が行われた（表3 名勝指定以前の土木局による試掘）。発掘は名古屋市土木局が中心となって行われたが、埋蔵文化財専門職員の参加はなかった。発掘は北池と庭園南東を中心に行われた。北池の東端や橋の基礎と考えられる石材を確認した。池底がタタキで固められていたことが明らかになった。庭園南東では南池の存在を確認した。南池の護岸は「石組み」からなり、池底は北池と同様にタタキで固められていた。これらの成果は土木局によって報告されているが、出土遺構の概要報告のみである*1。

土木局の成果を受けて名古屋市教育委員会が2次にわたって発掘調査を実施した（図7、表2①、表3 名勝指定以前の教育委員会による発掘調査）。

教育委員会による第1次調査は昭和51年（1976）5月から7月にかけて行われた。調査成果は出土遺構の概要のみ報告されている*2。調査は前年に土木局が掘削した南池を中心に庭園の南北端を確認するために南北約140mの調査区を設定した。また、北池、霜傑、庭園東端を確認するために北池から東へ延びる東西約80mの調査区を設定した。加えて、遺構の状況によっては調査区の拡張や新設を行った。調査の結果、北区で東西方向の暗渠*3と「漆喰塊地覆」を確認した。これらの遺構は庭園北端の塀基礎と考えられる。中央東区で「漆喰遺構」と「板石を敷きつめた遺構」を確認した。前者は霜傑、後者は庭園東端の塀基礎と考えられる。南区で南北方向の暗渠を確認した。暗渠の位置から北側で南池と接続すると考えられるが、前年の土木局による掘削時に南池との接続部分が掘削されていたため、南池との関係は不明である。

教育委員会による第2次調査は昭和51年（1976）9月から翌年2月にかけて行われた。調査は主に北池と南池で行われ、この成果をもとに現在みられる南池が復元された。第2次調査は報告書が刊行されないまま現在に至っており、調査の詳細は不明な点が多い。

二之丸庭園保存整備事業に伴う調査

二之丸庭園では権現山の復元をはじめ、庭園の整備にあたって、2013年（平成25）から現在まで現状確認の発掘調査が行われている（巻頭8、表2③④、③⑦、④⑦）。各調査の概要は表3に調査地点は図7～10に

記載した。また、特筆すべき近世遺構を確認した第2次調査*4の権東01、外-05、第3次調査*4の外-02～03、第4次調査*5の外縁北、第6次調査*5の風信、外縁、前庭は以下に個別に記載した。

第2次調査の権東01では調査区北東隅と北西隅で礎石列を検出した。2つの礎石列は検出高（標高約13m）と方向が同じであることから同一の礎石列と考えられる。礎石列は庭園と外縁を区切る塀基礎と推定される。礎石列の約40cm北側に礎石列と平行にのびる石組溝を確認した。石組溝を構成する石材は硬質砂岩からなる。溝内埋土は3回にわたって堆積しており、上層は近代の埋め戻し土、中層は時期不明ながら人為的に短期間で埋められた層、下層は近世の自然堆積と考えられる。石組溝は塀の雨落ちを兼ねた溝と考えられる。調査区北東端で検出した礎石、溝と調査区北西端で検出した礎石、溝はわずかに角度が異なっている。『御城御庭絵図』（巻頭1）では途中で塀の角度が変わっており、調査成果と一致する。

第3次調査の外-02～03で礎石列及び石組溝を確認した。検出高は標高12.3mである。外-02から出土した石組溝は権東01と同じ硬質砂岩からなる。石組溝の様相と『御城御庭絵図』に記載があることから権東01と連続する遺構と考えた。外-03から礎石列が出土した。検出高は標高約12.6mである。対となる石組溝は確認できなかった。外-02石組溝を西へ伸ばすと外-03礎石列と平行することから権現山東調査区礎石及び石組溝、外-02石組溝と連続する庭園と外縁を区切る遺構と考えた。

第2次調査の外-05から礎石列が出土した。検出高は標高約12.3mである。礎石列は一型に曲がっており、庭園境界が折れ曲がっている地点に当たると考えられる。『御城御庭絵図』と照合すると庭園西辺の栄螺山付近の一型に折れた塀に該当する。

第6次調査の外縁では園路と考えられる延段を確認した。延段を庭園内部の遺構と仮定すると外縁は調査区より北側に位置していると考えられる。

第6次調査の風信は現存する築山の測量調査を行った後、築山全体の状況を把握するために調査区を7箇所設定した。調査の結果、築山南西の調査区（調査区10）で築山南西から南に延びる土塁が近代の施工であることを確認した。築山は土塁構築に当たって近代以降の改変を受けていると考えられる。また、築山頂部で礫が充填された土坑を確認した。

第6次調査の前庭は2箇所調査区で発掘調査が行われた。前庭とは明治以降に存在した陸軍施設の一つである将校集会所に伴って造られた庭園を指す。標高約13.6mから上面が扁平な石を2石確認した。2石は座標北より約10°西に傾き南北に並んでいた。標高13.5mで黒色炭化物からなる層を確認した。標高13.4mで被熱した2石の切石が並んだ状態で出土した。標高約13.6mから出土した2石は御殿の基礎、被熱した2石の切石はカマドの可能性はある。

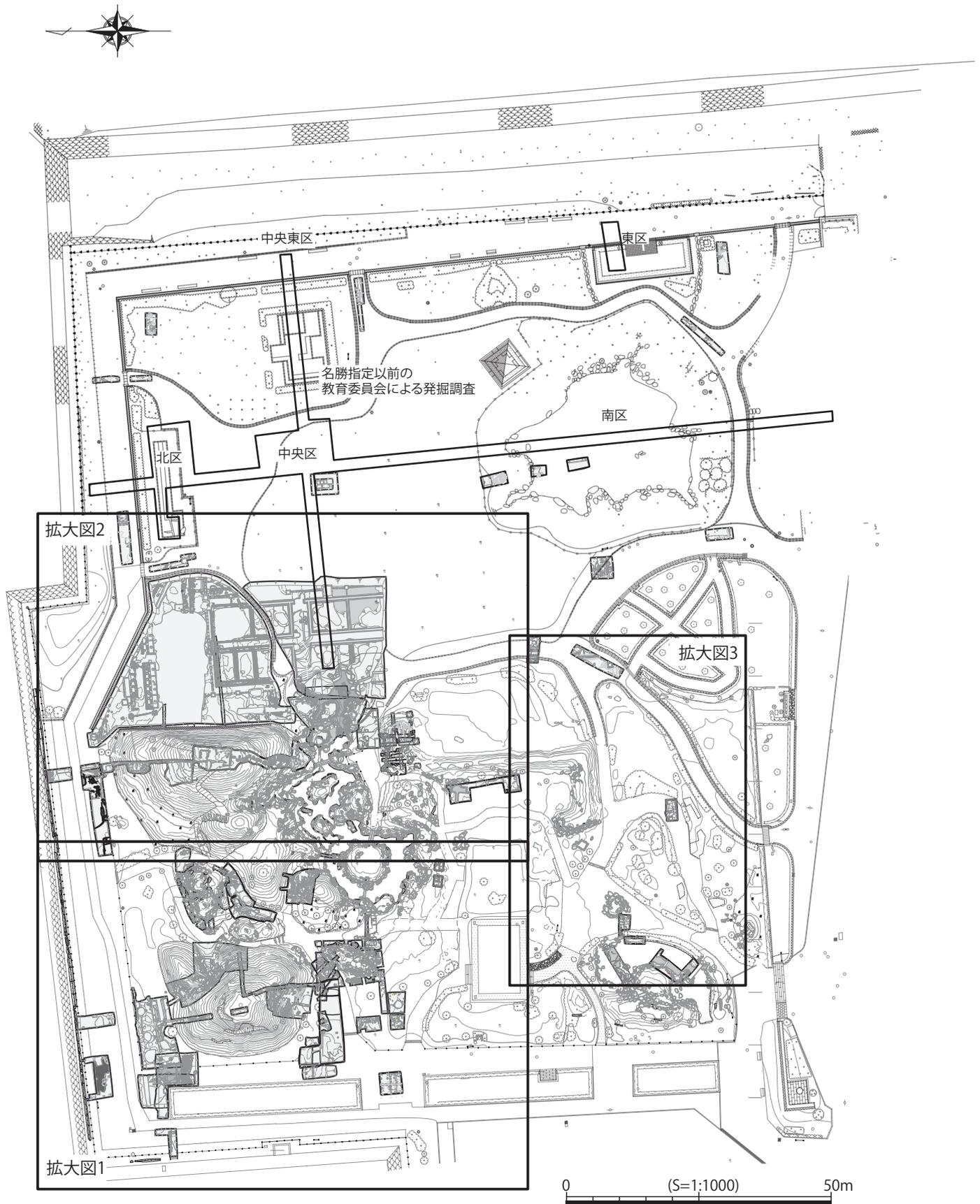
*1 名古屋市土木局『名城公園旧二之丸庭園試掘および調査報告書』（1975）

*2 名古屋市教育委員会『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』（1976）

*3 暗渠は現在露出展示されている。

*4 名古屋市『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第1次～第3次』（2017）

*5 名古屋市『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書 第4次～第6次』（2020）



二之丸全体の調査区位置図は巻頭8を参照
 第1次～第6次調査の調査区位置は拡大図1～3（図8～10）を参照

図7 名勝範囲 既往の調査位置図



図8 調査位置図拡大図1

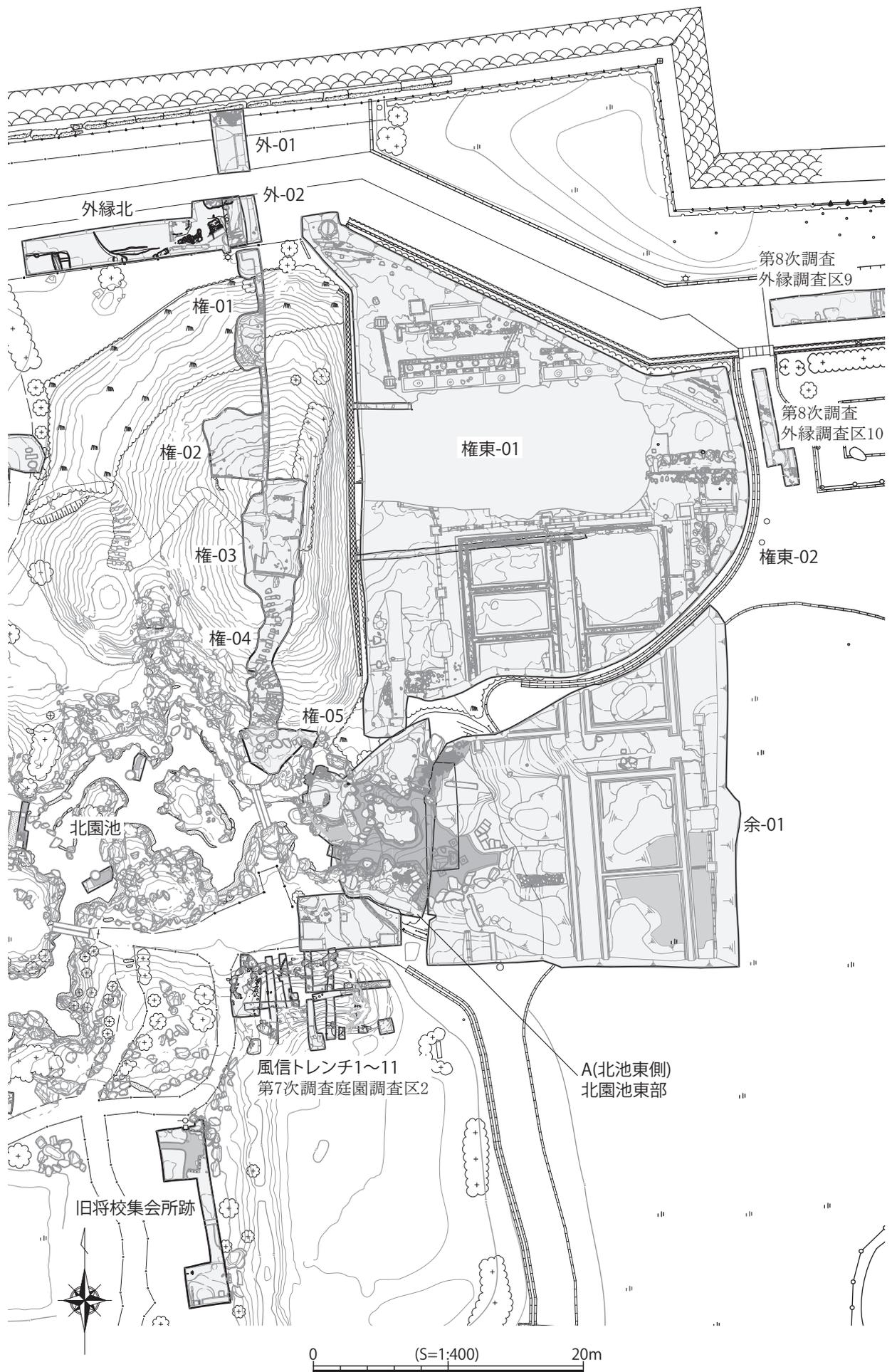


図9 調査位置図拡大図2

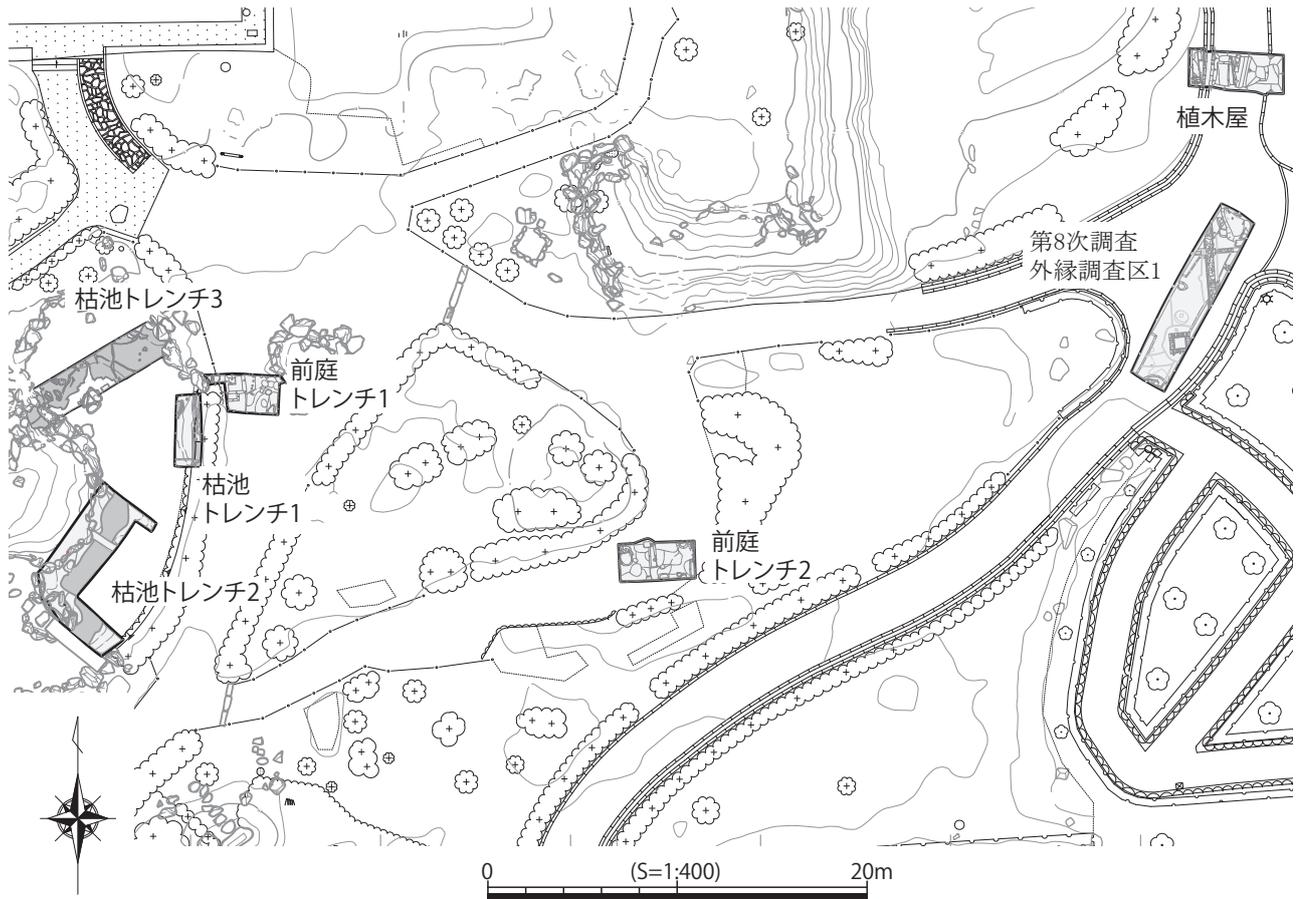


図10 調査位置図拡大図3

表3 二之丸調査区一覧

場所	回数	調査区名	調査区名(小)	主な出土遺構	
名勝指定地	名勝指定以前の土木局による試掘		A (北池東側)	北池の東端を確認 池底はタタキ、護岸は石組みで構築されていた	
			B (旧山下茶席跡)	原位置を保っていると考えられる石と保っていないと考えられる切石を1石ずつ確認	
			C (旧南御庭池の一部)	南池を確認 池底はタタキ、護岸は「石組み」で構築されていた	
	名勝指定以前の教育委員会による発掘調査			北区	庭園の北限と考えられる石組溝を検出
				中央区	年代不明の雨落状遺構と漆喰遺構を確認、近代の土管を検出
				中央東区	「霜傑」と考えられる漆喰遺構を検出
				東区	庭園東限と考えられる石列、礫敷の溝、瓦溜を検出
				南区	近世の暗渠を検出 南池に向かって流れている可能性がある
				十字トレンチ	庭園の北限と考えられる石組溝を検出、南池を再発掘

()内は調査回数

場所	調査回数	調査区名	調査区名(小)	主な出土遺構
名勝 指定地	1	笹巻山	笹-1～16, 栄-05, 栄-06	近代の園路を検出 近代遺構面検出時点で調査終了
	2	栄螺山	栄-01～03	山斜面に園路と考えられる平坦面を検出
	2	権現山	権-1～5	標高12.4mで近世の池、土間状遺構、化粧三和土遺構、飛び石列、礎石を検出 礎石は「多春園」基礎と庭園境界を構成する堀礎石と考えられる。
	2	権現山東	権東-01, 権東-02	近世の階段、園路、基壇状遺構、区画状遺構、愛宕山基壇、鳥居基礎、礎石を検出
	2～3	多春園	栄04 (2), 多-01～04 (3)	近世の北池の東端、庭園北限と考えられる礎石列と石組み溝、井戸、東西方向に延びる2条の石列等を検出 これらは標高13.0～13.5mから検出 近代の建物基礎と暗渠を検出
	2～3	外縁	外-05 (2), 外-01～03 (3)	標高13.0～13.5mから近世の庭園境界と考えられる溝と礎石列、園路を検出 二之丸北側の土堀裾を検出
	3	余芳	余芳	近世の池の東端、標高12.9mで「余芳」基礎とそれに伴う手水遺構を検出 近代の建物基礎を検出
	3	御文庫	外-04	標高12.8mから近世の「御文庫」基礎を検出
	3	二子山	二-1～8	近世の二子山裾と飛び石を検出
	4	外縁北	外縁北	標高12.95mから石列を検出 石列は2～3次調査で検出した庭園北限と考えられる溝の続き 標高13.8mから近代の建物基礎を検出
	4～5	栄螺山	栄螺南石組, 栄螺山北石組, 栄螺山東園路, 栄螺山南園路	近世の園路と近代の園路を検出 庭園が近代に改変を受けていることが明らかになった
	4～6	北園池	北園池東部 (4), トレンチ1～13(5～6)	池底の栗石を撤去しタタキを露出させた 池底のタタキは数か所で割られていた 橋台、沢飛び石、礫敷を検出 礫敷は洲浜と考えられる
	5～6	枯池	トレンチ1～3	近代の枯池底を検出
	5	旧将校集会所	旧将校集会所	標高13.5mから将校集会所基礎を検出
	6	風信	トレンチ1～11	築山が近代以降に削平を受けていることがわかった 頂部の土坑が「風信」基礎である可能性がある 標高13.7mから近代の園路を検出
	6	笹巻山	笹-14再発掘	中世那古野城の溝と考えられる遺構を検出
	6	植木屋	植木屋	標高13.6mから近代の建物基礎を検出
	6	前庭	トレンチ1, 2	標高13.5mからカマド状遺構を検出 近世の御殿の一角か
	特別史 跡名古屋 屋城跡 未告示 地区 (二之丸)	試掘	A1	A1～5
立会		立ち合い	P1～P10	
1			調査区1	大規模にかく乱されていた
1			調査区2	標高13.0mから近世の土坑と溝を確認
1			調査区3	標高13.0mから近世遺構面と遺構面に据えられた石を確認 石は二之丸御殿の基礎と考えられる
1			調査区4	標高12.9mから近代の石列を確認
1		調査区5	標高13.0mから近代の建物基礎を確認	

場所	調査回数	調査区名	調査区名(小)	主な出土遺構
特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)	2		調査区6	大規模にかく乱されていた
	2		調査区7	標高12.7mから近代の暗渠を確認
	2		調査区8	標高13.0mから近代の建物基礎と暗渠を確認
	2		調査区9	標高13.0mから近代の遺構面を確認
	2		調査区10	標高12.7mから近世の暗渠、標高12.8mから近代の暗渠を確認
	3		調査区11	標高13.0から近世の垂円礫が充填された土坑を、標高13.3mから近代の建物基礎を確認
	3		調査区12	大規模にかく乱されていた
	4		調査区13	近代遺構面に石を確認した。建物基礎と考えられる
	4		調査区14	大規模にかく乱されていた
	4		調査区15	標高12.8mから近世の石組溝と石列を確認

()内は調査回数

第3章 調査について

第1節 調査に至る経緯

名古屋城は1932年（昭和7）及び1935年（昭和10）に国の史蹟に指定されたが、二之丸と三之丸は陸軍の用地であったため指定されなかった。1952年（昭和27）に史蹟から特別史跡に指定変更された際も史蹟の範囲が引き継がれている。（図11）

二之丸のうち、二之丸庭園は戦前からその価値が認められており、『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十一』¹等の刊行物や重森三玲ら庭園研究者によって周知されてきた。戦後に入ると、北池とその周辺が昭和28年（1953）に国の名勝に指定され、平成30年（2018）に二之丸庭園全域と御殿の一部が追加指定された。なお、二之丸は1977年（昭和52）に文化財保護審議会から特別史跡に追加指定すべき箇所として答申されたが、名古屋城と関係のない施設である愛知県体育館があるため、告示されなかった。そのため、二之丸は名勝区域と名勝指定を受けていない区域に二分されている。（図11）

名古屋市は昭和42年（1967）二之丸庭園の一部を公開し、昭和54年（1979）には南池や「霜傑」の整備を行うなど、二之丸庭園の保存と活用を行ってきた。その後、適切に管理されていない樹木の成長や風水害によって荒廃が進んだため、平成22年度（2010）に特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会を設置し保存管理及び修復整備方針の具体的な検討を開始した。平成24年度（2012）に『名勝名古屋城二之丸庭園保存管理計画書』を策定し、これに基づき平成25年度（2013）から保存整備事業に着手した。

第7次及び第8次発掘調査は保存整備に際して遺構の現状を確認するために実施した。その後、令和3年度（2021）に『名勝名古屋城二之丸庭園整備計画書』もとりまとめられ、現在は保存整備にあたって発掘調査や絵図、古写真等資料の収集、検討等の調査を進めている。

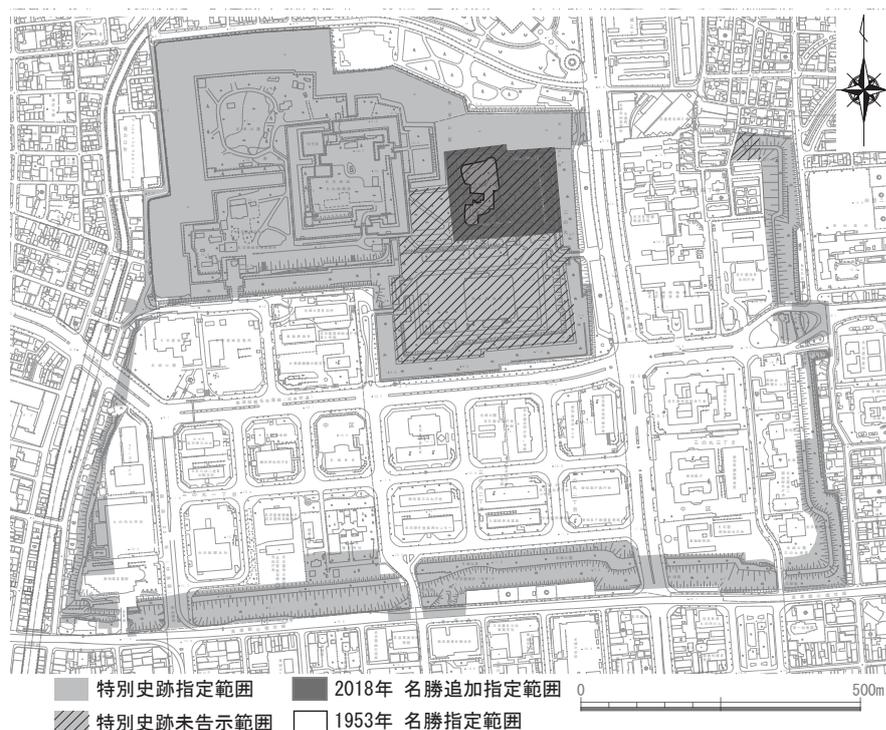


図 11 史跡名勝指定範囲図

第2節 調査の目的

第7次調査では庭園と外縁で調査を行った。庭園では「風信」の基礎と南池の北護岸の確認を目的とした。「風信」は『御城御庭絵図』（巻頭1）や徳川慶勝撮影写真等で存在が確認されている。南池周辺は『金城温古録』をはじめ様々な文献や絵図に示されており、昭和50年（1975）と昭和51年（1976）の発掘調査で池の存在を確認している*2。このような史料に記載されている遺構の確認と、「風信」及び南池の位置や形状の特定、遺構面の高さの特定が目的である。

外縁の調査区は庭園北西部に設定し、南蛮練堀の基礎および外縁の遺構の確認を目的とした。

第8次調査では庭園と外縁、二之丸御殿との境界を明らかにするための調査区を庭園全域に、東庭の遺構残存状況の確認を目的とした調査区を東庭北部に設定した。

第3節 調査の方法

発掘調査は下記の手順にて実施した。

1. 表土は重機にて掘削を行い、表土より下層は人力にて近世遺構面直上まで掘削した。
2. 検出した遺構は、検出状況・土層堆積状況・完掘状況等の写真撮影及び測量を行った。測量は写真測量を基本とし、必要に応じて手実測にて図化を行った。
3. 遺物は原則として近代以前に生産されたものを対象としてすべて取り上げた。第7次調査は調査区ごとに遺構単位で取り上げた。第8次調査は調査区ごとに層、遺構単位で取り上げた。
4. 庭園部会指導の下で一部の近代遺構については記録作業を行ったうえで取り外し、近世遺構面の検出を行った。
5. 遺構の時期を確認するために必要に応じて、一部トレンチを設定して断ち割り調査を実施した。
6. 調査終了後は、山砂を敷いた後、発生土にて埋戻しを行った。芝生と縁石は復旧を行った。

遺物整理作業は下記の手順にて実施した。

1. 遺物の洗浄・注記・接合を行った。
2. 遺物は報告書掲載遺物の選別を行った。報告書掲載遺物は基本的に実測・トレース、観察表の作成を行った。また、必要に応じて採拓、写真撮影を行った。
3. 報告書に掲載しなかった遺物も含めた遺物全点について分類と計量を行い、台帳をそれぞれ作成した。遺物は凡例に従って分類し、出土位置と分類が同じ遺物は一つの袋にまとめ、袋番号を付した。生産地や製作年代なども適宜記録した。

図面整理作業は下記の手順にて実施した。

1. 土層注記は調査時の所見を客観的に整理して記述した。
2. 断面図に記載した土層は各調査区内で通し番号とした。番号は土層の堆積が新しい順とした。遺物整理時は新しい土層番号を使用して台帳作成を行った。
3. 平面図は報告書作成にあたり断面図との対応のため、加除修正を行った。

第4節 調査の経過

第7次調査の現地作業期間は、令和元年（2019）12月12日～12月24日（庭園調査区1）、令和2年（2020）2月12日～3月27日（庭園調査区2・外縁調査区）である。

第8次調査の現地作業期間は、令和3年（2021）1月13日～3月23日である。

整理作業のうち、遺物の洗浄・注記・接合は委託により令和3年（2021）7月29日～12月28日に行った。実測・トレース・採拓は一部を委託して令和4年（2022）11月22日～令和5年（2023）3月31日に行い、一部は遺物の分類・計量と併行して令和5年（2023）4月～7月に名古屋城調査研究センターにて行った。図面整理は令和5年（2023）3月～7月に行った。

表4 発掘調査工程

内容	年月	2019年(令和元)	2020年(令和2)			2021年(令和3)		
		12月	1月	2月	3月	1月	2月	3月
第7次	庭園調査区1	■						
	庭園調査区2			■	■			
	外縁調査区			■	■			
第8次	御殿調査区							■
	庭園調査区						■	
	外縁調査区						■	■

表5 整理作業工程

内容	年月	2021年(令和3)						2022年(令和4)		2023年(令和5)													
		7月	8月	9月	10月	11月	12月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
遺物整理		■ 洗浄・注記・接合								■ 実測・トレース・採拓・分類・計量													
図面整理																							
報告書作成																							

第5節 調査区設定の目的

(1) 第7次調査区

調査区の位置は図12に示した。

庭園調査区1 現在は復元された南池と緩やかに傾斜した芝生広場が広がっている。調査区は再現以前の南池の北護岸と池底を確認するために設定した。

調査区は1976年（昭和51）に再現された南池の北岸に直列に並ぶように3箇所設定した（図15）。調査区は池上（1区）、中腹（2区）、池底（3区）に1箇所ずつ設定した。調査区の規模は1区が南北5m×東西2m、2区が南北3m×東西2m、3区が南北4m×東西2mである。1区と2区の間は約2m、2区と3区の間は約1mである。

調査区周辺を『御城御庭絵図』で確認すると南池護岸の傾斜に園路と景石が描かれている。『御城二之丸御庭之図』は『御城御庭絵図』よりも景石の数が少ないが、同様に園路と景石が描かれている。

庭園調査区2 第6次調査で北池の南に位置する築山から「風信」の根固めと考えられる遺構を確認した。庭園調査区2は「風信」の根固めと考えられる遺構に続く、「風信」の基礎を確認するために設定した。築山の頂部に1箇所、斜面に6箇所の調査区を設定した。調査区位置の詳細は図23の通り。

1区は「風信」中央付近の基礎に伴う遺構を確認するために南北0.5m×東西3mの規模で設定した。2区は「風信」の東端を確認するために南北5m×東西0.5mの規模で設定した。3区は「風信」中央の基礎に伴う遺構を確認するために南北5m×東西0.5mの規模で設定した。4区は第6次調査で検出した「風信」の基礎と考えられる遺構(01SK)に続く遺構を確認するために南北4m×東西0.5mの規模で設定した。5区は「風信」の西端及び築山と土塁との境を確認するために南北6.5m×東西0.5mの規模で設定した。6区は築山西側の景石配置年代を確認するために南北3.5m×東西2mの規模で設定した。7区は3区で確認した景石の配置時期を確認するため南北0.9m×東西0.4mの規模で設定した。

調査区周辺を『御城二之丸御庭之図』、『御城二之丸図』で確認すると築山があり、築山上には茶亭の「風信」が位置している。築山をさらに詳細に描いた『御城御庭絵図』には景石と園路が、『二之丸図御庭道及踏石図』には園路が描かれている。

外縁調査区 庭園外に広がる外縁の北側に調査区を設定した。南蛮練堀と呼ばれる土堀の構造と築造時期の確認と、土堀周辺の近世及び近代生活面の残存状況を確認するために調査区を設定した。調査区周辺を『御城二之丸御庭之図』、『御城二之丸図』、『二之丸図御庭道及踏石図』で確認すると二之丸北端と庭園北端に境界を示す線が描かれており、『御城御庭絵図』には二之丸北端と庭園北端に堀が描かれている。こうした絵図に描かれた庭園と外縁の境界を確認することも目的とした。

調査区は南北2m×東西5.2mの長方形の調査区に北西と北東が土堀に向かって拡張区を設けた調査区形状である。北西拡張区がT1、北東拡張区がT2である。その他に5箇所のトレンチ(T3～T7)を設定し、断面の観察を行った。

表6 第7次調査遺構一覧

調査区	遺構番号	内容	本文記載
庭園調査区1	SK1	土坑	○
	SK2	土坑	○
	SK3	土坑	○
	SS4	石列	○
	景石群5	石B, C, D	○
	景石群6	石I, H, G	○
庭園調査区2	築山		○
	SK7	土坑	○
	SK8	土坑	○
	SK9	土坑	×
	土塁		×
	景石群10	石A~H	○
景石群11	石I~N	○	
外縁調査区	土堀		○
	SK12	土坑	○
	SK13	土坑	×

(2) 第8次調査区

調査区の位置は図12に示した。

御殿調査区 庭園と御殿の境界を明らかにするために調査区を設定した。現在の園路上に位置する。調査区は南北4m×東西4mの規模で設定した。標高13.5mで石列を検出したため、掘削を終了した。13.5m以下は調査区中央に南北方向に水道管にのびているため、その掘方で断面の観察を行った。

調査区周辺を絵図で確認すると庭園の外にあたり、空地である。

庭園調査区 二之丸庭園の中央付近に設定した。本調査まで周辺では発掘調査が実施されていないため、

遺構の残存状況が不明であった。遺構の状態を確認するために、改変を受けていないと考えられるところに調査区を設定した。調査区周辺は近代においてはグラウンド、現在は芝生広場である。

南北5m×東西4mの規模で設定した。最大掘削深が2mを越えるため、地表より約1mの深さで幅1mの段を設けた。そのため遺構は南北3m×東西2mの範囲で検出を行った。

調査区は庭園の中央に位置しているため、絵図と現況を合わせる際に基準となる石垣や園池から離れている。調査区が絵図のどこに位置しているかは不明である。

外縁調査区1～10 外縁は第8次調査時点で範囲が不明であったため、庭園と外縁の境界と予想された地点に10か所の調査区を設定した。調査区は南西から反時計回りに調査区1～調査区10となる。調査区設定にあたって『御城二之丸御庭之図』、『御城二之丸図』、『御城御庭絵図』で描かれた庭園境界を参照した。『御城二之丸御庭之図』と『御城二之丸図』は境界を示す線が引かれている。『御城御庭絵図』には塀が描かれている。

調査区1は外縁南辺に南北10m×東西2mの規模で設定した。地表から10cm掘削したところで近代遺構の検出を行った。また、近世遺構を確認するためにかく乱の掘削やトレンチの設定を行った。

調査区2は外縁南辺に園路に沿って南北4m×東西4mの規模で設定した。調査区3は外縁南辺に園路に沿って長さ5m、幅2mの規模で設定した。調査区4は外縁南辺に園路に沿って長さ10m、幅1mの規模で設定した。調査区2～調査区4では近代遺構面を検出した後にかく乱の掘削を行い、かく乱の壁から近世遺構面の観察を行った。

調査区5は庭園の南東角付近に南北2m×東西6mの規模で設定した。調査区全域で近代遺構を検出したため、近世遺構面まで到達しなかった。

調査区6は長さ10m、幅は調査区東側が1.3m、調査区西側が0.7mで設定した。調査区南東で埋設電気線を確認したため掘削を中止し、遺構の検出は東西10m、南北0.7mの規模で行った。

調査区7は南北2m×東西4mの規模で設定した。約1m掘削したところで近代のタタキ面を検出した。タタキ面を掘り込む土管やかく乱を利用して下層を確認したところ、近世の石列（SS43）を確認したため、範囲を確認するトレンチを設定した。

調査区8は南北10.5m×東西1mの規模で設定したが、現代の排水路を避けるため調査区中央部1.5mの掘削を行わなかった。そのため長さ4m、幅1mの北区と長さ5m、幅1mの南区に分けた。調査区は二之丸北辺石垣に近く、北辺石垣天端上に土塁が存在するため、北区北側が周辺より約0.4m高くなっている。約1.5m掘削した時点で安全のため掘削を中止した。明確な遺構面を確認することはできなかった。

調査区9は南北2m×東西10mの規模で現在の園路上に設定した。調査区10は南北9m×東西1mの規模で現在の園路上に設定した。現代の排水管を避ける関係で食い違い状に折れ曲がっている。調査区9と調査区10は明確な近世遺構面を確認することができなかったため、近世遺構面と考えられる面まで掘り下げ検出を行った。

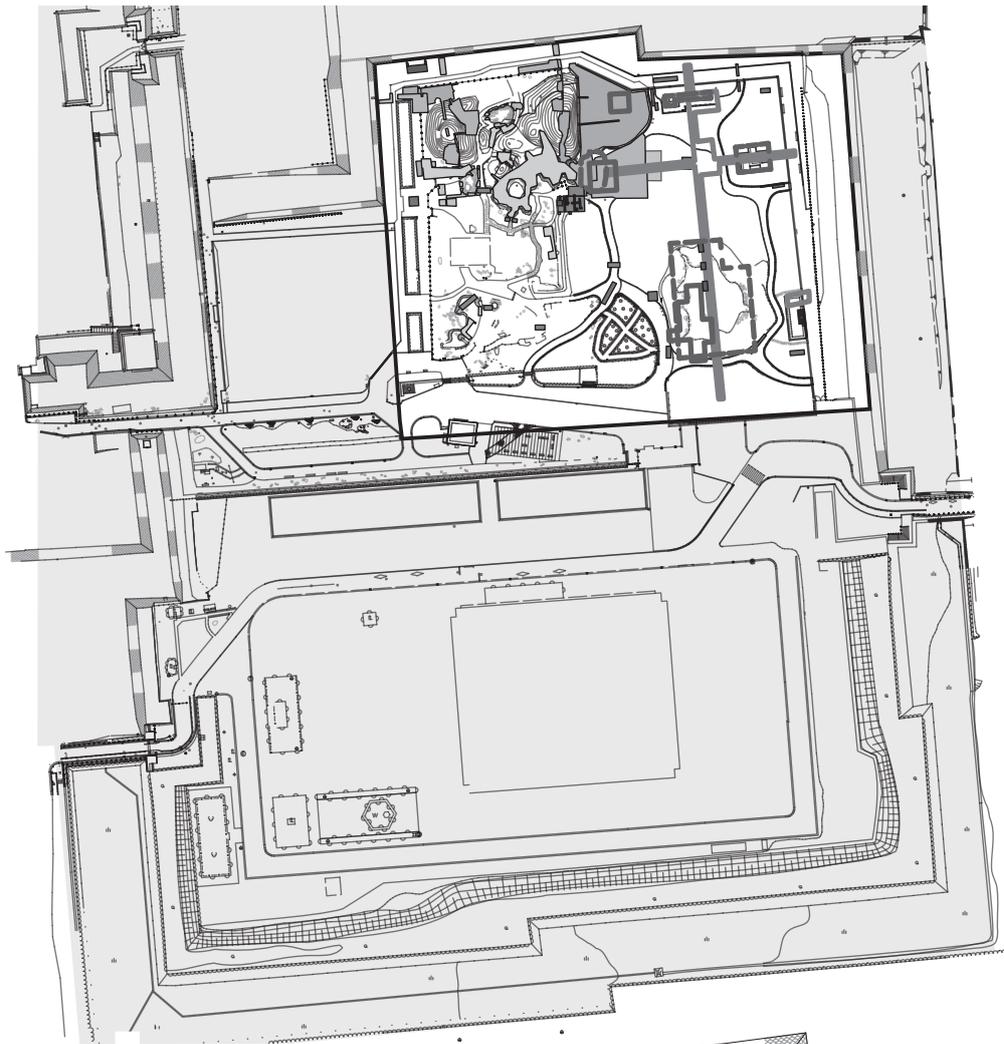
*1…愛知県『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十一』（1933）

*2…名古屋市土木局『名城公園旧二之丸庭園試掘および調査報告書』（1975）、名古屋市教育委員会『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』（1976）

表7 第8次調査遺構一覧

調査区	遺構番号	内容	本文記載
御殿調査区	SK1	土坑	○
	SB2	礎石（束石）列	○
	SS3	縁石	○
	SX4	タタキ盛土	○
庭園調査区	桝5	排水・調整桝	○
	管6	土管	○
	管7	土管	○
	SD8	セメント製溝	○
	SX9	亜円礫集積	
外縁調査区1	SK10	土坑	○
	SK11	土坑	○
	SB12	レンガ基礎建物	○
	桝13	排水・調整桝	○
	SK14	土坑	○
	石15	石	○
外縁調査区2	SK16	土坑	○
	SK17	土坑	
	SB18	レンガ基礎建物	○
	桝19	排水・調整桝	○
	管20	土管	
	管21	土管	
	管22	土管	
	管23	土管	
外縁調査区3	SK24	土坑	○
	SB25	レンガ基礎建物	○
外縁調査区4	SK26	土坑	○
	SK27	土坑	
	管28	鋳鉄管	○
	SS29	間知石列	○
外縁調査区5	SB30	コンクリート・タタキ面	○
	SK31	土坑	
	SB32	コンクリート壁	○
	SD33	タタキ及び瓦敷溝	○

調査区	遺構番号	内容	本文記載
外縁調査区6	SB34	レンガ基礎建物	○
	SB35	レンガ基礎建物	○
	SB36	コンクリート基礎	○
	管37	土管	○
	SK38	土坑	
外縁調査区7	SE39	コンクリート井戸	○
	SK40	土坑	
	SK41	土坑	
	管42	土管	
	SS43	石列（暗渠蓋列）	○
外縁調査区8	SK44	土坑	
	土塁45	土塁	○
	SS46	縁石	
	SK47	瓦溜	○
外縁調査区9	管48	土管	
	SK49	土坑	○
	石50	石（礎石か）	○
外縁調査区10	SK51	土坑（石抜取か）	○
	SS52	間知石列	○
	石53	石（礎石か）	○
	SD54	石組溝	○



名古屋城二之丸平面
白抜き部分が名勝範囲
白抜き内の枠及び着色箇所は
発掘調査区(既往の調査を含む)

0 50m

第7次・第8次調査区位置
上図白抜き部分を拡大

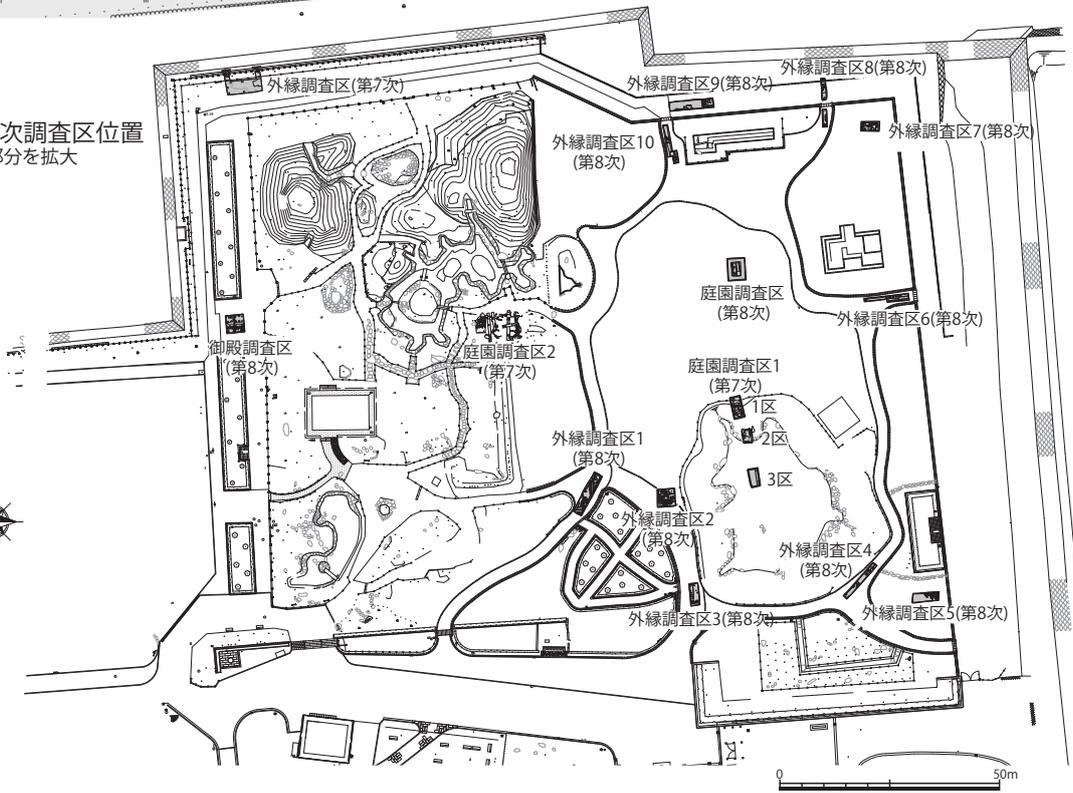


図12 調査区位置図

第4章 調査成果

第1節 基本層序

名古屋城二之丸の基本層序は大きく4層に分けられる。第Ⅰ層は1975年（昭和50）から現在までに盛土された現代の造成土である。0.2m～2mの厚さで盛土されている。主に客土である山砂と大ぶりのブロック土を含んだ非常に硬い粘質土からなる。

第Ⅱ層は近代の硬化面（層）である。灰白色～黒褐色のしまりが強い粘質土からなり、上面にφ50mm程度の礫が敷き詰められている。第Ⅱ層は標高12.5～13.2mの間に10cmの厚さで二之丸全体に広がっている。調査区によっては複数層の硬化面が標高12.5～13.0mの間で確認できる。

第Ⅲ層は近代の盛土である。第Ⅱ層の直下に10cm～50cmの厚さで堆積している。小さいブロック土を含んだ粘質土からなる。調査区によっては第Ⅲ層の中でも近代の遺物が多く含まれる上層と遺物が少ない下層に分けられる。調査区によっては第Ⅲ層と第Ⅳ層を削平した上で第Ⅱ層が盛土されている。

第Ⅳ層は近世遺構面及び近世の盛土である。ブロックをほとんど含まない均質な土と小ぶりの黄褐色、灰白色粘質土ブロックをわずかに含む土からなる。褐色～暗灰色のしまった砂質土または粘質土である。二之丸全体で一定の土質ではないため、調査区ごとに様相が異なっている。第Ⅳ層は標高12.8mで確認できるが、第Ⅰ層～第Ⅲ層にかく乱され確認できないことが多い。また、第Ⅳ層検出時点で掘削を止める調査方針であるため、厚さは不明である。第Ⅳ層上面は二之丸御殿及び庭園が廃絶する直前の面であるため、幕末～近代初頭（19世紀後葉）の生活面となる。二之丸は1871年（明治4）から順次解体されていったため、第Ⅳ層の埋没に時期差があり、各調査区の第Ⅳ層は必ずしも同時代の生活面を示していないと考えられる。

第7次庭園調査区1は近世の池底に、第7次庭園調査区2は築山に該当するため、堆積状況は基本層序と異

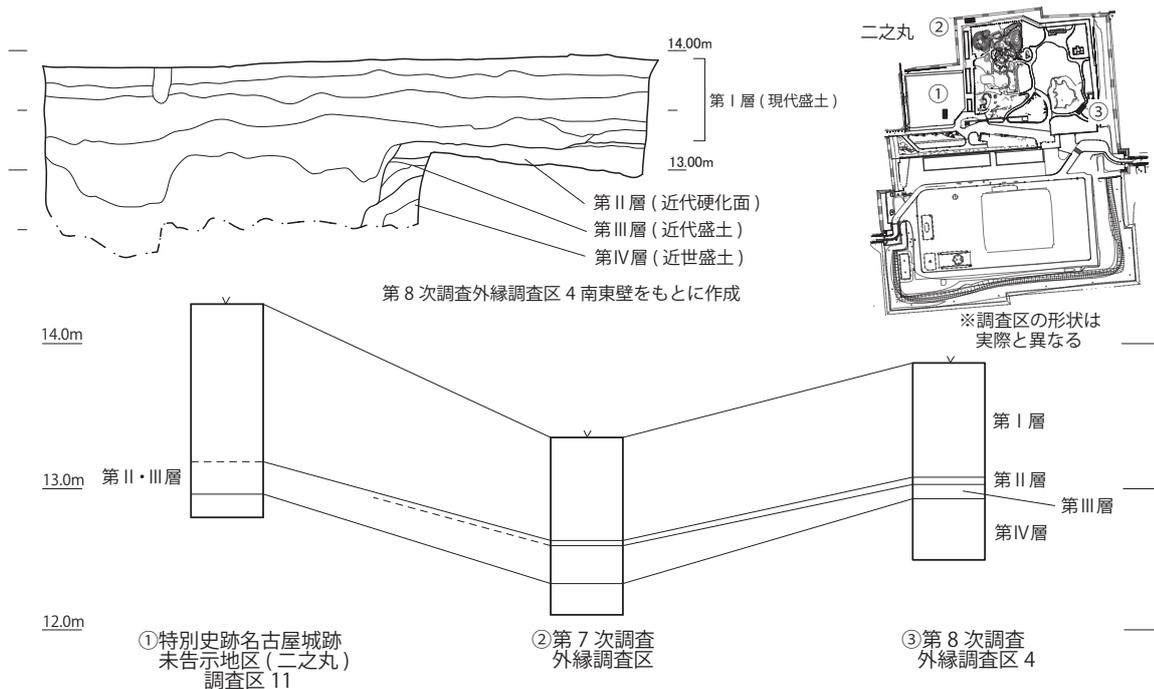


図13 基本層序模式図及び二之丸東西ライン柱状図

なる。個々の堆積状況については第2節にて個別に記載する。

以上のような基本層序を図13にて柱状図で示した。既往の調査を含めて遺構の残存状態が良い調査地点を抽出した。特別史跡名古屋城跡未告示地区（二之丸）調査区11（①）は二之丸の西側、第7次調査外縁調査区（②）が北端、第8次調査外縁調査区4（③）は東側に位置している。

第2節 出土遺物の概要

第7次調査と第8次調査で出土した遺物の合計は5,379点で重さは610,450gである。遺物点数は破片点数である。このうち第2節で取り上げた遺物は原則以下の基準で図化した。遺構から出土した遺物は遺構の記述のなかで取り上げ、小片以外は図化した。遺構外出土遺物の抽出基準は以下の通り。

○中世以前の遺物

- ・土器・陶磁器類…口縁部又は底部が残存している又は年代の特定が可能な部位が残存していること

○近世の遺物

- ・土器・陶磁器類…口縁部又は底部が残存している又は年代の特定が可能な部位が残存していること
- ・瓦類…文様区が残存している・3辺以上残存している・施釉されている、のいずれかを満たしていること
- ・御庭焼等の庭園に関すると考えられる遺物は残存状態に関わらず図化した

○近代の遺物

- ・土器・陶磁器類…口縁部又は底部が残存し全体が50%以上残存していること

全ての辺が残存しているレンガ・土類と完形の武器類は計測を行い、調査区ごとに表にまとめた。

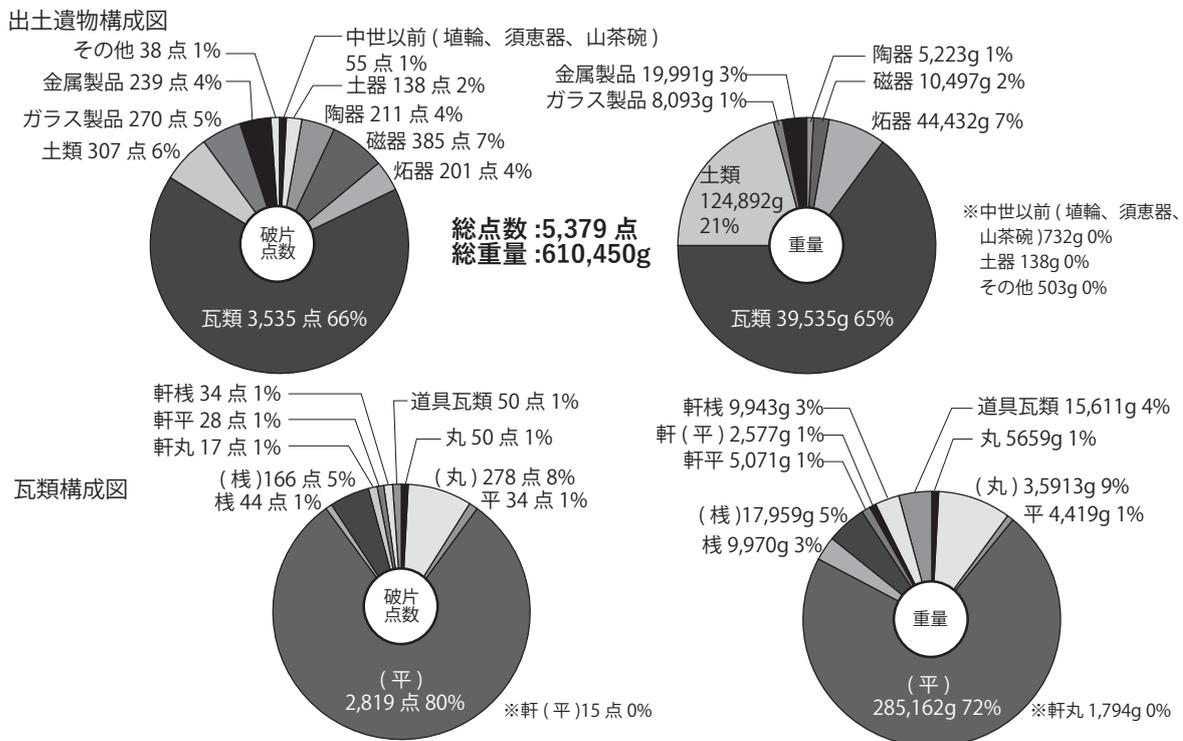


図14 出土遺物構成図

第3節 遺構と遺物

第7次調査（2019年度）

(1) 庭園調査区1

層序（図16～18）

現在みられる南池は池底の標高が約11.2m、護岸上の標高が約14.3mである。表土（1層）は1区と2区北側で確認することができる。2区南側と3区は1970年代に入れられたこぶし大の川原石が池底全面に敷かれている。1層の下層は標高14.2～14.9mで南に傾斜しながら2層が堆積し、現在の南池の北岸を形成している。2層は1970年代に入れられた土である。標高12.5mから8層を確認した。この層まで近代の遺物が含まれている。

2区と3区で標高11.15mから4層を確認した。4層は石Bより南に向かって広がっている。北側で0.2mの厚さで堆積し南に向かって厚く堆積している。南端が最も厚く1.4mの厚さで堆積しており、底面の標高は9.75mである。4層は近世の陶磁器類が多く含まれている一方で、酸化コバルト釉磁器、土管、ガラスといった近代の遺物も確認できる。陸軍が南池を埋め立てた際の埋土である。

4層の直下で17層を確認した。17層は約5cmの厚さで南に低く傾斜しながら堆積している。北側は標高10.6mで南側は標高10.2mである。南端は2区と3区の間で4層に掘り込まれていると考えられる。17層直下の27層は地山である熱田層と考えられる。

SK1（図16）

遺構：21層、24層、SS4南側に展開する礫敷面を掘り込んで構築された土坑である。規模は約0.7m×0.7mである。

遺物：瓦類4点と現代の製品数点が出土した。

年代：遺物の様相から現代に構築された土坑である。

SK2（図16）

遺構：25層、SS4、SS4南側に展開する礫敷を掘り込んでいる土坑である。規模は直径約1.25mで形状は円形である。

石OはSK2内に位置することとSS4とは規模と石質が異なっていることからSS4を構成する石ではなく、SK2に伴う石と考えられる。

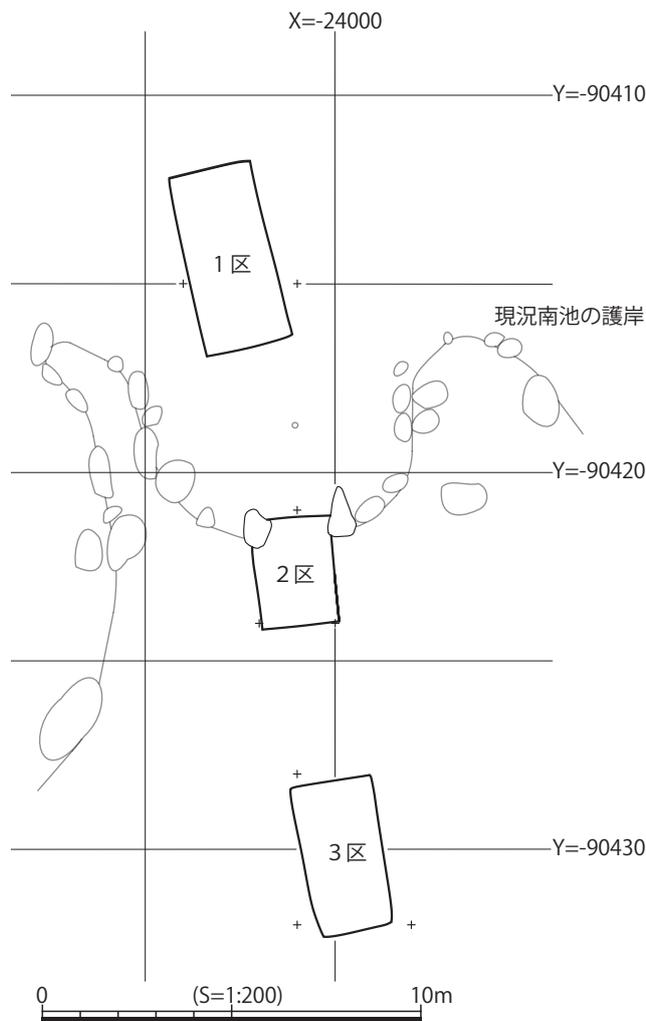


図15 庭園調査区1配置図

遺物：年代不明の常滑製の炆器甕1点と瓦類13点が出土した。

年代：SS4より新しい遺構である。SK1との新旧関係は不明である。

SK3 (図16)

遺構：25層を掘り込んでいる土坑である。規模は直径約0.7mで南西端は調査区外へと続いている。

遺物：瓦類5点が出土した。そのうち1点は近代の無文軒平瓦で、陸軍が使用していた瓦と考えられる。

年代：遺物から近代に構築された土坑である。

SS4 (石K～N, O, P) (図16)

遺構：幅0.3m～0.4mで東西方向に延びる黒褐色で軟質の石で構成される石列である。凝灰岩と考えられる。石は長方形から正方形の平面形状で、一辺が最大40cm、厚さ12cm～22cmである。石Pと石Qは重なり合っている。

SS4の掘方は確認できなかった。礫敷がSS4の南に広がっていることから、SS4の掘方は礫敷の下層に存在すると考えられる。

年代：SS4、礫敷の順に構築されている。出土遺物はなく構築年代は不明である。

景石B, C, D (図17)

遺構：石Bと石Dは調査以前から景石として地表に露出していた。石Cは石B及び石Dと組み合っていることから同様に景石と判断した。

石Bは花崗岩類、石Cと石Dはチャートである。2区の北西でBとC、CとDは組み合っている。石Cは20層と地山(27層)を掘り込んで据えられている。2区西壁(図16 C-D断面)をみると南側では石に密着してタタキが位置しているため、石C設置後にタタキが施工されている。南側の掘方はタタキの下層にあると考えられる。

石Bと石Dは石Cと接して据えられている。掘方は確認できない。

年代：27層上に石C、タタキ、17層の順に構築されており石Cは2区で最も古い遺構である。南池が存続している期間に設置された。

石Bと石Dは石C構築直後に組まれた石組であれば、2区で最も古い遺構のひとつと言えるが、後補することが可能であるため、構築年代やタタキ及び17層との新旧関係は不明である。西壁(図16 C-D断面)で堆積の様子を確認すると少なくとも4層堆積時には存在していたことがわかる。

景石群G,H,I (図16)

遺構：不規則な間隔で規格性のない石が3石並んでいたことから石G、H、Iを景石と判断した。

石Gは美濃帯の砂岩、石HとIはチャートである。

平坦な面を上面にして設置されている。石I頂部が標高12.6mであり石Hと石Gとともに、南東に向かって低くなっていく。石は加工痕が確認できないため、転石をそのまま利用したと考えられる。

石Iはタタキと密着しているが、石Cと異なりタタキ、石Iの順に施工されている。石Gと石Hはタタキよ

り先に据えられている可能性があるが、タタキを断ち割ることができなかつたため不明である。

年代：石G～H、タタキ、石Iの順に構築されていると考えられる。南池埋土より下層に据えられているため、南池が機能していた時期（近世）に構築されたと考えられる。

タタキ面（図16、17）

遺構：1区では標高12.2mで調査区南側に広がっている。北側を21層に、南側を24層に切られている。

2区では調査区西側と東側に存在している。南側は17層に掘り込まれている。上面は6層に削られているため、わずかに南に傾斜しており北端が標高10.66mで南端が標高10.64mである。

3区では東壁トレンチでタタキを確認した。検出標高は9.4mである。50cm四方のサブトレンチでのみ検出したため、規模や広がりには不明である。

年代：1区のタタキ面と2区のタタキ面の新旧関係は不明である。1区のタタキ面を掘り込む21層は砂利の下層である。タタキ面、21層、砂利層の順に構築されている。しかしSS4も砂利層に先行して構築されているため、タタキ面とSS4の新旧関係は不明である。出土遺物はなく構築年代は不明である。



写真1 2区 景石C 南から



写真2 1区 景石I 東から

出土遺物（図19）

庭園調査区1から出土した遺物は414点で重さは42,087gである。最も多い遺物は瓦類で315点出土し、重さは39,613gである。年代の判断が難しい細片が多い。施釉された瓦は4点出土している。出土遺物は391点が池埋土から出土している。池埋土から出土した遺物は時期不明の瓦片が中心で近世の陶磁器や近代の土管や瓦を含んでいる。池埋土から残存状態が良い0101～0112を図化した。

0101はいわゆる黄瀬戸の鉢である。口縁部の一部が残存している。全体に灰釉が施釉されている。

0102は瀬戸・美濃製の陶器の搦鉢である。口縁部の一部と摺り目がわずかに残存している。全体に鉄釉が施釉されている。大窯第4段階後半に属し16世紀末～17世紀前葉の製品と考えられる。0103は明石・堺系の炆器の搦鉢である。口縁部と摺り目の一部が残存している。常滑製品の真焼のように焼しめられ表面は赤褐色となっている。内面は全体に摺り目が彫られている。18世紀後葉の製品と考えられる。

0104は葵文軒丸瓦もしくは軒棧瓦の小巴である。推定瓦当径は90mmと他の軒丸瓦と比較して小型であ

る。葵内部には葉脈の意匠が確認できる。0105は巴文軒丸瓦である。文様区と丸瓦部のみ残存している。珠文は5個残存しており、珠文の間隔から完形では14個になると考えられる。巴は尾が発達して圏線となっている。

0106は軒平瓦もしくは軒棧瓦である。外区上部のみ面取りが確認できる。0111と0112は軒平瓦もしくは軒棧瓦である。瓦当のみ残存している。文様はいわゆる東海式*2である。瓦当に雲母粉が付着している。

0107は巴文の鳥衾瓦である。外区で面取りが確認できる。瓦当全体に雲母粉が確認できる。破面の刻みから瓦当と胴部を別個に作成したことがわかる。

0108は施釉された丸瓦である。凸面に銅緑釉が施釉されている。端部は面取りされている。内面は斜め方向にナデ調整を行ったのちに横方向にナデ調整を行っている。凸面は不明瞭であるが横方向のナデ調整が確認できる。胎土は灰白色で瀬戸・美濃製の陶器の胎土に類似している。0109は施釉された平瓦である。凹面前方に銅緑釉で施釉されている。全体的に平坦な形状だが、側端部が急激に立ち上がる。胎土は0108と比較して粗く、褐色である。0110は施釉された道具瓦である。凸面の横半分が施釉されている。凸面に墨書が書かれているが、退色しているため内容は不明である。断面形状は平瓦と同様であるが、葺いた際の露出面と施釉面が一致しない。0108~0110は施釉瓦の生産地である穴田窯の稼働年代から17世紀の製品と考えられる。

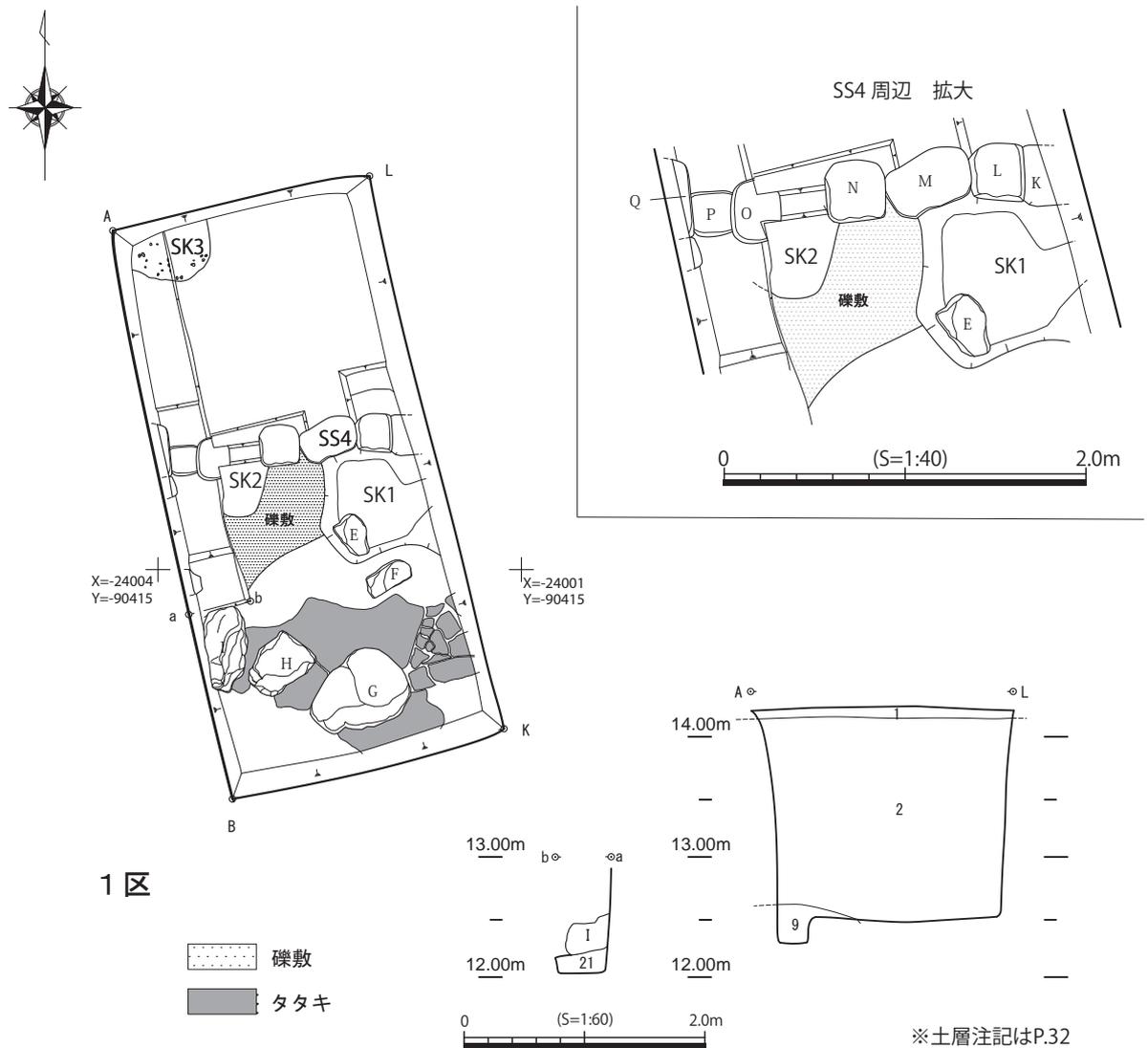
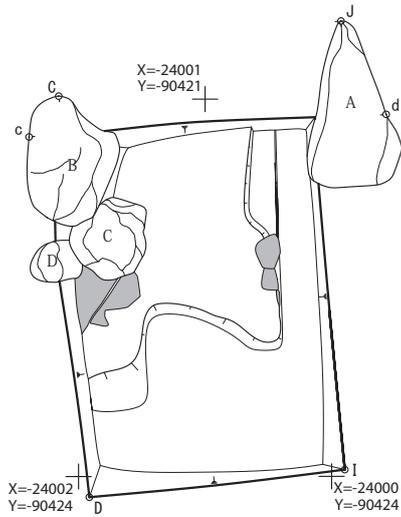
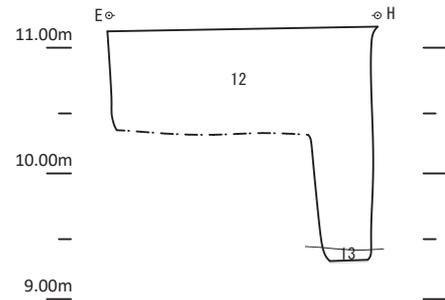
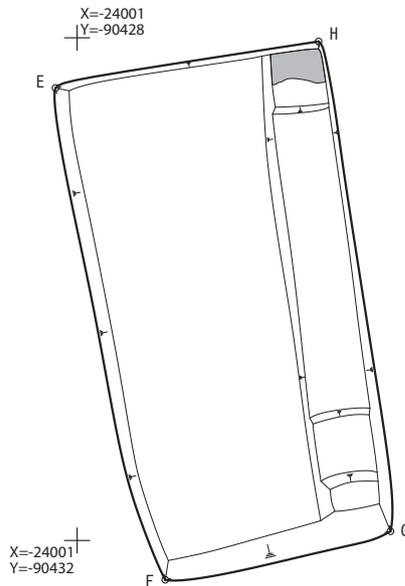
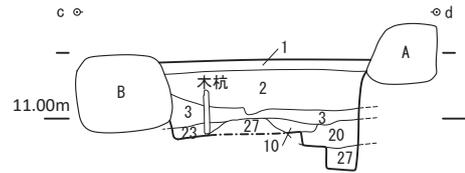


図 16 庭園調査区 1 1 区平面図及び断面図

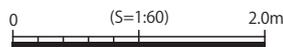


- 1 褐灰色7.5YR 4/1砂質土 しまりなし(表土)
 - 2 黄橙色10YR7/8砂質土 しまりなし 黒色粘土ブロック含む 山砂
 - 3 褐灰色5YR4/1シルト質土 しまりあり 黒色、黄色粘質土ブロック含む 公園造成土
 - 4 褐灰色10YR5/1粘質土 黄色、黒色粘質土ブロックを含む タタキが少量含む 池埋土
 - 5 灰褐色7.5YR4/2シルト質土 タタキ片含む
 - 6 灰色7.5Y4/1砂質土
 - 7 極暗褐色7.5YR 2/3粘質土 しまりあり(SK1埋土)
 - 8 黒色7.5YR 2/1粘質土 しまりあり 褐色粘質土ブロック(地山)含む
 - 9 黒褐色10YR 2/2粘質土 しまりあり 茶色土ブロック多く含む(SK3埋土)
 - 10 灰色5Y5/1砂質土 褐色粘質土ブロック(地山)含む
 - 11 暗褐色10YR 3/3粘質土 しまりあり φ50mm程度の円礫を含む
 - 12 オリーブ褐色2.5Y4/6粘質土 しまりなし 黒色、黄色粘質土、灰色砂質土ブロック含む(池埋土)
 - 13 オリーブ色5Y6/6 砂利層(10~20mm)で体積している(池底か)
 - 14 褐色5Y1/4砂質土 しまりなし 黄色粘質土ブロックを少量含む
 - 15 褐灰色10YR1/4粘質土 黄色粘質土ブロック含む φ20mm程度の礫を含む
 - 16 褐灰色10YR4/1 粘質土
 - 17 暗灰色10YR4/1砂質土 褐色粘質土ブロック多く含む
 - 18 灰色7.5Y4/1砂質土 褐色粘質土ブロック(地山)多く含む
 - 19 灰色5Y4/1砂質土 褐色粘質土、灰色砂質土ブロックを含む
 - 20 灰色7.5Y6/1砂質土 黄色粘質土、褐色粘質土含む
 - 21 黒褐色5YR 2/1 砂利層 しまりなし
 - 22 灰色5Y6/1粘質土 黒色土含む
 - 23 褐灰色5YR4/2砂質土 褐色粘質土ブロック(地山)多く含む
 - 24 にぶい黄褐色10YR 4/3粘質土 しまりあり 黒、茶色土含む
 - 25 黒褐色7.5YR 2/2粘質土 しまりあり
 - 26 にぶい黄褐10YR 4/3粘質土 しまりあり(地山)
 - 27 灰色10Y8/1砂質土 しまりあり(地山)
- ※ タタキ 橙7.5YR6/6

2 区



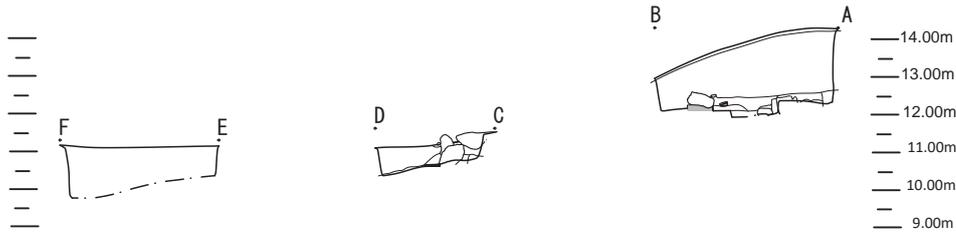
3 区



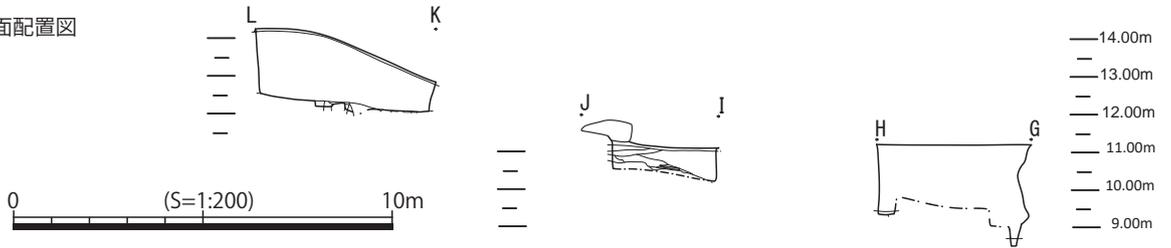
■ タタキ

図 17 庭園調査区 1 2 区・3 区平面図及び断面図

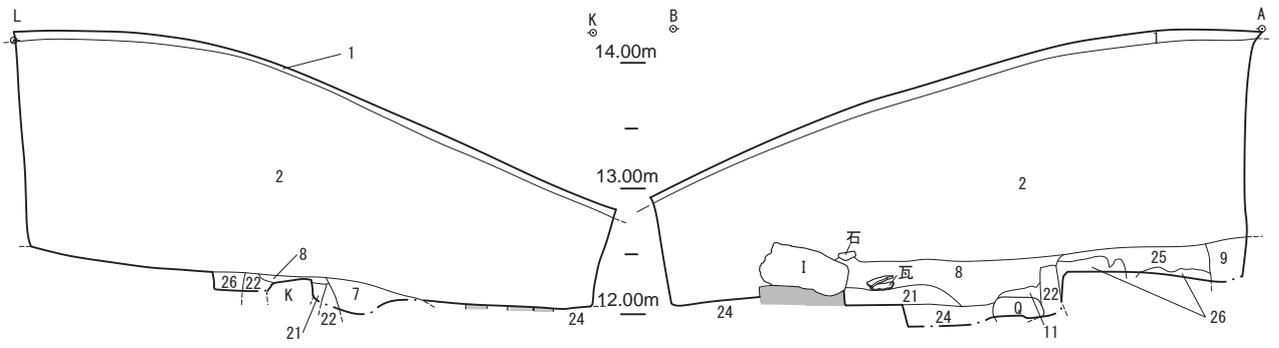
西壁断面配置図



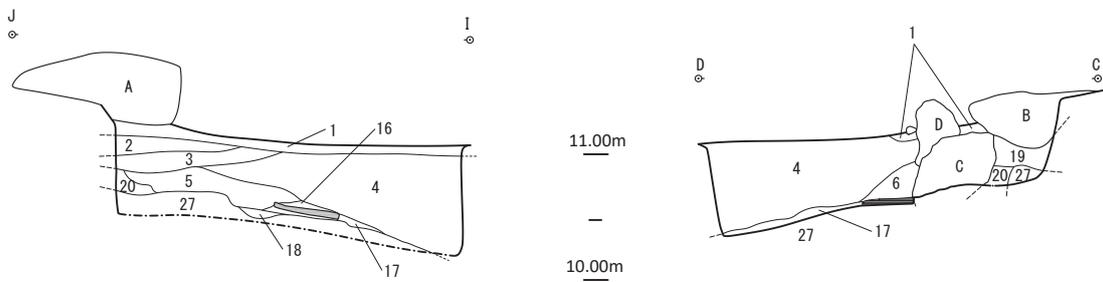
東壁断面配置図



1区



2区



3区

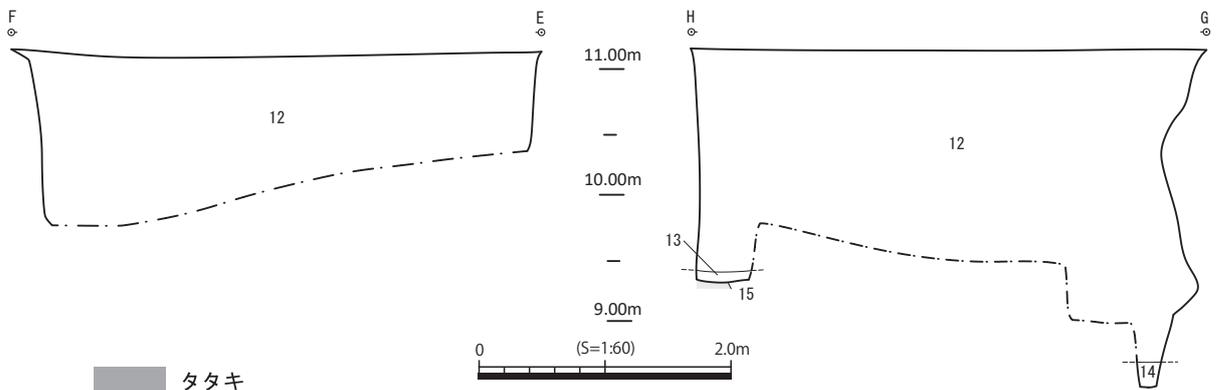


図18 庭園調査区1 1区・2区・3区断面図

※土層注記はP.32

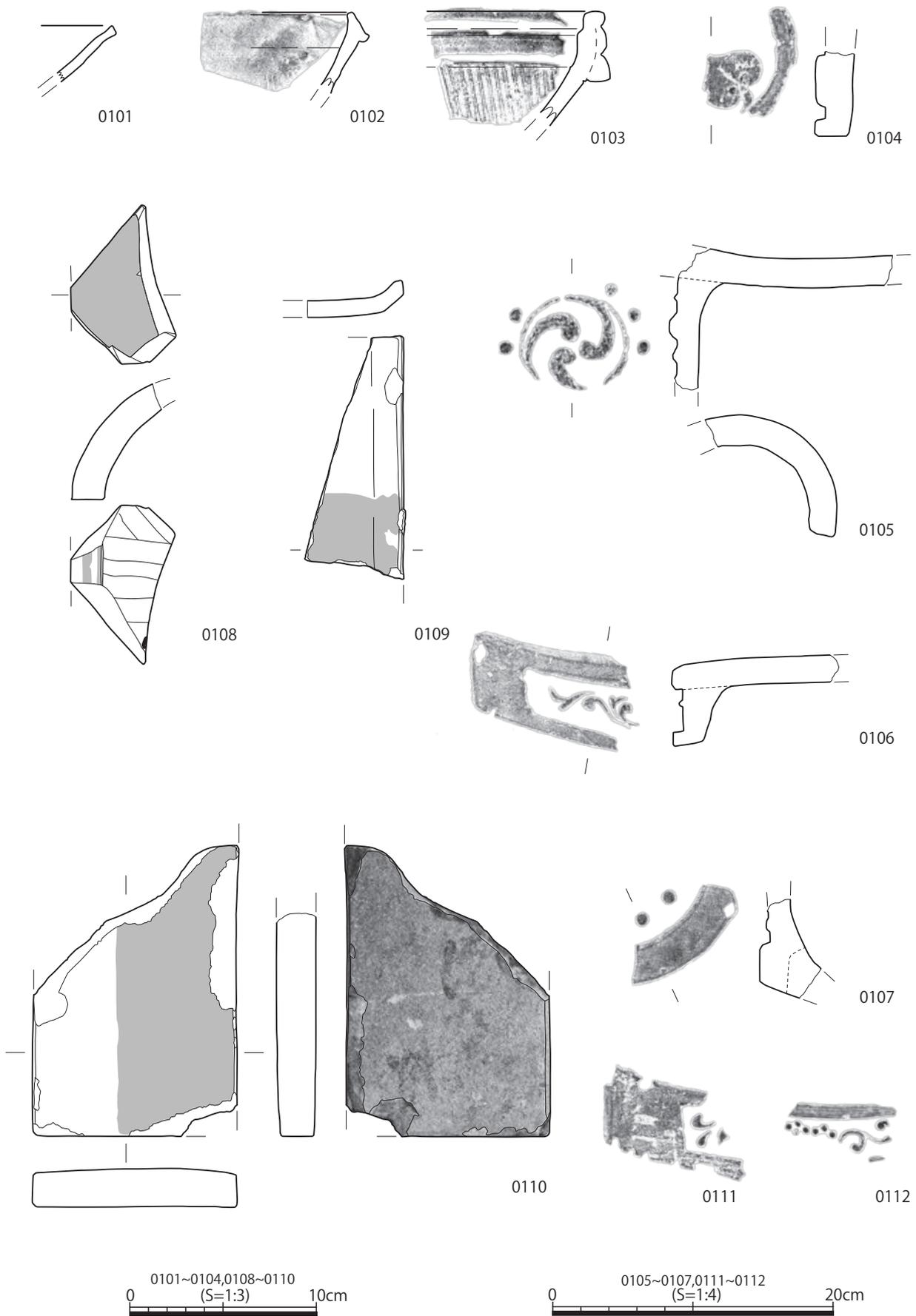


图 19 庭園調査区 1 遺物実測図

表 8 庭園調査区 1 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			胎質	製作地	
0101	3区 12層	陶器	皿	—	(30)	—	10	ロクロ成形	灰釉	—	2.5Y8/1灰白	—	瀬戸・美濃	—	黄瀬戸
0102	2区 4層	陶器	播鉢	—	(44)	—	38	ロクロ成形	鉄釉	—	黄褐	—	瀬戸・美濃	16世紀後葉	大窯第4段階後半
0103	2区 4層	炆器	播鉢	(36)	(62)	—	118	ロクロ成形	—	—	—	—	明石・堺	—	

表 9 庭園調査区 1 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0104	3区 12層	軒丸	(90)	—	(2)	(2)	63	葵文	灰 灰白	—	—	近世	
0105	3区 12層	軒丸	—	—	(158)	21	73	巴文	灰 灰	—	—	近世	
0106	2区 4層	軒平	(123)	59	(112)	19	382	唐草	暗灰 灰白	—	—	近世	
0107	3区 12層	道具瓦	(160.0)	—	(44.0)	2.6	264	巴文	暗灰 灰白	—	—	近世	鳥衾
0108	3区 12層	丸	(56.0)	—	(85.0)	16.0	112	—	灰白 灰白	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉 墨書あり
0109	3区 12層	平	(53.0)	—	(131.0)	9.0	92	—	緑黒 にぶい橙	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉
0110	3区 14層	道具瓦	110.0	—	(157.0)	21.0	442	—	黒 浅黄橙	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉 墨書あり
0111	3区 12層	軒	(110.0)	—	(43.0)	—	188	唐草	灰 灰白	—	—	近世	風車状五子葉文系か
0112	3区 12層	軒平	(87.0)	39.0	(41.0)	17.0	101	唐草	暗灰 灰白	—	東海	近世	東海式

(2) 庭園調査区1の自然科学分析

調査当時、南池の護岸と推定した1区22層、池底と推定した2区16層、3区14層に対して自然科学を行った。自然科学分析は近世における南池の滞水状況を確認するために珪藻分析、近世における南池周辺の植生を確認するために花粉分析を行った。また、南池護岸と考えられるタタキの成分分析を行った。分析に当たって遺構から遊離していたタタキをサンプルとして取り上げて分析に使用した。

珪藻分析

野口真利江 (パレオ・ラボ)

珪藻は、10~500 μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている (小杉, 1988; 安藤, 1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境 (例えばコケの表面や湿った岩石の表面など) に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、名古屋城二之丸庭園南池において採取された土層堆積物試料中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

試料と方法：試料は、二之丸庭園の南池で採取された土層堆積物4点である (表10)。

表 10 堆積物の特徴

分析No.	調査区	位置	層位/場所	堆積物の特徴	備考
1	南池	1区	22層	灰色 (5Y 6/1) 白色粘土	
2				白色粘土に混じる黒色土	
3		2区	16層	褐灰色 (10YR 4/1) タタキ直上堆積土	
4		3区	14層	褐色 (5Y 1/4) 砂質土	池の埋土

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 処理重量約1.0gを取り出し、秤量した後ビーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を10回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

作製したプレパラートは顕微鏡下400~1000倍で観察し、プレパラートの面積の2/3以上または珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形（原則として半分程度残っている殻）に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を図版20-1に載せた。珪藻化石の環境指標種群：珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉(1988)および安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、本分析においては淡水種のみが検出されているため、淡水種における環境指標種群以外の珪藻種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉(1988)が設定した海水~汽水域における環境指標種群と、安藤(1990)が設定した淡水域における環境指標種群のうち、淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中~下流性河川指標種群(K)]：河川の中~下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)]：水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態に優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群(P)]：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群(Q)]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

[陸生珪藻A群(Qa)]：耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群(Qb)]：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

結果：堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が27分類群20属11種1変種であった(表11)。これらの珪

藻化石は、淡水域における5環境指標種群（K、L、P、Qa、Qb）に分類された（表11）。以下では、調査位置ごとにおける珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

No.1：殻が半分以上残存する珪藻化石は検出されなかった。藻化石が検出されなかったため、基本的に乾燥した陸域環境と考えられる。

No.2：堆積物1g中の珪藻殻数は 2.3×10^5 個、完形殻の出現率は53.3%である。堆積物中の珪藻殻数はやや多い。環境指標種群では、陸生珪藻A群（Qa）が多く、陸生珪藻B群（Qb）を伴い、最下流性河川指標種群（L）や高層湿原指標種群（P）などをわずかに伴う。

環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域環境が推定される。

No.3：堆積物1g中の珪藻殻数は 2.1×10^4 個、完形殻の出現率は60.0%である。堆積物中の珪藻殻数は少ない。環境指標種群では、陸生珪藻A群（Qa）のみがわずかに検出された。

珪藻化石が少ない点と環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の影響をわずかに受ける、基本的に乾燥した陸域環境と考えられる。

No.4：堆積物1g中の珪藻殻数は 1.9×10^2 個、完形殻の出現率は50.0%である。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群では、陸生珪藻A群（Qa）のみがわずかに検出された。

珪藻化石が少ない点と環境指標種群の特徴から、ジメジメとした陸域の影響をわずかに受ける、基本的に乾燥した陸域環境と考えられる。

考察：No.2からのみ、珪藻化石が多く検出され、ジメジメとした陸域環境が推定された。しかし、白色粘土からは殻が半分以上残存する珪藻化石は検出されなかったため、2種類の土が混じる前のそれぞれの堆積環境を反映している可能性がある。

また、No.3からは、わずかに陸生珪藻が検出された。過去に分析を行ったタタキやモルタルの表面観察では、隙間に陸生珪藻が密集している様子が観察されている（タタキの成分分析を参照）。このことから、No.3からわずかに検出された陸生珪藻については、タタキの直上に堆積物が堆積する際に、タタキ表面に繁茂していた陸生珪藻の一部が取り込まれた可能性などが考えられる。

池の埋土と考えられているNo.4から、珪藻化石はほとんど検出されなかったが、わずかに検出された珪藻化石には陸生珪藻A群（Qa）が含まれていた。一方で、北園池の分析で検出されていた湖沼浮遊生指標種群（M）や湖沼沼沢湿地指標種群（N）などの湖沼性の珪藻群集は検出されなかった。検出数が少ないため過小・過大評価の可能性はあるが、湖沼性の珪藻群集が繁茂するような安定した水域は形成されていなかった可能性が考えられる。なお、堆積物は砂質土である点から、多少水の流れがあるような水域が形成されていた可能性もある。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

千葉 崇・澤井裕紀（2014）環境指標種群の再検討と更新．Diatom，30，7-30.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，1-20.

花粉分析

森 将志（パレオ・ラボ）

名古屋城二之丸庭園において、古環境を検討するために土壌試料が採取された。以下では、試料につい

て行った花粉分析の結果を示し、考察を行った。

分析試料と方法：分析試料は、南池から採取された4点である（表12）。これらの試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

表 11 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

No.	分類群	種群	1	2	3	4
1	<i>Achnanthes</i>	<i>inflata</i>	W	1		
2	<i>A.</i>	spp.	?	1		
3	<i>Amphora</i>	<i>montana</i>	Qa	1		
4	<i>A.</i>	spp.	?	1		
5	<i>Aulacoseira</i>	spp.	?	1		
6	<i>Caloneis</i>	spp.	?	1		
7	<i>Cyclotella</i>	<i>meneghiniana</i>	L	2		
8	<i>Cymbella</i>	<i>mesiana</i>	W	2		
9	<i>C.</i>	spp.	?	1		
10	<i>Diadismis</i>	<i>confervacea</i>	Qb	6		
11	<i>Diatoma</i>	spp.	?			1
12	<i>Diploneis</i>	spp.	?	1		
13	<i>Eunotia</i>	spp.	?	1		
14	<i>Fragilaria</i>	spp.	?	1		
15	<i>Gomphonema</i>	<i>parvulum</i>	W	1		
16	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Qa	15	2	
17	<i>Luticola</i>	<i>mutica</i>	Qa	15	2	1
18	<i>Navicula</i>	spp.	?	3		
19	<i>Neidium</i>	spp.	?	3		
20	<i>Nitzschia</i>	spp.	?	4		
21	<i>Pinnularia</i>	<i>borealis</i>	Qa	2	1	
22	<i>P.</i>	<i>subcapitata</i> var. <i>elongata</i>	P	1		
23	<i>P.</i>	spp.	?	11		
24	<i>Planothidium</i>	<i>lanceolatum</i>	K	1		
25	<i>Stauroneis</i>	<i>obtusa</i>	Qb	10		
26	<i>S.</i>	spp.	?	3		
27	Unknown	?		3		
中～下流性河川			K	1		
最下流性河川			L	2		
高層湿原			P	1		
陸生A群			Qa	33	5	1
陸生B群			Qb	16		
広布種			W	4		
淡水不定・不明種			?	32		1
その他不明種			?	3		
海水種						
海～汽水種						
汽水種						
淡水種				89	5	2
合計			0	92	5	2
完形殻の出現率 (%)			—	53.3	60.0	50.0
堆積物1g中の殻数 (個)			0.0E+00	2.3E+05	2.1E+04	1.9E+02

表 12 分析試料一覧

分析No.	調査区	位置	層位	堆積物の特徴
1	南池	1区	白色粘土 (22層)	灰色 (5Y6/1) 粘土
2			白色粘土に混じる黒色土	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土
3		2区	タタキ直上堆積土 (16層)	褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
4		3区	池埋土 (14層)	褐色 (5Y1/4) 砂質土

試料（湿重量約4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。検鏡は、プレパラート1枚の全面を検鏡した。

結果：検鏡の結果、4試料からは花粉化石は検出されなかった。花粉化石が得られなかったため、図表は示していない。なお、プレパラートの状況を図20-2に示す。

考察：4試料からは、花粉化石が得られなかった。一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境下で堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。珪藻分析の結果においても、絶えず水を湛えた堆積環境ではなかったと推測されているため、南池は酸化的環境が優勢であったと考えられ、そのため、花粉の残りが悪いと思われる。今回の分析結果から、古植生を推測するのは難しい。

タタキの成分分析

藤根 久・米田恭子・竹原弘展(パレオ・ラボ)

名古屋城二之丸庭園のタタキについて、材質を調べるために薄片の顕微鏡観察、元素マッピング分析およびX線回折分析を行った。

表 13 分析試料の詳細

分析No.	種別	調査区	採取位置
1	タタキ	南池	2区 16層直下
2	タタキ	外縁	T7付近

試料と方法：分析は、名古屋城二之丸庭園のタタキ2

点を対象として、薄片の偏光顕微鏡観察、同薄片切断面の元素マッピング分析（点分析含む）、基質部のX線回折分析を行った（表13）。

[薄片の偏光顕微鏡観察]

試料は、岩石カッターを用いて整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し、接着面と反対面を平滑にした後、平滑面をエポキシ系樹脂で固化処理した。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨して、スライドガラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片について、偏光顕微鏡を用いて、薄片全面に含まれていた微化石類（珪藻化石や骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物の観察と記載を行った。

[元素マッピング分析]

分析試料は、偏光顕微鏡の観察用薄片の作製時に切断した残りの試料（平滑面）を測定試料とした。分析装置は、株式会社堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（分析顕微鏡XGT-5000Type II）を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム（Rh）ターゲット、X線ビーム径が100 μm、検出器は高純度Si検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）である。

分析は、最初に元素マッピング分析を行い、カルシウム（Ca）のマッピング図において基質部の高輝度部分、複数箇所について、点分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が50kV、1.00mA、ビーム径100 μm、測定時間6000sを1回走査、点分析が50kV、電流自動設定、ビーム径100 μm、測定時間500sに設定して測定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を行った。

[X線回折分析]

分析試料は、アルミナ製乳鉢で軽く粉砕した後、250μmのふるいで粗い砂粒を取り除いてよく粉砕し、無反射試料板に充填して、不定方位試料として測定した。

分析には、株式会社リガク製X線回折装置 (MiniFlex600) を使用した。装置は、X線管が銅 (Cu) ターゲット、検出器が一次元半導体検出器 (D/teX Ultra) を使用している。測定条件は、40kV、15mA、走査速度 2deg/min、ステップ幅 0.02deg、走査範囲 3~65deg、蛍光X線軽減モードに設定し、試料を回転させつつ測定した。結果：以下に、各試料の薄片の顕微鏡観察、元素マッピング分析、X線回折分析の結果について述べる。

[薄片の偏光顕微鏡観察]

粒子組成は、微化石類や岩石片および鉱物を記載するために、プレパラート全面を精査した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の岩石片・鉱物の砂粒組成、微化石類などの記載を示す。なお、表14における不等号は、量比の概略を示す。表15における量比を示す記号は、◎が非常に多い、○が多い、△が検出、-が不検出であることを示す。

表 14 タタキ胎土中の粘土の微化石類と砂粒組成の特徴

分析No.	種別	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	タタキ	380 μm ~ 1250 μm	4.02mm	—	複合石英類(微細)、石英・長石類)石灰岩類)雲母類、凝灰岩質、複合石英類(大型)、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、片理複合石英類、斜長石(双晶)、泥岩質、斑晶質(ガラス質)、流紋岩質
2	タタキ	420 μm ~ 1200 μm	9.35mm	珪藻化石(空隙内に陸域指標種群Hantzschia amphioxys、Pinnularia borealis)、植物珪酸体化石	石英・長石類、複合石英類(微細))石灰岩類、複合石英類(大型)、雲母類)斑晶質(ガラス質)、カリ長石(パーサイト)、凝灰岩質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、片理複合石英類、砂岩質、ガラス質(バブル型)

表 15 タタキ胎土中の粘土および砂粒組成の特徴 (◎：多い、○：やや多い、△：少量含む)

分析No.	種別	粘土の特徴							砂粒の特徴							鉱物の特徴					植物珪酸体化石	その他の特徴			
		種類	放射虫化石	珪藻化石	淡水珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	A・a	B・b	C・c	D・d	E・e	F・f	G・g	石英	(双晶・累帯)斜長石	(パーサイト)カリ長石	ジルコン			角閃石類	輝石類	雲母類
1	タタキ	石灰質	—	—	—	—	—	C	△	△	◎	△	△	△	—	◎	△	—	△	△	△	△	—	—	基質に方解石充填(少ない)、堆積岩類は概ねチャートからなる
2	タタキ	石灰質	—	—	—	—	—	C	△	△	◎	△	△	—	△	◎	—	△	△	△	△	○	△	△	基質に方解石充填、大型チャート、砂粒付着珪藻(陸域指標種)

1. 粘土材料の分類

タタキの薄片全面を観察した結果、基質部における方解石の有無により、2点とも、a) 石灰質粘土、に分類された (表15)。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a) 石灰質粘土 (分析No.1、No.2)

これらのタタキ中には、砂粒や礫の粒子間の基質に、虹色を呈する微細な方解石が充填していた (図 20-3 1a~2c)。なお、分析No.2では、イネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体化石がわずかに含まれていた。

2. 砂粒組成による分類

比較的大型の砂粒と鉱物群により、起源岩石の推定を行った (表15)。岩石の推定では、片理複合石英類が片岩類 (A/a)、複合石英類 (大型) が深成岩類 (B/b)、複合石英類 (微細) などが堆積岩類 (C/c)、斑晶質・完晶質が火山岩類 (D/d)、凝灰岩質や結晶度の低い

表 16 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群							
		A	B	C	D	E	F	G	H
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga	Ha
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb	Hb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc	Hc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd	Hd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge	He
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf	Hf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	Hg
	h	石灰岩質	Ah	Bh	Ch	Dh	Eh	Fh	

火山岩が凝灰岩類 (E/e)、流紋岩質が流紋岩類 (F/f)、ガラス質がテフラ (G/g) である。

タタキ中の砂粒組成は、表16の組み合わせに従い、2点ともC群に分類された。

1) 主に堆積岩類からなるC群 (分析No.1、No.2)

このタタキの胎土中には、主に複合石英類 (微細) や砂岩質からなる堆積岩類が多く含まれていた。その他に、複合石英類 (大型) からなる深成岩類、凝灰岩類、火山岩類も含まれていた。なお、複合石英類 (微細) は、堆積岩類の多くがチャートと考えられる (表14、表15)。

[元素マッピング分析]

元素マッピング分析によるケイ素 (Si)、イオウ (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、鉄 (Fe) のマッピング図を示す (図20-4)。また、カルシウム (Ca) のマッピング図において高輝度を示す基質部の点分析の結果を表17に示す。

カルシウム (Ca) のマッピング図では、分析No.1、2ともに、砂や礫の粒子間の基質部で輝度が高いが、分析No.1は高輝度の範囲がやや少ない。

ケイ素 (Si) のマッピング図では、チャートまたは石英に対応して粒子状に輝度が高い。次いで長石類や雲母類などに対応してやや輝度が高い。カリウム (K) のマッピング図では、主に長石類などに対応して輝度が高い。

イオウ (S) のマッピング図で輝度が高いのは、包埋時に使用したエポキシ樹脂成分であり、試料とは関係がない元素であるが、空隙を間接的に示す。

基質部の点分析では、分析No.1のカルシウム (CaO) が80.00~97.87%、分析No.2のカルシウム (CaO) が91.51~95.75%であった (表17)。

表 17 各ポイントの蛍光 X 線分析結果 (重量 %)

分析No.	種類	位置	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Total	備考
1	タタキ	a	1.36	4.56	13.70	0.00	0.00	80.00	0.09	0.00	0.29	100.00	基質部
		b	0.75	3.45	13.06	0.00	0.01	82.42	0.07	0.00	0.25	100.01	
		c	0.03	0.78	3.15	0.00	0.00	95.90	0.04	0.01	0.09	100.00	
		d	2.48	4.18	10.60	0.00	0.02	82.31	0.04	0.09	0.29	100.01	
		e	0.19	0.55	1.24	0.00	0.00	97.87	0.00	0.00	0.14	99.99	
2	タタキ	a	0.01	0.79	5.75	0.00	0.00	93.37	0.01	0.00	0.08	100.01	基質部
		b	0.79	2.08	4.99	0.00	0.05	91.51	0.08	0.01	0.48	99.99	
		c	0.06	1.00	3.27	0.00	0.00	95.47	0.04	0.04	0.11	99.99	
		d	0.76	5.08	2.11	0.00	0.00	91.56	0.04	0.03	0.42	100.00	
		e	1.06	0.75	2.22	0.00	0.00	95.75	0.02	0.03	0.17	100.00	

[X線回折分析]

X線回折分析では、分析No.2から方解石 (Calcite : CaCO₃) や石英 (Quartz : SiO₂) が検出された。分析No.1からは、方解石 (Calcite : CaCO₃) は検出されなかった。(表18、図20-3)。

表 18 X 線回折分析による検出鉱物一覧

分析No.	種類	方解石 (Calcite)	石英 (Quartz)	正長石 (Orthoclase : KAlSi ₃ O ₈)
1	タタキ		◎	△
2	タタキ	◎	◎	

ピーク検出の程度、◎：顕著に高く検出 ○：高く検出 △低く検出 (同定の信頼度低い)

考察：以下に、今回のタタキの材質について、その特徴をまとめる。

分析No.1は、砂粒の平均粒径が380 μ m-1.25mm (最大粒径4.02mm) で、主に中粒砂～極粗粒砂からなり、中礫を含む。砂礫は、主に堆積岩類からなるC群であった。基質部では、微細な方解石の集合部と粘土部が見られた。元素マッピング分析では、カルシウム (Ca) が明瞭に検出され、最大97.87%であった。なお、基質部には方解石を含まない粘土質部があり、不均一であった。方解石の集合部が少なかったため、X線回折分析においては方解石 (Calcite : CaCO₃) が検出されなかった。

分析No.2は、砂粒の平均粒径が420 μ m-1.2mm (最大粒径9.35mm) で、主に中粒砂～極粗粒砂からな

り、中礫を含む。砂礫は、主に堆積岩類からなるC群であった。基質部では、微細な方解石の集合部と粘土部が見られた。元素マッピング分析では、基質部に対応してカルシウム (Ca) が明瞭に検出され、最大95.75%であった。X線回折分析においても、方解石 (Calcite : CaCO₃) が検出された。

分析の結果、2試料とも基質部から方解石が観察された。主に石英類からなる堆積岩類を中心とした砂粒を含む土砂に、消石灰 (Ca(OH)₂) を混ぜ込んでたたき締めた、いわゆるタタキと考えられる。消石灰は、大気中の二酸化炭素を取り込んで炭酸カルシウムとなり、固化する。ただし、分析No.1は微細な方解石の集合が観察されるものの、それほど多くはなく、締まりが悪く、脆い。

参考文献

- 牧野和孝 (1998) 鉱物資源百科辞典. 1390p, 日刊工業新聞社.
 日本粘土学会編 (2009) 粘土ハンドブック第三版. 990p, 技報堂出版.
 リガク編 (2010) X線回折ハンドブック. 243p, リガク.

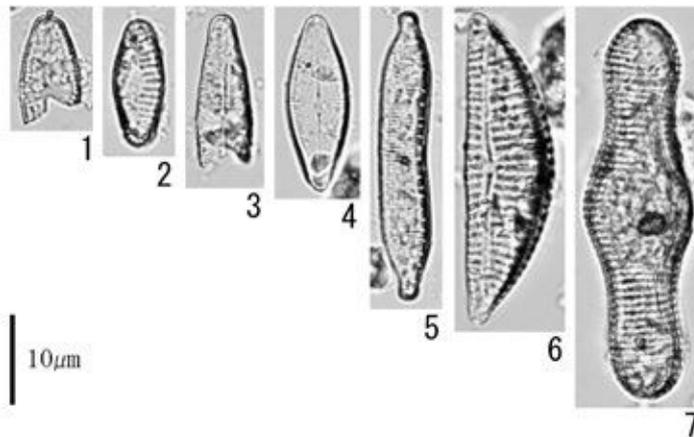


図 20-1 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 (括弧内の数字は分試料 No. を示す)

1. *Luticola mutica* (No.2) 2. *Planothidium lanceolatum* (No.2) 3. *Stauroneis obtusa* (No.2)
 4. *Diadesmis confervacea* (No.2) 5. *Hantzschia amphioxys* (No.2) 6. *Cymbella mesiana* (No.2)
 7. *Achnanthes inflata* (No.2)

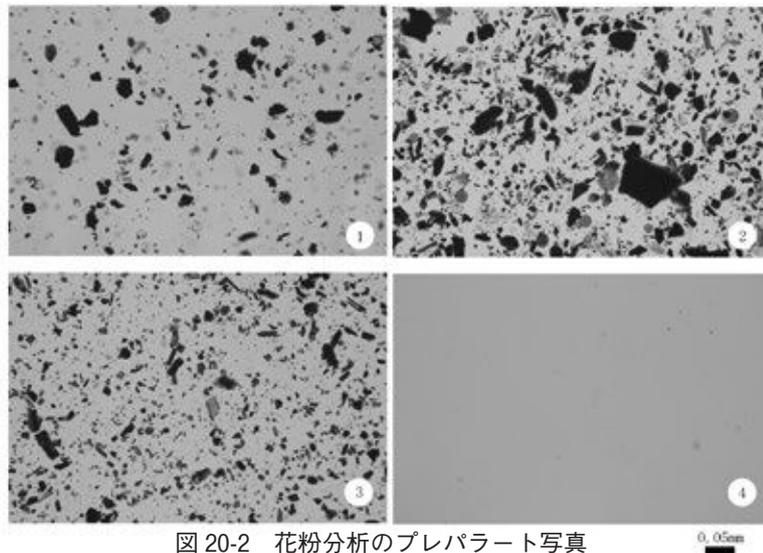


図 20-2 花粉分析のプレパラート写真

1. No.1 2. No.2 3. No.3 4. No.4

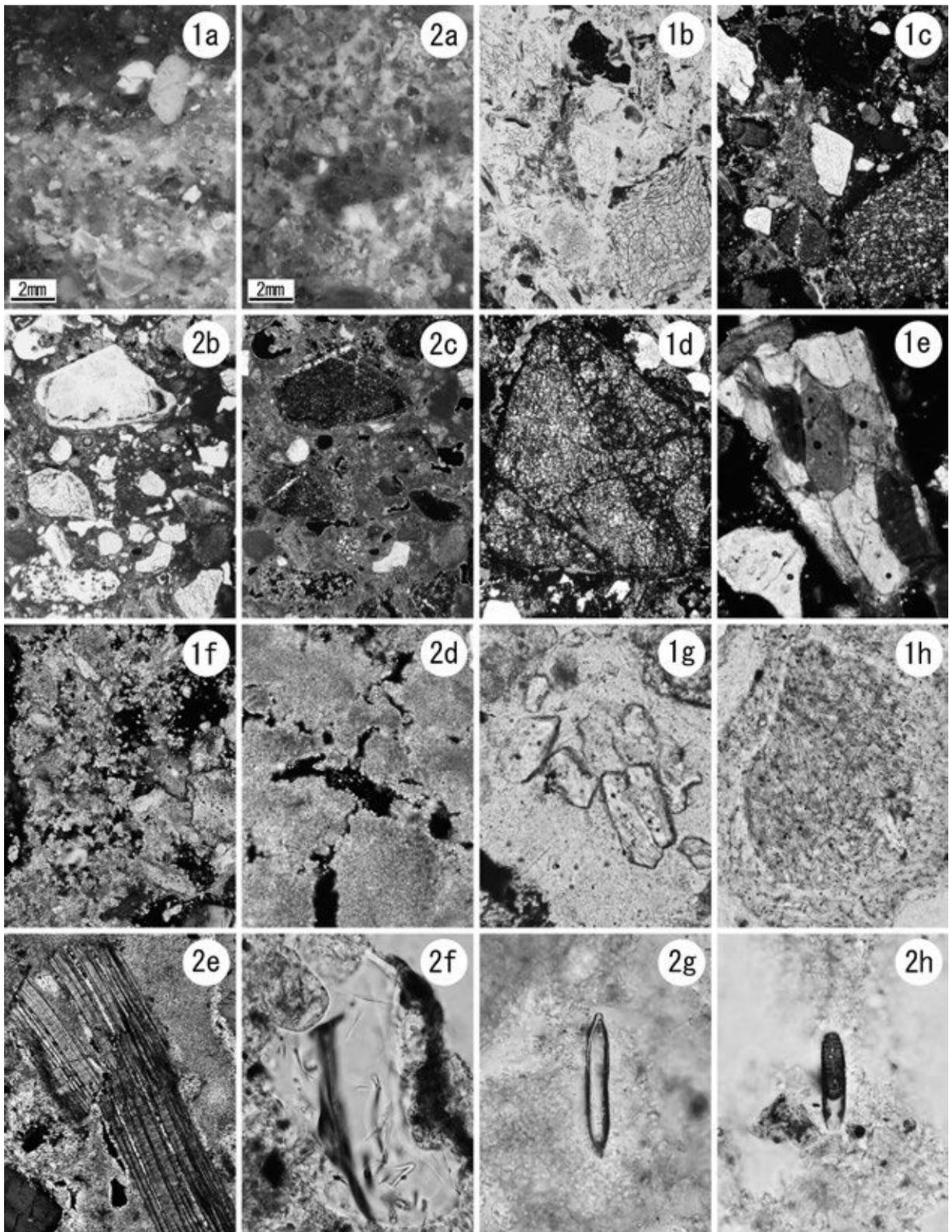


図 20-3 タタキとその胎土中の粒子の偏光顕微鏡写真

(スケール ; 1b, 1c, 2b, 2c, 1d : 500 μ m、1f, 2d, 2e : 100 μ m、1e, 1g, 1h : 50 μ m、2f, 2g, 2h : 20 μ m)

- 1a. 分析No.1 (断面) 2a. 分析No.2 (断面) 1b. 分析No.1 (解放ニコル) 1c. 分析No.1 (直交ニコル)
 2b. 分析No.2 (解放ニコル) 2c. 分析No.2 (直交ニコル) 1d. 複合石英類 (微細) 1e. 石灰岩類
 1f. 石灰質類 2d. 石灰質類 1g. 方解石 1h. 斑晶質(ガラス質) 2e. 雲母類 2f. ガラス質(バブル型)
 2g. 珪藻化石 (陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*) 2h. 珪藻化石 (陸域指標種群 *Pinnularia borealis*)

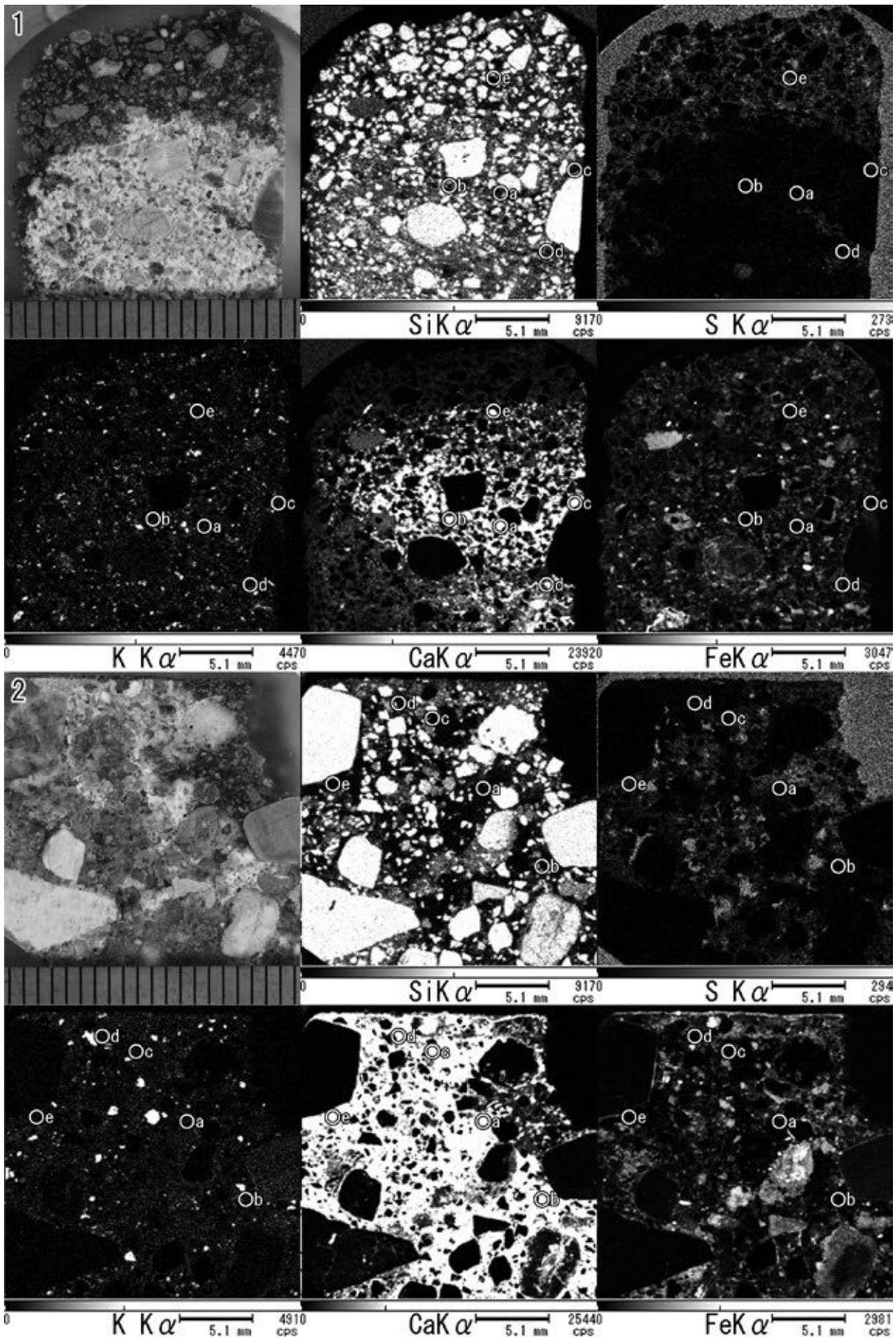


図 20-4 元素マッピング分析結果 (左上数字は分析 No.)

(3) 庭園調査区2

層序 (図24、25)

庭園調査区2の層序は表土、近現代層、地山由来のブロック土を含む層である。現存する築山に1～6区の小調査区を設定した。地山由来のブロック土を含む層を近世の築山盛土と捉え、検出した時点で掘削を終えた。

表土(2層)は築山全体で約2cmの厚さで堆積している。表土の下層は近代の磁器やガラス、陸軍が使用した葉莢等を含む近現代層(4～16層)である。3、19層は根かく乱と推定した。近現代層は築山の頂部から斜面にかけては約30cm、築山南麓では約50～80cm、築山北麓では約20cmの厚さで堆積している。近現代層の下層では地山由来のブロックを含む土(40、43、44、46、51層)を確認した。これらの層から遺物は出土していない。近現代層と比べてしまりのある土であること、地山由来のブロックを含む土であることから第6次調査同様に近世の築山盛土と推定した。また、41、48、45層はいずれもしまりのある土で地山由来のブロックを含む40、43、44、46層とほぼ同レベルで検出されたことから近世の築山盛土と推定した。

築山 (図23)

遺構：北池の南に現状で南北約6m、東西約12mの規模で存在する。現存する築山の標高は15.8mで山裾からの高さは最大約1.9mである。樹木による根かく乱が激しい。北麓には景石群10(石A～H)、南麓には景石群11(石I～N)が配置されている。築山の南側には南北方向に土塁が残存している。土塁は築山を利用して近代に築かれたとされ、築山の西南隅と土塁が接続している。4区でSK7、SK8、6区でSK9を検出した。

遺物：築山から出土した遺物は906点で重量は38,036gである。最も多く出土した遺物は瓦類で447点出土し、重さは28,940gである。出土した瓦類の中では平・棧瓦が最も多く出土している。庭園調査区2ではほかの調査区と同様に厚さ20mm前後の平・棧瓦も出土しているが、10mm前後の平・棧瓦の出土が目立つという特徴がある。瓦類に次いで磁器、陶器、ガラス製品の順に出土量が多い。ほかの調査区と比べてガラス製品の出土量が97点1,491gと多い。

年代が分かる遺物と残存状態が良い遺物を中心に14点を図化した。

0201は山茶碗の皿である。粗い胎土と形状から13世紀中葉～14世紀前葉に生産された尾張型山茶碗と考えられる*1。

0202は瀬戸・美濃製の陶器の壺蓋である。外面は鉄釉で施釉されている。内面(壺側)に糸切り痕が見られる。0203は瀬戸・美濃製の陶器の小皿である。全面が長石釉で施釉されているいわゆる志野皿である。形状から17世紀末～18世紀前葉に生産された製品と考えられる。0204は瀬戸・美濃製の陶器の碗である。形状からいわゆる天目茶碗である。

0205と0206は軒棧瓦である。小巴が欠損している。全面で雲母粉が観察できる。18世紀以降に生産された瓦である。0206は外区に「壬戌」という角印が確認できる。0207は軒平瓦もしくは軒棧瓦の瓦当である。瓦当面に雲母粉が確認できる。18世紀以降に生産された瓦である。0208は平瓦もしくは棧瓦である。側面に○に「作」と彫られた刻印が確認できる。幕末に生産された瓦と考えられる。

0210～0213は陸軍が使用した武器類の葉莢である。

0214はガラス瓶である。体部に「大日本麥酒株式會社製造」と製造元を表すマーク、底部に☆の陽刻が確認できる。
年代：遺物から築山の構築年代を推定することはできなかった。南麓は近現代層である4・12・13層が近世の築山盛土と推定した46層を削平して堆積しているため、築山の南側は近代以降の削平を受けていると考えられる。

SK7 (図23、図24)

遺構：築山頂部に位置する。4区で検出した。径0.3mの円形の土坑である。48層から掘り込まれている。φ100～200mmの礫が入る。礫の周囲には褐色土（41層）が充填されている。第6次調査では01SKが検出されており、第6次調査では01SKを「風信」の根固めと推定している。SK7を01SKから北へ0.4mのところ
で検出した。いずれも土坑内で礫を検出したことからSK7は01SKと関連する遺構もしくは同様の役割を持つ遺構であると考えられるが、「風信」に関連する遺構であるかはさらに検討が必要である。

遺物：遺物は出土していない。

年代：築山構築後に近世の築山盛土である48層を掘り込んで構築された土坑である。廃絶年代は不明である。

SK8 (図23)

遺構：築山頂部に位置する。4区で検出した。検出した範囲では径0.5m程度の不整形の土坑である。SK7
と重複する形で検出した。礫等は含まない。

遺物：埋土から陶器1点（0209）が出土した。0209は猿投製の甕の頸部と考えられる。外面に4条の沈線と
縦方向のヘラ描きがされている。内外面ともに灰釉がみられる。

年代：SK7に切られているため、SK7に先行する土坑である。

景石群10（石A～H）（図23～25）

遺構：調査以前から露出しており、築山の北麓に沿って配置されていることから景石と判断した。石A、
B、Gはチャートである。石C、E、Hは砂岩である。石D、Fは花崗閃緑岩である。

石A頂部の標高は14.4m、石B頂部の標高は14.4mである。石Bは上面をケズリ加工し、皿状の窪みを形
成している（図21・図版2）。窪み中心の標高は14.2mである。手水鉢や灯籠等の石造物を乗せるために加
工した可能性がある。石C頂部の標高は14.8mである。石A・B・Cの下に39層が堆積している（図25の6区
東壁L'-NL-L'断面）。いずれも掘方はなく、39層に据えられている。39層からは遺物が出土していない。

石D頂部の標高は14.5mである。石E頂部の標高は14.6mである。石F頂部の標高は14.8mである。石D・E・
Fの掘方はなく、17層上に据えられている（図24の4区東壁I-I'断面、5区西壁J-J'断面、図25の5区東壁K-K'
断面）。17層からは遺物が出土していない。

石G頂部の標高は14.7mである。石Gの掘方はなく5層堆積後に現在位置に配置されたものである（図24
の3区北斜面南壁F'-G'断面、3区東壁G-G'断面）。

石H頂部の標高は15.4mである。石Hの掘方はなく近世の築山盛土である44層と密着している（図24の3
区東壁G-G'断面）。

年代：石A～Fの配置年代は不明である。5層は近現代層のため、石Gは近代以降に配置されたと考えられる。
石Hは層序から近世に配置された可能性がある。配置年代が異なる石A～Hは現在も景石として機能している。

景石群11（石I～N）（図23～25）

遺構：築山の南麓で検出した。石I・石Nは調査以前から露出していた。築山の南麓に沿って検出したことから景石と判断した。石I・L・Mはチャートである。石J・K・Nは砂岩である。

石I頂部の標高は15.3mである。石Iは近現代層である16層中に据えられている（図24の5区西壁J-J'断面）。石J頂部の標高は14.4m、石K頂部の標高は14.6m、石L頂部の標高は14.1m、石M頂部の標高は14.0mである。石J～Mは近現代層である4・12・13層中にある（図24の3区東壁G-G'断面、図25の7区N-N'・M-M'断面）。石N頂部の標高は14.4mで9層上に置かれている（図24の2区南斜面東壁E-E'断面）。

年代：いずれも近現代以降に配置されたと考えられる。築山の南側は近代以降の削平を受けていると考えられるため、石I～Nは近世に築山の景石として配置されていたものを利用した可能性がある。

出土遺物（図22、表19～21、図版5）

庭園調査区2から出土した遺物は1,145点で総重量は35,776gである。陶磁器類と瓦類が主体であるが、近現代遺物ではガラス製品が目立ち、97点1,491gを占める。また、表土からの出土であるが、銅緑釉で施釉された丸瓦1点が含まれている。陶磁器類は皿や碗が主体である。

4層から現代のガラス瓶（0215）が出土した。頸部に「1リットル」、体部にカタカナで「ココ・コーラ」の表記がある。12・13層からガラスや碇子、14層からガラスが出土した。

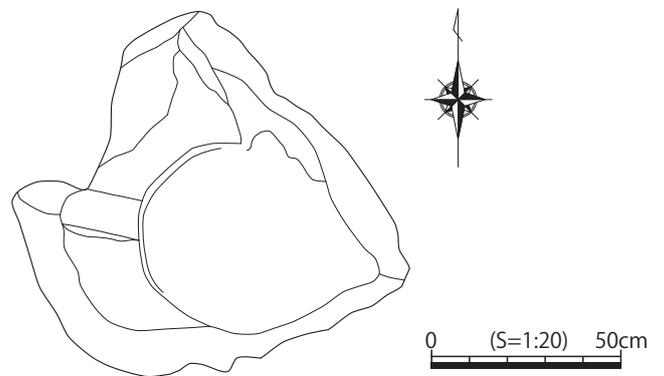


図21 庭園調査区2 石B 実測図

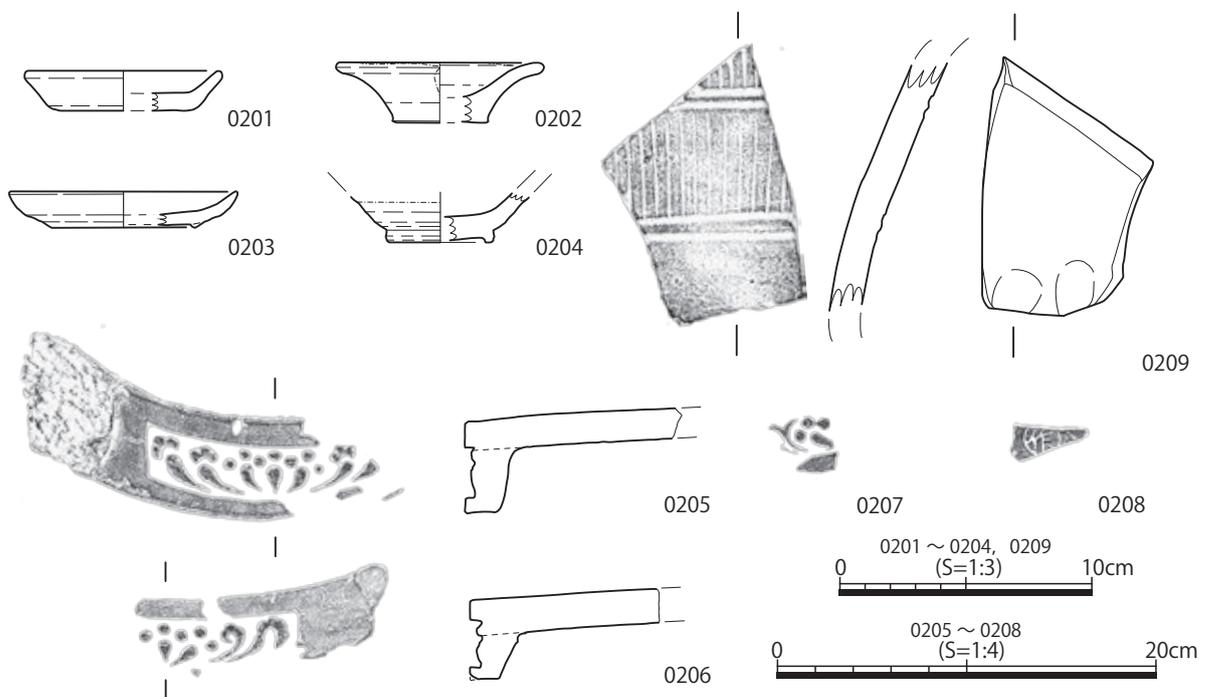


図22 庭園調査区2 遺物実測図

※観察表はP.51

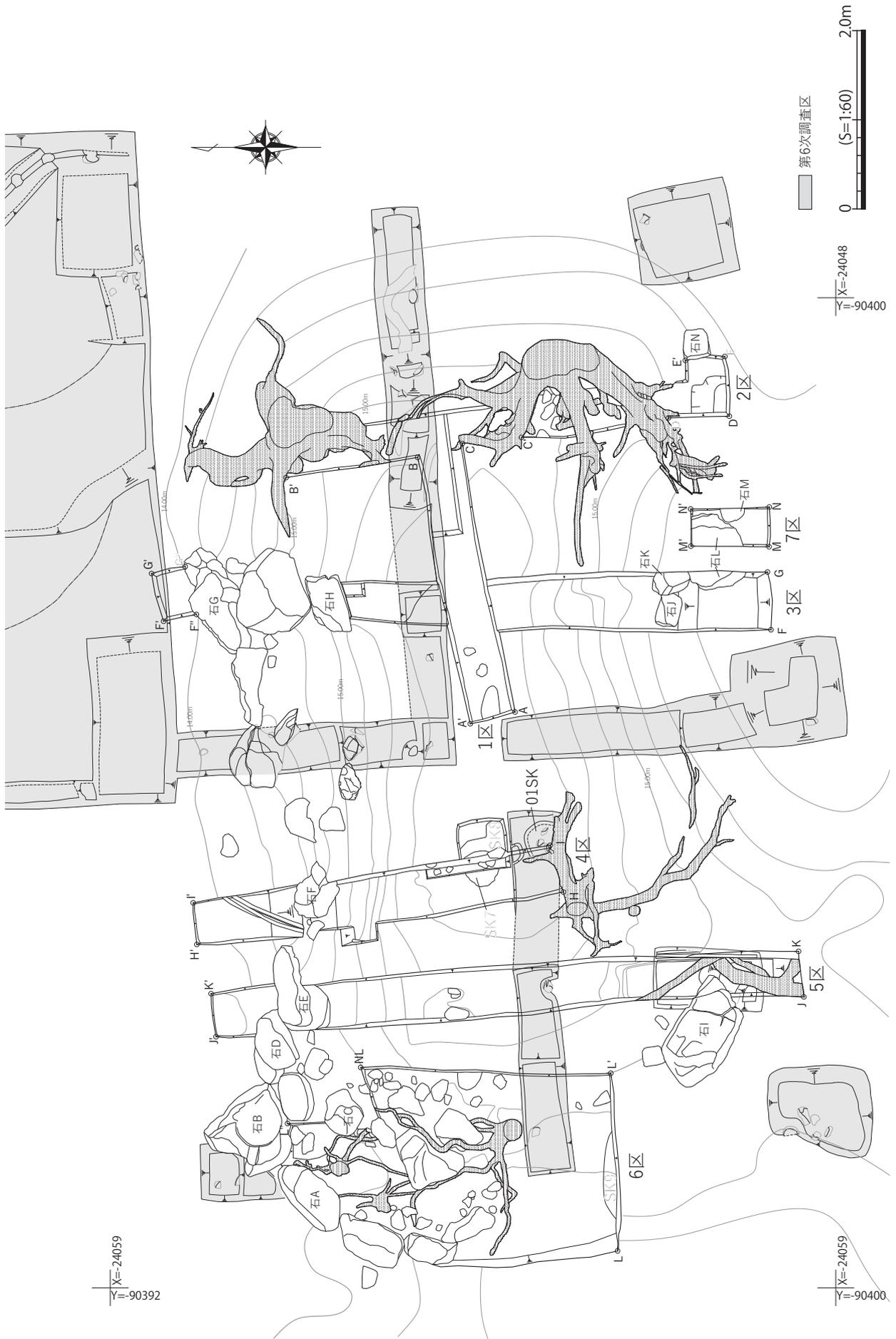


图 23 庭園調査区 2 平面図

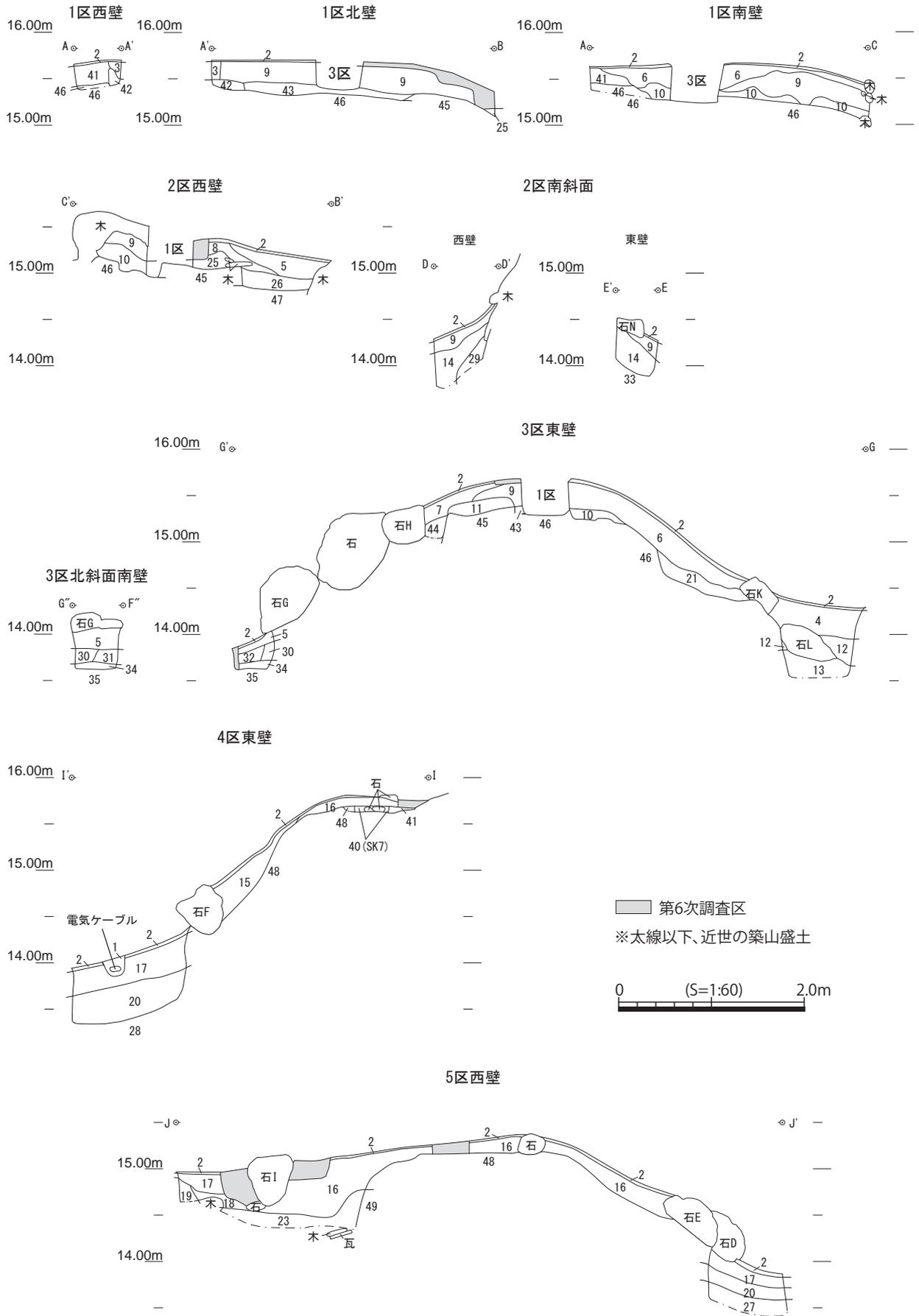
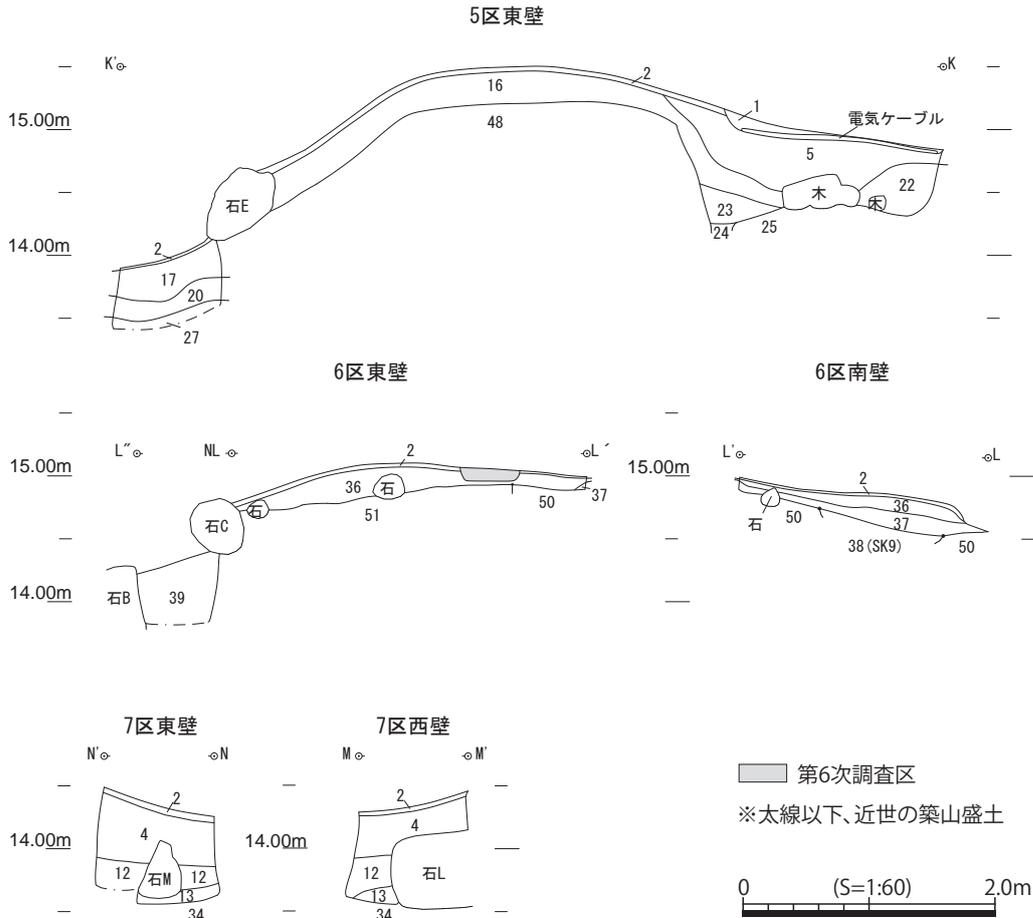


図24 庭園調査区2断面図その1



- | | |
|---|--|
| <p>1 黒褐色10YR 2/3 粘質土 しまりあり(電気ケーブル掘方)</p> <p>2 暗オリーブ褐色2.5Y 3/3 砂質土 しまりあり(表土)</p> <p>3 褐色7.5YR 4/3 砂質土 しまりややあり(根かく乱か)</p> <p>4 黒褐色7.5YR 2/2 砂質土 しまりあり Φ1cmの小石含む</p> <p>5 黒褐色2.5Y 3/2 粘質土 しまりあり 茶色土ブロック含む
3区北斜面では粘性・しまり度合いがやや低い</p> <p>6 褐色10YR 4/4 砂質土 しまりあり</p> <p>7 暗褐色10YR 3/4 粘質土 しまりややあり 白色土ブロック含む</p> <p>8 オリーブ褐色2.5Y 4/4 砂質土 しまりあり 茶色土ブロック含む</p> <p>9 にぶい黄褐色10YR 5/4 砂質土 しまりあり
白色粘土・黄色砂質土ブロック含む</p> <p>10 暗褐色10Y 3/4 砂質土 しまりなし 黄色土ブロック含む</p> <p>11 暗褐色7.5YR 3/4 粘質土 しまりややあり 白色粘土含む</p> <p>12 暗褐色10YR 3/3 砂質土 しまりともあり</p> <p>13 黒褐色10YR 2/3 粘質土 しまりややあり</p> <p>14 褐色10YR 4/4 砂質土 しまりあり</p> <p>15 暗褐色10YR 3/4 粘質土 しまりなし 茶色土ブロック含む</p> <p>16 オリーブ褐色2.5Y 4/3 砂質土 しまりあり</p> <p>17 暗褐色10YR 3/4 粘質土 しまりややあり 茶色土ブロック含む</p> <p>18 暗灰黄色2.5Y 5/2 砂質土 しまりあり</p> <p>19 暗褐色7.5YR 3/3 粘質土 しまりややあり(根かく乱か)</p> <p>20 暗褐色7.5YR 3/4 粘質土 しまりややあり 茶・黒色土ブロック含む</p> <p>21 暗褐色10YR 3/4 砂質土 しまりややあり 黄色土ブロック含む</p> <p>22 暗褐色10YR 3/4 砂質土 しまりあり</p> <p>23 褐色7.5Y 4/4 粘質土 しまりややあり</p> <p>24 暗褐色10YR 3/4 粘質土 しまりややあり</p> <p>25 褐色7.5Y 4/3 粘質土 しまりなし 黄色土ブロック含む</p> <p>26 暗褐色10YR 3/3 粘質土 しまりややあり 白色土ブロック含む</p> <p>27 黒褐色7.5YR 3/2 粘質土 しまりややあり</p> <p>28 黒褐色10YR 2/3 粘質土 しまりあり 茶・黒色土ブロック含む</p> <p>29 暗オリーブ褐色2.5Y 4/3 砂質土 しまりあり</p> <p>30 オリーブ褐色2.5Y 4/4 粘質土 しまりなし</p> | <p>31 黒褐色10YR 2/3 粘質土 しまりややあり</p> <p>32 褐色7.5YR 4/3 粘質土 しまりややあり</p> <p>33 黒褐色2.5Y 3/2 粘質土 しまりあり</p> <p>34 暗褐色10YR 3/4 粘質土 しまりややあり</p> <p>35 暗オリーブ褐色2.5Y 3/3 粘質土 しまりあり</p> <p>36 黄褐色2.5Y 5/3 砂質土 しまりあり</p> <p>37 にぶい黄褐色10YR 4/3 砂質土 しまりあり</p> <p>38 褐色7.5 4/4 砂質土 しまりややあり(SK9)</p> <p>39 極暗褐色7.5YR 2/3 粘質土 しまりなし</p> <p>40 にぶい黄褐色10YR 4/3 粘質土 しまりあり
茶色砂質土・白色粘土ブロック含む(SK7)</p> <p>41 明褐色7.5YR 5/6 砂質土 しまりあり</p> <p>42 にぶい黄褐色10YR 4/3 粘質土 しまりややあり 白色粘土多量に含む</p> <p>43 暗褐色10YR 3/3 砂質土 しまりややあり 白・茶・黄・黒色土ブロック含む</p> <p>44 褐色7.5YR 4/3 粘質土 しまりややあり 白・茶色土ブロック含む</p> <p>45 褐色10YR 4/4 粘質土 しまりややあり</p> <p>46 褐色7.5YR 4/3 砂質土 しまりややあり 白・茶色土ブロック含む</p> <p>47 褐色7.5YR 4/3 粘質土 しまりあり</p> <p>48 黄褐色2.5Y 5/4 砂質土 しまりあり 茶色砂質土・白色粘土ブロック含む</p> <p>49 暗褐色7.5YR 3/4 粘質土 しまりややあり</p> <p>50 灰黄褐色10YR 4/2 砂質土 しまりあり</p> <p>51 褐色7.5YR 4/4 砂質土 しまりあり 白・茶色土ブロック含む</p> |
|---|--|

図 25 庭園調査区 2 断面図その 2

表 19 庭園調査区 2 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0201	2層	山茶碗	皿	(78)	16	(49)	16.2	ロクロ成形	—	—	にぶい黄橙色	—	尾張	13世紀中葉～ 14世紀前葉	
0202	5区北斜面17層	陶器	蓋	(82)	24	(38)	18.4	ロクロ成形	鉄釉	—	にぶい黄橙色	—	瀬戸・美濃	近世	
0203	5区南斜面2層	陶器	皿	(88)	14	(47)	6	ロクロ成形	長石釉	—	浅黄	—	瀬戸・美濃	近世	志野
0204	5区南斜面5層	陶器	碗	—	20	(43)	19.3	ロクロ成形	鉄釉、錆釉	—	にぶい黄橙色	—	瀬戸・美濃	近世	天目茶碗
0209	4区SK8	陶器	甕	—	—	—	138	ロクロ使用	灰釉	—	5Y6/1灰色	—	猿投		

表 20 庭園調査区 2 瓦類観察表

No.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0205	6区 2層	軒棧瓦	(205.0)	49.0	(111.0)	16.0	606.9	唐草	黒褐色 灰黄色	—	東海	18世紀以降	
0206	6区 2層	軒棧瓦	(130.0)	43.0	(100.0)	18.0	313.4	唐草	黒褐色 灰白色	□に「壬戌」	東海	18世紀以降	
0207	2層	軒平(棧)瓦	(37.0)	(36.0)	(22.0)	—	24.9	唐草	灰黄色 にぶい黄色	—	東海	18世紀以降	
0208	6区 2層	平(棧)瓦	(40.0)	—	(17.0)	—	5.9	—	暗灰色 灰黄色	○に「作」	—	18世紀以降	

表 21 庭園調査区 2 金属・ガラス観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	印・銘など	年代	備考
				a	b	c				
0210	2層	金属	葉莢	12	—	51	9	—	陸軍期	
0211	1区 9層	金属	葉莢	14	—	52	14	—	陸軍期	
0212	4区北斜面2層	金属	葉莢	14	—	(51)	12	—	陸軍期	
0213	7区4層	金属	葉莢	14	—	53	11	—	陸軍期	
0214	2区南斜面	ガラス	瓶	25	227	63	466	体部下部に「大日本麥酒株式会社製造」 底部に「☆」	1906年～ 1949年	
0215	3区4層	ガラス	瓶	36	293	84	606	「コカ・コーラ」「1リットル」	1974年～ 1987年頃	

(4) 外縁調査区

層序 (図26)

調査区周辺の標高は約13.4mで平坦である。平坦な面は南蛮練塀と呼称されている土塀に沿って東西に続いている。

第 I 層は表土である礫を含むしまった土 (2層) と11層、17層、35層が堆積しているが、途中に大規模にかく乱 (5層、15層、21層、32層など) されている箇所が多くみられる。

標高約12.8mで平坦面 (37層) を検出した。37層は土塀際を除いて調査区全体に広がっている。37層を

掘り込む層はなく、37層より下の42層、47層、48層も大規模に掘り込まれることなく水平に堆積している。42層は37層と同様に土塀際を除いた調査区全体に広がっている。37層と比較してしまりが無い。47層は標高約12.5mの高さで調査区内に広く見られるが、南に向かうに従い薄くなり調査区南壁で確認することはできなかった。本調査では47層を調査区の底とした。37層～47層が第Ⅱ層に相当すると考えられる。

調査区の角にサブトレンチT1とT2を設定し土塀基底部の様子を確認した。また、T3～T4を設定し47層の下層の様子を確認した。サブトレンチの底から灰色系統のシルト質土を確認したが、各サブトレンチ内で包含するブロックや色調に差異があり、面的な堆積は確認できなかった。

SK12 (図26)

遺構：約1m×約1mの土坑である。埋土は5層である。

遺物：埋土から須恵器1点（0301）、山茶碗1点、陶器8点、磁器17点、炆器2点、瓦類99点（0308）が出土した。陶器と磁器は近代の製作である。

0301は古代の須恵器の坏蓋である。自然釉が付着している。端部は摩耗しており不明瞭である。0308は鬼瓦である。文様区下部のみ残存している。文様は粘土を貼り付けた後にヘラのような工具で削って波を描いている。

年代：第Ⅰ層である11層を掘り込んでいることから現代に構築された土坑である。

黄褐色粘質硬化面（48層）（図26）

遺構：上面に砂利が薄く乗った黄褐色粘質土からなり、平坦な面を構成している。標高約12.5～6mの高さで調査区内に広く見られるが、南に向かうに従い薄くなり、調査区端まで続かない。調査区南壁で確認することはできなかった。また、土塀の南に位置するSK12とSK13に北端を掘り込まれており、土塀との新旧関係は不明である。

遺物：砂利と混ざるように層の上面から近世の瀬戸・美濃製灯明皿1点、平瓦49点、金属製品13点が出土した。金属製品13点の内、12点（表22）が銃弾である。

銃弾のうち10点が半球形で縁が反り返った状態で出土した。元来、球形の火縄銃の銃弾だったが射出後に何かに当たってつぶれた状態であると考えられる。2点がどんぐりのような形状をしている。十三年式村田銃またはその改良型の十八年式村田銃の銃弾と考えられる。十三年式村田銃は明治13年（1880）、十八年式村田銃は明治18年（1885）に開発され、明治22年（1889）まで陸軍が使用していたとされている*3。

年代：遺物の様相から1880年以降に形成された面であったと考えられる。

土塀（図26、27、28）

遺構：二之丸の北端に長さ約80mの規模で残存している。土塀は地中に約0.1～0.2mが埋没している。土塀はタタキのような硬化した土にφ5mm以下の長石などの鉱物とφ20～45mmの礫を含んだ構造物である。礫は主に亜角礫と亜円礫からなり、石質は主にチャートである。土塀には円形の直径約35cmの空間が約20cm間隔であいている。土塀の厚さは28～30cmである。版築状に積み重ねられている。

土塀際では小規模に広がる57層、59層、61層が積み重なり、断面形状が土塁のような高まり①（図27

A-B断面図、F-I断面図)を形成している。これらは土塀から約1m離れた位置まで存在し、南に傾斜して62層や67層の直上で消滅する。高まり①頂点の標高は約13m、幅は0.3m～0.5mである。土塀は高まり①に据えられている。

高まり①を覆うように49層、50層、53層、54層、55層が堆積している。これらの層はφ10～100mmの礫と漆喰のような白色の土類を多く含んでいる。土塀際の高まり①と同様に断面形状が土塁のような高まり②を形成している。高まり②頂点の標高は約13m～13.2m、幅が0.4m～0.6m。高まり②は土塀壁に接している。

また、高まり②の上面や内部でこぶし大の礫の集石を確認した。礫は高まり内に均等には入らず、密なところとそうでないところが存在する。礫と土塀の関係は不明である。

検出した土塀基底は土塁状の高まり①の上に据えられていることが確認できた。高まり①、土塀、高まり②の順に構築されている。

遺物：54層で平瓦6点、57層でタタキ片、49層、51層、61層で漆喰のような白色の土類が出土した。

年代：遺物及び遺構から年代を推定することはできなかった。層序的には54層と55層が1880年以降に形成された面と考えられる48層より低い位置から構築されている。また、44層に掘り込まれている。このことから土塀と高まり①、②は19世紀後葉以前から存在していると考えられる。

出土遺物

外縁調査区から出土した遺物は1,576点で重量は187,505gである。最も多い遺物は瓦類で1,214点出土し、重さは152,139gである。年代の検討が難しい細片が多い。施釉された瓦は5点出土している。

年代が比定できる遺物として陶器碗1点(0302)、燻瓦5点(0303～0307)、施釉瓦3点(0309～0311)を図化した。また、刻印がおさされている平瓦1点(0312)と瓦当の残存状態が良い軒瓦7点(0313～0319)の採拓を行った。

0302は瀬戸・美濃製陶器の丸碗である。底部のみ残存している。内面に鉄釉が厚く施釉されている。

0303と0304は軒椽瓦である。文様はいわゆる東海式で同文であるが、顎貼り付け方法に差異が見られる。全体に雲母粉が見られる。0305は完形の輪違瓦である。端部に「○」の刻印が見られる。内面は調整されているが、布目を確認できる。近世の製品と考えられる。0306は棟瓦である。全体に雲母粉が見られる。0307は無文の鬼瓦である。陸軍が使用した鬼瓦である。

0309は施釉された丸瓦である。凸面に銅緑釉が施釉されている。端部は面取りされている。0310は施釉された平瓦である。側端部のみ残存している。瓦の中央部に銅緑釉が施釉されている。全体的に平坦な形状だが、側端部が急激に立ち上がる。凸面は横方向の調整と縦方向の調整が混在している。0311は施釉された平瓦である。銅緑釉で施釉されている。厚く平坦な形状であるため敷瓦の可能性もある。0309～0311は施釉瓦の生産地である穴田窯の稼働年代から17世紀の製品と考えられる。

その他に特徴的な遺物として円形のガラス製品があげられる。直径74mm、厚さ2mmで赤色と緑色の2種類を確認した。赤色のガラスが完形8点、破片9点、緑色のガラスが完形9点、破片3点出土している。形状から陸軍の隠頭灯と考えられる。

なお、調査当時は第Ⅱ層に相当する37層～47層も含めて表土として取り上げている。

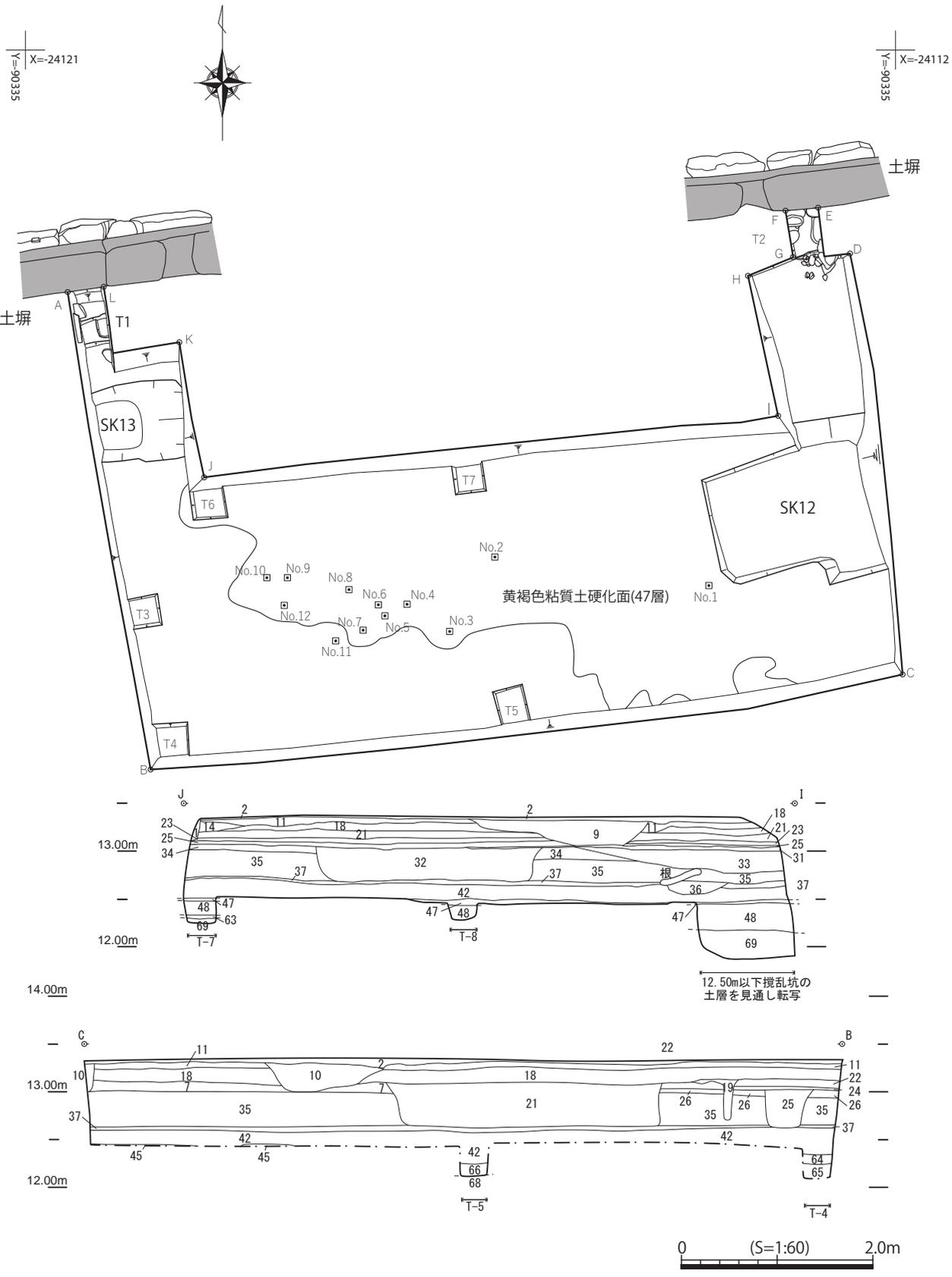
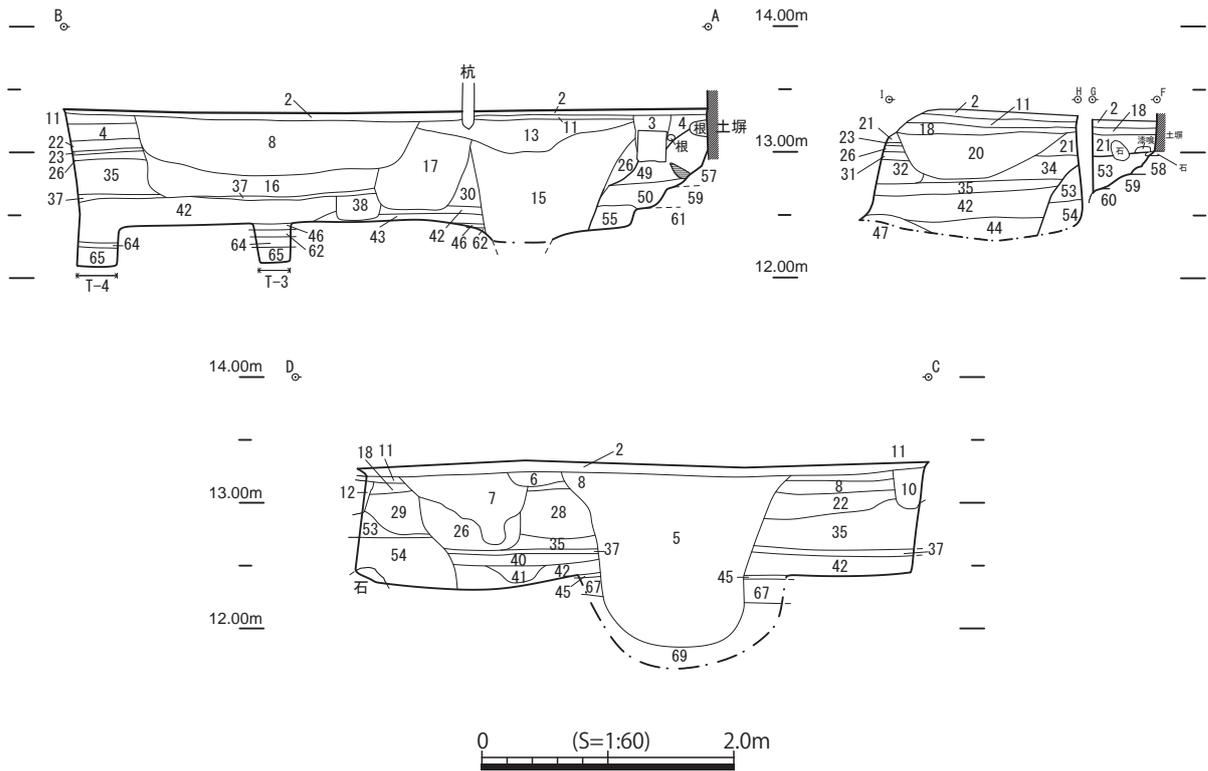


図 26 外縁調査区平面図及び断面図その 1



- | | |
|---|---|
| <p>1 灰色7.5YR5/1 砂質土</p> <p>2 灰色7.5Y6/1 砂質土 小礫多量に含む(表土)</p> <p>3 灰色7.5Y5/1 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>4 灰色5Y5/1 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>5 黒褐色2.5Y3/1 シルト質土 瓦、レンガ、炭化物を含ま(SK12埋土)</p> <p>6 黄灰色2.5Y6/1 砂質土 小礫多量に含む</p> <p>7 黒色10Y2/1 砂質土 炭化物粒多量に含む(かく乱)</p> <p>8 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土 炭化物、瓦、礫を多量に含む(かく乱)</p> <p>9 灰褐色7.5Y6/2 砂質土(かく乱)</p> <p>10 褐灰色10YR6/1 砂質土(かく乱)</p> <p>11 黄色5Y8/6 砂質土 山砂</p> <p>12 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土</p> <p>13 褐灰色7.5Y4/1 シルト質土(かく乱)</p> <p>14 黒色7.5Y2/1 砂質土 炭化物多量に含む</p> <p>15 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土(SK13埋土)</p> <p>16 灰色7.5Y5/1 シルト質土 貝殻を含ま(かく乱)</p> <p>17 灰褐色7.5YR4/2 シルト質土 瓦、貝殻、炭化物粒を含ま(かく乱)</p> <p>18 灰色5Y5/1 シルト質土</p> <p>19 黒褐色7.5YR3/1 シルト質土 小礫を含ま(かく乱)</p> <p>20 暗灰色N3/ シルト質土 炭化物粒多量に含む(かく乱)</p> <p>21 褐灰色10YR5/1 シルト質土 礫、瓦多量に含む貝殻を含ま(かく乱)</p> <p>22 灰褐色7.5Y5/2 シルト質土 貝殻を含ま</p> <p>23 黒褐色5YR3/1 シルト質土 硬い</p> <p>24 黒褐色5YR3/1 シルト質土 硬い</p> <p>25 黒褐色7.5YR3/1 シルト質土(かく乱)</p> <p>26 黄灰色2.5Y5/1 シルト質土(かく乱)</p> <p>27 褐灰色10YR6/1 シルト質土</p> <p>28 褐灰色10YR5/1 シルト質土 小礫が混じる</p> <p>29 黄灰色2.5YR6/1 シルト質土 小礫が多量に混じる</p> <p>30 灰オリーブ色5Y4/2 シルト質土 しまりなし</p> <p>31 灰白色7.5Y8/2 砂質土 しまりなし 漆喰状の層</p> <p>32 黄灰色2.5Y5/1 シルト質土 貝殻を含ま 瓦多量(かく乱)</p> <p>33 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土 小礫、貝殻が多量に混じる</p> <p>34 黒褐色2.5Y5/1 シルト質土 硬く締まる 西側直上に砂利が乗る</p> <p>35 褐灰色10YR5/1 シルト質土 礫、瓦、タタキ、貝殻を含ま</p> | <p>36 灰黄褐色10YR6/2 シルト質土 礫を含ま</p> <p>37 黒色10YR2/1 シルト質土 硬い</p> <p>38 黄灰色2.5Y5/1 シルト質土 礫を含ま</p> <p>39 灰色7.5Y5/1 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>40 褐灰色10YR4/1 シルト質土 小礫をわずかに含む</p> <p>41 灰色7.5Y5/1 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>42 黄灰色2.5Y5/1 砂質土</p> <p>43 灰白色5Y4/1 シルト質土 硬い</p> <p>44 黒灰色2.5Y4/1 シルト質土 礫を少量含む</p> <p>45 明褐色7.5YR5/8 シルト質土 硬い</p> <p>46 オリーブ黒色Y3/1 シルト質土 硬い 小礫を含ま 瓦も少量含む</p> <p>47 黒褐色2.5Y3/1 シルト質土 硬い 小礫、瓦を少量含む</p> <p>48 黄褐色2.5Y4/2 粘質土 黄色粘土ブロック、瓦を少量含む 小礫を含ま(黄褐色粘質土硬化面)</p> <p>49 褐灰色7.5YR4/1 シルト質土 小礫、漆喰を少量含む(高まり②)</p> <p>50 黒褐色2.5Y3/1 シルト質土 硬い 小礫、漆喰を含ま(高まり②)</p> <p>51 灰褐色7.5YR4/2 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>52 灰色10Y8/1 シルト質土 漆喰ブロックが多量に含む</p> <p>53 褐灰色7.5YR4/1 シルト質土 小礫、漆喰を少量含む(高まり②)</p> <p>54 褐灰色7.5YR4/1 シルト質土 黄色土ブロック、小礫含む(高まり②)</p> <p>55 黄褐色2.5Y5/3 シルト質土 タタキ、瓦を含ま(高まり②)</p> <p>56 灰色10Y6/1 シルト質土 小礫を含ま</p> <p>57 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土 硬い 貝殻、タタキ、瓦、小礫を含ま(高まり①)</p> <p>58 明赤褐色5YR5/8 粘質土 非常に硬い 小礫、漆喰を含ま(高まり①)</p> <p>59 にぶい黄色2.5Y6/4 粘質土 硬い 漆喰を含ま(高まり①)</p> <p>60 褐灰色10YR5/1 シルト質土 黄色、黒色土粒、橙色ブロックを含ま</p> <p>61 黒褐色10YR3/1 シルト質土 にぶい黄色粘土ブロック、漆喰を含ま(高まり①)</p> <p>62 黄色2.5Y8/8 砂質土 礫を含ま</p> <p>63 灰色5Y4/1 シルト質土 硬い 礫を少量含む</p> <p>64 灰色5Y4/1 シルト質土 硬い 礫を少量含む</p> <p>65 黒色5Y2/1 シルト質土 黒、黄色土粒を含ま 礫、瓦を少量含む</p> <p>66 黒色2.5Y2/1 粘質土 礫、砂粒、瓦を含ま</p> <p>67 暗灰黄色2.5Y4/2 シルト質土 わずかに黄色粘土粒、小礫を含ま</p> <p>68 黒褐色2.5Y3/1 粘質土 黄色土ブロック含む</p> <p>69 黄灰色2.5Y4/1 シルト質土 黒、黄、白黄色土ブロック多量に含む</p> |
|---|---|

図 27 外縁調査区断面図その 2

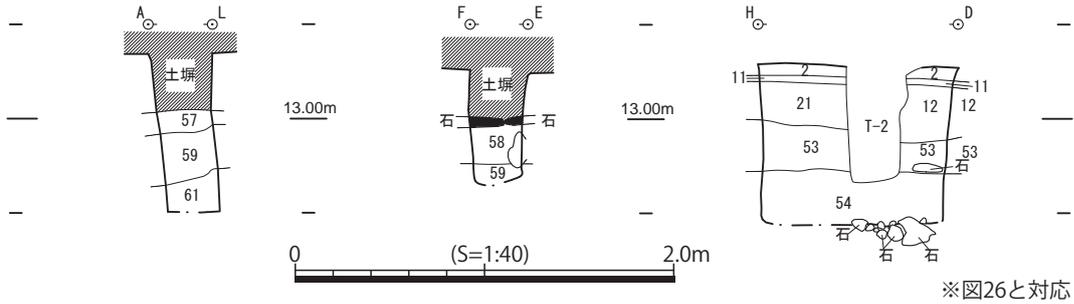


図 28 外縁調査区断面図その 3

表 22 出土弾頭一覧

No.	形状	法量 (mm)			重量 (g)
		長軸長	短軸長	厚さ	
1	ひしゃげ	16	15	7	8
2	ひしゃげ	25	22	4	8
3	ひしゃげ	22	22	4	8
4	球形	12	12	12	8
5	シイの実形	11	11	30	26
6	ひしゃげ	25	20	3	7
7	ひしゃげ	26	10	4	4
8	シイの実形	11	11	30	26
9	ひしゃげ	21	21	4	8
10	ひしゃげ	25	19	2	7
11	ひしゃげ	20	19	5	8
12	球形	12	12	12	8

※No.は図26と対応

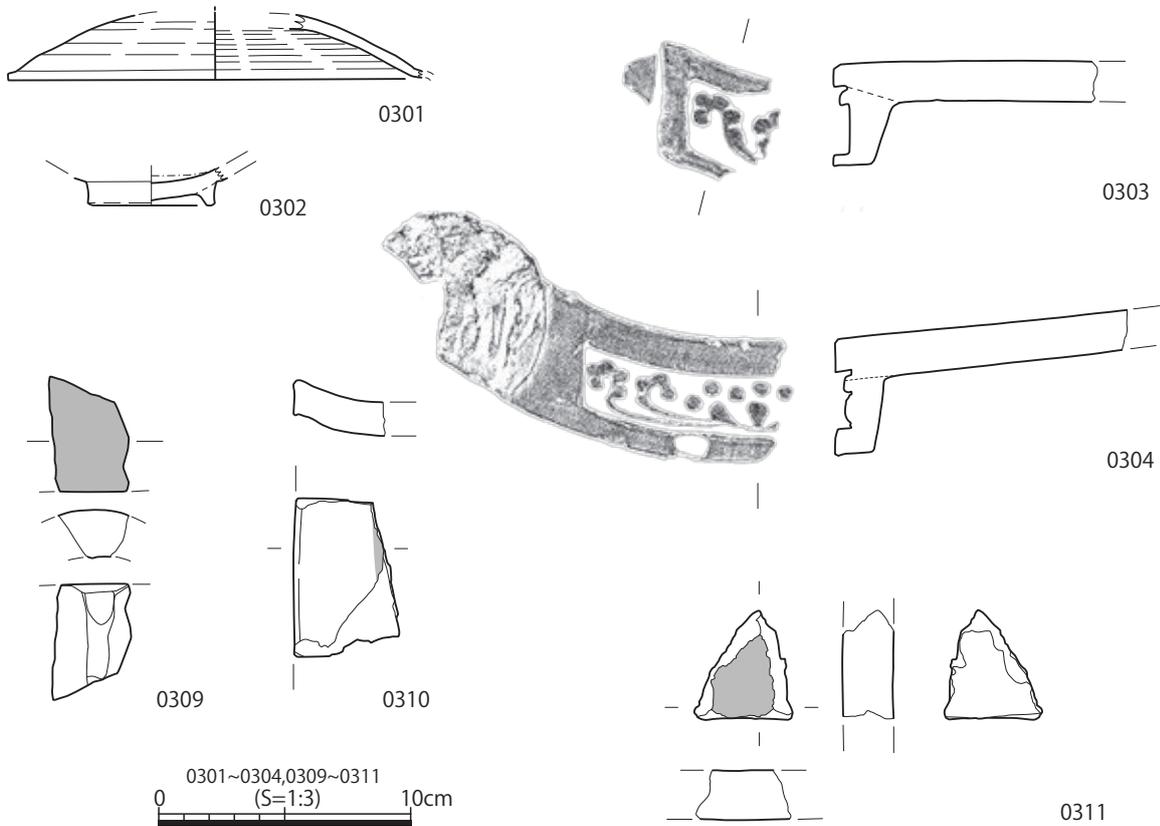


図 29 外縁調査区遺物実測図その 1

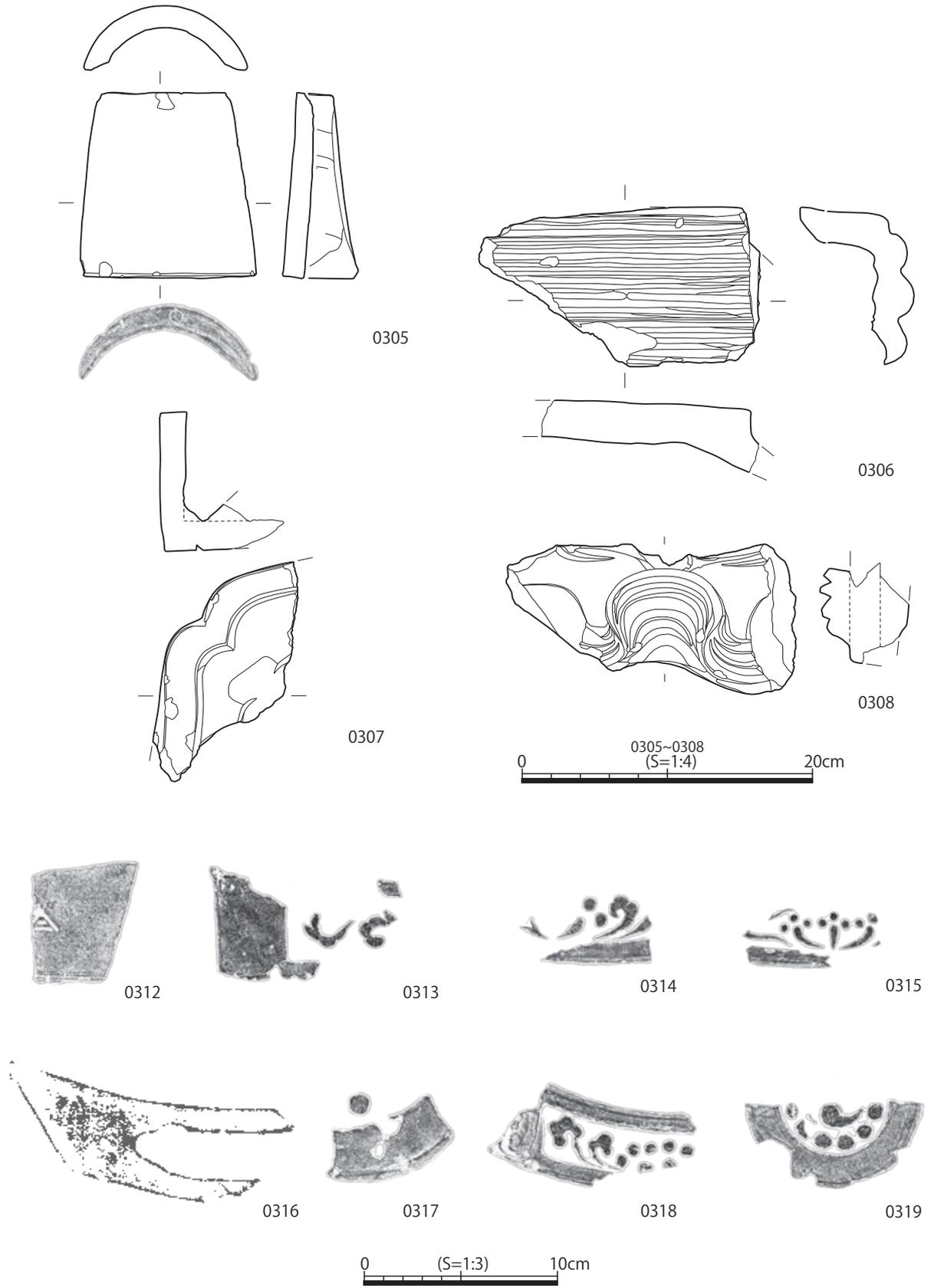


図 30 外縁調査区遺物実測図その 2

表 23 外縁調査区土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0301	東廃棄土坑SK12	須恵器	杯蓋	—	(26)	164	37	口クロ使用	—	—	橙	—	—	—	自然釉付着
0302	表土	陶器	碗	—	(16)	50	24	口クロ成形	鉄釉	—	灰白	—	瀬戸・美濃	—	

表 24 外縁調査区瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0303	表土	軒棧	(128)	41	(102)	16	310	唐草文	黒褐 灰白	—	—	—	
0304	表土	軒棧	(156)	46	(115)	17	440	東海式	黒褐 灰黄	—	東海	—	
0305	表土	輪違	120	—	129	15	406	—	黒褐 灰黄	丸印	—	—	
0306	表土	棟	(111)	高さ 78	(193)	28	628	—	暗灰 暗灰	—	—	—	
0307	表土	鬼	(100)	高さ (152)	96	19	708	無文	黒褐 灰	—	—	近代	
0308	東端廃棄土坑	鬼	(104)	—	(198)	(61)	814	不明	黒褐 灰黄	—	—	近代か	
0309	表土	丸	(27)	—	(46)	19.0	27	—	灰白 灰白	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉
0310	表土	平	(42)	—	(63)	18	55	—	灰白 灰白	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉
0311	表土	平	(39)	—	(44)	20	30	—	灰白 灰白	—	瀬戸・美濃	近世	銅緑釉
0312	表土	平	(70)	—	(63)	200	108	—	灰 灰白	<二	—	—	
0313	表土	軒(平)	(43)	52	17	—	197	唐草文	灰 灰白	—	—	近世	
0314	表土	軒(平)	(20)	(34)	—	—	42	東海式	灰 灰白	—	東海	近世	
0315	表土	軒(平)	(25)	(30)	—	—	44	東海式	灰 灰白	—	東海	近世	
0316	表土	軒平	(140)	(49)	(46)	19	248	無文	黒褐 灰白	—	—	近代	
0317	表土	軒丸	(22)	(150)	—	(70)	80.0	巴文	黒褐 灰白	—	—	—	
0318	表土	軒棧	(49)	42	16	(106)	122	東海式	暗灰 灰白	—	東海	—	
0319	表土	軒棧	(20)	(88)	—	(88)	65	巴文	灰 灰	—	—	—	

第8次調査（2020年度）

（1）御殿調査区

層序（図31）

調査区地表面の標高は13.5～13.7mである。第Ⅰ層の主な層は表土層、1970年代に公園整備に伴う造成で盛土された山砂（3層）、釘、鉄滓、ガラス、ブロック土を含む暗褐色砂質土（7層）である。7層検出時点でSB2の頂部が数箇所確認できた。

第Ⅰ層の下層で第Ⅱ層～第Ⅳ層の明確な堆積を確認できなかった。現在の地表面から検出面であるSB12まで約20cmであり、ほかの調査区と比較して浅いことから近代～現代の盛土は削平されたと考えられる。

7層の下層は地山由来のブロック土を含む砂質土（12層）である。礫や瓦片が多く含まれる。非常に固く締まっている。12層はSB2機能時の整地面であると考え検出した時点で掘削を終え、12層より下層は現代の管掘方(中央トレンチ)を利用して壁面を観察した。遺物から少なくとも11層まで近代と考えられる。

12層の下層は地山由来のブロック土を含む砂質土（15層）である。12層ほどではないが、固く締まっている。遺物は出土していない。堆積時期は不明である。

15層下層は16層が中央トレンチの南側に、同じく15層によく似た17層が北側に広がっている。16層から遺物は出土していない。17層から瓦片が出土した。15層～17層は12層に比べブロック土が小粒で、土は全体的にきめ細かい。17層で瓦片を確認した他に遺物は確認できなかった。堆積時期は不明である。

SK1（図31）

遺構：検出できた遺構の範囲は南北2.8m、東西約0.5mの不整形で、調査区の南側と北側に続くと考えられる。深さは不明である。12層を掘り込んで作られている。西端でSB2の石L掘方埋土を掘り込んでいる。埋土（9層）にタタキ片やコンクリート塊が乱雑に入っている。

出土遺物：SK1埋土からコンクリート塊以外を遺物として取り上げた。埋土から瓦類1点とモルタル2点、金属製品6点が出土した。

年代：埋土に含まれる遺物から近代に構築されたと考えられる。また切り合い関係からSB2より新しい遺構である。

SB2（図31）

遺構：12層を掘り込んで据えられた石B、D、H、I、L、N、O、Pと石抜取痕a、c、e、f、g、j、k、mからなる礎石建物基礎である。石は露出している部分の直径が25～40cmである。石LやNは地表露出部分が最大径となる。石は硬質な砂岩や溶結凝灰岩（濃飛流紋岩）で角が丸みを帯びていることから川原等で採取された石と考えられる。本丸御殿の礎石間に配置された東石に形状が類似することと石同士の間隔が1m以下となり非常に狭いことから石は東石と考えられる。

石B、I、L、N、P周辺で硬く締まった黄褐色粘質土を確認した。黄褐色粘質土は石掘方埋土と考えられる。黄褐色粘質土は石の周囲に40～60cmの規模で広がり、深さは約10cmになることが中央トレンチ西断面か

ら確認できた。石DとHは黄褐色粘質土を確認できなかったが、石B、I、L、N、Pと比べて周辺検出面の標高が2～5cm高いことから黄褐色粘質土まで掘削していない可能性がある。石抜取痕は埋土と周辺に充填された黄褐色粘質土からなるc、e、g、j、kと黄褐色粘質土のみ残るa、f、mを確認した。黄褐色粘質土はいずれも40～60cmの規模で広がる。jの埋土下層から黄褐色粘質土を確認した。このことから黄褐色粘質土を石掘方全体に充填した後に石を据え付けたと考えられる。

出土遺物：SB2は石抜取痕aと石抜取痕jで埋土の掘削を行った。遺物は石抜取痕aから土師質皿1点、瓦類1点、レンガ等の近代遺物が出土した。

年代：掘り込んでいる12層の年代が不明であるため、構築年代は不明である。本丸御殿との類似性を考慮すると、12層及びSB2が近世までさかのぼる可能性がある。抜き取りaの埋土から出土したモルタルが近代に比定できることから石を抜き取った時期は近代である。

SS3 (図31、写真3)

遺構：長方形の花崗岩製切石を並べた縁石状の石列である。6層に据えられている。SS3は調査区内で長さ270cm、幅14cm、高さ20cmである。断面形状が幅14cm、高さ20cmの石が3石直線状に並べられている。SS3は調査区中央を東西方向にのび、西側は調査区外へ続き、東側はSK1の手前で切れている。SK1施工時に石が外された可能性が考えられるが、SS3の東延長線上から石の抜き取り痕は確認できなかった。

中央トレンチでは石の下をトンネルのように掘り、後の時代の水道管を設置している。SS3は16層に据えられている。16層に対して地業を行った痕跡が確認できず、16層に石を置き自重で固定したと考えられる。SS3の南は16層上に12層が堆積している一方で、北側は16、15、14、12層の順に堆積している。北側の盛土に対する土留めの役割を持つ遺構と考えられる。

年代：SS3は層序からSB2よりも古い遺構である。出土遺物はなく年代は不明であるが、SB2との新旧関係から近世遺構である可能性がある。

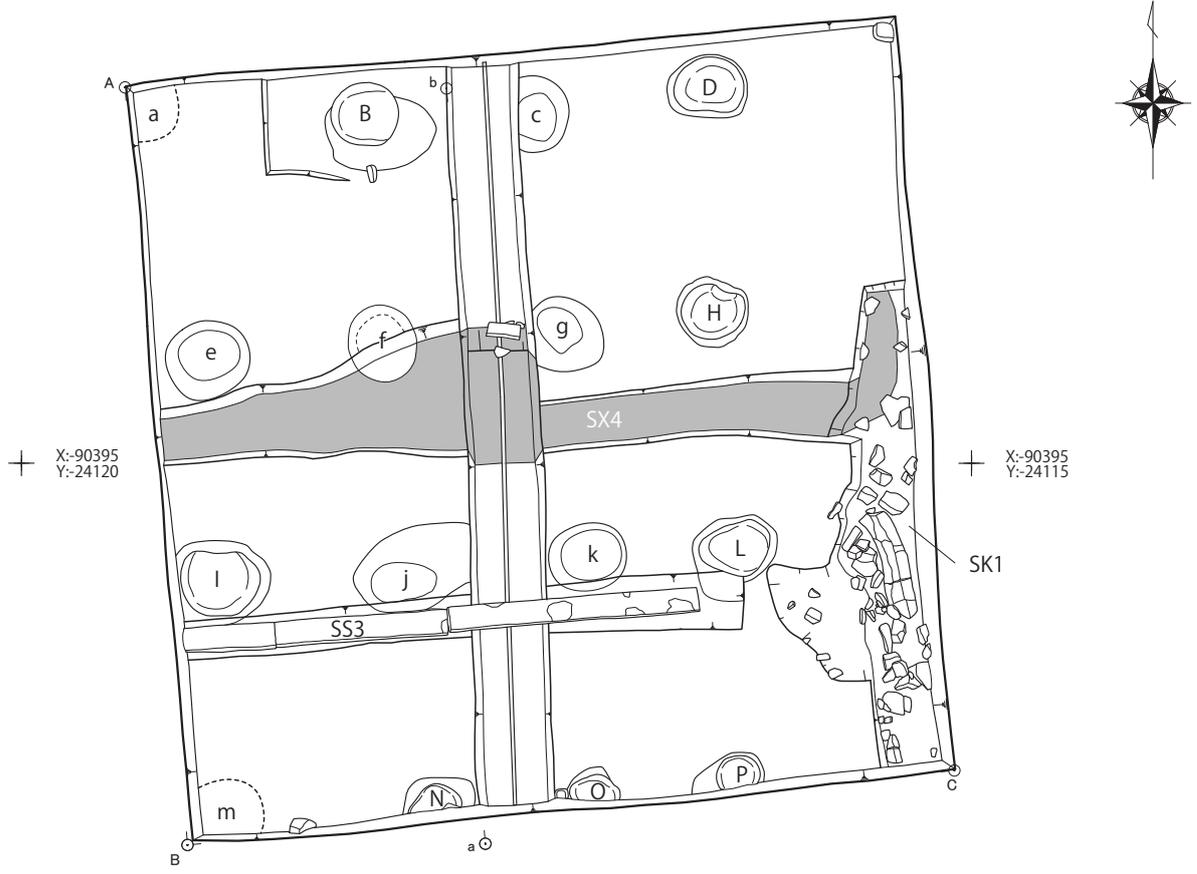
SX4 (14層) (図31、写真3)

遺構：東西に延びる粘質土の高まりからなる。粘質土は花崗岩由来の石粒が骨材のように全体に含まれ、非常に硬く締まっている。南側を13層、16層、18層に掘り込まれ、北側は16層と18層に掘り込まれている。頂部は5層によって削平されている。

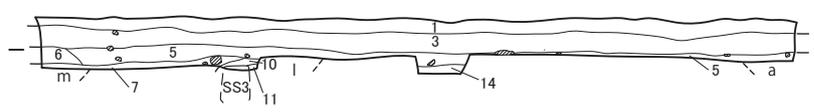
幅約0.7mで調査区を東西に横断している。高さは中央トレンチで30cmを計測したが、裾部まで掘削しなかったため、不明である。頂部は12層やSB2によって削平されている。16層と18層に掘り込まれているため、裾部は今回検出した層よりも古い層に据えられている。

中央トレンチでSX4北側に貼り付けられている石を確認した。石は平滑な面を持つ割石もしくは自然石である。

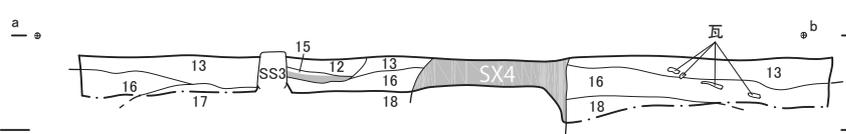
年代：13層に掘り込まれているため、SX4は検出した遺構の中で層序的に最も古い遺構である。出土遺物はなく年代は不明であるが、SB2との新旧関係から近世遺構である可能性がある。



B 14.00m A

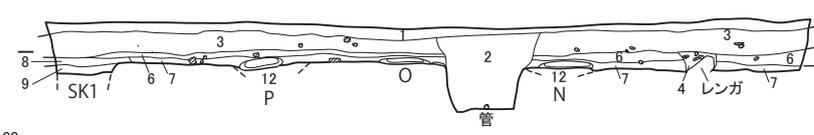


13.00m

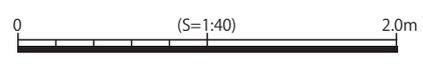


13.00m

C 14.00m B



13.00m



※土層注記は p.62

図 31 御殿調査区平面図及び断面図

出土遺物 (図32)

御殿調査区から出土した遺物点数は89点で2,454gである。御殿調査区出土遺物の特徴に金属製品が占める割合の高さが挙げられる。出土した金属製品は47点848gで出土遺物点数の半分以上を占める。また、時期を判別することができた遺物は全て近代の遺物であった。現代の管掘方(中央トレンチ)から軒瓦(0401)を図化した。

1～5層から土器3点、陶器2点、磁器4点、瓦類4点、土類2点、ガラス製品8点が出土した。土器は古代以前の土器と近世の土師皿である。陶器、時期、瓦類、土類で時期が判別できる遺物は全て近代以降である。

6・7層から出土した遺物は陶器の鉢、二次焼成を受けた瓦、土類、金属製品である。12層から出土した遺物は瓦で詳細な時期は不明であるが、棧瓦が含まれることから近世中頃以降である。

0401は唐草文の軒瓦である。文様は中心飾りに珠文を持つ「東海式」である。瓦当は文様区と外区に雲母粉が付着している。瓦当角を大きく面取りしている。

表 25 御殿調査区瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量(mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0401	2層	軒棧瓦	(115.0)	45.0	(69.0)	16.0	299	唐草	灰 灰白	—	東海	18世紀以降	



写真 3 SS3 及び SX4 北から

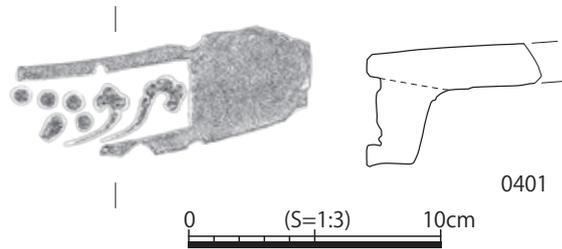


図 32 御殿調査区遺物実測図

図31 断面図土層注記

- 1 暗灰黄色2.5Y4/2 砂質土 しまりややあり 下部に砂利含む(表土)
- 2 暗オリーブ褐色2.5Y3/3 砂質土 しまりややあり 砂利、レンガ、瓦混じる(水道管理土)
- 3 灰オリーブ色7.5Y5/2 砂質土 しまりなし
- 4 灰黄褐色10YR4/2 粘質土 しまりあり 小石含む
- 5 黒褐色10YR3/2 砂質土 しまりあり レンガ、瓦混じる
- 6 にぶい黄褐色10YR4/3 砂質土 しまりあり 白、茶、黒色ブロック土含む 鉄出土
- 7 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 茶、黒色ブロック土混じる 釘・ガラス出土
- 8 黄褐色2.5Y5/3 砂質土 しまりあり 白、茶色ブロック土含む
- 9 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりあり コンクリート、タタキ含む(SK1埋土)
- 10 にぶい黄褐色10YR4/3 砂質土 しまりあり 小石含む
- 11 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり
- 12 黄橙色10YR7/8 砂質土 しまりあり 東石堀方
- 13 にぶい黄褐色10YR4/3 粘質土 しまりあり 白、黒、茶色ブロック土含む 上面に漆喰片含む
- 14 暗褐色10YR3/3 粘質土 しまりあり
- 15 暗灰黄色2.5Y4/2 砂質土 しまりなし 砂層
- 16 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 白、黒、茶色ブロック土含む
- 17 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりあり 白、黒、茶色ブロック土含む 16層よりしまりなし
- 18 暗褐色7.5YR3/3 粘質土 しまりあり 白、黒、茶色ブロック土、瓦含む

(2) 庭園調査区

層序 (図33、34)

調査区周辺は1970年代に盛土が行われたため、標高は14.9mである。御殿や外縁と比べて約2m高くなっている。第Ⅰ層は山砂と現代の廃棄物が多く混ざる粘質土からなる2～4層、1970年代の整備直前の地表面である5層である。第Ⅰ層は約180cmの厚さで堆積している。

11層は砂利敷で第Ⅱ層にあたる。標高約13.0mで調査区全体に広がっている。

12層～16層は第Ⅲ層である。12層は近世～近代の瓦とレンガ片を多く含んでいる。11層が地表面であった時期の遺構は桝とそれに伴う土管（土管1、土管2）である。13層は11層よりもやや大ぶりの礫からなる層である。礫は不規則に入っており、地表面を成す層とは考え難い。地盤を強化するために入れられたと考えられる。15層と16層は南北に延びる溝（SD4）に掘り込まれている層である。15層は上面に結晶片岩の円礫集積が存在する。

17層～20層は第Ⅳ層である。標高12.6mで17層、標高12.3mで18層、標高12.1mで19層と20層を確認した。17～20層はいずれも地山由来のブロック土がわずかに含み、17層より上層と比較して、土はきめ細かく、包含するブロックの土質は一定である。土の堆積は水平に近い。50cm×40cmの範囲で掘削を行ったため、層の広がりを確認することができなかった。ロクロ成形の土師質の皿が多く出土している。近代の遺物は17層まで確認することができた。燻がかけられた近世の瓦片は20層まで出土している。遺物からは17層は近代、18層より下層は近世といえる。

21層は地山である。17～20層は21層に由来するブロック土が多く含まれていることから、21層を削平した際に発生した土で17～20層を盛土したと考えられる。

SD8や管6が調査区内で大きく広がっており、面的に掘り下げることができなかったため、庭園に伴う遺構は確認できなかった。

桝5 (図33)

遺構：12層を掘り込んで構築されている。桝5は粗く硬い粘質土と暗褐色粘質土（12層）を交互に積み上げた版築状の構造で外郭が造られている桝である。天端は矢穴が入った花崗岩製切石、レンガ、直方体の漆喰塊で水平になるように整えられた後、鉄製の蓋を被せてあった。桝の蓋を外すことができなかったため、内部は蓋と桝の隙間から観察を行った。

内部はモルタルまたは漆喰で止水措置がなされている。桝の底に学校用椅子が正位置で置かれ、椅子周囲にはビニル袋などが散乱していたことから名古屋大学が二之丸を利用していた時期（1948～1965）に桝は開口していたと考えられる。桝は戦後に不要となったレンガや花崗岩製切石等の陸軍施設部材を再利用して作られたと考えられる。

桝の蓋は陸軍建物の鉄扉の転用と考えられる。鉄扉は1枚の長方形の鉄板に細長い鉄板を2枚張り付けた上で「X」字状に鉤が打ち付けてあった。細長い鉄板上には門が残存していた。愛知県豊橋市の歩兵第十八連隊兵當地（吉田城）に現存する軽油庫の鉄扉に類似しており、二之丸に存在した同様の小規模建物の扉を転用したと考えられる。

出土遺物 (図35、表26～28)：桝を構成する土（粗く硬い粘質土と12層からなる版築状の構造で外郭）か

ら陶器の中皿1点、瓦類2点が出土した。中皿は歩兵第十八連隊兵営地でも類例がある近代の刷毛目皿である。

柵と蓋の間に挟まるレンガ5点（0519,0520）を遺物として取り上げた。レンガは柵と蓋の隙間を埋め、蓋の角度を水平に調整する役割をしていた。

0519は長手1面、小口1面が磨くように調整されている。色調は橙色である。

0520は耐火レンガである。胴部1面を除く残存する4面が調整されている。色調はにぶい黄橙色である。胴面に「TK」と刻印されている。

年代：陸軍建物の部材を転用していることから陸軍退去後、すなわち1945年以降に構築された遺構と考えられる。柵内に捨てられている遺物から1970年代までには廃絶したと考えられる。

管6、7（図33）

遺構：管6は調査区を南北に貫く直径55cmの土管である。土管の接続部はモルタルで固められている。

管7は調査区を東西に貫く直径15cmの土管である。13層を掘り込んで構築している。西端が破壊されているため、壁面で土管を確認することはできなかったが、土管掘方を確認することができた。東側は管6に破壊されている。土管の接続部はタタキ様の土類で固められている。

そのほかに柵を起点に東へ延びる土管を蓋と柵の隙間から確認した。直径、長さともに不明である。

年代：管6は排水柵に接続することから排水柵と同時期と考えられる。管7は管6よりも古い遺構である。

SD8（図33）

遺構：モルタル製のU字溝である。残存する遺構の規模は長さ236cm、幅39cm、深さ21cmである。北側は調査区外へ続いている。東側は土管6に、南側は柵5に破壊されている。溝に伴う基礎や掘方が確認できないことから15層と16層を掘り込み、直接モルタルを流し込んで施工したと考えられる。北端がビニルシートに覆われており、1970年代の名古屋市教育委員会による発掘調査で埋め戻しの際の縁切りと考えられる。

年代：近代～現代に構築され廃絶した遺構である。遺構の切合い関係からSD8、管7、管6及び柵5の順に作られたことが分かる。

出土遺物（図35～37）

庭園調査区から出土した遺物点数は397点で重量は50,188gである。遺物は主に公園造成時に盛土された1～4層から出土した。1～4層からは224点39,297gが出土した。点数としては陶磁器類の碗類、皿類、鉢類、瓶類、水注類が多い。1～4層から出土した遺物のうち、特徴的な0508～0518を図化した。

年代を判別することができる遺物を層序からみると、近代の遺物は17層まで含まれる。しかし17層から出土した近代遺物は酸化コバルト釉で絵付けされた碗と葉莖の2点のみで、近世遺物が大勢を占めるため、17層の近代遺物は混ざり込んだ可能性がある。これらの様相から近代遺物の混入も考慮し17層より下層を近世の盛土、17層より上層を近代の盛土と考えた。17層の位置付けは不明である。5～17層から出土した遺物のうち、特徴的な0507～0509、0512を図化した。

18～19層は近世の遺物からなり、20層、21層から遺物は出土していない。遺物は近世の土師質の皿が多く出土した。土師質の皿はロクロで成形されている。断面形状から17世紀前半に比定した*4。18層から出

土した遺物は27点で土師質の皿は20点、瓦片が7点である。瓦片はすべて小片である。そのほかに16世紀後半～17世紀前半の瀬戸・美濃産の丸碗が出土した。18層から出土した遺物5点の年代は17世紀前半にまとめることができる。すなわち遺物の様相からみると18層は寛永期庭園が造営された時期の盛土といえる。18層から0501～0506を図化した。

0501～0503は土師質の皿である。ロクロ成形で内面底部と器壁の間に溝をもつ。底部は糸切り痕が見られる。胎土は ϕ 0.5mm以下の長石や雲母が混ざるものの、密である。ただし0502の胎土は精密で長石がほとんど見られない。

0504は土師質の皿である。溝状の調整痕はナデ消されている。底部は糸切り痕が見られるがナデ消されているため不明瞭である。0501～0503と比較して小ぶりで器高が低く、胎土は0502や0503と比較して精密である。

0505は金箔が貼られた土師質皿である。胴部のみ残存している。金箔は内面上部にわずかに残存している。金箔の周囲は漆と考えられる黒い斑点がみられる。ロクロ成形と考えられる横方向の痕跡を確認した。

0506は瀬戸・美濃産の丸碗である。いわゆる志野釉が全体にかけられている。口径は10cmに満たない碗である。器壁が天目茶碗のように屈曲している。時期は16世紀後半～17世紀前半に生産されたと考えられる。

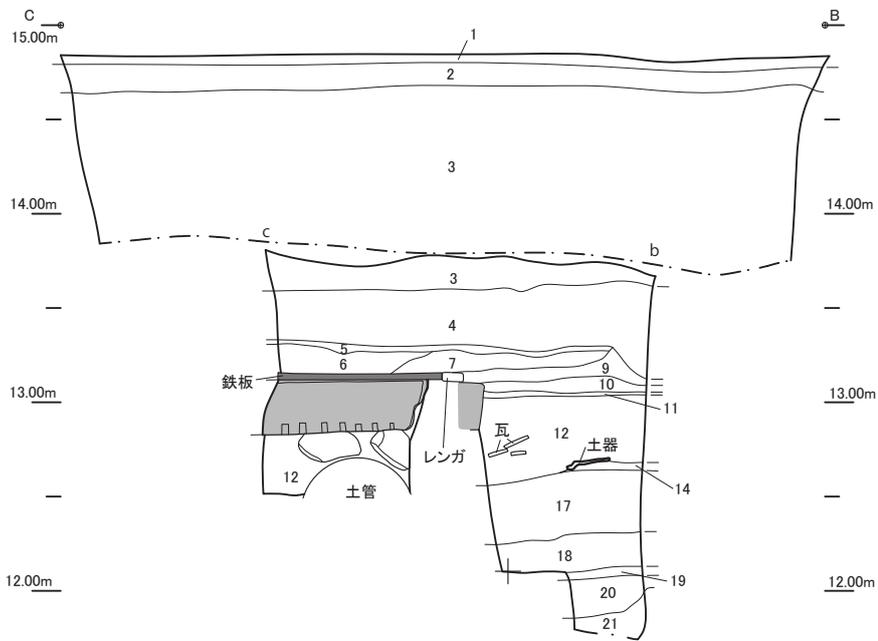
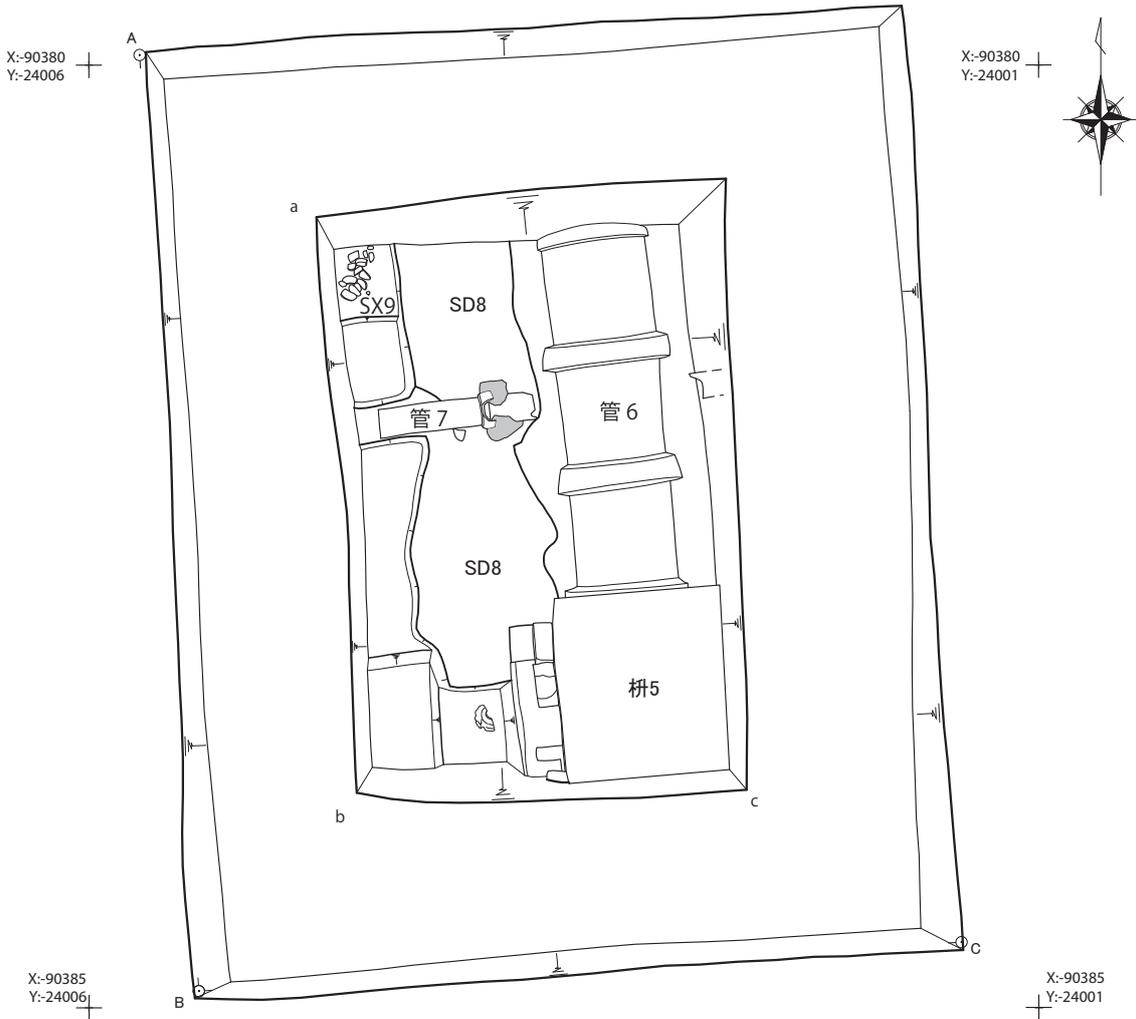
0507は瀬戸・美濃製の灰釉碗である。二次焼成を受けているため、釉は黄化し胎土は白化している。高台は付け高台である。

0508は丸瓦である。玉縁に漢字2文字が描かれた印が押されているが不明瞭である。印は「甲宣」と読める。凹面は縦方向に強く調整されており、布目痕やコビキ混は確認できない。

0509は軒丸瓦の瓦当である。巴文である。巴は判を押した後にナデ調整されている。残存する円弧から大きさを復元すると瓦当の直径は160mmとなる。瓦全体に雲母粉が付着している。雲母粉は文様区で特に集中して付着しているが、外区と裏面にも付着している。

0510は平瓦である。凹面は横方向に磨きのような調整がされている。凸面は凹面と比較して雑な調整で一定方向にはナデ調整されていない。胎土は灰白色の粘土に暗灰色の粘土が層状に入る。また、5mm程度の石粒がまれに入る。

0511は軒棧瓦である。文様区中心飾りに珠文が存在することから東海式と呼ばれる東海地方で生産された瓦と考えられる。文様区に雲母粉が付着し、外区や棧瓦部にはほとんど付着しない。胎土は灰白色で ϕ 1～3mmの粒が入る。瓦上面は山を横方向に磨くようにナデ調整、谷を縦方向に磨くようにナデ調整されている。下面は上面と比較して雑に調整されている。



※一点鎖線より下層は見通し図（合成）

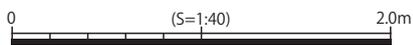
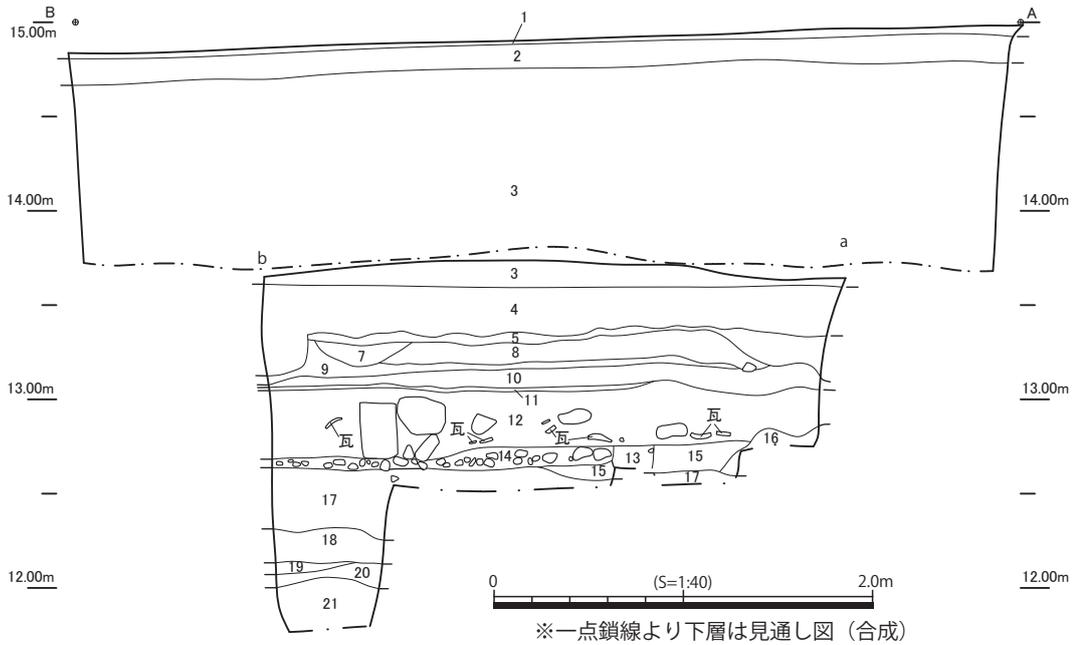


図 33 庭園調査区平面図及び断面図その 1



- 1 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりなし(表土)
- 2 黄褐色2.5Y5/6 砂質土 しまりなし
- 3 黒褐色2.5Y3/2 やや粘質土 しまりあり レンガ、瓦、石、コンクリート、灰色ブロック土含む 南西部に帯状に黄褐色土入る
- 4 灰オリーブ色5Y5/3 砂質土 しまりなし
- 5 黒色7.5Y2/1 粘質土 しまりあり
- 6 オリーブ黒色5Y3/2 粘質土 しまりあり 灰色、茶色、黒色ブロック土含む
- 7 褐色10YR4/6 粘質土 しまりあり
- 8 暗褐色10YR3/4 粘質土 しまりあり 白色ブロック土含む
- 9 黒色10YR1.7/1 粘質土 しまりあり 赤土、炭含む
- 10 黒褐色2.5Y3/2 やや粘質土 しまりあり 小石含む
- 11 暗オリーブ褐色2.5Y 砂質土 しまりあり 砂利層
- 12 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり 瓦、コンクリート、近代磁器、レンガ含む
南壁西側で非常に硬い橙色粘質土が互層状に入る(樹5)
- 13 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 灰色、茶色ブロック土混じる(管7掘方埋土)
- 14 暗褐色7.5YR3/3 砂質土 しまりあり 5~10cmの石敷き層
- 15 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 灰色、茶色ブロック土混じる
- 16 にぶい黄褐色10YR4/3 やや粘質土 しまりあり 黒色、茶色小ブロック土(SX9)
- 17 暗褐色10YR3/3 粘質土 しまりあり 黒色、黄褐色、茶色ブロック土を含む
- 18 黒褐色10YR2/3 粘質土 しまりあり 黒色、灰色、黄褐色粘質ブロック土を含む
- 19 黒色10YR2/1 粘質土 しまりあり
- 20 褐色10YR4/4 粘質土 しまりあり 灰色、黒色、黄褐色小ブロック土を含む
- 21 にぶい黄色2.5Y 砂質土 しまりあり 遺物なし 白色ブロック土含む

図 34 庭園調査区断面図その 2

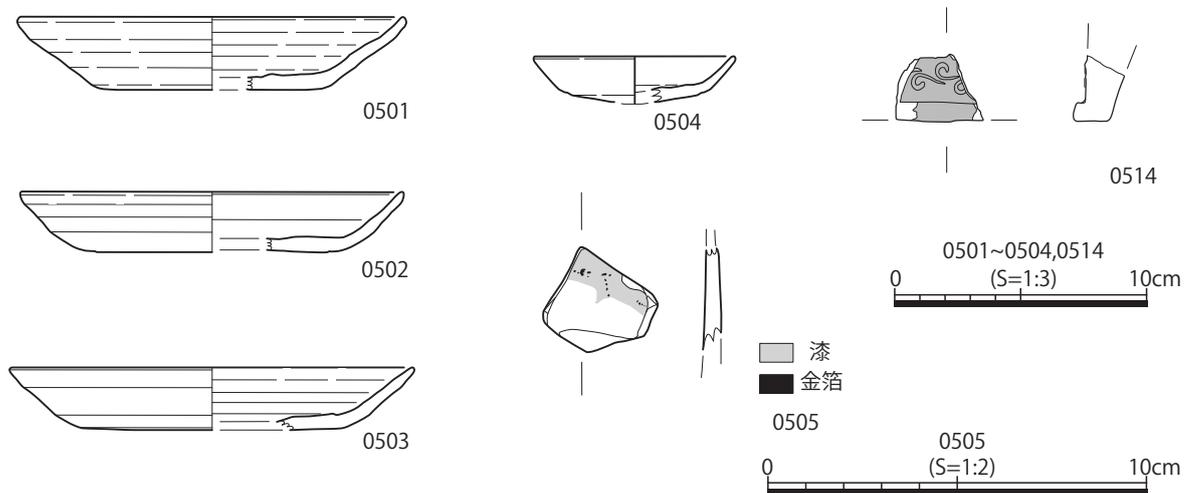


図 35 庭園調査区遺物実測図その 1

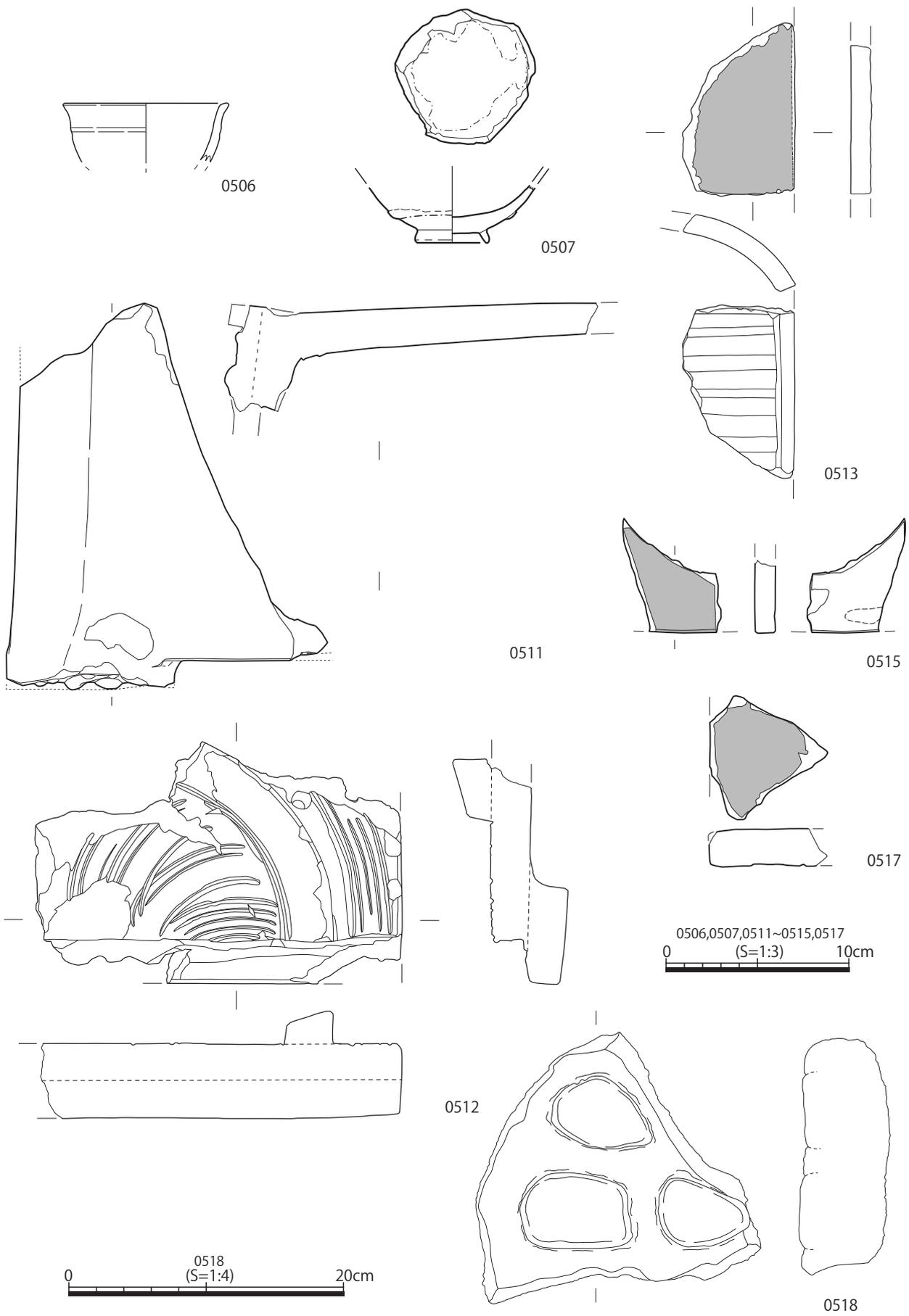


図 36 庭園調査区遺物実測図その 2

0512は鬼瓦である。端部のみ出土したため、文様の詳細は不明である。

0513は施釉された丸瓦である。凸面は銅緑釉で施釉されている。釉は光沢がなく青みがかったことから発色は悪い。施釉により不明瞭であるが、施釉前に横方向にナデ調整されている。凹面は50～100mmの間隔で横方向にナデ調整されている。凸面、凹面ともに横方向のナデ調整後に端部の調整を行っている。このことから製作方法はロクロを用いて筒を作り、内外面を調整した後に半裁して端部の調整を行ったと考えられる。露胎と胎土はやや黄色がかった灰白色である。

0514は施釉された軒平瓦である。瓦当の下部のみ残存している。釉は銅緑釉で裏面上部を除き、全体が施釉されている。釉は光沢があり0513と比較して発色が良い。文様は唐草文で4つの唐草が確認できる。中心飾りは確認できない。無釉部分の表面色は赤褐色で、胎土は褐色である。

0515は施釉された平瓦である。前端部のみ残存している。釉は銅緑釉で凹面と側面が施釉されている。釉は光沢があり0513と比較して発色が良い。表面色と胎土は灰白色である。

0516は施釉された敷瓦である。詳細は(13)庭園出土の敷瓦に記載した。

0517は施釉された道具瓦である。凸面と端部が銅緑釉で施釉されている。凹面には布目が残存している。

0518は延段である。延段は3方が破面で1方は端部と考えられる。盛土中から原位置を保っていない状態で出土した。延段は主に漆喰からなり踏面に上面が扁平な石材3石とφ1～3mmの石粒を装飾している。岩石種の内訳はチャート2石、濃飛流紋岩(溶結凝灰岩)1石である。石粒の岩石種は多様であるが、チャートが目立つ。

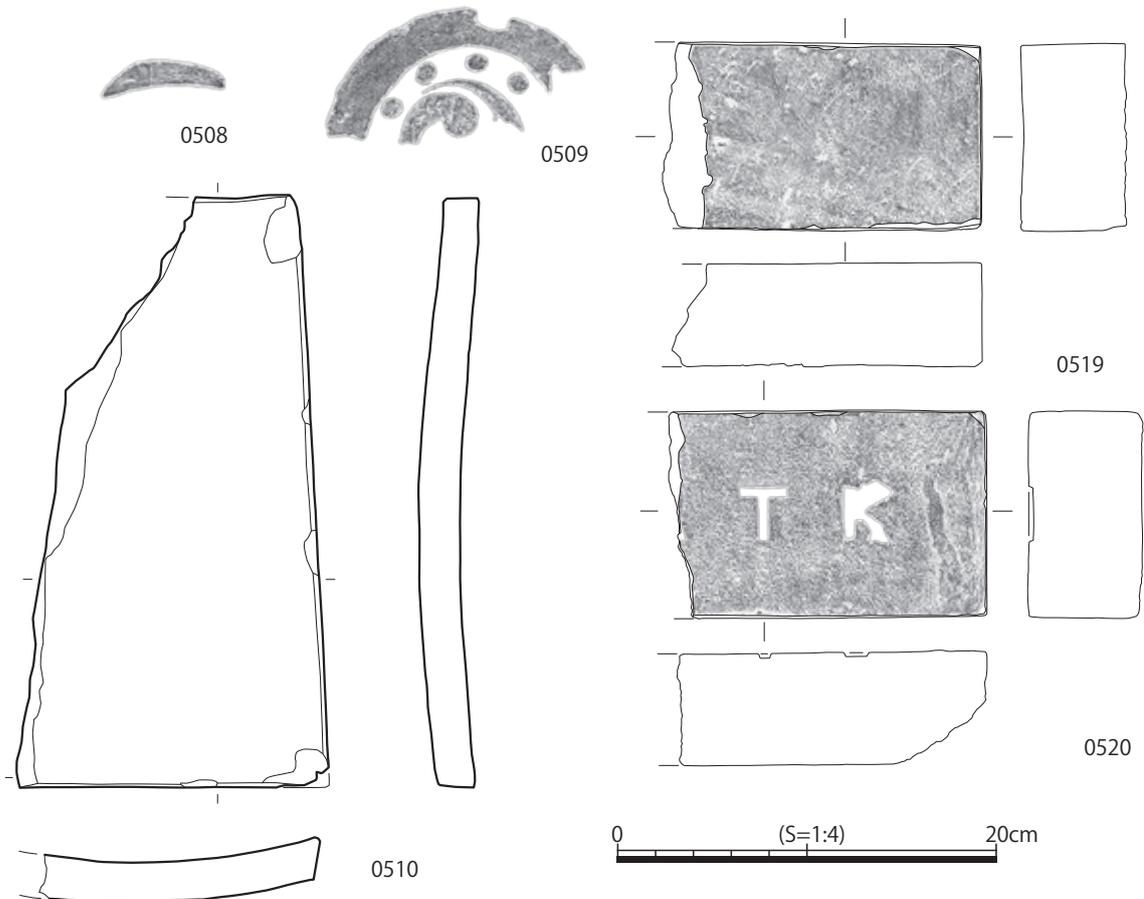


図 37 庭園調査区遺物実測図その 3

表 26 庭園調査区土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘 など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0501	18層	土器	皿	(151)	29	(86)	31	ロク口成形	—	—	にぶい黄橙色	—	—	17世紀	
0502	18層	土器	皿	(150)	24	(92)	36	ロク口成形	—	—	にぶい黄橙色	—	—	17世紀	
0503	18層	土器	皿	(158)	25	(104)	42	ロク口成形	—	—	にぶい黄橙色	—	—	17世紀	
0504	18層	土器	皿	(80)	19	50	9	ロク口成形	—	—	にぶい橙色	—	—	17世紀	
0505	18層	土器	皿	—	—	—	5	ロク口成形	内面に金箔と漆	—	にぶい橙色	—	—	—	
0506	18層	陶器	碗	(90)	(33)	—	4	ロク口成形	長石(志野)釉	—	黄灰色	—	瀬戸・美濃	16世紀 中～後葉	小坏 志野碗 大窯第3段階前半か
0507	11層	陶器	碗	—	(31)	38	66	ロク口成形 付高台	灰釉	—	灰白色	—	瀬戸・美濃	近世	二次焼成

表 27 庭園調査区瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量(g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0508	5~10層	丸瓦	(110.0)	—	(96.0)	16.0	326	—	暗灰色 暗灰色	「甲富」刻 印か	—	—	
0509	5~10層	軒丸瓦	(99.0)	(146.0)	(34.0)	—	288	巴文	暗灰色 暗灰色	—	—	—	
0510	3・4層	平瓦	30.4	—	(16.5)	21.0	1440	—	灰色 灰白色	—	—	—	
0511	3・4層	軒棧瓦	(174.0)	(113.0)	(201.0)	20.0	600	東海	灰色 灰白色	—	東海	18世紀～	
0512	5~10層	鬼瓦	(196.0)	—	(133.0)	63.0	909	不明	暗灰色 灰白色	—	—	—	
0513	表土	丸瓦	(42.0)	—	(95.0)	(12.0)	114	—	釉：銅緑釉 胎土：灰黄色	—	瀬戸・美濃	17世紀	
0514	3・4層	軒平瓦	(36.0)	(27.0)	(14.0)	—	18	唐草	釉：銅緑釉 胎土：灰褐色	—	瀬戸・美濃	17世紀	
0515	3・4層	平瓦	(104.0)	—	(113.0)	11.0	38	—	釉：銅緑釉 胎土：灰黄色	—	瀬戸・美濃	17世紀	
0516	表土	敷瓦	(133.0)	—	(199.0)	31.0	724	唐草	釉：灰釉、呉須 胎土：灰黄色	—	瀬戸 穴田窯	17世紀	
0517	11層	道具瓦	(6.4)	—	(6.8)	(2.0)	77	—	釉：銅緑釉 胎土：灰黄色	—	—	—	

表 28 庭園調査区レンガ・土類観察表

No.	検出地点	種別	法量 (mm)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
0518	5~10層	延段	(199.0)	(207)	66	2,339	
0519	排水柵部材	レンガ	(168.0)	100	56	1,318	
0520	排水柵部材	レンガ	(167.0)	110	61	1,710	刻印あり

(3) 外縁調査区1

層序 (図38)

調査区周辺の標高は13.5mである。第Ⅰ層は1層～4層である。表土(1層)は上面に園路に伴う砂利が薄く敷かれ、厚さ20～30cmで堆積している。4層は調査区中央付近で面的な広がりを確認した。調査区南側は焼土や現代の廃棄物を多く含む黒色土(3層)が面的に広がっている。

5層は第Ⅱ層である。調査区南側から中央部にかけて垂円礫を密に含む黒褐色砂質土(5層)が標高13.15mで面的に広がる。下層のSB12や柵13の掘方を覆うように堆積している。平面的には柵13周辺で特に垂円礫の密集がみられる。柵13周辺以外では疎らに検出した。5層は垂円礫を敷き詰めて化粧土としたと考えられる。5層を近代遺構面と考え、面的な掘削を終了した。5層より下層はトレンチを入れて堆積状況を確認した。

12層以前に堆積した土が第Ⅲ層と第Ⅳ層に相当するが、遺物などの情報が少なく、明確に区分することはできなかった。12層は地山由来のブロック土を含む土である。調査区中央部と調査区南隅で確認できる。SB12と柵13は12層を掘り込んで構築されていることからSB12をはじめとする近代建物建設以前から堆積していた土である。遺物が出土していないため堆積の時期は不明である。

14層は12層に比べて粘性があるが、含まれるブロック土の質は12層と同じ地山に由来すると考えられる。14層から遺物が出土していないため時期は不明である。

調査区南で確認された12層の下層から暗褐色砂質土(21層)を確認した。土質と含まれるブロック土は12層に類似しているが、12層と比べて固く締まっている。遺物は出土していない。21層から20層が掘り込まれており、12層との間に時期差があると考えられる。

近世の庭園境界を示す遺構は確認できなかった。

SK10 (図38)

遺構：SB12掘方を掘り込んだ土坑である。検出できた規模は南北1.8m、東西1.5mである。調査区外に続くため、規模は不明である。

出土遺物 (図39)：埋土から瀬戸・美濃製の磁器3点、中国製染付1点(0601)、炆器1点、瓦類6点、ガラス製品1点、レンガ8点が出土した。時代が判別できる遺物は全て近代である。

0601は碗である。輪高台をもち、高台に胎土目が残る。高台、器壁、内面が施釉されている。見込みにはモチーフ不明の図柄が描かれている。

0604は長手、小口、胴面がそれぞれ片面のみナデ調整が確認できる。ナデ調整がされていない胴面に「○」と「#」の刻印がおされている。

年代：4層より上層から掘り込んでいるため、現代に掘り込まれた土坑である。

SB12 (図38)

遺構：レンガを主体とする建物基礎である。SB12は南北方向にのび、上面の幅が35cmある基礎(以下「主基礎」とする)と東西方向にのび上面の幅が24cmある基礎(以下「支基礎」とする)からなる。主基礎の底部の幅は約100cm、残存する高さは約80cmである。北端と南端は調査区外へ続く。底部から上に向かっ

てピラミッドのように幅が狭くなる断面形状をしている。

底部はレンガが核となり周辺をモルタルで固めている。モルタルの表面は凹凸があるため、型枠などを用いずに掘方にそのまま流し込んでいると考えられる。支基礎の残存する高さは約30cmである。支基礎は主基礎から東に延びて調査区外まで続いている。このことから主基礎はSB12西側であると考えられる。基礎上面はレンガを横に並べて構成しているため、支基礎幅とレンガ長手幅は一致している。

SB12西側で中心に穴が開いた一辺が20cmの立方体の花崗斑岩を確認した。花崗斑岩の下部に土管が接続しており、穴とつながっている土管は西にのびて調査区外へ続いている。土管は排水管と考えられる。また、花崗斑岩は排水管と雨樋を繋ぐジョイントと考えられる。

出土遺物：掘方から磁器の中碗1点が出土した。釉調と胎土から近世の肥前製と考えられる。

年代：掘方埋土から出土した遺物は近世に比定できるが、手抜き成形⁶で作られたレンガを主体とする建物であることから1873年から1880年代に構築されたと考えられる。

柵13及び土管

遺構：調査区南側に位置する一辺が150cmのレンガ製の柵である。内壁は一辺が60cmの正方形で内部壁面及び底面はモルタルが塗布されている。柵を中心に土管が四方へ延びている。北壁、東壁、南壁に接続している土管は直径約20cm、西壁に接続している土管は直径約30cmである。柵は各土管から給排水される水を調整する役割を持っていると考えられ、内壁に塗布されているモルタルは止水のためと考えられる。柵13掘方がSB12掘方と同じ12層から掘り込まれていることと、北壁から延びる土管がSB12と同じ角度で平行に設置されていることからSB12の排水を担っていた可能性がある。

出土遺物：柵の埋土から近代の棧瓦と現代のスレートが1点ずつ出土した。

東へのびる土管の掘方埋土から磁器の碗類3点、瓦類2点、金属の釘1点が出土した。

年代：柵を構成するレンガが手抜き成形で作られているため、SB12構築に近い時期に構築された遺構である。柵埋土からスレートが出土しているため、廃絶は現代である。

SK14・石15 (図38)

遺構：SK14は12層を掘り込んだ土坑である。残存する規模は120cm×40cmである。東側を13層に掘り込まれて、南側は調査区外に続くため、規模は不明である。深さは約30cmである。SK14埋土は主に暗褐色砂質土（16層、18層、20層）からなるが互層状に硬い明赤褐色粘質土（17層）が入る。SK14底から長さ約70cm、幅40cm以上ある石15を確認した。石の頂部は標高13.0mで、露出した部分の高さは約20cmである。石は北に平滑な面を持つが、明確な加工痕は確認できなかった。石の裾はSK14埋土より深いところに位置している。本調査では石の下端まで掘削していないため、据えられている層や置かれた時期は不明である。調査区は庭園に近接していることから庭園に設置した景石の可能性もある。また、景石と仮定すると調査区は近世において庭園内部に位置していた可能性がある。

出土遺物：埋土のうち互層状に堆積する16～20層から碗類1点と瓦片4点が出土した。碗類は釉調と胎土から肥前製と考えられる。

年代：SK14はSB12や柵13、土管と同じく12層から掘り込まれているため、これらの遺構と年代は大きく

変わらないと考えられる。

石15が機能していた時期は不明である。12層が堆積した時期には廃絶していたと考えられる。

出土遺物（図39）

外縁調査区1から出土した遺物は75点で重量は22,006gである。そのうち18点2,210gが近代の陶磁器類、12点15,312gがレンガである。これは検出面が近代であることに起因している。遺構外から出土した遺物は近代の遺物と年代不明の小片遺物である。瓦類が13点と最も多い。

0602は平もしくは棧瓦である。「東洋組谷□□」と書かれた角印が捺されている。凹面と凸面に雲母粉が確認できる。

0603は凹面が銅緑釉で施釉された平瓦である。直線的であるが端部が急激に立ちあがる断面形状をしている。露胎はにぶい赤褐色で胎土は灰褐色である。凹面に離れ砂が確認できる。

(4) 外縁調査区2

層序（図40）

調査区周辺の標高は14.0mである。第Ⅰ層に相当する層は1層～17層である。4層は1970年代の造成土である。4層の下層は調査区南側で7～11層、調査区北側で12～14層が厚さ約60cmで堆積している。これらは現代の廃棄物を含む粘質土である。

第Ⅱ層に相当する層は20層～22層である。また、第Ⅰ層や第Ⅱ層に明確に分けることができない粘質土（16層）とその下層の砂質土（17層）、砂質土（18層）、黒褐色砂質土（19層）を確認した。第Ⅱ層は標高13.25m前後に広がる。

標高約13.1mで暗褐色粘質土（26層・29層・30層）を確認した。根によるかく乱やSK16、管4、管7による掘り込みによって面的に広がらない。これらを除去すると地山由来のブロック土を含む層（31層、32層、34層、35層）を確認した。31層はφ50mmの垂角礫や瓦片を含む層である。32層は調査区北西に設定したトレンチ内では31層の下層に位置し、SK16底や管20掘方側壁でも確認することができ、調査区北側一帯に広がっていると考えられる。これらの層が属する時期は不明である。

近世の庭園境界を示す遺構は確認できなかった。調査区の大半で近代遺構の検出にとどまったため、近世遺構面に到達していない可能性がある。

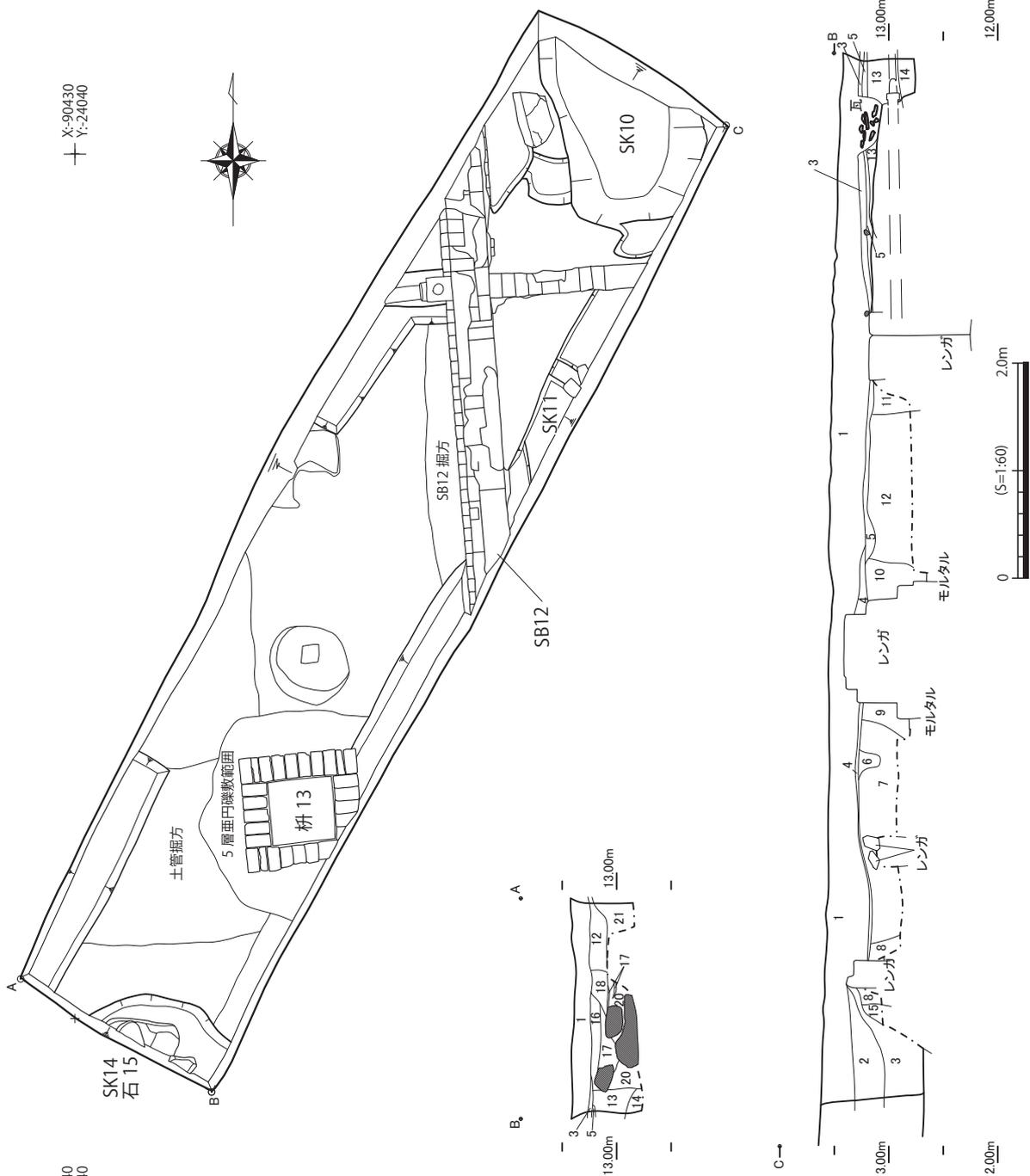
SK16（図40）

遺構：29層を掘り込む土坑である。東西約70cm、南北約40cmの規模で検出した。西側を管20掘方に掘り込まれ、北側は調査区外へ続いている。深さは約35cmである。

出土遺物：常滑製の土管8点、瓦類1点、コンクリート1点が出土した。全て近代の遺物である。土管は隣接する管20や管20掘方から出土した土管片によく似ているため、管20に由来する遺物と考えられる。

年代：出土遺物から近代の土坑である。

十 X:90440
Y:24040



十 X:90430
Y:24040

- 1 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 上面に砂利を含む(表土)
- 2 灰黄色2.5Y7/2 砂質土 非常に固い砂とφ10cm以下の礫からなる(SK10埋土)
- 3 黒色N1.5/7 砂質土 しまりなし 煉土、瓦、レンガ、木製品、石油製品を多く含む(SK10埋土)
- 4 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりなし 白色、橙色粘質ブロック土を含む
- 5 黒褐色2.5Y3/2 砂質土 φ1~3cmの垂円障を密に含む
- 6 明赤褐色5YR5/8 粘質土 φ0.1cm程度の細かい砂を多く含む
- 7 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 白色、橙色粘質ブロック土を含む部分的に炭を含む(SK10埋土)
- 8 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり 細かい白色、橙色粘質ブロック土を含む(SB12掘方埋土)
- 9 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり 細かい白色、橙色粘質ブロック土を含む(SB12掘方埋土)
- 10 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり(SB12掘方埋土)
- 11 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり(柵13掘方埋土)
- 12 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 白色、橙色粘質ブロック土を含む(SK11埋土)
- 13 黒褐色10YR2/3 やや粘質土 しまりなし 白色、橙色粘質ブロック土を含む(土管掘方埋土)
- 14 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりなし 白色、橙色粘質ブロック土を含む 13層より粘性がない
- 15 暗褐色10YR3/4 やや粘質土 しまりあり 細かい白色、橙色粘質ブロック土を含む
- 16 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 白色、橙色粘質ブロック土を含む
- 17 明赤褐色5YR5/8 やや粘質土 非常に硬くしまるφ1cm~10cmの粗い砂からなる(SK14埋土)
- 18 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 白色、橙色粘質ブロック土を含む(SK14埋土)
- 19 黒褐色2.5Y3/2 粘質土 しまりあり
- 20 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり 白色、橙色粘質ブロック土を含む(SK14埋土)
- 21 暗褐色10YR3/4 砂質土 白色、橙色粘質ブロック土を含む

図 38 外観調査区1 平面図及び断面図

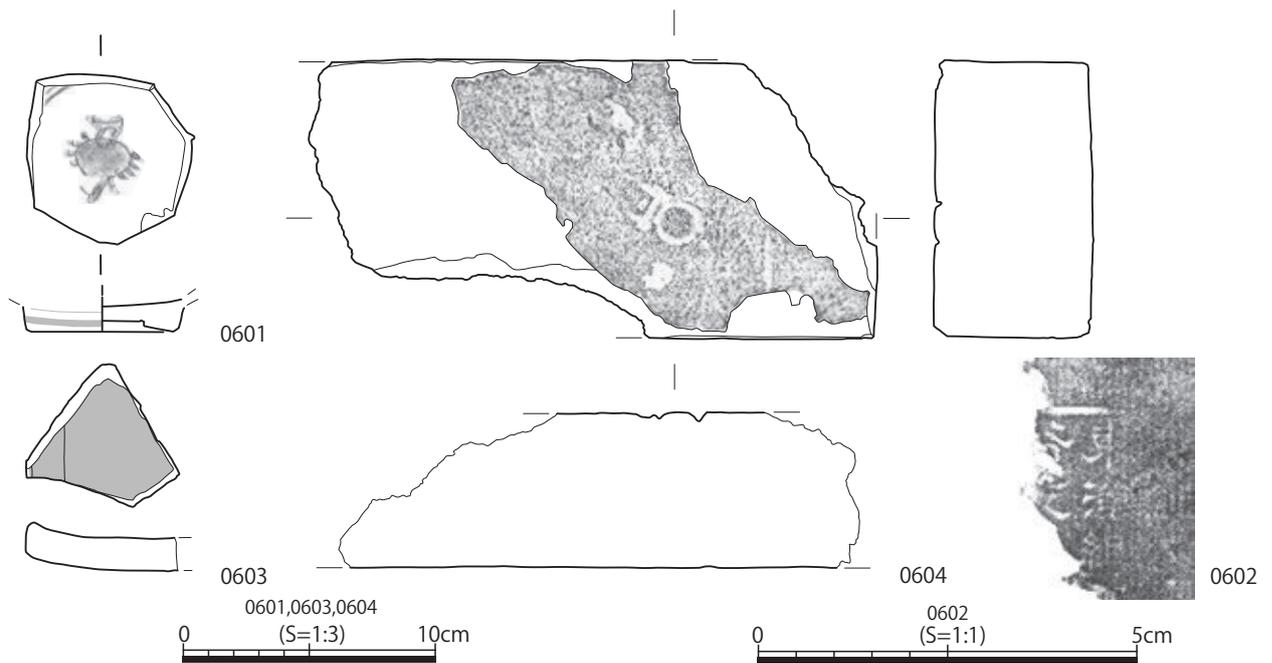


図 39 外縁調査区 1 遺物実測図

表 29 外縁調査区 1 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0601	SK10	磁器	碗	(60)	(13)	60	70	—	染付	モチーフ不明	白色密	—	中国	—	

表 30 外縁調査区 1 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0602	表土	(平)	(140)	—	(111)	18	299	—	暗灰色 灰白色	「東洋組谷口」の刻印	西尾	近代	
0603	12層	平	(60)	—	(58)	13	46	—	明赤褐色 明赤灰色	—	瀬戸・美濃	17世紀	銅緑釉が凹面に施釉されている。

表 31 外縁調査区 1 レンガ・土類観察表

No.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	備考
			長さ	幅	高さ	重量 (g)		
0604	SD5	レンガ	(224)	111	62	1,764	刻印あり	

SB18 (図40)

遺構：レンガを主体とする建物基礎である。頂部を標高13.2mで検出した。東西約20cm、南北約100cm、高さ約80cmの規模で検出した。南側は直方体の切石までで、西側と北側は調査区外へ続いている。レンガは頂部から階段状に広がり、最下段はモルタルとなっているSB12と類似することから西側も同様に階段状に広がっていくと考えられる。高さ約80cmのうちレンガが約50cm、モルタルが約30cmで、モルタルはさらに下に続く。SB18の掘方は31～33層を掘り込み、19層に覆われている。

SB18の南端は長方形の切石に切られている。切石は花崗岩質で、東へ延び柵19に接続している。切石の掘方はなく直接土に乗せ、周囲をコンクリートで固定している。

出土遺物 (図41)：掘方から土師質皿1点、焙烙1点 (0701)、須恵器の甕1点、瀬戸・美濃製陶器の中碗1点、コンクリートが出土した。時期が分かるものは2点で18世紀の焙烙と近代のコンクリートである。

0701は口縁部の内側が発達している。18世紀後半から19世紀に生産された製品と考えられる。全体がにぶい橙色で胎土に長石を含んでいる。細片であるため、口縁径は不明である。

年代：手抜き成形で作られたレンガを主体とする建物であることから1873年から1880年代に構築されたと考えられる。

柵19及び土管 (管20、22) (図40)

遺構：管と接続する柵である。柵の平面形状は1辺が130cmの正方形で深さは46cmである。柵の外枠は花崗岩質の切石からなり底部はモルタルが塗布されている。切石は管と接続するために管に合わせた半円形の穴が開けられ、半円形の穴が開けられた2石を組み合わせて給排水口を構成している。管20と管22はSB18に並行している。

柵の周囲を直径10～50cmの石や非常に硬い粘質土で固定している。掘方は確認できなかった。各管頂部の標高から管20～22は柵に向かって水が流れ、柵から管23を通り東に排水されると考えられる。管20と管22はSB2と平行にのびている。底部のモルタルは砂を多く含みSB18底部と比較して柔らかい。モルタルの下は32層であり、柵外枠の切石も32層に直接のっている。

柵13底部を断ち割り、下層を確認したところ、下層から粘質土を確認した。

出土遺物 (表33)：柵19の周囲を固める石材と粘質土から土師質皿1点、瀬戸・美濃製陶器の播鉢1点、瓦類5点、レンガ3点 (0702～0704) の他、近現代の遺物が多数出土した。埋土から山茶碗1点、近代の磁器碗1点、棧瓦1点、金属製品1点、年代不明の炆器2点が出土した。

柵19に蓋をするように8点のレンガ塊が敷き詰められていた。レンガ塊は複数のレンガを漆喰で接続した建物部材である。8点のなかで最も状態が良いレンガを遺物として取り上げた。レンガ1つ当たりの大きさは長さ215mm、幅105mm、厚さ55mmで、SB18とほぼ同一である。SB18廃絶後時間を置かずに柵19も廃絶されたと考えられる。

柵19底部の下層から瓦類1点、タタキ、コンクリートが出土した。遺物の様相から少なくとも柵の直下までは近代遺構面といえる。

柵19から四方にのびる土管から近世から近代にかけての遺物20点を確認した。

年代：並行するSB18に関連する遺構と考え、SB18と同じく1873年から1880年代に構築されたと考え

られる。また、柵を封鎖するように敷き詰められていたレンガをSB18に由来すると考えるとSB18廃絶後時間を置かずに柵19も廃絶されたと考えられる。

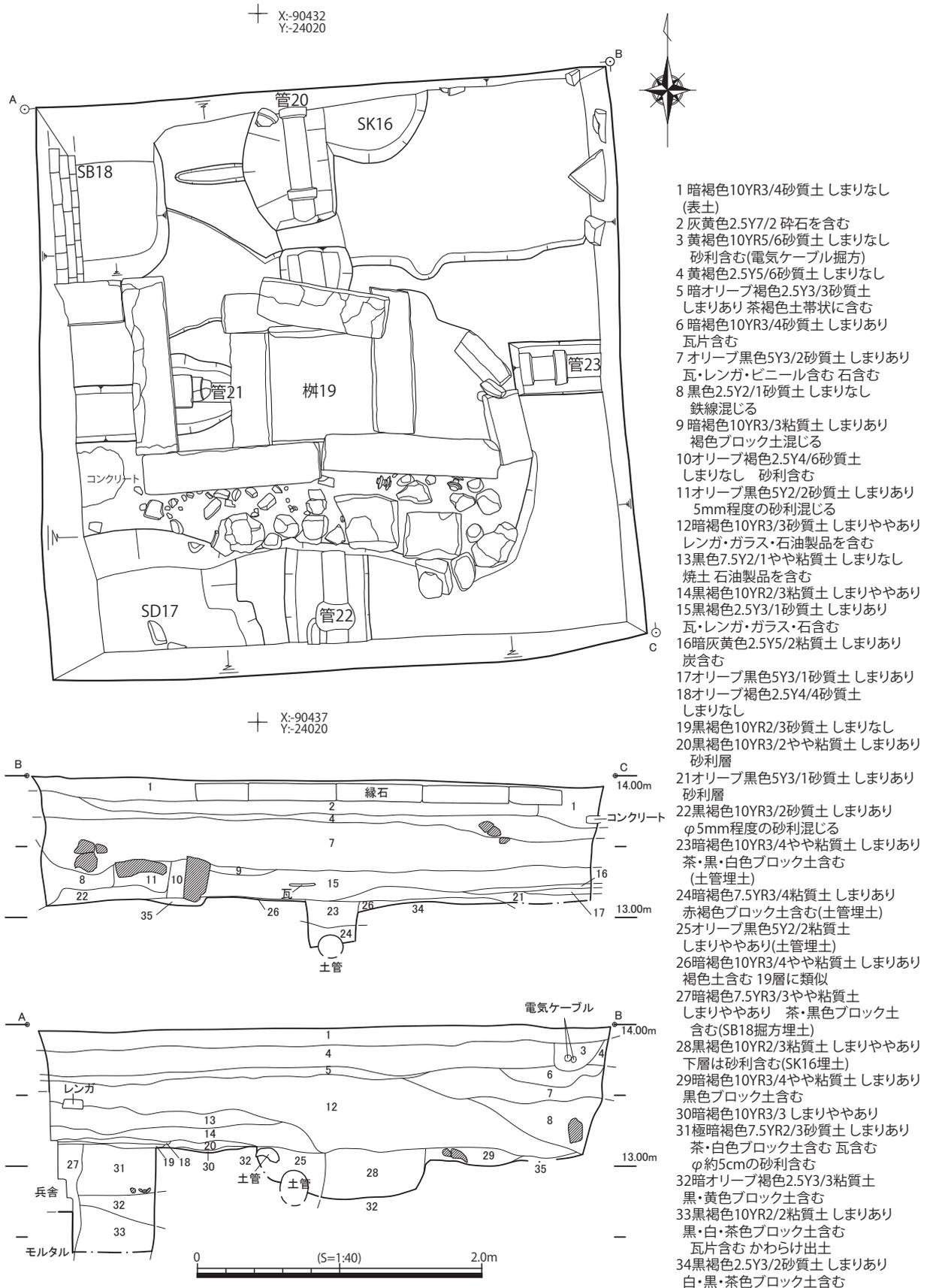


図40 外縁調査区2 平面図及び断面図

出土遺物

調査区2から出土した遺物は77点で重量は21,126gである。そのうち29点6,064gが近代の陶磁器類、6点12,324gがレンガである。調査区1と同様に検出面が近代であることに起因している。

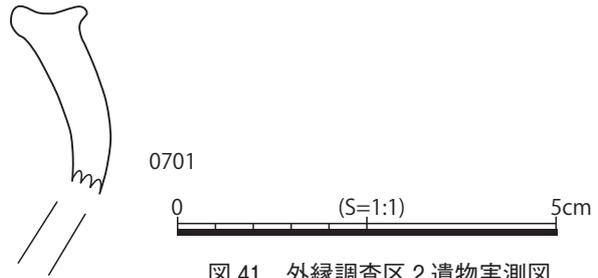


図 41 外縁調査区 2 遺物実測図

表 32 外縁調査区 2 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0701	SB2掘方	土器	鍋類/焙烙	—	(25)	—	9	—	—	—	明褐色	—	—	18世紀後半～ 19世紀前半	

表 33 外縁調査区 2 レンガ・土類観察表

No.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
0702	石組西	レンガ	(56)	(48)	(18)	40		
0703	樹蓋	レンガ	222	106	58	2,784		
0704	樹蓋	レンガ	215	99~114	55	9,500	漆喰で接続し塊になっている	

(5) 外縁調査区3

層序 (図42)

調査区周辺の標高は13.4mである。第 I 層に相当する層は1層～4層である。園路上に灰色砂質土 (1層) が堆積し、その下に園路舗装のための碎石 (2層) が堆積している。2層の下層は少量の2層由来の礫とコンクリート片を含む灰オリーブ色砂質土 (4層) である。

6層はブロック土をほとんど含まない黒色土である。7層は焼土を多く含む黒色砂質土、8層は砂層、9層はしまりがなく少量の礫を含む黒色粘質土である。9層の下層は炭、貝殻、瓦片を多く含む黒色砂質土 (10層) である。南側は6層に掘り込まれているため面的に広がらない。SB25とSB25が据えられた面である12層を覆うように堆積している。12層はSB25より北側で5層に掘り込まれているため、北への広がり是不明である。これらの層が属する時期は不明である。

近世の庭園境界を示す遺構は確認できなかった。調査区北側はSK24によってかく乱されていると考えられるが、SB25下層や南側は近世遺構面に到達していない可能性がある。

SK24 (図42)

遺構：調査区北側に広がる7層を掘り込んだ土坑である。現代の廃棄物を多く含む黒色粘質土 (5層) からなる。調査区外へ続くため規模は不明である。地表面から150cm掘削したが、完掘することはできなかった。

遺物 (図43)：近世以前の土器1点、陶器1点 (0804)、近世の陶器3点 (0805)、磁器2点、施釉された道具瓦1点 (0806)、近代の磁器1点、炆器2点、金属製品1点、その他に年代不明の遺物が5点出土した。また、

壁面に現代のコンクリート塊を確認した。

0804は口縁部のみ残存している瀬戸・美濃製の天目茶碗である。鉄釉で全体に施釉されている。大窯第3段階～第4段階に比定でき、名古屋城築城段階に生産されたと考えられる。

0805は瀬戸・美濃製の壺蓋である。外面が灰釉で施釉されている。

0806は外面全体に菊文が施された用途不明の瓦である。軒平瓦のような断面形状を持つ。全体が灰釉で施釉され、菊文は鉄釉で施釉されている。菊文は陰刻と陽刻がある。胎土はやや黄味がかかった灰白色で精密である。同様の瓦は第1～3次調査で1点出土しており、海鼠瓦と報告されている。

年代：現代の廃棄土坑である。

SB25 (図42)

遺構：SB25は調査区の南にあるレンガを主体とする基礎である。幅16cm、高さ26cmで底部はレンガとほぼ同じ幅でモルタルが存在する。頂部の検出高は標高12.7mである。東西方向に延び両端は調査区外へ続いている。レンガは確認できただけでも5段積まれている。SB12やSB18と比べると幅が細く、掘方も狭く不明瞭である。SB12やSB18と比較して小規模な建物基礎や建物の重量がかかりにくい部分の基礎と考えられる。

年代：手抜き成形で作られたレンガを主体とする建物であることから1873年から1880年代に構築されたと考えられる。

出土遺物 (図43)

外縁調査区3から出土した遺物点数は57点で重量は15,868gである。

2層から瀬戸・美濃製の灯明受皿 (0803) が出土した。全体が鉄釉で施釉されている。形状から登窯第2段階第7小期^{*1}に属し、18世紀中葉の製品と考えられる。

SD24に掘り込まれている6層から山茶碗3点 (0801、0802) と陶器1点が出土した。山茶碗はいずれも胎土が粗い尾張型^{*1}である。6層より下層の11層と12層からレンガなどの近代遺物が含まれているため、SB25構築後に再堆積した土と考えられる。

表 34 外縁調査区 3 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0801	中世包含層	山茶碗	碗	—	(25)	—	18	ロクロ成形	—	—	にぶい黄橙	—	尾張	—	6層か
0802	中世包含層	山茶碗	小皿	—	(33)	—	8	ロクロ成形	—	—	にぶい黄橙	—	—	—	6層か
0803	2層	陶器	灯明受皿	—	2.3	7.2	45	ロクロ成形	鉄釉	—	褐灰色	—	瀬戸・美濃	18世紀中頃	
0804	SK24	陶器	碗/中碗	(119)	(44)	—	26	ロクロ成形	鉄釉	—	褐灰色	—	瀬戸・美濃	中世	天目茶碗
0805	SK24	陶器	蓋類	—	(170)	(39)	123	ロクロ成形	灰釉	—	灰白色	—	瀬戸・美濃	—	

表 35 外縁調査区 3 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0806	SK24	道具瓦類	(63)	—	(54)	(38)	89	—	胎土：灰白色	菊文陰刻 菊文陽刻	瀬戸・美濃	17世紀か	長石釉で全面を施釉 文様は鉄釉で施釉

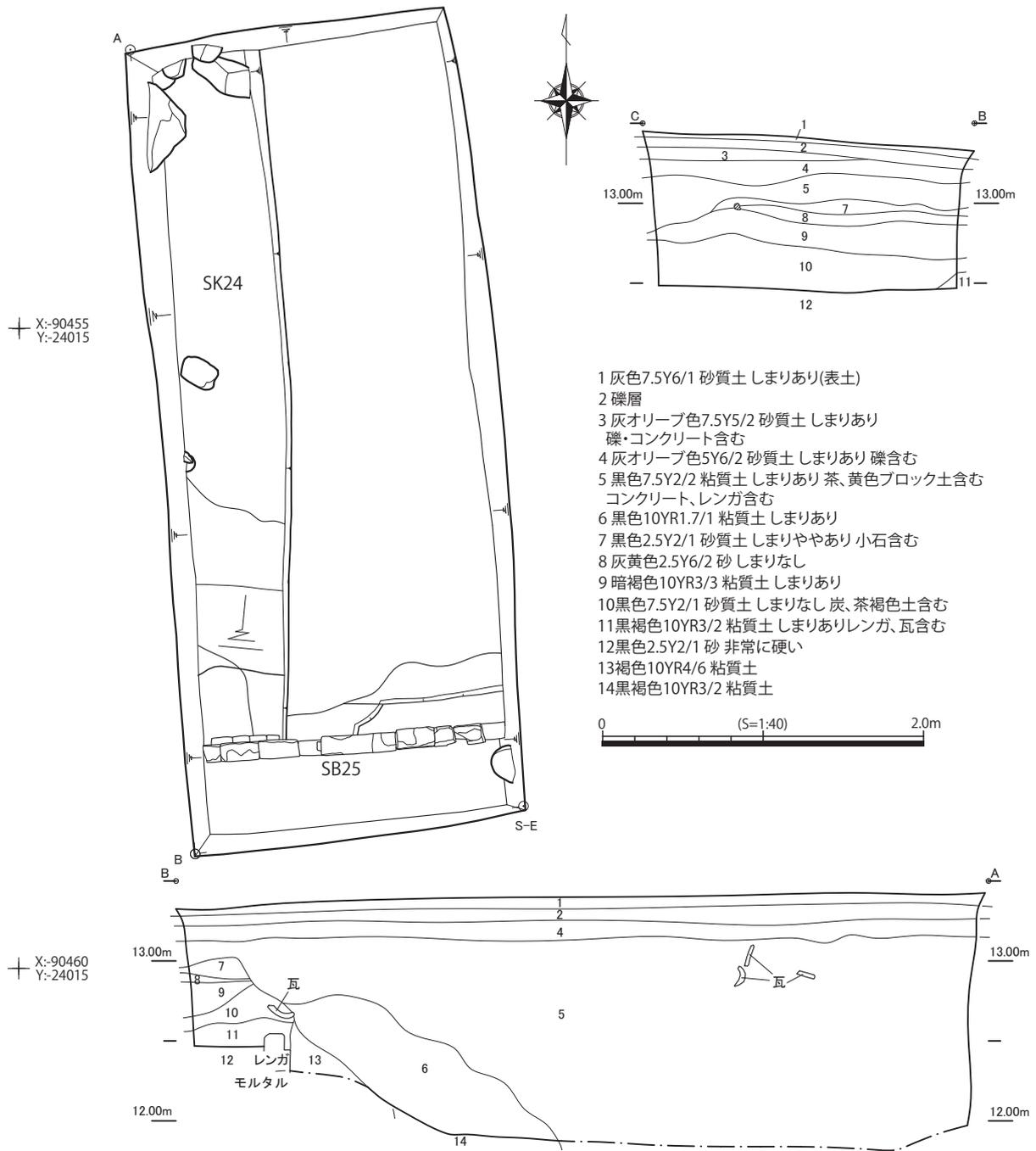


図 42 外縁調査区 3 平面図及び断面図

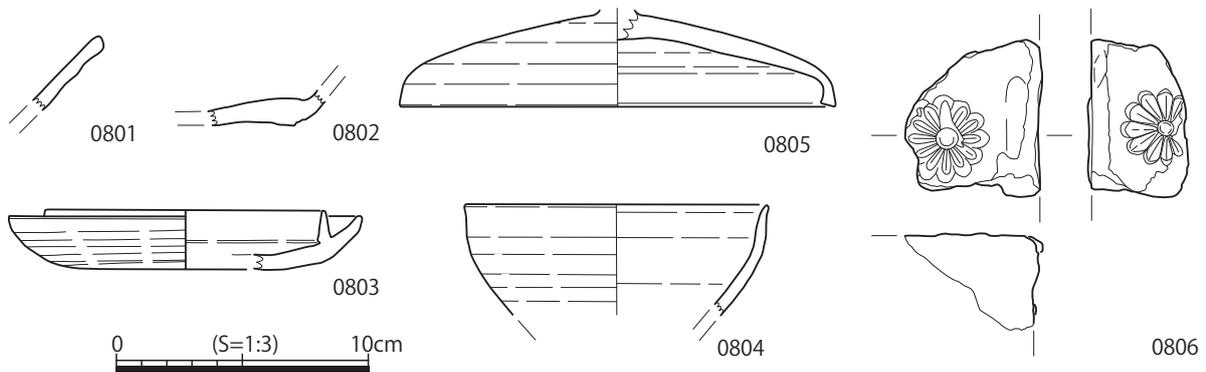


図 43 外縁調査区 3 遺物実測図

(6) 外縁調査区4

層序 (図44)

調査区周辺の標高は13.8～13.9mである。第Ⅰ層に相当する層は1層から10層である。表土は2層である。4層には庭園調査区の4層で見られるような山砂が含まれていることから、この層まで公園造成に伴う1970年代の盛土と考えられる。

10層と11層は第Ⅱ層に相当する。10層はタタキ片、レンガ片、コンクリート片を多く含む暗褐色砂質土である。6層と7層より固くしまっている。上面の一部に焼土層(9層)が薄く堆積している。11層は標高13.1mで亜円礫～亜角礫と礫の間に入り込んだ砂からなる固くしまった砂質土である。礫は大半がチャートからなり、大きさはφ1cm～10cmとばらつきがある。礫の他にφ5cm～10cmのタタキ片や瓦片も含まれている。上面にタタキ片や割石が乗っている。上面に近代の瓦片が乗っていたことから少なくとも近代まで露出していた面である。

12層と13層は第Ⅲ層に相当する。12層は茶褐色粘質ブロックやタタキ片を多く含む粘質土である。北をSK26に掘り込まれ、東西南はトレンチ外へ続くため、層の広がり不明である。13層は茶褐色粘質ブロックを含む粘質土である。瓦を多く含んでいる。12層と同様に層の広がり不明である。

14層と15層は第Ⅳ層に相当する。14層は茶褐色粘質ブロックを含む粘質土である。瓦を含んでいる。15層にSS29が据えられている。15層は北端を14層に掘り込まれた層である。黒褐色の粘質土からなり、非常に多くの瓦を含んでいる。粘性や包含するブロック土は13層や14層に類似している。

SK26 (図44)

遺構：調査区北側に広がる10層を掘り込んで構築された土坑である。埋土は7層である。規模は不明であるが、調査区の半分以上を占めることから少なくとも長さ6m以上になる巨大な土坑と考えられる。二次焼成を受けた現代の製品やレンガ塊が多く出土しているため、学生会館(旧陸軍歩兵第六連隊第7中隊・第二機関銃隊兵舎)焼失後の廃棄土坑と考えられる。

遺物：7層は現代のコンクリート塊を多く確認したが、遺物として取り上げることができなかった。また二次焼成を受けた現代の石油製品が調査区底に数十点廃棄されていた。

年代：遺物の様相から現代の廃棄土坑である。

SS29 (図44、写真4)

遺構：硬質砂岩の割石2石からなる石列である。標高12.5mの高さに据えられている。西側の石の頂部が標高12.64m、東側の石の頂部が標高12.58mと不揃いであることから天端とは考えにくく、上段がSK26にかく乱され失われていると考えられる。面を北に向けて並んでおり、間知石に近い形状をしている。不明瞭ではあるが石列の東に凹みが確認できる。凹みを石材抜き取り痕と仮定すると調査区を東西に横断するように石列が続いていたと考えられる。SS29は15層に据えられており、13、14層は裏込め土として入れられたと考えられる。

SS29の背面から近代の遺物は出土しておらず、検出高が第3次調査の外-02～03調査区から出土した庭園境界遺構に近い。また、SS29を構成する石材とその配置は後述する外縁調査区10のSD54と類似しており、

近世の庭園境界をなす溝の片側であると考えられる。

遺物(図45)：背面の13層と14層から瀬戸・美濃製の陶器碗1点(0901)常滑製の炆器甕1点、瓦類の平瓦41点、丸瓦3点、軒丸瓦1点が出土した。

0901は瀬戸・美濃製の中碗である。口縁部と胴部が残存している。内面に石ハゼが2箇所あり、内外面にロクロ痕が強く残る。釉は灰釉で全体に薄くかかるが、高台付近は無釉である。

背面盛土から出土した遺物は全て近世と考えられるが、詳細な年代特定ができる遺物は出土しなかった。年代：背面盛土出土遺物から近世に構築されたと考えられる。石が据えられている高さは既往の調査で検出した二之丸庭園に関連する遺構の高さと近似している(第2章第2節参照)。第Ⅲ層堆積時点で廃絶していた。



写真4 SS29 北東から

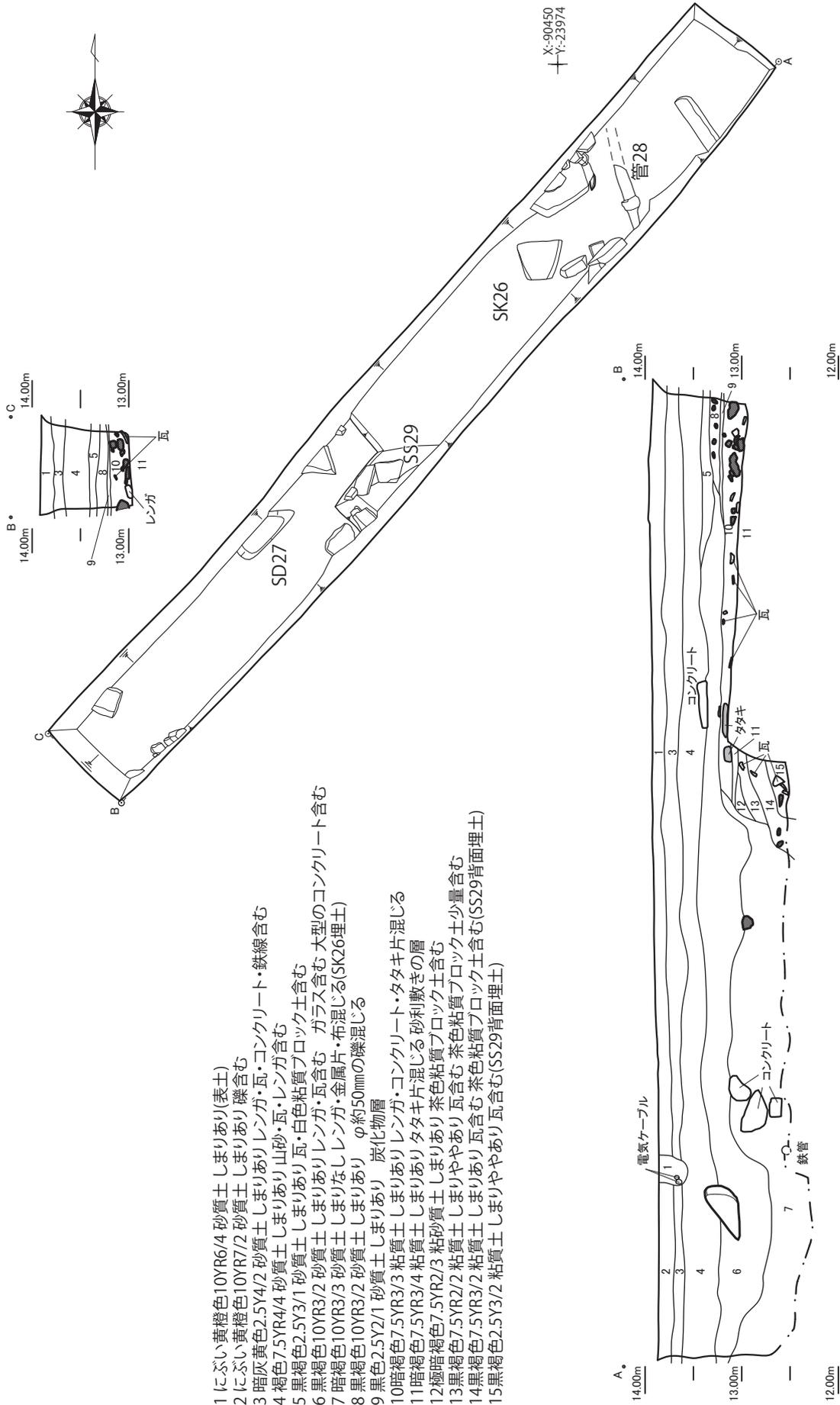
出土遺物(図45)

外縁調査区4から出土した遺物点数は156点で重量は22,429gである。11層より上層に近代遺物が分布し、12層より下層に近世遺物が分布している。11層は近世の瓦と近代の瓦が混在している。11層から0902と0903を図化した。

0902は軒平瓦である。向かって左側のみ残存し、中心飾りは欠損している。瓦当文様は先端三叉三子葉文系^{*6}と想定できる。瓦当上部の面取りが大きい。燻が吸着しきらなかったためか露出していた部分は燻が滅失し灰白色となっている。

0903は軒平瓦である。向かって右側のみが残存し、中心飾りは欠損している。瓦当文様は三子葉萼文系^{*6}と推定できる。文様区が34mm、瓦当高が50mm程度あり第7次・第8次出土瓦のなかでは大きな部類である。

X:-90458
Y:-23980



- 1 にぶい、黄褐色10YR6/4 砂質土 しまりあり(表土)
- 2 にぶい、黄褐色10YR7/2 砂質土 しまりあり礫含む
- 3 暗灰黄色2.5Y4/2 砂質土 しまりありレンガ・瓦・コンクリート・鉄線含む
- 4 褐色7.5YR4/4 砂質土 しまりあり山砂・瓦・レンガ含む
- 5 黒褐色2.5Y3/1 砂質土 しまりあり瓦・白色粘質ブロック土含む
- 6 黒褐色10YR3/2 砂質土 しまりありレンガ・瓦含む ガラス含む、大型のコンクリート含む
- 7 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりなしレンガ・金属片・布混じる(SK26埋土)
- 8 黒褐色10YR3/2 砂質土 しまりあり φ約50mmの礫混じる
- 9 黒色2.5Y2/1 砂質土 しまりあり 炭化物層
- 10 暗褐色7.5YR3/3 粘質土 しまりありレンガ・コンクリート・タタキ片混じる
- 11 暗褐色7.5YR3/4 粘質土 しまりありタタキ片混じる 砂利敷きの層
- 12 極暗褐色7.5YR2/3 粘砂質土 しまりあり 茶色粘質ブロック土含む
- 13 黒褐色7.5YR2/2 粘質土 しまりややあり 瓦含む 茶色粘質ブロック土少量含む
- 14 黒褐色7.5YR3/2 粘質土 しまりあり 瓦含む 茶色粘質ブロック土含む(SS29背面埋土)
- 15 黒褐色2.5Y3/2 粘質土 しまりややあり 瓦含む(SS29背面埋土)

図 44 発掘調査区 4 平面図及び断面図

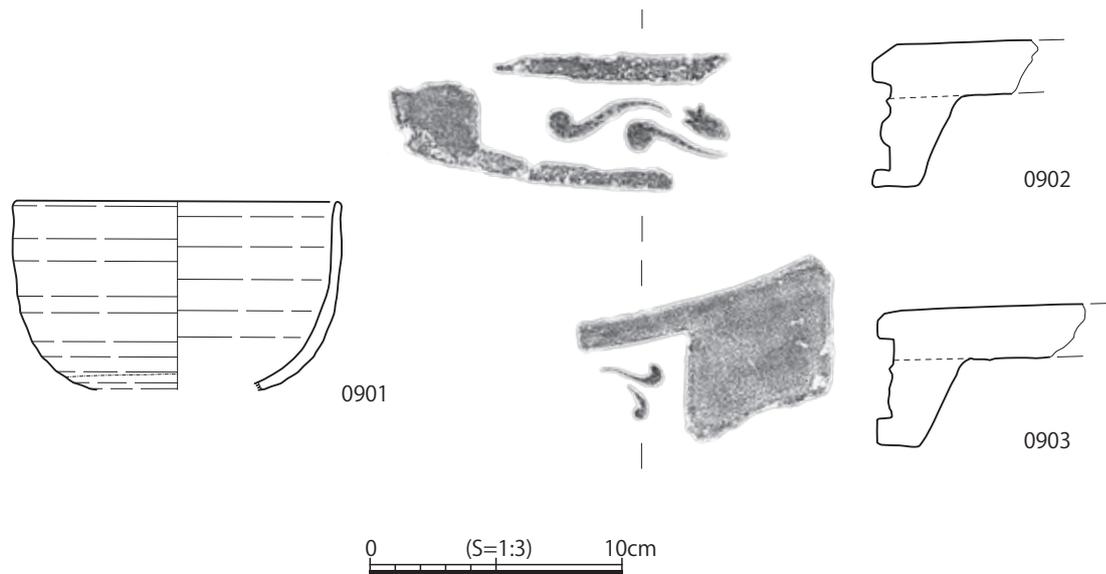


図 45 外縁調査区 4 遺物実測図

表 36 外縁調査区 4 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量(g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
0901	近世遺構面深堀	陶器	碗/中碗	(126)	(75)	—	61	ロクロ成形	灰釉	—	灰黄	—	瀬戸・美濃	近世	

表 37 外縁調査区 4 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量(mm)				重量(g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
0902	玉砂利下層	軒(平)	(140)	57	(63)	21	317	唐草文	灰白色 灰白色	—	—	—	—
0903	玉砂利下層	軒(平)	(104)	54	(81)	21	364	唐草文	灰色 灰白色	—	—	—	—

(7) 外縁調査区5

層序 (図46)

調査区周辺の標高は14.1~14.4mである。1~12層が第I層に相当すると考えられる。表土は約10cmの厚さで堆積し、その下層は公園造成に伴う盛土と考えられる砂層(3・4層)が堆積している。5~7層は現代の廃棄物を多く含む粘質土である。5~7層の下層は約5cmの厚さで堆積している砂利層(8層)である。8層の下層は9層が厚さ約10cmでほぼ水平に堆積している。8層はφ5~10mmの礫からなり、13.7mで平坦な面を持つ。調査区ほぼ全域に広がっているが、西側を5層と6層に掘り込まれている。8層は一時期地表に露出していた面と考えられる。

14層の下層は14層より小ぶりの礫とタタキ片を含む粘質土である(20層)。厚さ10~20cmで堆積し、東側は16~18層に掘り込まれているため、層の広がり不明である。

近世の庭園境界を示す遺構は確認できなかった。調査区最下面で標高12.8mであることから近世遺構面

に到達していないと考えられる。

SB30 (図46)

遺構：標高13.76mで水平に施工されたコンクリート敷である。上面が熱を受け黒く変色している。SB30の南北西端は調査区外へ続き、東端はかく乱を受けているため、規模は不明である。

コンクリートの直下はタタキが敷かれている。タタキ上面は標高13.40mで平滑に仕上げられていることから、コンクリート施工以前の床面として露出していた可能性がある。しかし上面がコンクリートと密着していることから、コンクリート施工にともなう基礎としてタタキが敷かれた可能性もある。すなわち上面のコンクリートとタタキを併用した工法である可能性と、SB30がタタキ敷からコンクリート敷へ改造された可能性の2つが考えられる。

タタキの下は10～100cmの石材やタタキ片を含む粘質土（14層）が堆積している。石材のうち3分の1程度が間知石である。間知石の大半は正面が1辺約20cmの正方形で奥行きは30～40cmである。

遺物：コンクリートの下に広がるタタキから現代の石油製品1点が出土した。出土状況からタタキが硬化し安定してから入り込んだと考えられる。タタキ下層の礫敷から近代の時期1点、ガラス製品1点、年代不明の瓦類3点、金属製品1点が出土した。

年代：SB32とSD33を覆うように施工されているため、調査区5内で最も新しい遺構である。現代に構築され、公園造成（1976年）までには廃絶していたと考えられる。コンクリート下層のタタキは現代以前（コンクリート普及以前）に構築された可能性がある。

SB32 (図46)

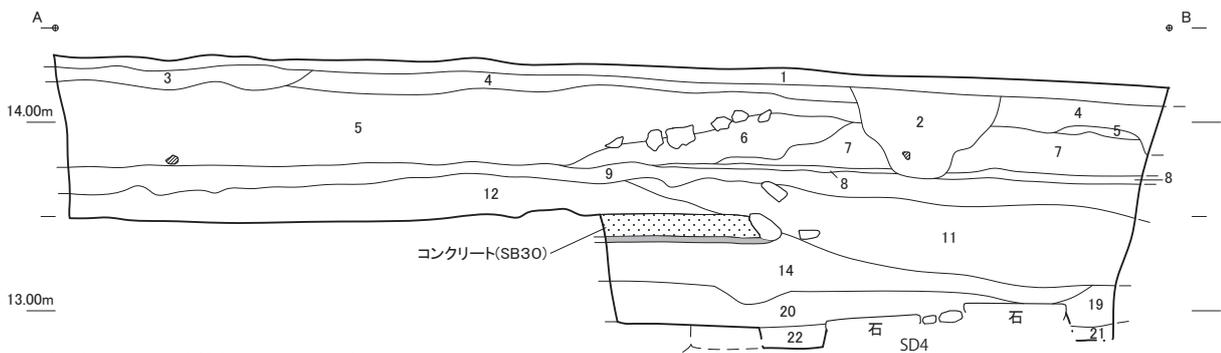
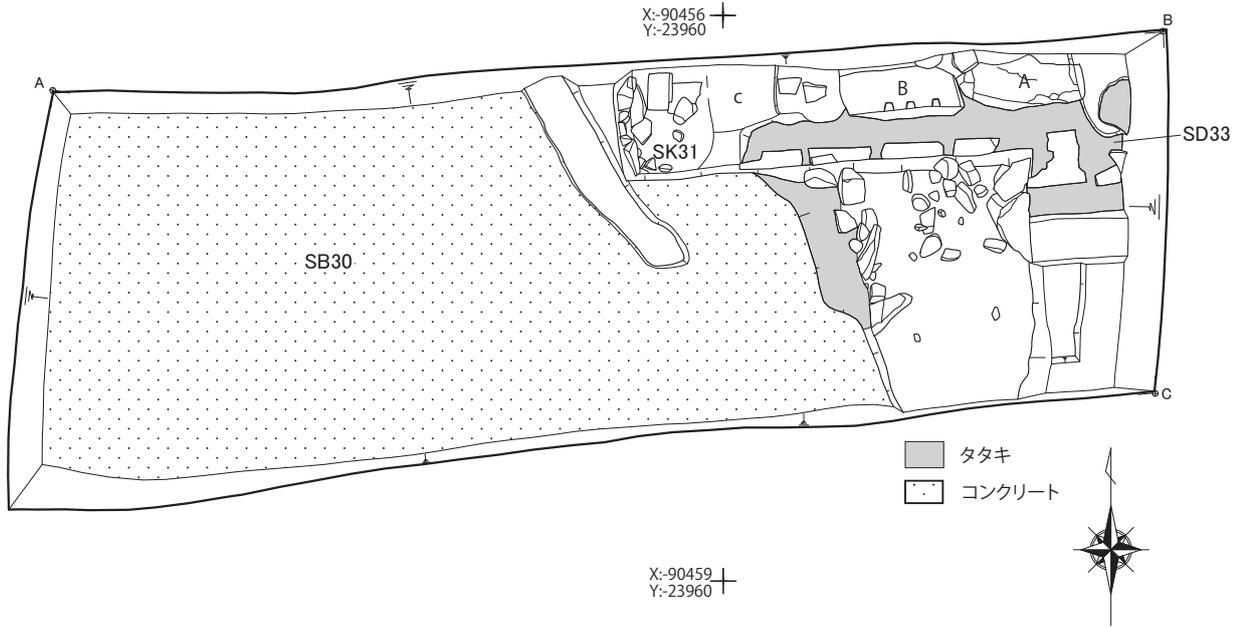
遺構：調査区南壁東側で確認したコンクリート壁である。上面の標高は13.4mである。上面はSB30のタタキに掘り込まれている。コンクリート敷部分はかく乱の影響で新旧関係が確認できない。東壁で掘方を確認した（15層）。

年代：構築年代は不明である。SB30に掘り込まれていることからSB30施工時には廃絶していたことがわかる。

SD33 (図46)

遺構：東西方向にのびる瓦敷の溝である。溝の幅は約110cmで西端はSK31に掘り込まれている。東の一部が18層に破壊され、調査区外へ続いている。溝の底は標高約12.9mで北護岸は直列に並んだ切石や自然石からなり、南護岸はコンクリートである。底部はタタキに平瓦を貼り付けている。

北護岸石Aは長さ約60cm、幅約25cm、高さ約15cmのチャートの自然石である。北護岸石Bは長さ約60cm、幅約20cm、高さ不明の花崗岩製切石である。上部幅5cm、底部幅4cm、深さ3～4.5cmの方形に近い台形の矢穴が3箇所確認できる。北護岸採取痕cはSK31に掘り込まれているため、正確な規模は不明だがAやBと同程度の石材が設置されていたと考えられる。採取痕cからレンガ片が出土した。南護岸は上辺の幅が20cm、検出した高さが20cmで東西方向にのびるコンクリートである。上面の標高は13.0mである。掘り切ることができなかつたため、正確な高さは不明である。掘方は周辺が16～18層にかく乱されている



- 1 暗褐色7.5YR3/4 砂質土しまりなし(表土)
- 2 黄褐色10YR5/8 やや粘質土しまりややあり
砂利、7層、9層ブロックを含む
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/6 砂質土しまりなし 山砂
- 4 黄褐色10YR5/8 やや粘質土しまりややあり
西側は帯状ににぶい黄褐色土を含む
- 5 暗褐色7.5YR3/3 粘質土しまりややあり
- 6 黒色2.5Y2/1 やや粘質土しまりあり 砂利、9層含む
- 7 黒色10YR2/1 やや粘質土しまりなし 焼土
浅黄橙10YRが大きなブロックで混じる 砂利、レンガ、瓦を含む
- 8 砂利 φ5mm~10mmの砂からなる
- 9 浅黄橙色10YR 粘質土しまりなし 灰白色、黄褐色粘質
ブロック土を含む
- 10 黒色5Y2/1 砂質土しまりなしレンガ混じる
- 11 黒褐色2.5Y3/2 粘質土しまりあり 黒色 2.5Y2/1粘質土を含む
石、瓦、ビニール、レンガを含む
- 12 黒色7.5Y2/1 粘質土しまりあり 木、鉄片を含む
- 13 暗褐色10YR3/4 やや粘質土しまりなしレンガ片を多量に含む
- 14 橙色2.5YR7/6 粘質土 土間状コンクリートの基礎
人頭大の角礫と三和土片多量に含む(SB30基礎)
- 15 黒褐色7.5YR2/2 砂質土しまりなし(SB32掘方埋土)
- 16 暗褐色10YR3/4 粘質土しまりあり 褐色10YR4/6粘質土を含む
- 17 黒褐色2.5Y3/1 砂質土
- 18 褐灰色10YR4/1 粘質土 タタキ片、瓦、レンガを含む
- 19 灰褐色7.5YR4/2 粘質土しまりともありタタキ片を含む
にぶい黄褐色土を含む
- 20 黒褐色10YR3/2 粘質土 こぶし大の礫とタタキ片を含む
レンガ・瓦を含む
- 21 黒色7.5YR2/1 やや粘質土しまりなし 瓦を含む
- 22 暗褐色10YR3/3 粘質土 黒色粘質ブロック土を含む
コンクリート片を含む(SD33抜取埋土)

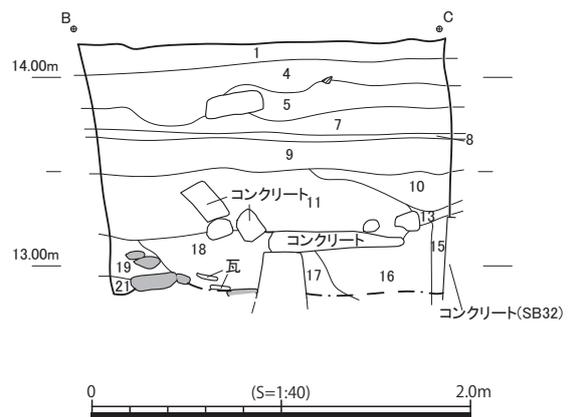


図 46 外縁調査区 5 平面図及び断面図

ため確認できなかった。コンクリートはSB30と比べて黒く、骨材は粗い。骨材はφ約5cmの垂円礫を主に使用している。底は長さ30～40cm、幅28cmの平瓦がタタキにめり込むように設置されている。タタキが硬化する前に設置されたと考えられる。また、底部西端でレンガ片がタタキに埋め込まれていた。

遺物：埋土から近代の磁器1点、ガラス製品2点、レンガ塊28点が出土した。レンガ同士が接続したレンガ塊や漆喰が付着したレンガが多く、実際に使用されたレンガが投棄されていると考えられる。年代不明の瓦類が22点出土した。

護岸抜取痕から近代のモルタル1点と年代不明の瓦類1点が出土した。

年代：コンクリートを護岸に用いていることから近代以降に構築され、廃絶した遺構である。切り合い関係から外縁調査区5内で最も古い遺構で、護岸に近世の石材を使用していることから近代の早い段階で構築されたと考えられる。

出土遺物

外縁調査区5から出土した遺物点数は504点で重量は80,534gである。レンガ138点48,472g、その他127点11,533gが近現代の遺物で「名古屋大学」や陸軍に関する文字が描かれた磁器類が調査区全体で見られる。これらの近現代遺物は二次焼成を受けていることや、焼土が付着していることから熱を受けているSB30と関連すると考えられる。

近世の遺物は5層出土の陶器碗1点と3層出土の瓦1点である。

(8) 外縁調査区6

層序 (図47)

周辺の標高は13.6～13.7mである。1層～4層は第Ⅰ層に相当する。表土(1層)、園路に伴う碎石を敷き詰めた2層、1970年代の公園造成に伴う3層が堆積している。3層を除去すると調査区中央でSB34の頂部が露出した。

5層は第Ⅱ層に相当する。SB35を境に西に6層、東に5層が堆積している。5層はレンガ片などの近代遺物を含む砂質土で、上面に薄く砂利が敷かれている。

調査区東側の標高13.1mから約2cmの厚さで堆積する粘質土(14層)を確認した。管37より東側では標高12.7～12.8mから約2cmの厚さで14層を確認した。14層の下層は15層から18層が堆積している。いずれも地山由来のブロック土を含む土で遺物はほとんど含まれない。21層は直径約20cmの灰黄色粘土ブロックが大量に含まれており、灰黄色粘土ブロックとその隙間に入り込んだ粘質土からなる。特に管37以東は灰黄色粘土ブロックが密である。遺物は出土していない。調査区西側では6層の下層にしまりがなく地山由来の粘質土ブロックを含む粘質土(20層)を確認した。20層は約80cmの厚さで堆積している。近世から近代の遺物が出土している。これらの層が堆積した時期は不明である。

21層の下層は24層、26層、27層が大きく広がらずに堆積している。26層は地山が再堆積してできた層である。28層は遺物を含まない地山由来の粘質土ブロックを含む土である。

近世の庭園境界を示す遺構は確認できなかった。

SB34 (図47)

遺構：調査区西端に位置するレンガとコンクリートからなる南北方向に延びる建物基礎である。20層を掘り込んで作られている。頂部の標高は13.1mで上部幅の半分程度が調査区外へ続いているため、幅は不明である。レンガとコンクリートの高さは68cmである。底部のコンクリート下はタタキである。高さ14cmごとに5cm東へ広がり、階段のような断面形状となる。調査区外にある西側も階段状に広がって行くと考えられる。

階段状に広がるレンガの下部はコンクリートである。コンクリートはレンガより30cm東へせり出し、高さは30cmである。コンクリートの下はφ50mm以上の骨材を多く含むタタキが敷かれている。タタキの高さは不明である。

遺物 (図48)：掘方から年代不明の瓦類2点が出土した。

SB34から遊離していたレンガ3点 (1102～1104) を遺物として取り上げた。レンガは手抜き成形で、大きさはいずれも長さ約230mm、幅約100mm、厚さ約60mmである。

年代：手抜き成形で作られたレンガを主体とする建物であることから1873年から1880年代に構築されたと考えられる。他調査区のSB12、SB18、SB25と異なり、コンクリート基礎の下にタタキが施工されていることから、他調査区のレンガ建物基礎と差異が認められる。

SB35 (図47)

遺構：調査区中央に位置するレンガとコンクリートからなる南北方向に延びる建物基礎である。6層と12層を掘り込んで作られている。構造はSB34と同じくタタキ、コンクリート、レンガの順に積まれている。頂部の標高は13.24cm、頂部幅は46cm、レンガとコンクリートの高さは90cmである。頂部から25～30cm下がったところで東西に5cmずつ広がり、2段目から14cm下がったところで東西に5cmずつ広がるピラミッドのような断面形状をしている。レンガの下部はコンクリートである。コンクリートはレンガより12cmずつ東西へせり出し、高さは30cmである。コンクリートの下はφ50mm以上の骨材を多く含むタタキが敷かれている。タタキの厚さは不明である。

構造及び構成するレンガがSB34と同一で同じ20層を掘り込んで構築されているため、SB34と合わせて1つの建物基礎となる可能性が高い。

年代：SB34と同時期の遺構と考えられる。

SB36 (図47)

遺構：調査区東側に位置するコンクリート基礎である。12層を掘り込んで作られている。SB34、SB35と平行して南北方向に延びる。頂部の標高は13.31mで、断面形状は幅10cm、高さ10cmの正方形である。構造はSB34、SB35と比較して細く、SB35と1mしか離れていないことからSB35に付随する建造物の基礎と考えられる。

年代：SB34、SB35と同時期の遺構と考えられる。

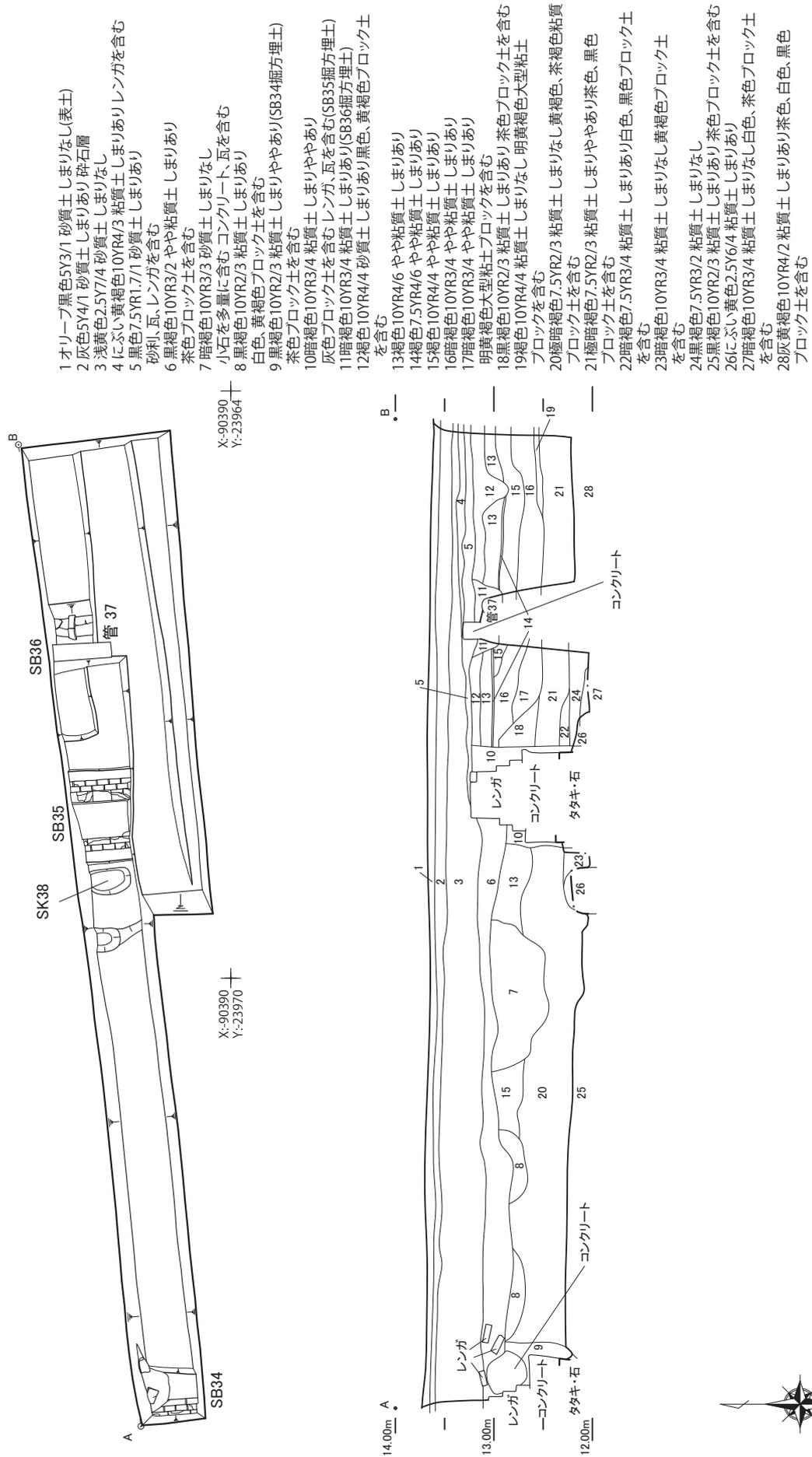


図 47 外縁調査区 6 平面図及び断面図

管37

遺構：調査区東側に位置する土管である。頂部の標高は13.12mで直径は15cmである。SB34、SB35、SB36と平行して南北方向に延びていることからSB34とSB35の排水を担う遺構と考えられる。

年代：SB34、SB35と同時期の遺構と考えられる。

出土遺物（図48）

外縁調査区6から出土した遺物点数は133点で重量は21,890gである。SB34、SB35に由来すると考えられるレンガが表土と2層から6点、レンガ基礎から遊離したレンガ3点が合わせて11,458gと重量の約半分を占める。最も多く出土した遺物は年代不明の瓦類で60点5,501gである。表土から出土した1101を図化した。

近世の遺物は瀬戸・美濃製の播鉢1点（1101）である。口縁の一部のみ残存している。細片のため口径は不明である。口縁部形状から播鉢Ⅰ類で17世紀後葉の製品と考えられる。

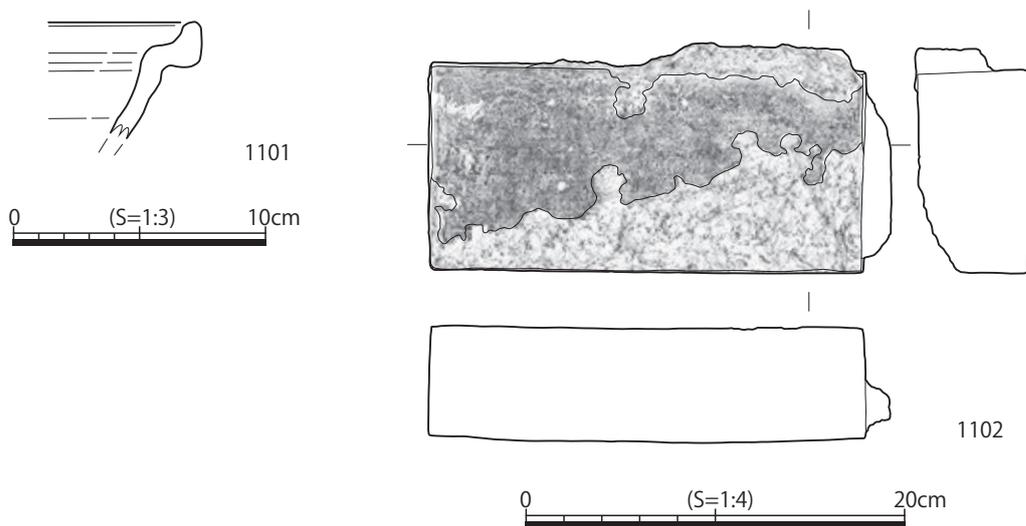


図 48 外縁調査区 6 遺物実測図

表 38 外縁調査区 6 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様	製作地			製作年代		
1101	4層	陶器	鉢/摺鉢	—	(46)	—	36	口クロ成形	鉄釉	—	橙	—	瀬戸・美濃	17世紀後葉	登録第1段階第4小期	

表 39 外縁調査区 6 レンガ・土類観察表

No.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ			
1102	SB35	レンガ	230	108	60	2,521		

(9) 外縁調査区7

層序 (図49)

外縁調査区7周辺の標高は14.1～14.3mである。1層～6層は第Ⅰ層に相当する。2層は1970年代の公園造成に伴う山砂である。その下層の3層から4層は現代の廃棄物を多く含む粘質土で大きさや構成が雑多なブロック土を多く含む。5層は貝殻を多く含む粘質土である。6層は調査区北側に広がる粘質土である。貝殻やタタキ片、礫を多く含み、硬くしまっている。6層から現代の廃棄物は出土しなかったが、近代の染付が出土した。

6層の下層は褐色、黒褐色、黄褐色の粘質土ブロックを含む11層と14層が部分的に広がる。SK41 (7層) や管42掘方 (10層) などに掘り込まれている。近代遺構に掘り込まれている層であることから第Ⅱ層もしくは第Ⅲ層に属すると考えられる。

標高約12.8mで16～23層を確認した。SS43上面に堆積している。多くは褐色～暗褐色の粘質土で水平に堆積しない。17、18、20、22、23層は北東から南西に向かって下に傾斜し、21、24層は南東から北西に向かって下に傾斜している。16～23層は広く面を形成せず、包含する遺物やブロック土の内容に大きな差異が見られないことから、SS43を埋め立てた際の埋土の単位と考えられる。近世遺構と考えられるSS43を埋める層であることから第Ⅲ層に属すると考えられる。

25層は第Ⅳ層に相当する。25層は灰黄褐色の粘質土である。同色と灰色の粘質土ブロックを含んでいる。ブロック土は地山に由来している。

SE39 (図49)

遺構：直径約110cmのコンクリート製外枠をもつ井戸である。内部は石油製品などの現代の廃棄物を多く含む黒色土である。廃棄物の一部で被熱の痕跡を確認した。SE39掘方は5層とタタキ面を掘り込んでいる。

遺物：埋土から近代の軒平瓦1点、ガラス製品1点、現代の石油製品1点、年代不明の陶磁器類2点と瓦類4点が出土した。

年代：コンクリートで構築されていること、埋土出土遺物から近代～現代に構築され、1970年代には廃絶したと考えられる。

タタキ面 (図49)

遺構：標高12.9mで検出した。タタキは調査区南西に広がる。11層の上に約10cmの厚さで敷かれている。11層とタタキの間には固くしまった明褐色粘質土が1～5cmの厚さで敷かれている。東側はSE39の掘方に掘り込まれ、西側はSK40に掘り込まれ、北側はSK41 (7層) に掘り込まれている。南は調査区外に続いている。タタキ面は平滑な面と、割れたタタキを埋め込んで面を構築した凹凸を持つ面がモザイク状に入り混じっている。上面に凹凸は目立つが、面全体で見ると標高12.9mに水平に敷かれている。

遺物：タタキ上から年代不明の瓦類18点と近代の土管1点が出土した。

年代：遺物から近代まで地表に露出していたと考えられる。下層からレンガが出土しているため近代に構築されたと考えられる。

SS43 (図49、写真5)

遺構：25層を掘り込んで構築された調査区を東西に横断する石列である。上面にタタキ面や管37が存在するため、これらの遺構に影響を及ぼさない調査区の西端と東端のみで検出を行った。石列は長さ約80cm、幅20～30cm、厚さ約10cmの粗く成形された直方体の花崗岩類からなる。石材の長辺が隣り合うように並べられ、石材間の隙間には長さ10～20cm、幅5～10cm、厚さ2～5cmの割石が充填されている。調査区東端で割石を取り外し、下層を確認したところ、暗褐色粘質土が充填されていた。調査区東端の石の北側で明褐色粘質土が石に沿って充填されている。SS43掘方埋土の可能性はある。

SS43を西に延長すると1970年代に発掘調査され、現在露出展示されている暗渠に至る。石材の形状や並べ方も類似していることから、庭園北側に露出展示されている暗渠に接続すると考えられる。なお、暗渠は過去の調査成果から近世遺構と考えられている。

年代：構築年代を示す遺物は出土しなかったが、過去の調査成果から近世の暗渠蓋と考えられている。SS43の直上に堆積している土から出土した遺物から近代には廃絶していたと考えられる。

出土遺物 (図50)

外縁調査区7から出土した遺物点数は366点で43,471gである。大まかな年代が分かる遺物のほとんどが近代の碗類、皿類、鉢類、瓶類といった生活雑器である。詳細な年代が推定できる遺物は表土から出土した陶器の皿(1201)、6層から出土した陶器の挿鉢(1202)、16層から出土した陶器の皿(1203)の3点である。そのほかに24層から出土した丸瓦(1204)を図化した。

16層と24層はSS43直上に堆積している土である。16層は0703の他に瓦類3点が出土している。24層は1204の他に須恵器1点、瓦類32点、レンガ1点が出土した。

1201は志野鉄絵皿である。高台と底部の一部が残存している。付け高台である。全体に長石釉が掛けられ、見込みに鉄絵で図柄が描かれている。細片であるため図柄のモチーフは不明である。17世紀前半に生産された製品と考えられる。1202は瀬戸・美濃製の挿鉢である。口縁部の一部が残存している。19世紀前半に生産された製品と考えられる。

1203は志野鉄絵皿である。口縁の一部が残存している。全体に長石釉が掛けられ、内面に鉄釉で圏線と図柄が描かれている。細片であるため図柄のモチーフは不明である。17世紀前半に生産された製品と考えられる。

1204は丸瓦である。胎土は灰白色で陶器のように緻密である。燻はかかっていない。内面に布目痕やコビキはなく、内外面を横方向にナデ調整をして成形している。成型方法と胎土から施釉丸瓦と考えられる。



写真5 SS43 及び管 37 (調査区西側) 西から

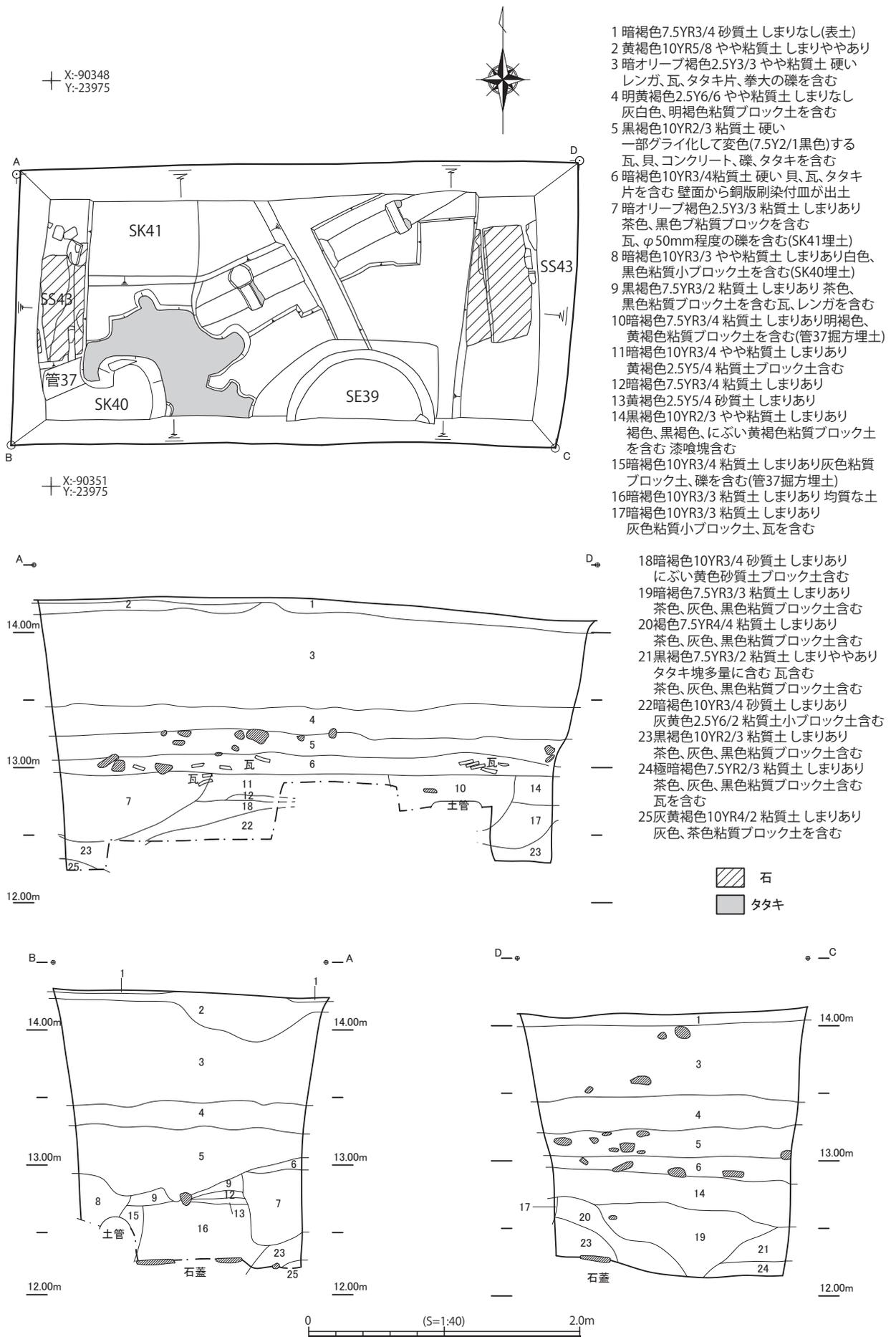


図 49 外縁調査区 7 平面図及び断面図

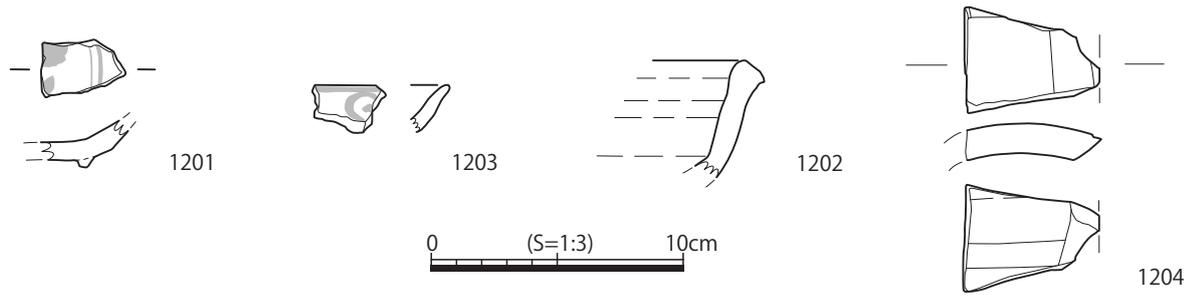


図 50 外縁調査区 7 遺物実測図

表 40 外縁調査区 7 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
1201	表土	陶器	皿/丸皿	—	(18)	—	8	ロクロ成形	長石釉鉄絵	—	褐色	—	瀬戸・美濃	16世紀前半	志野 登窯第1段階第1小期
1202	6層	陶器	鉢/播鉢	(318)	(4.7)	—	77	ロクロ成形	鉄釉	—	褐色	—	瀬戸・美濃	19世紀前半	登窯第3段階第10小期
1203	16層	陶器	皿	—	(19)	—	4	ロクロ成形	長石釉鉄絵	馬目	灰黄	—	瀬戸・美濃	17世紀前半	登窯第1段階第1小期

表 41 外縁調査区 7 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
1204	24層	丸	(44)	(41)	(42.0)	12	33	—	灰白色 灰白色	—		近世か	

(10) 外縁調査区8

層序 (図51)

南区周辺の標高は14.6mである。北区は北側の標高は13.9m、中央から南側は13.5mである。

1層～21層は第Ⅰ層に相当する。7層は1970年代の公園造成に伴う盛土である。南区では表土と7層の間に角礫を多く含む硬い粘質土層が入る。7層の下層は一辺が5～20cmある石材やコンクリート塊を密に含む砂質土(8層)である。8層は北区や南区北側に石材が集中し、南区南側は密ではない。石材のなかに間知石や刻印が入っている石が含まれる。8層より下層は北区と南区で様相が異なる。南区9層は粘質土からなり、石材は含まれていないが、こぶし大の礫や貝殻を多く含んでいる。9層から近代の金属製品、ガラス製品が出土した。一方で北区10層は9層に似た粘質土ではあるが、9層よりさらに小ぶりの礫を含み、貝殻は含まない。南区で標高12.5～12.75mの間にブロックを含まない12層、13層、14層、16層が薄く水平に堆積する。8層に掘り込まれているため北側と東側へ広がらない。下層にタタキ片を含む砂質土(21層)が約40cm堆積し、21層の下層にSK47(26層)が存在する。

第Ⅱ層と第Ⅲ層に相当する層は確認できず、第Ⅰ層によってかく乱されたと考えられる。

28層は18層と26層に切られている砂質土である。周囲の土に比べてしまりが無い。土師器、須恵器、山茶碗といった中世以前の遺物、近世の播鉢、近代の鉢類、瓦類、レンガが出土した。遺物からみると28層は第Ⅳ層に相当すると考えられる。

北区でタタキ片やφ約10cmの垂円礫を含む砂質土(21層)や地山由来のブロック土を含む砂質土(22層、23層、24層)が堆積しているが、11層によってかく乱されているため面的に広がらない。遺物は出土していない。堆積した時期は不明である。

土塁45 (図51)

遺構：二之丸北辺を構成する石垣の天端上に位置する土塁である。北区北側に位置し東西方向にのびている。調査区は土塁の南斜面裾部にかかっている。土塁の東端は櫓台西石垣まで続き、西端は石垣の折れまで続く。土塁内部から縁石を確認した。縁石は南に面を持つ石で北側以外を平滑に加工している。6層と7層の流出を抑えるために設置されたと考えられる。

出土遺物：6層と7層から磁器1点、瓦類8点、土類のコンクリート塊3点、ガラス製品2点を確認した。

年代：石垣天端まで到達していないため部分的な推論ではあるが、遺物の様相から土塁の上部は近代に盛土されていると考えられる。

SK47 (図51、写真6)

遺構：南区南端で検出した瓦溜である。確認できた規模は東西100cm、南北30cm、深さ30cmである。遺構は調査区外へ続いている。SK47頂部の標高は12.42mで底部は11.95mまで確認したが、さらに深く続く。

出土遺物 (図52)：SK47に含まれる瓦は丸瓦と平瓦で、明確に棧瓦と断定できる個体は出土しなかった。燻がかかっている瓦が多数を占めるが、一部白化している瓦が見られた。二次焼成を受けたと考えられる。取り上げた瓦は159点で重量は22,337gである。そのうち丸瓦が15点364g、平瓦が144点21,937gである。瓦の他に山茶碗2点、近代の鉢類1点、レンガ1点、年代不明の陶磁器類4点が出土した。

年代を検討することができる遺物に瀬戸・美濃製の播鉢(1302)がある。口縁部の一部が残存し、推定口径は318mmである。器壁がほとんど残存していないため、摺り目は確認できなかった。口縁形状から17世紀前半に生産された製品と考えられる。

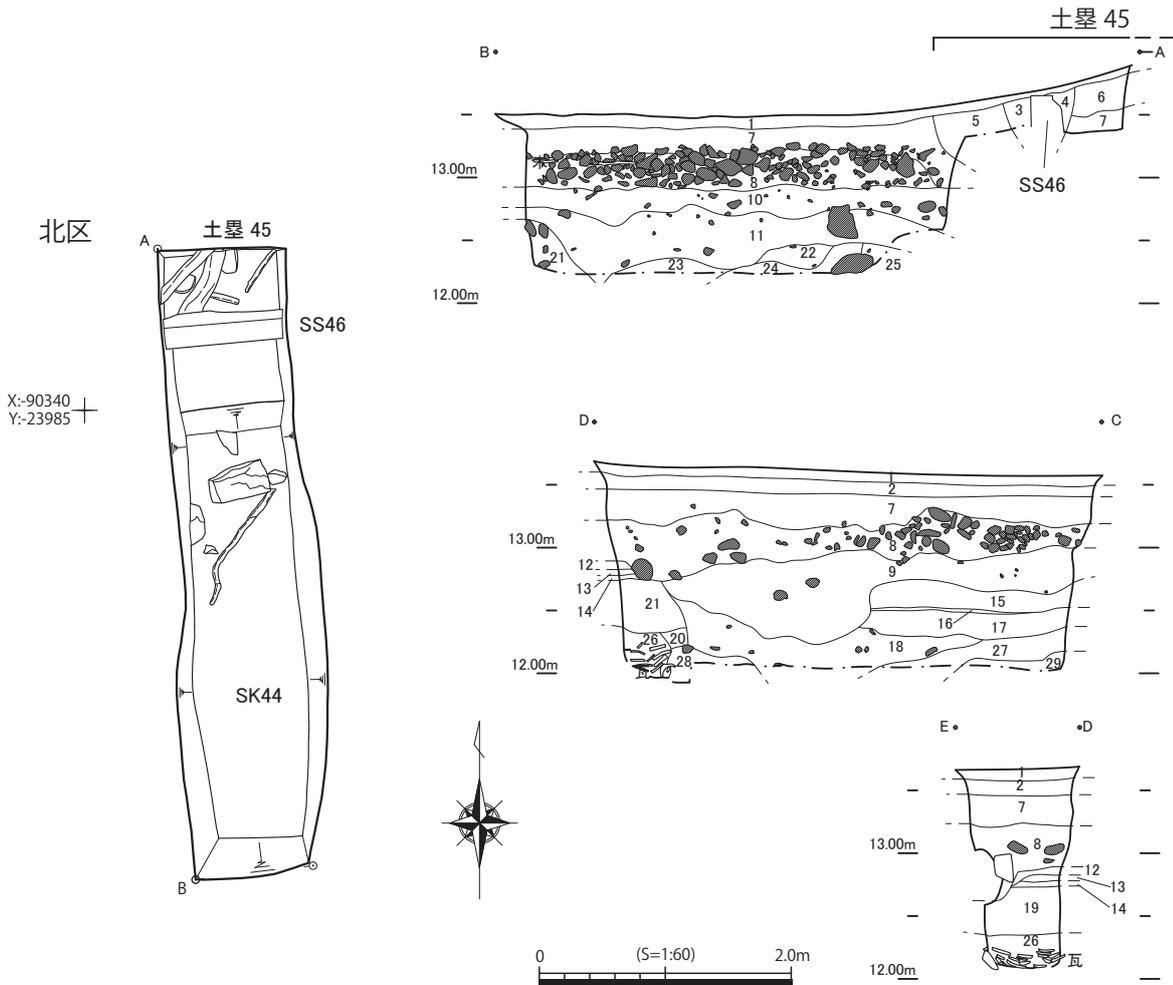
年代：埋土に近代遺物を含んでいることと、近代遺物を含む28層より上から掘り込んでいるため、近代の土坑と考えられる。

出土遺物 (図52)

外縁調査区8から出土した遺物点数は544点で45,987gである。おおまかな年代が分かる遺物のうち、中世以前が5点67g、近世が4点49g、近代が56点1,274gである。年代が分かる遺物は表土から出土した腰鏝碗(1301)1点である。また、18層から施釉された丸瓦(1303)が出土した。

1301は口縁部の一部が残存する陶器の腰鏝碗である。瀬戸・美濃製である。口縁部は長石釉、高台付近は鉄釉で施釉されている。器壁外面に4本の沈線が確認できる。登窯第3段階10~11小期に属する19世紀中葉の製品と考えられる。

1303は銅緑釉で施釉された丸瓦である。胎土は灰白色で陶器のように緻密である。内面に布目痕やコピキはなく、内外面を横方向にナデ調整をして成形している。



- 1 灰色 7.5Y6/1 砂質土 硬い(表土)
- 2 明黄褐色 10YR6/8 砂質土 しまりなし
- 3 灰色 5Y4/1 砂質土 しまりあり
- 4 黒褐色 2.5Y3/2 砂質土 しまりなし
- 5 浅黄褐色 2.5Y7/4 砂質土 しまりあり
- 6 黒褐色 10YR2/3 砂質土 しまりなし(土壘 45)
- 7 浅黄褐色 10YR8/4 砂質土 しまりあり(土壘 45)
- 8 灰色 5Y5/1 砂質土 φ5~20cm 礫を多く含む
- 9 黒褐色 2.5Y3/1 やや粘質土 しまりなし 大の石と貝を含む
- 10 暗褐色 10YR3/3 砂質土 しまりあり にぶい黄褐ブロック、小石を含む
- 11 暗褐色 10YR3/4 砂質土 しまりあり コンクリート、鉄、レンガ片を含む
- 12 灰オリーブ色 5Y4/2 粘質土 しまりあり
- 13 にぶい黄色 2.5Y6/4 粘質土 しまりあり
- 14 灰色 5Y4/1 砂質土 しまりあり 浅黄粘質土を含む
- 15 オリーブ褐色 2.5Y4/3 やや粘質土 しまりあり
三和土片、灰色粘質土、茶色ブロック土を含む
- 16 明黄褐色 2.5Y7/6 粘質土
- 17 オリーブ褐色 2.5Y4/3 やや粘質土 しまりあり
三和土片、灰色粘質土、茶色ブロック土を含む
- 18 オリーブ黒色 5Y3/2 やや粘質土 しまりあり
小石、白色ブロック土を含む
- 19 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 やや粘質土 しまりあり
茶、黒色ブロック土を含む
- 20 黒褐色 2.5Y3/2 粘質土 しまりあり 黒、茶色ブロック土を含む
- 21 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 しまりあり タタキ片を含む
- 22 黒褐色 10YR2/3 砂質土 しまりなし 黄褐色砂質ブロック土を含む
- 23 オリーブ褐色 2.5Y4/3 砂質土 しまりあり 白色砂質ブロック土を含む
- 24 黄褐色 10YR5/6 砂質土 しまりあり 白、黄、茶色ブロック土を含む
- 25 明黄褐色 10YR6/6 砂質土 しまりなし 暗褐色ブロック土、小石を含む
- 26 黒褐色 10YR2/2 粘質土 しまりあり 白、黒色ブロック土、瓦を多く含む
(SK47 埋土)
- 27 暗褐色 10YR3/3 砂質土 しまりあり 茶色ブロック土を含む
- 28 黄褐色 2.5Y5/4 砂質土 しまりややあり 白、茶色粘質土を含む

図 51 外縁調査区 8 平面図及び断面図

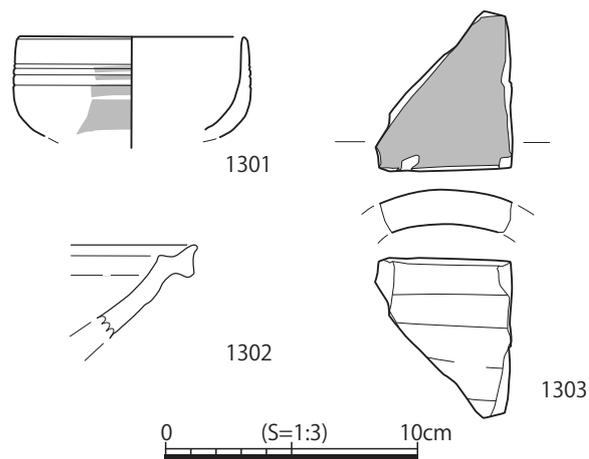


図 52 外縁調査区 8 遺物実測図



写真 6 SK47 北から

表 42 外縁調査区 8 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
1301	表土	陶器	碗	88	39	—	15	ロクロ成形	鉄釉・長石釉	—	灰白色	—	瀬戸・美濃	19世紀中葉	腰鑄碗 登窯3段階第11小期
1302	SK47 (28層)	陶器	播鉢	—	—	—	75	ロクロ成形	—	—	—	—	瀬戸・美濃	17世紀前半	登窯1段階第1小期

表 43 外縁調査区 8 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量(mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
1303	18層	丸	(55)	(65)	—	12	55	—	灰白色 灰白色	—	瀬戸・美濃	17世紀	

(11) 外縁調査区9

層序 (図53)

調査区周辺の標高は13.6mである。1～12層は第I層に相当する。表土下に園路用の碎石(2層)が5～10cmの厚さで堆積している。その下層に1970年代に入れられた山砂(3、4層)が堆積している。山砂の下層は標高約12.8mまで現代の廃棄物を含む層(9層、12層)が堆積している。

19層～21層は第IV層に相当する。標高12.6～12.8mで19層と20層が堆積している。19層はややしまった粘質土である。調査区中央付近で面的に広がっている。遺物は出土していない。19層は管48より西で確認できる地山由来の粘質土ブロックを含む粘質土である。東に向かって傾斜しており、西端が東端よりも15cm高くなっている。19層は中央部でSK49に掘り込まれ、南側で石50が据えられている。19層から年代不明の常滑製甕1点と瓦類1点と近世の施釉された軒丸瓦(1403)1点が出土した。19層の下層の様子と石50下層の様子を確認するために南壁に長さ2.5m、幅20cmのトレンチを設定したところ、標高約12.7mで21層を確認した。21層は地山由来の粘質土ブロックを含む砂質土で、遺物は出土していない。

管48 (図53)

遺構：調査区の東側に南北方向にのびる土管である。土管の直径は24cmである。土管設置に伴う掘方は5層から掘り込まれ、深さは1m以上になる。掘方に投棄されたコンクリート塊や石材を除去しきれなかったため、完掘することはできなかった。

年代：層序から現代に設置された土管である。

SK49 (図53、写真7)

遺構：調査区中央部に位置する土坑である。埋土は褐色砂質土ブロックを含む黄褐色粘質土である。約100cm四方の規模で広がり、深さは15cmである。

出土遺物 (図54)：埋土からロクロ成形の土師質の皿2点、近世の碗1点、瀬戸・美濃製の天目碗 (1401) 1点、年代不明の常滑製の甕1点、瓦類3点 (1402)、金属製品1点が出土した。

1401は口縁部の一部が残存する瀬戸・美濃製陶器の中碗である。いわゆる天目碗で、口縁部が外反している。鉄釉が全体にかけられている。

1402は丸瓦の前端部である。内面に布目痕と吊り紐痕が確認できる。

年代：近代遺物を含まない20層またはさらに下層を掘り込んで構築されていること、埋土出土遺物が近世遺物からなることから近世に構築された遺構と考えられる。

石50 (図53、写真8)

遺構：上面が扁平な硬質な砂岩の石材である。上面のみ加工された割石である。石は南北52cm、東西40cm、高さ約15cmで石頂部の標高は12.82mである。19層に対して約10cm程度埋まっているが、掘方は確認できなかった。上面が平坦な形状から礎石の可能性はある。

年代：近代遺物を含まない19層に据えられていることから近世に構築された遺構と考えられる。

出土遺物 (図54)

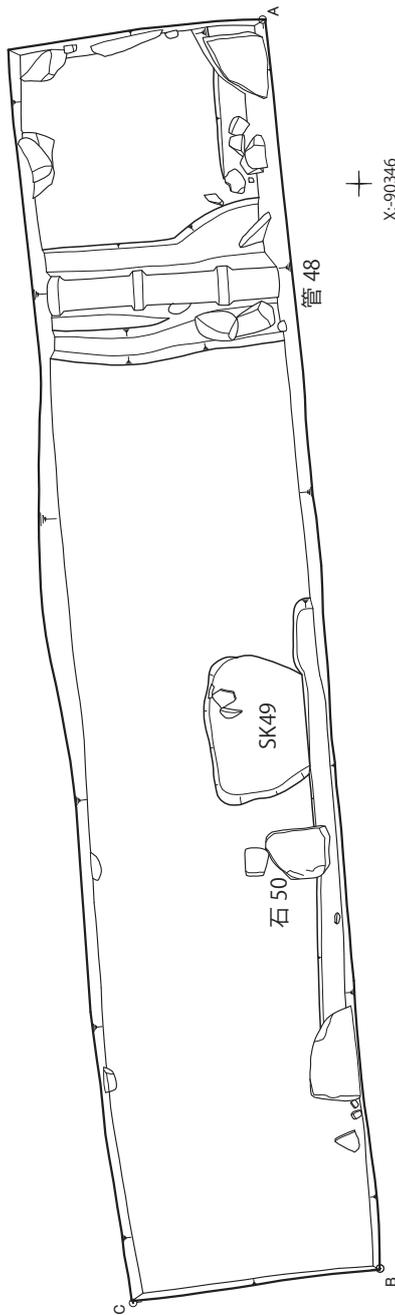
外縁調査区9から出土した遺物は116点で重量は12,557gである。遺構外から出土した遺物のうち大まかな年代が分かる遺物は全て近代以降に生産されたものである。レンガは出土せず、碗類、皿類、鉢類、瓶類といった生活雑器が遺物の主を占めている。

19層から土師質の皿1点、瓦9点、施釉された軒丸瓦 (1403) 1点が出土した。

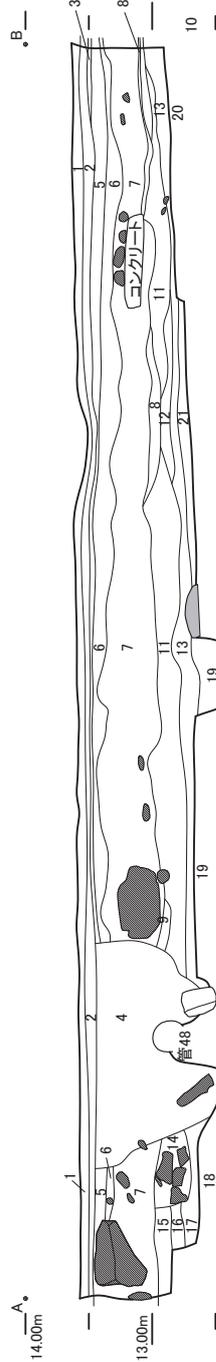
1403は軒丸瓦の瓦当である。文様区裏を除いて全体に銅緑釉が施釉されている。瓦当の推定径は88mmで文様区の推定径は72mmである。他の軒丸瓦と比べて小型であることから菊丸瓦である可能性も考えられる。文様区に珠文のような突起が1つ残存している。



X:-90344
Y:-24020



X:-90346
Y:-24010



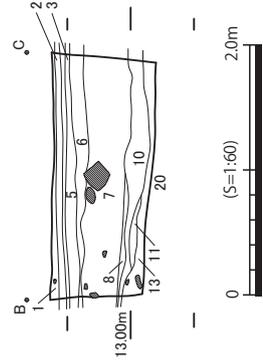
A
14.00m

13.00m

- 1 暗オリーブ褐色2.5Y3/3 砂質土 しまりなし(表土)
- 2 礫層
- 3 にぶい黄褐色10YR9/3 砂質土 しまりあり
- 4 にぶい黄褐色10YR4/3 砂質土 しまりややあり
- 6 層をブロックで含む(管48埋土)
- 5 暗灰黄色2.5Y4/2 砂質土 しまりあり
黒色土、瓦を含む
- 6 明黄褐色2.5Y6/6 砂質土 しまりなし山砂
- 7 暗オリーブ褐色2.5Y3/3 砂質土 しまりあり
石油製品、レンガを含む
- 8 黒褐色2.5Y3/1 砂質土 しまりなし 根を含む
- 9 黒褐色2.5Y3/2 やや粘質土 しまりややあり

- 10 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり
黒、黄色土ブロックを含む
- 11 暗灰黄色2.5Y4/2 砂 しまりなし
- 12 黒褐色2.5Y3/2 砂質土 しまりあり
黄色土ブロックを含む
- 13 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりあり
黒、黄、茶色土ブロックを含む
- 14 暗灰黄色10YR6/1 砂質土 しまりあり
黄褐色10YR5/6 砂質土、灰黄色2.5Y6/2 砂
をブロックで含む 小石、瓦を含む
- 15 にぶい黄褐色10YR4/3 砂質土 しまりあり
黒、茶色土ブロックを含む

- 16 暗オリーブ褐色2.5Y3/3 しまりあり
茶、黒色土ブロックを含む
- 17 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりあり
- 18 暗褐色10YR3/3 砂質土 しまりあり
- 19 暗オリーブ褐色2.5Y3/3 やや粘質土
しまりあり 白色土ブロックを含む
- 20 暗褐色10YR3/4 砂質土 しまりあり
白、黒、茶色土ブロックを含む
- 21 にぶい黄褐色10YR4/3 砂質土
しまりあり 白、黒、茶色土
ブロックを含む



13.00m

0 (5=1:50) 2.0m

図 53 外縁調査区 9 平面図及び断面図

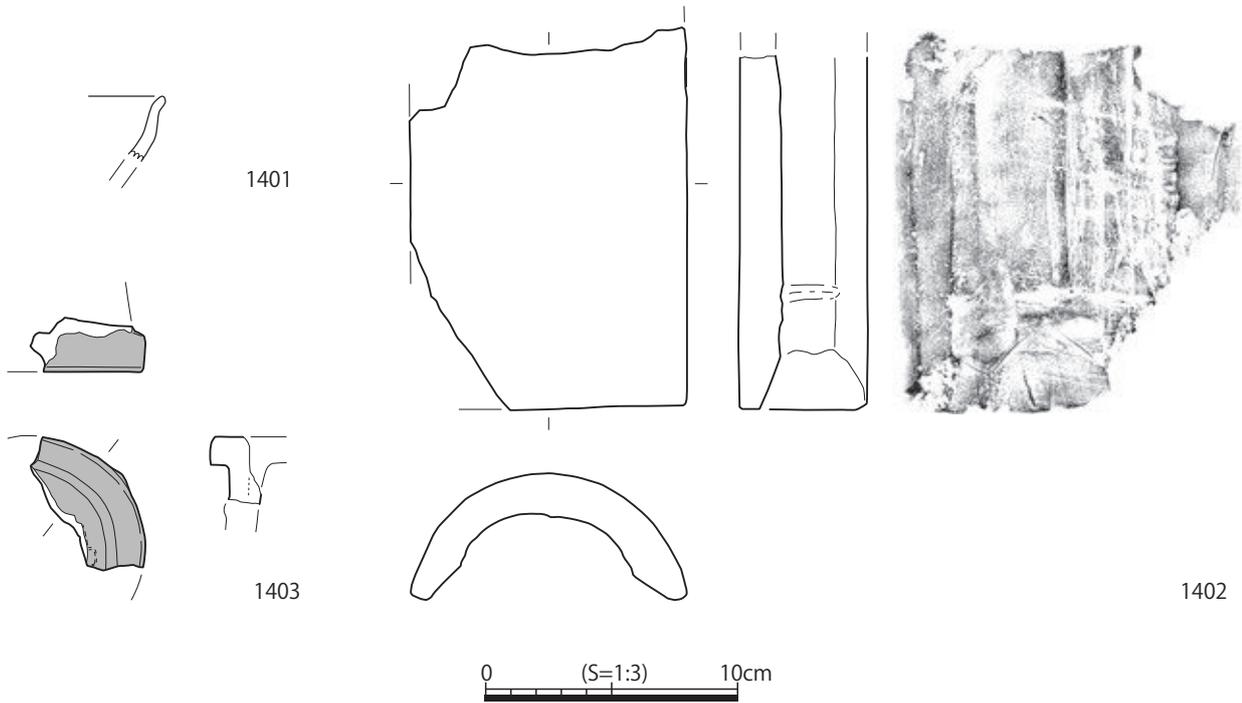


図 54 外縁調査区 9 遺物実測図

表 44 外縁調査区 9 土器・陶磁器類観察表

No.	検出地点	材質	器種	法量(mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾		胎土色 胎質	印・銘など	製作		備考
				a	b	c			絵付・釉薬	文様			製作地	製作年代	
1401	SK49	陶器	碗	(118)	(26)	—	4	ロクロ成形	鉄釉	—	にぶい黄橙	—	瀬戸・美濃	近世	天目茶碗

表 45 外縁調査区 9 瓦類観察表

NO.	検出地点	種別	法量 (mm)				重量 (g)	文様	表面色 胎土色	印・銘など	製作		備考
			a	b	c	d					製作地	製作年代	
1402	SK1	丸	159	50	(152)	17	414	—	灰 灰白	—	—	—	
1403	19層	軒丸	(88)	—	(20)	—	35	不明	銅緑釉 にぶい橙色	—	瀬戸・美濃か	17世紀	



写真 7 SK49 及び石 50 南から

(12) 外縁調査区10

層序 (図56)

1～6層は第Ⅰ層に相当する。約40cmの厚さで調査区全体に堆積している。

8層、10層、11層、13層は第Ⅱ層に相当する。調査区南側で標高13.15mから砂利層（8層）が約5cmの厚さで堆積している。8層の下層に8層よりも粒が粗い砂利（10層）が約5cmの厚さで堆積している。10層の下層に粗い砂（11層）が1～2cmの厚さで堆積している。11層下層から均質な砂質土（13層）が1～2cmの厚さで堆積している。これらの層は薄く水平に近い状態で堆積している。8層、10層、11層から遺物は出土していない。13層から瓦類が出土しているが、時期は不明である。

標高13.15mから極暗褐色のよくしまった砂質土（17層）を確認した。17層はSS52より南側に広がる。

12層と14層は第Ⅲ層に相当する。調査区北側では標高13.1mの地点で地山由来の粘質土ブロックを含む粘質土（12層）を確認した。12層は厚さ10～30cmで調査区北側に堆積している。調査区北端では12層上面に薄く焼土（7層）が堆積している。瓦類20点、ガラス製品2点が出土している。12層以降で現代遺物が出土していないため、12層は近代の盛土と考えられる。

27～34層は第Ⅳ層に相当する。27層はφ5～15cmの亜円礫と礫間に入り込んだ18層に由来する砂からなる層で、32層とともに亜円礫敷遺構をなす。27層の下層は非常に硬い粘質土（29層）である。地山由来の粘質土ブロックを含んでいる。厚さ約10cmで堆積している。層の広がりには27層と重なっており、27層と29層は一体で施工されたと考えられる。遺物は出土していない。

調査区北側の標高約12.5m以下は地山由来の粘質土ブロックを含む砂質土である。50cm以上堆積し、調査区底まで続いている。遺物は出土していない。

SS52 (図55、56c-d、写真9)

遺構：調査区南側に位置する間知石列である。調査区を東西に横断している。北に面を持つ2段積の間知石で、1石当たりの規模は幅約30cm、高さ約35cm、奥行き約60cmである。2段分の高さは約70cmである。石は硬質な砂岩で全体を割って加工している。特に北面はほかの面と比べて丁寧に割られている。

SS52の前面は25層と26層で埋められている。なお、25層と26層は24層に掘り込まれて調査区北側まで続かないため、SK2、石3、SD4、亜円礫敷遺構との新旧関係は不明である。SS52は34層またはさらに下層に据えられている。34層を掘削していないため、据え付け面を明らかにすることはできなかった。

SS52の背面は硬質な砂岩の破片と少量の瓦片を含む17層が調査区南端まで続いている。硬質な砂岩の破片は10cm～30cmの大きさで破面が鋭利なため、石材成形の過程で発生した石材片を裏込め石として再利用していると考えられる。

SS52を西に延長すると第2次調査権東-01調査区から検出された同規模の間知石列と接続するため、同一の遺構と考えられる。

年代：遺物が出土していないため、構築年代は不明である。第Ⅱ層によって埋められているため、近代までには廃絶していたと考えられる。

調査区北側まで連続する層がないため、調査区北側に位置するSK2、石3、SD4、亜円礫敷遺構との新旧関係は不明である。第2次調査では近世遺構と評価している。

SK51 (図55)

遺構：調査区南側に位置する土坑である。残存する規模は南北128cm、東西110cm、深さ23cmである。北側は24層に掘り込まれ、南と西は調査区外へ続いているが、形状から調査区外へ大きく広がらないと考えられる。埋土は黒色砂質土である。

SK51の西に第2次調査権東-01調査区から検出された同規模の土坑列が東西に延びているため、権東-01調査区の土坑列の続きと考えられる。第2次調査では土坑は景石の抜き取り痕と評価されている。

年代：SS52を掘り込む24層はSS52前面を埋めた土（25層）を掘り込んでいることから、SS52より新しいと考えられる。

石53 (図55)

遺構：調査区中央部に位置する硬質砂岩である。石の規模は上面が長さ41cm、幅31cmの長方形で塀礎石と考えられる。厚さは15cmである。上面はほかの面と比較して精緻に割られ、水平に近い状態で据えられている。約50cm南にSD54が存在する。

石の西側で第2次調査権東-01調査区から検出された石によく似た規模と加工を受けた石が並んで検出された。第2次調査権東-01調査区出土遺構は石53を含めて等間隔に並んでSD54と平行して存在する。庭園境界をなす塀の礎石と考えられる。

年代：本調査の結果から年代を推定する資料は確認できなかったが、第2次調査では『御城御庭絵図』に描かれた土塀の礎石と推定している。

SD54 (図55、56a-b)

遺構：調査区中央部に位置する石組の溝である。石質は硬質な砂岩である。南西から北東に向かってのび調査区を横断している。溝の北護岸は良好に残存しているが、南護岸はかく乱されているため西壁付近を除いて石は確認できなかった。

1石あたりの規模は幅約25cm、高さ約20cm、奥行き約30cmで間知石の形状をしている。北護岸を見ると石は2段に積まれており、石頂部の標高は12.9～12.92mである。2段分の高さは約35cmである。正面は精緻に割り加工され、その他の面は粗く割り加工されている。矢穴などの工具を使用した痕跡は確認できない。下段の石は確認できた高さは約10cmで調査区底よりさらに深く続く。加工度合いは上段の石と同様である。

石の面から50cm離れたところでSD54掘方埋土（33層）がSD54と平行に調査区を東西に横断している。33層の北に背面粘質土（31層）がSD54と33層と平行に調査区を東西に横断している。31層は一部に灰白色の粘質土ブロックを含む均質な粘質土で熱田台地の地山の土である。33層は7層を掘り込んでいるため、地山ではなく盛土である。33層は石を覆うように堆積している。31層を掘り込んで石を設置し、33層を盛土して石を固定している。33層の上層に亜円礫を敷き詰めた32層が確認できる。17層と比べると礫はまばらであるが、盛土によって石を固定した後に17層と同様に礫で化粧したと考えられる。

SD54の埋土は南護岸をかく乱した20層と21層、かく乱土が堆積した後に堆積した15層と19層である。SD54機能時に堆積した土は確認できなかった。

SD54の西延長上に第2次調査権東-01調査区から検出された石組溝が存在する。庭園の境界をなす溝と考えられ、石53と約50cmの幅で平行して西へ続くことから塀の雨落ちも兼ねていると考えられる。
年代：SD54と同時期に構築されたと考えられる。埋土に遺物はなく、廃絶年代は不明である。

亜円礫敷（図55、写真8）

遺構：亜円礫を密に敷き詰めた27層と32層からなる面である。27層は標高12.76～12.85m、32層はSD54より北側で標高12.83～12.89m、南側で標高12.74～12.87mの高さで位置し、約5cmの厚さで堆積している。南側は上面が22層と23層にかく乱されているため、高さは各地点で一致しない。調査区の中央より北側に広がっている。北側は大きくかく乱されているため、東壁断面と北壁断面の東側のみで確認できる。調査区中央部では東西に調査区外へ続いている。南端は24層に掘り込まれている。

亜円礫はφ5～15cmでチャート、濃飛流紋岩、砂岩からなる。φ5～10cmのチャートと濃飛流紋岩が大多数を占める。

隣接する第2次調査権東-01調査区から亜円礫敷遺構は確認されていない。

年代：亜円礫敷はSD54によって分断されているように見えるが、SD54構築に伴う土（33層）の上に施工されているため、SD54よりも新しい遺構である。

出土遺物

外縁調査区10から出土した遺物は186点で重量は10,130gである。おおまかな年代が分かる遺物のうち、中世以前が1点27g、近世が2点36g、近代が88点4,699gである。近世の遺物には銅緑釉で施釉された丸瓦1点が含まれている。レンガは出土せず、碗類、皿類、鉢類、瓶類といった生活雑器が遺物の主を占めている。



写真9 SS52 北から

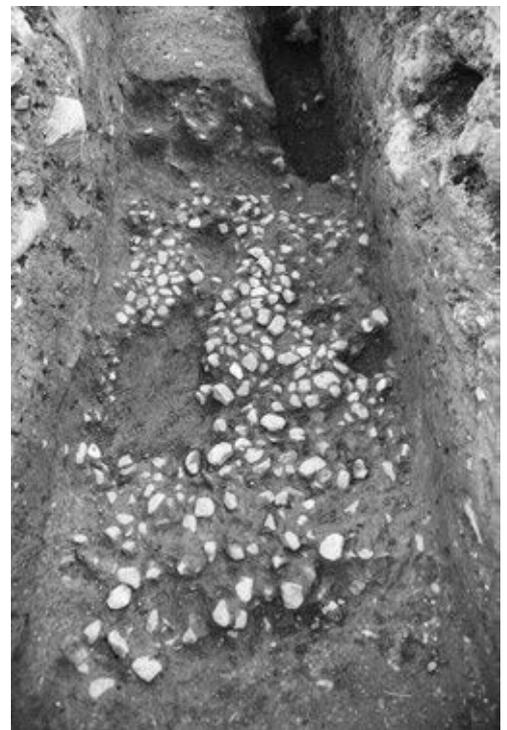


写真8 亜円礫敷 北から

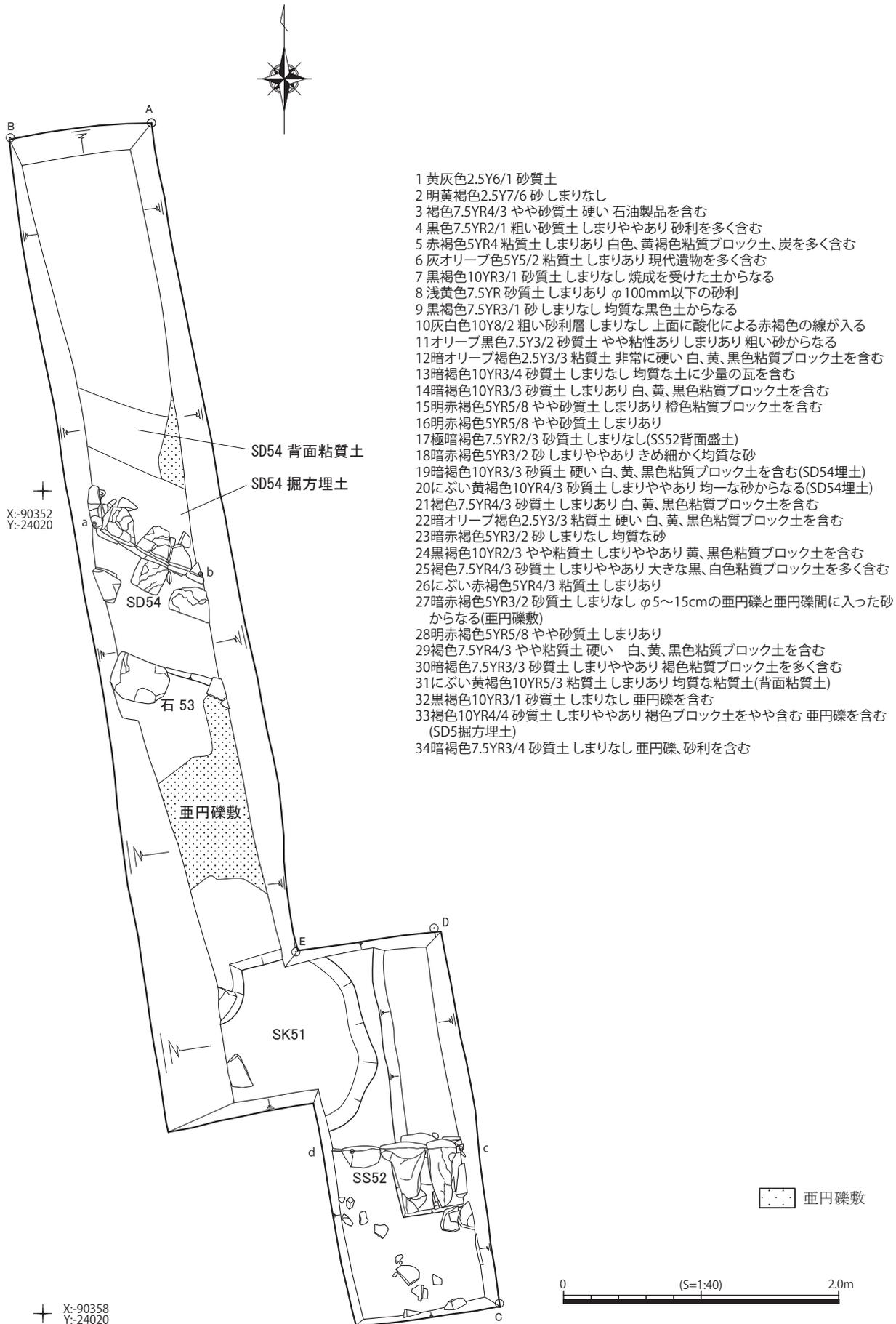


図 55 外縁調査区 10 平面図及び土層注記

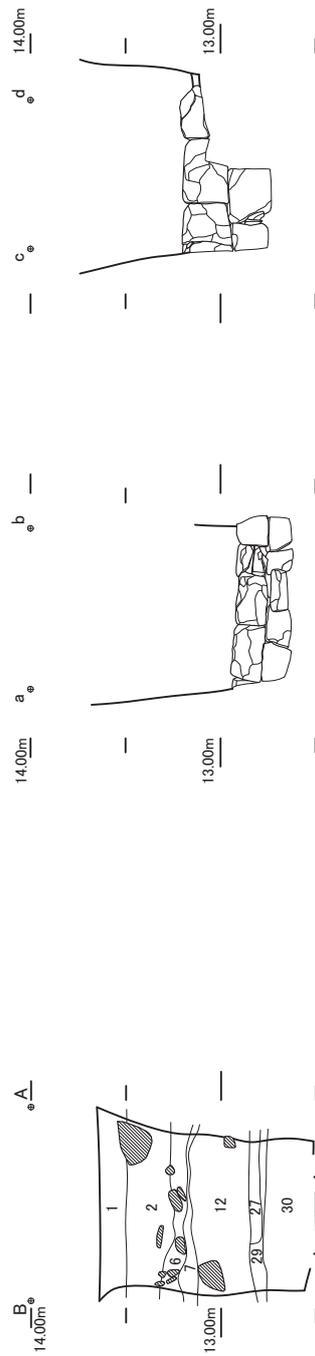
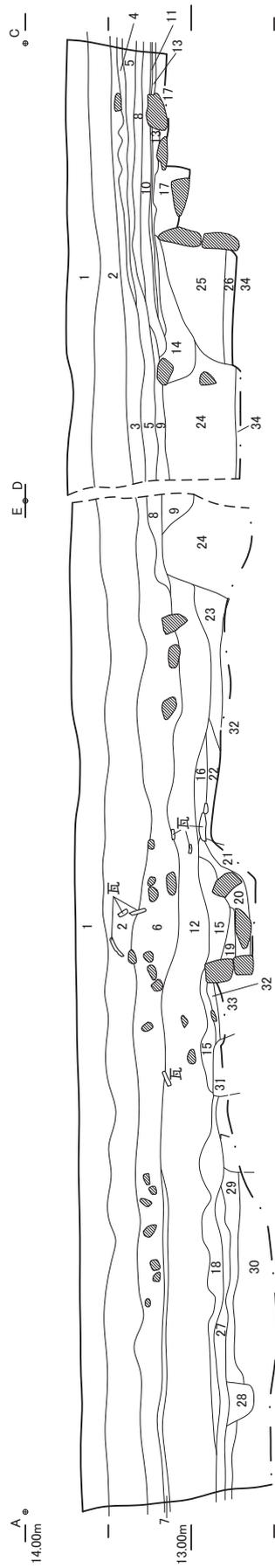


图 56 外縁調査区 10 断面图

(13) 庭園出土の敷瓦

敷瓦の定義と名称

本報告における敷瓦とは平坦な断面形状を持ち、いわゆる凹面と凸面の区別がない瓦を指す。平面形状は方形、長方形、三角形である。片面を施釉や文様の描画を行い、もう片面を無釉としている。施釉した面が上面となる。用途としては先行研究^{*7}や民俗事例（定光寺、宝泉寺、小石川後樂園得仁堂等）から床に敷き詰める瓦である。胎土は陶質である。釉薬は長石釉、灰釉、鉄釉のいずれかが施釉されている。文様が描かれている場合は陰刻または施釉による絵付またはその両方で、絵付には鉄釉か呉須を用いている。

地方窯屋文書の『加藤新右衛門家文書』や尾張藩の記録である『事蹟録』、18世紀に成立した小石川後樂園の様子を記録した『後樂園紀事』に「敷瓦」と記載されている。これらの記録にならって敷瓦とする。

今回取り上げる敷瓦の文様区の名称は図57の通りである。文様の構成は中心と中心から放射状に延びる唐草群からなる。唐草群は中心から外に向かって第1唐草、第2唐草、第3唐草となる。中心が大きく唐草群が小さくなる文様構成（宝泉寺観音堂、尾張戸神社参道、小石川後樂園得仁堂^{*8}など）と中心が小さく第3唐草が大きくなる文様構成（穴田窯、尾張藩上屋敷、尾張藩下屋敷、名古屋城三の丸遺跡）に大別することができる。庭園調査区出土の敷瓦(0516)は中心が欠損しているが、第3唐草の大きさから後者と考えられる。

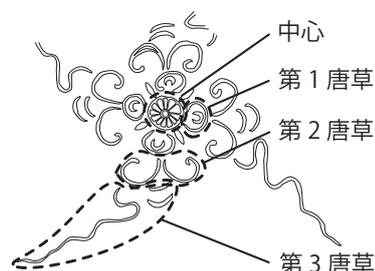


図 57 文様区名称

庭園出土の敷瓦の特徴

0516は庭園調査区の第I層から出土した敷瓦である。隅部のみ残存しているため、完形時の規模は不明である。隅部はわずかに外反している。表面側端部は薄く面取りされている箇所もあるが、敷瓦を外周するような面取りは確認できない。裏面は縦方向と横方向の調整痕の他に弧を描いた調整痕が確認できる。調整に規則性は確認できない。また、15個の刺突が確認できる。刺突の規模は長さ7mm、幅3mm、深さ5mm～10mmである。

表面はオタマジヤクシのような意匠の掘り込みがあり、内部に呉須が流し込まれている。掘り込みの深さは2mmである。その上から表面全体を灰釉で施釉している。灰釉は青みがかったいわゆる御深井釉である。側面は表面の灰釉が流れ込んだ後にふき取った痕跡がのこされている。裏面は灰釉のはねと灰釉による指痕が確認できる。

胎土は長石粒を僅かに含んだ灰白色～灰黄色である。胎土の組成と色調は第7次調査及び第8次調査で出土した施釉瓦0513、0515、0517、0806、1204、1303と類似している。

類例^{*9}

0516について文様構成から産地と製作時期を推定するために、0516と同様に中心、第1唐草、第2唐草、第3唐草からなる文様構成を持つ敷瓦の類例を収集した。中心、第1唐草、第2唐草、第3唐草からなる文様構成を持つ敷瓦は尾張藩に関連する遺跡で出土例を確認することができる。生産地では穴田窯、消費地では江戸の尾張藩上屋敷と尾張藩下屋敷、名古屋城三の丸遺跡があげられる。

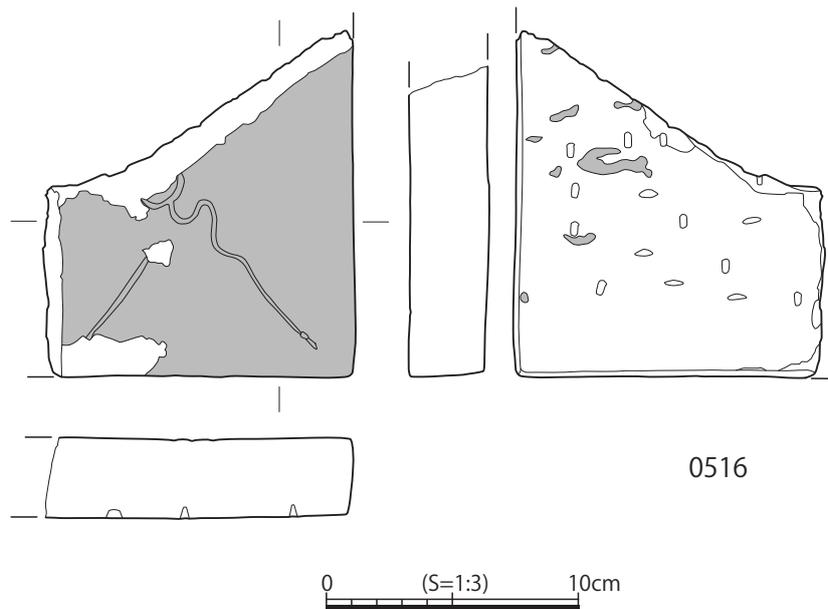


図 58 0516 実測図

穴田窯ではNo.1～No.3が出土した。No.1とNo.2は鉄釉絵付け、No.3は長石釉絵付けである。穴田1号窯の廃絶時期は窯内から出土した敷瓦（No.1）と定光寺に現存する敷瓦と結び付けて承応元年（1652）前後^{*10}に比定している。共伴遺物は登窯第1段階第2小期（17世紀中葉）が中心であり、No.1の時期比定と矛盾しない。No.2とNo.3は窯内部の出土ではないが、穴田1号窯に近接して出土していることからNo.1と同じ年代を当てはめている。

尾張藩上屋敷では長石釉絵付け敷瓦が主に第12地点と第29地点から出土している。第12地点は東御殿と庭園の築山に位置する。東御殿は消失するたびに建て替えられており、17世紀中葉～後葉にかけては能舞台、17世紀後葉～18世紀前葉にかけては能舞台に伴う楽屋と明地、18世紀中葉以降は倉庫や作事小屋となっている。No.10、No.11、No.18は共伴遺物から18世紀後半に比定される地下式土坑から出土した。No.13～17は共伴遺物から延享3年（1746）の火災によると考えられる土坑から出土した。第29地点は17世紀中葉以降、近世を通じて御殿空間であるが、絵図によっては中庭の存在が確認できる。

No.19は長石釉絵付けの敷瓦である。出土地点は名古屋城三の丸遺跡の家臣屋敷地である。当初は三木、杉山、小笠原、平岩の屋敷地であり、寛文3年（1663）に屋敷替えが行われ、幕末は竹腰、山澄、熊谷の屋敷地であった。共伴遺物から17世紀中葉～後葉に比定される瓦溜から出土した。

これらの他に伝製品や現在も敷かれている敷瓦が存在する。No.4は裏面に「勘右衛門」と墨書されている。「勘右衛門」は『加藤儀兵衛家文書』の「瀬戸竈焼物師伝記」にて「利右衛門」^{*10}（No.3裏面墨書）と並列して書かれていることからNo.3と同時期に比定されている。No.5は鉄釉絵付けの敷瓦である。定光寺焼香殿を修復した際に新補材として入れられた敷瓦である。時期は現代である。生産した敷瓦のうち、1点がサンプルとして徳川家に納品され、現在は徳川美術館で保管されている。定光寺焼香殿に敷かれている敷瓦と中心や第1、第2唐草に差異がみられるが、文様パターンを継承している。他にINAXライブミュージアムに寄贈された敷瓦で詳しい来歴は不明であるが、長石釉絵付けの敷瓦が存在する（No.20）。

これらの敷瓦はいずれも上面が広い逆台形の断面形状をしている。角の端々まで行うようなメリハリの
ある面取りは確認できず、一部の瓦で薄い面取りが確認できるのみである。

なお、名古屋城内では三の丸遺跡の他に大天守穴蔵に鉛製の「敷瓦」が敷かれていたことが『仕様之大
法』に記載されているが、実物は遺物や伝製品として確認できない。

類例と比較した庭園出土敷瓦の産地

0516と取り上げた類例を文様区の差異を用いて分類すると、中心は点、輻、環、花卉に分けることが
できる(図59)。

第1唐草は二又(No.13、No.14、No.17、No.19)、ハ
ート形(No.5、No.10、No.11)、ハート崩し形(No.1、
No.2、No.3、No.4、No.9、No.20)、C字形(No.7、
No.8)に分類できる(図59)。文様の形からハート形
→ハート崩し形→C字形と花卉が唐草化するような変
遷が組めるように見えるが、各遺物の生産時期が明ら
かではないので変遷に年代を当てはめることは困難で
ある。また、出土した遺構の廃絶時期と文様変遷は一
致しない。

第2唐草は二又(No.1、No.2、No.3、No.4、No.5、
No.7、No.8、No.9、No.20)、二又崩し(No.11、No.12、
No.13、No.14、No.15、No.16、No.17、No.18、No.19)
に分類できる。二又は唐草の巻きが強いNo.1、No.3、
No.4、No.7、No.8と巻きが弱いNo.2、No.5、No.20に細分できる。

第3唐草はC字形の唐草とオタマジクシ形の唐草を重ねた重層C字形(No.1、No.2、No.3、No.4、
No.7、No.8、No.9、No.20)、C字形の唐草と環形の唐草とオタマジクシ形の唐草を重ねた重層環形(No.5)、
オタマジクシ形単体からなる単層形(No.13、No.14、No.15、No.16、No.17、No.18、No.19)に分類できる。

出土遺跡、年代、分類等は表46にまとめた。

唐草群の差異を用いてグループ化すると

- ・第1唐草ハート崩し形、第2唐草二又、第3唐草重層C字形のAグループ(No.1~No.4、No.9、No.20)
- ・第1唐草のみAグループと異なるC字形であるBグループ(No.7、No.8)
- ・第1唐草二又、第2唐草二又崩し、第3唐草単層という構成でAグループと共通する文様を持たないCグループ(No.10~No.19)

に分けることができた。

文様構成からみると尾張藩上屋敷出土のNo.9を含むAグループは穴田1号窯製と考えられる。AグループはNo.20を除いては裏面刺突が存在する点も共通している。

Bグループは第1唐草がAグループと異なるものの、共通する意匠が多く、裏面刺突が存在する点も共通している。また、AグループNo.2とBグループNo.7、No.8の裏面には「水野かま」という墨書があり、Bグループ



図59 中心文様分類

表 46 唐草文施釉敷瓦一覽表

No.	遺跡名	出土位置 (遺構の年代)	規模(mm)			年代	文様 中心、第1唐草、 第2唐草、第3唐草	釉薬	墨書等	刺突方向	備考
			長さ	幅	厚さ						
1	穴田1号窯	前庭	248	248	26	17世紀 中葉	点、ハート崩し、二又、 重層C字	鉄釉上絵付 絵付：鉄釉	—	一定方向	
2	穴田窯1号窯	焚口脇	—	—	—	17世紀 中葉	点、ハート崩し、二又、 重層C字	鉄釉上絵付 絵付：鉄釉	百五十八 水野かま善 九郎(墨書)	2方向(平 行、斜め)	
3	穴田窯1号窯	表採	(216)	(125)	34	17世紀 中葉	欠、ハート崩し、二又、 重層C字	灰釉下絵付 絵付：呉須 文様へら彫	里右(エ)門 (へら書き)	不定方向	
4	穴田窯	伝製品	—	—	—	17世紀 中葉	輻、ハート崩し、二又、 重層C字	灰釉下絵付 絵付：呉須 文様へら彫	勘右衛門 (へら書き)	一定方向	
5	定光寺焼香殿	徳川美術館所蔵品	266	254	30	昭和	点、ハート、二又、重 層環	鉄釉上絵付 絵付：鉄釉	—	—	定光寺焼香殿修復時 に作成した新補敷瓦
6	尾張藩下屋敷	3区 1085号遺構 (18世紀後葉)	—	—	—	—	欠、欠、二又か、欠	灰釉下絵付 絵付：呉須 文様へら彫か	—	一定方向	
7	尾張藩上屋敷	145-2A-4遺構 (17世紀中葉～後 葉)	(159) 推定300	(174)	38	—	環、C字、二又、重層 C	灰釉下絵付 絵付：呉須 文様へら彫	水野かま (花押)	不定方向	
8	尾張藩上屋敷	144-4A-1遺構	(141) 推定300	300	36	—	輻、C字、二又、重層 C字	—	水野かま (墨書)	一定方向	
9	尾張藩上屋敷	144-4A-1遺構	(246) 推定288	(168)	36	—	欠、ハート崩し、二又、 重層C字	—	—	一定方向	
10	尾張藩上屋敷	133-2P-2遺構 (19世紀前葉～中 葉)	(52)	(40)	25	—	花卉、ハート、欠、欠	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	
11	尾張藩上屋敷	133-2R-1遺構 (18世紀後葉)	(138) 推定240	(102)	29	—	花卉、ハート、二又崩 し、欠	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	
12	尾張藩上屋敷	133-2S-1遺構 (18世紀後葉)	(71)	(79)	26	—	欠、欠、二又崩し、欠	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	被熱
13	尾張藩上屋敷	135-2T-12遺構 (18世紀前葉) (1746[延享3]か)	260	259	25	—	花卉、二又、二又崩し、 単層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	唐草二段目も二又に 近い状態で別れる 被熱
14	尾張藩上屋敷	135-2T-12遺構 (18世紀前葉) (1746[延享3]か)	251	253	30	—	花卉、二又、二又崩し、 単層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	唐草二段目も二又に 近い状態で別れる 面取りあり 被熱
15	尾張藩上屋敷	135-2T-12遺構 (18世紀前葉) (1746[延享3]か)	258	(194)	32	—	欠、欠、二又崩し、単 層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	唐草二段目も二又に 近い状態で別れる 面取りあり 被熱
16	尾張藩上屋敷	135-2T-12遺構 (18世紀前葉) (1746[延享3]か)	254	(142)	30	—	欠、欠、二又崩し、単 層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	唐草二段目も二又に 近い状態で別れる 被熱 長方形か
17	尾張藩上屋敷	135-2T-12遺構 (18世紀前葉) (1746[延享3]か)	256	(130)	25	—	花卉、二又、二又崩し、 単層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	一定方向	面取りあり 被熱
18	尾張藩上屋敷	143-2V-3遺構 (18世紀後半)	(121)	(100)	30	—	欠、欠、二又崩し、単 層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	被熱
19	名古屋城三の 丸遺跡	SK210 (17世紀中 葉～後葉)	(140) 推定280 以上	(120)	30	—	欠、二又、二又崩し、 単層	長石釉下絵付 絵付：鉄釉	—	—	裏面に重ね焼き痕か
20	—	INAXライブミュー ジウム	—	—	—	—	環、ハート崩し、二又、 重層C	灰釉上絵付 絵付：呉須	—	—	山本コレクション

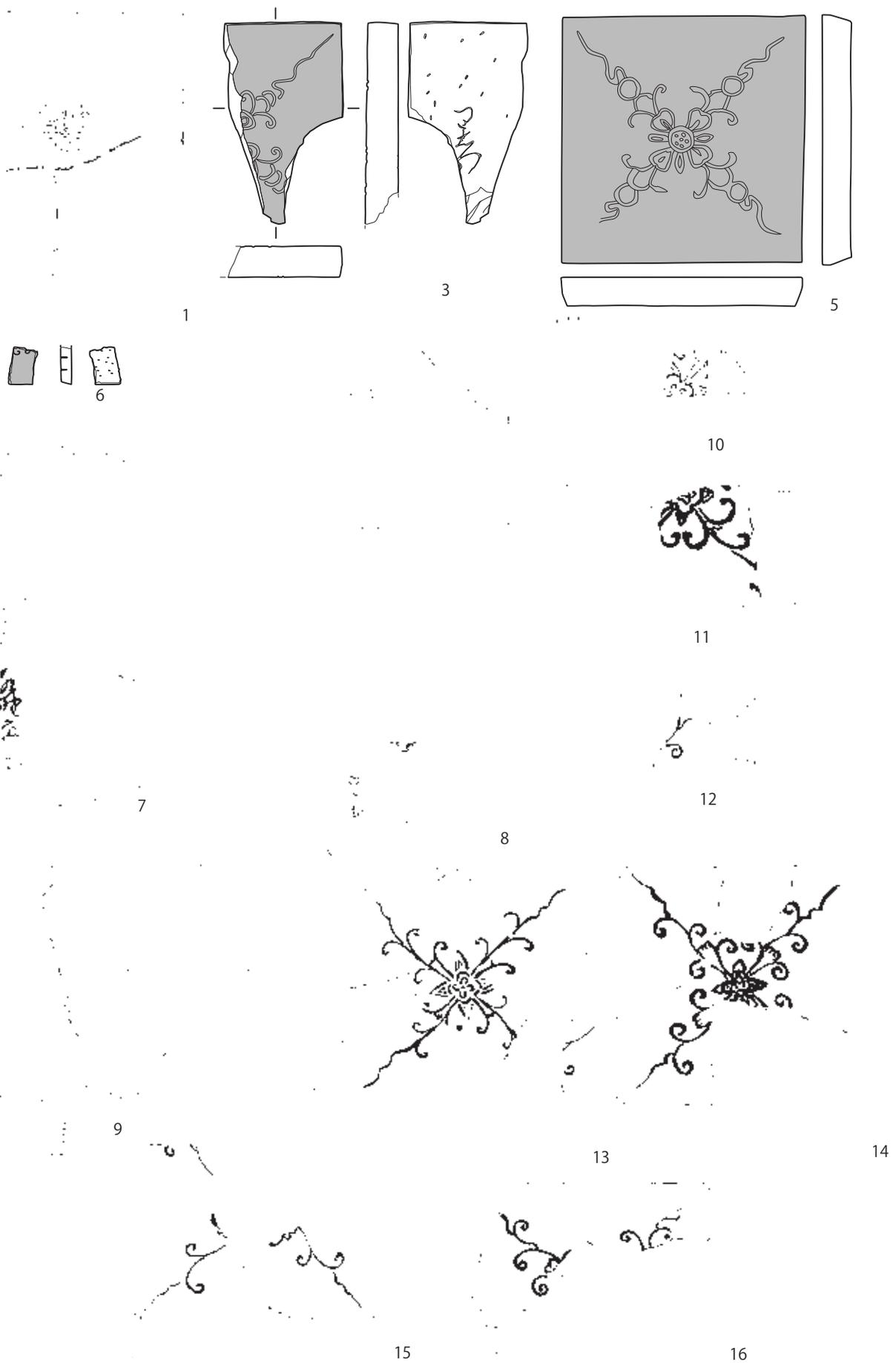


図60 全国出土唐草文敷瓦その1

0 (S=1:6) 20cm

ブも穴田1号窯製と考えられる。

一方、Cグループは文様においてAグループ及びBグループとの共通性はみられない。釉薬においてもCグループは長石釉で上面全体を施釉した後に鉄釉で意匠を描いているが、AグループとBグループは上面全体を鉄釉または灰釉で施釉している。穴田1号窯から碗皿など敷瓦以外の製品を含め、長石釉を使用していない。こうした状況からCグループを穴田窯1号窯製と考えるのは難しい。

0516は中心～第2唐草が欠損しているため、第3唐草の共通性を確認した。第3唐草は重層C字形もしくは重層環形と考えられる。類例が多い重層C字形と仮定するとAグループもしくはBグループに入れることができる。釉薬は灰釉を用い、文様はヘラ彫りをしたうえで呉須を流し込む技法である点、裏面に刺突がある点も共通している。このことから0516は穴田1号窯製の敷瓦である可能性が高い。

文様、釉薬、裏面刺突、墨書を用いて、生産地と消費地を結びつけることができたが、それぞれの敷瓦の大きさが一定していない。同じ穴田窯製と考えたAグループとBグループで大きさに差異があり、Cグループ内でも最大で19mmの差が生じている。敷瓦の規格については今後の課題である。

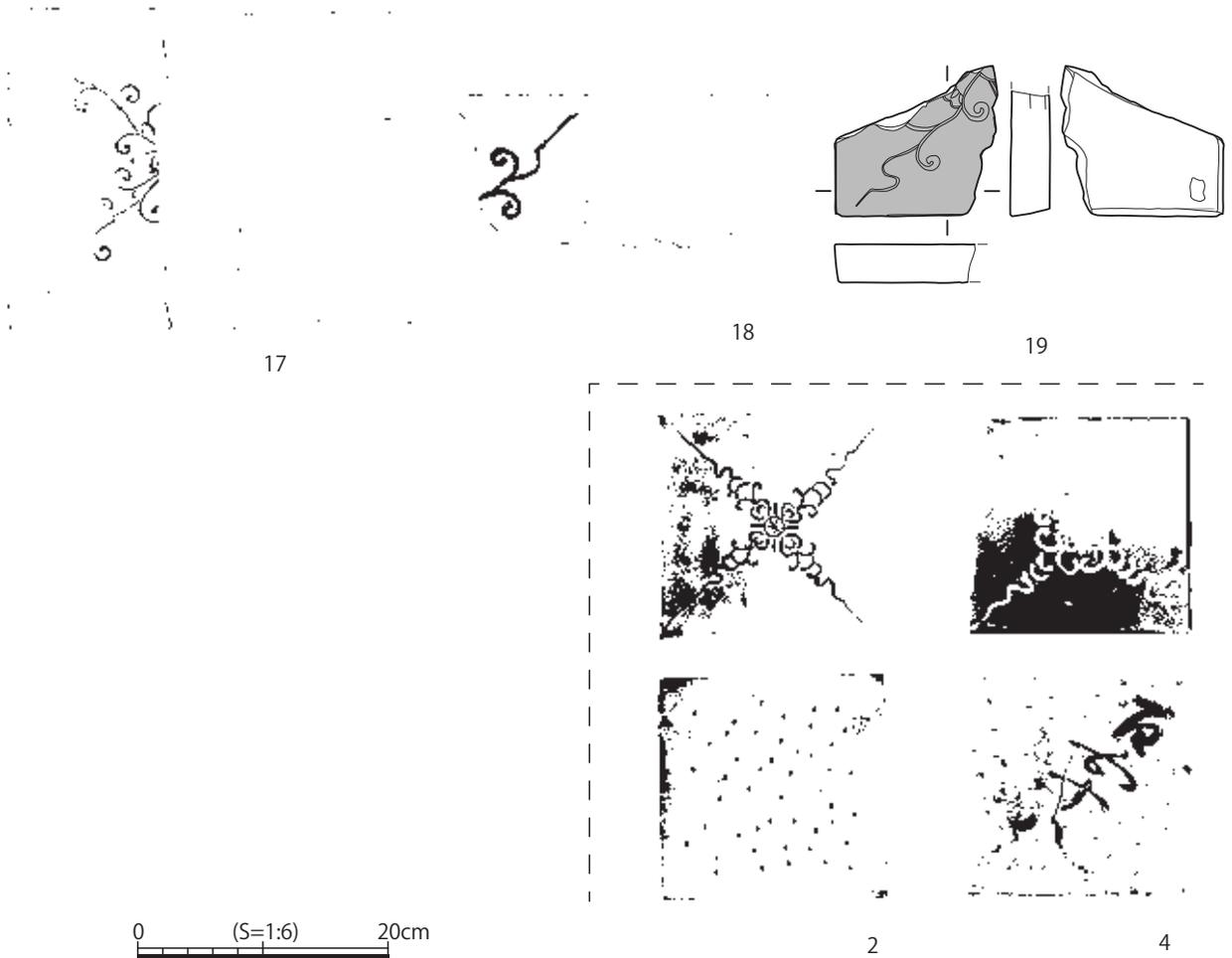


図 61 全国出土唐草文敷瓦その 2

- *1 藤澤良祐「第1章 総論」「編年表」『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』
- *2 金子智「尾張藩麴町邸跡出土瓦類の検討―軒平・軒棧瓦瓦当文様の変遷を中心として―」『尾張藩麴町邸跡』新日本精練・紀尾井町6-18遺跡調査会（1994）
- *3 佐藤公保「〈資料紹介〉名古屋城二之丸庭園出土の実包について」『名古屋城調査研究センター研究紀要』名古屋城調査研究センター（2020）
- *4 愛知県史編さん委員会「第3節 時期区分と編年」『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』（2017）
- *5 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』（2013）
- *6 梶原義実「瓦の生産と流通」『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』（2017）と濱崎健「〈研究ノート〉近世尾張地域の軒平・軒棧瓦に関する情報整理―文様編年について―」『名古屋城調査研究センター研究紀要 3』（2022）
- *7 株式会社INAX 日本のタイル工業史編集委員会編集『日本のタイル工業史』（1991）
瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史陶磁史篇六』（1998）
- *8 『特別史跡・特別名勝 小石川後楽園得仁堂修理工事報告書』（2019）東京都東部公園緑地事務所によると明治7年に修理されているため、現在みられる敷瓦は近代の施工である可能性がある。ただし下層から銅緑釉無文敷瓦が出土していること、『後楽園紀事』等の記録から敷瓦を敷きならべた床は近世から存在していることがわかる。
- *9 図58～59 No.1は瀬戸市歴史民俗資料館『穴田第1・2号窯発掘調査概要』（1981）から転載した。No.2、No.4は瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史陶磁史篇六』（1998）から転載した。No.3は村上慶介（名古屋城調査研究センター）と高橋が実測を行った。遺物は『穴田第1・2号窯発掘調査概要』にて報告され瀬戸市文化振興財団が所蔵している。No.5は個人蔵で高橋が実測を行った。No.6は東京都埋蔵文化財センター『新宿区尾張徳川家下屋敷跡5―国立国際医療センター新棟整備第1期工事に伴う調査―』（2008）から再トレースして記載した。No.7は東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡9』（2002）から転載した。No.8とNo.9は東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡8』（2001）から転載した。No.10～18は東京都埋蔵文化財センター『尾張藩上屋敷跡遺跡7』（2001）から転載した。No.19は高橋が実測を行った。遺物は愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡4』（1993）にて報告され、愛知県埋蔵文化財調査センターが所蔵している。No.20はINAXライブミュージアムが所蔵している。
- *10 「瀬戸竈焼物師伝記」には「利右衛門」と書かれているが、No.3では「里右衛門」と墨書されている。

第5章 総括

第1節 発掘調査の総括

第7次庭園調査区1は復元以前の南池北護岸と池底を確認するために設定し、南池護岸と考えられる緩斜面に景石群5～6、タタキ、石列（SS4）を確認した。景石、タタキは池に伴う遺構であるため、池が機能していた時期に構築されたと考えられる。SS4は発掘調査から遺構の構築年代を確認することができなかった。明確な池底を確認することができなかったが、池埋土である4層の下層の砂利層が池底である可能性がある。

第7次庭園調査区2は「風信」の基礎を確認するために設定した。第6次調査で根固めと判断した遺構（01SK）に類似する遺構（SK7）を確認した。「風信」に関連する遺構であると特定することはできない。

第7次外縁調査区は土塀の築造時期を明らかにするために調査区を設定した。土塀は高さとしては近代の盛土（第Ⅲ層）よりも下層から盛られた高まり④上に構築されているため、近世の構築と考えられる。より詳細な年代は不明である。調査区全体に近代の黄褐色粘質硬化面が広がっており、調査区各所に設けたサブトレンチから近世の盛土が黄褐色粘質硬化面下に残存していることが明らかになった。

第8次調査御殿調査区及び外縁調査区1～10は近世における二之丸庭園の範囲を確認するために設定した。溝等の庭園範囲を直接示す遺構は外縁調査区4、6、10で確認した。外縁調査区6のSS43と外縁調査区10のSD54、石53は既往の調査成果で確認した遺構の続きと考えられる。また、外縁調査区10では庭園境界との関係は不明であるが、北区の暗渠（第2章第2節）につながる遺構としてSS52とSK51を確認した。庭園範囲を直接示す遺構ではないが、庭園範囲を推察できる遺構として外縁調査区1の石15がある。石15を庭園の景石と仮定すると庭園範囲は石15以南となる。近世と考えられる遺構は標高約12.3～12.9mに分布している。

第8次調査外縁調査区1、2、3、5、6で近代の建物基礎を確認した。また外縁調査区8と9を除いた調査区で近代遺構面（第Ⅱ層）を確認した。第Ⅱ層は数面の硬化面からなっており、近代の間に整地が繰り返されていたことが分かった。硬化面の面数は調査区ごとに異なっており、各調査区の硬化面を対応させることはできなかった。

全体の遺構の残存状況を整理すると、近世遺構の多くは近代の兵舎と兵舎周辺の埋設物によってかく乱されていた。近代遺構も現代の廃棄土坑にかく乱されており、遺構の残存状況は悪いと言える。しかし庭園北側に設定した第8次調査外縁調査区7、9、10で近世遺構が確認できたため、北側は比較的近世遺構が残存していると考えられる。また、第7次調査庭園調査区1のようにかく乱が及ばない深い位置にある遺構は残存していた。

第2節 遺構の年代及び性格の比定

第4章第3節と本章第1節で遺構の年代比定を行った。本節ではその結果に絵図との対比を加えて、できるだけ年代幅を狭める作業を行った。発掘調査成果で明らかになった近世遺構と判断した遺構は表47の通りである。また、絵図と対比した結果も表47にまとめた。

検出した遺構と絵図の対比の際に絵図に描かれた構造物と出土遺構の同定作業も行った。同定作業は近代遺構にも行った。

確認した近世遺構の多くは19世紀前葉に徳川齊朝が二之丸庭園の改修を行った際の遺構と、19世紀後葉の様子を描いた絵図（『御城二之丸図』、『二之丸御庭道及踏石図』）から存在が確認できる遺構である。

二之丸に陸軍が入るのが明治6年（1873）であるが、兵舎は明治7年（1874）に二之丸の南側に、明治9年（1876）に二之丸の北側に建築される。第7次及び第8次調査の調査区は全て二之丸の北側に位置しているため、本調査で確認した近世遺構は二之丸の北側に兵舎が建築される明治9年（1876）頃の廃絶と考えられる。しかし後述する第8次調査外縁調査区5のように兵舎構築以前に構築されたと考えられる遺構が確認されており、廃絶時期が早まる可能性がある。

つまり発掘調査及び出土遺構と絵図を対比した結果、二之丸では近世に構築された遺構の廃絶がいわゆる明治時代（明治元年）以降となる。明治時代初頭まで近世の建物が存在していたため、以下、『御城御庭絵図』や『御城二之丸図』が成立した19世紀中葉から徳川家が二之丸を退去する明治6年（1873）までを近世末期とし、徳川家退去後から二之丸の北側に兵舎群が完成する明治9年（1876）までの間を近代初頭と表現する。

近世（19世紀中葉以前）の二之丸庭園

庭園

南池北岸に設定した第7次調査庭園調査区1で確認したG～Iは扁平な形状を持つことから飛石と考えることができるが、飛石を描いた絵図は存在しない。タタキについても同様である。一方で護岸に景石を描いた絵図は『御城御庭絵図』が存在し、景石群5が対応すると考えられる。調査区内で構築の順序が確認できる景石群5、景石群6、タタキ面が一連の作業の中で設置されたのであれば、すべて同時期に施工された近世遺構と考えることができる。SS4はタタキ面との間に礫敷が入っており、景石群やタタキ面との新旧関係を確認することができなかった。

築山と第7次調査庭園調査区2で確認した石A～FとHを『二之丸御庭道及踏石図』、『御城御庭絵図』で確認することができる。また、『御城二之丸図』、『二之丸御城御庭之図』、『二之丸御庭道及踏石図』、『御城御庭絵図』に「風信」が築山上に描かれている。第6次調査では築山上の土坑（01SK）を「風信」の礎石根固めと評価している。本調査区で確認したSK7は01SKと類似していることから同様の役割を持つと考えられるが、「風信」に関連する遺構であると特定することはできない。

外縁

二之丸庭園は19世紀前葉～後葉にかけて徐々に整備され、庭園の範囲は図5のようになることが明らかになった（第1章 第2節参照）。また、発掘調査で確認した境界を示す遺構を抽出して図示すると図62のようになる（第2章 第2節、第4章 第3節 第8次調査（3）～（12）参照）。

第2次調査で検出した溝が第8次調査外縁調査区10のSD52と外縁調査区7のSS43に接続する。第2次調査で検出した堀礎石列が第8次調査石53に接続する。第8次調査までに検出したこれらの遺構を推定ラインで結ぶことで、おおよその二之丸庭園北境界の位置が明らかになった。外縁調査区4のSS29を溝の南岸と推定して、二之丸庭園南境界の一部と考えた。二之丸庭園北境界などの既往の調査で確認した境界を示す遺

構と合わせて、二之丸庭園は東西約150m、南北約130mの規模で二之丸の北側に存在すると考えられる。

しかし巻頭1～3に掲載した絵図にあるように南境界は御殿の影響を受け、複雑に折れ曲がっている。このため、今回までの調査から二之丸庭園南境界の正確な形状を把握することはできなかった。また、推定を重ね、第8次調査外縁調査区1の石15を19世紀前葉～後葉にかけて設置された景石と仮定すると、南境界はSS29を西に延長し、南池に沿って北上し、途中で西に折れて石15より南を通過するラインを描くことができる。二之丸庭園の南境界については現状では推測が多くを占めているため、更なる調査が必要である。

外縁の構造については既往の成果を追認した。塀礎石と石組溝が並行し境界をなしている個所と塀礎石と石組溝のどちらか一方しか確認できない箇所がある。第8次調査外縁調査区10では前者であり、第8次調査外縁調査区4と7は後者である。調査区の面積が狭いため、塀もしくは溝にかからなかった可能性もあるが、溝が城外へ排水するために境界から外れて堀に向かっている可能性もあるため、更なる調査が必要である。

近世末期～近代初頭の二之丸庭園

第8次調査御殿調査区のSB2、SS3、SX4は構築時期は不明で近代に廃絶した遺構と評価した。19世紀中葉の庭園を描いた絵図や資料1～3でも確認することができないことから近世末～近代初頭の遺構と考えられる。SB2、SS3、SX4は図62で推定した庭園境界線の外、すなわち御殿空間に存在したと考えられる。SX4とSS3は絵図に現れない境界を示す遺構と考えられる。SB2は調査区内に収まらない大型の建物と推定できる。陸軍は1873年（明治6）に御殿を取り壊し、翌年に二之丸の南側にレンガ基礎を持つ建物を構築していることから礎石や束石を持つ大型の建物を1873年（明治6）から1876年（明治9）に構築することは考えにくい。したがってSB2は近世末の構築と考えられ、近世末における御殿空間の拡大を示している可能性がある。

第2章第2節でとりあげた庭園北側の暗渠は調査図面から暗渠内に近代遺物を確認しており、近世遺構をそのまま使用し続けたと考えられている。二之丸南側でも近世の石組溝内に近代遺物を確認しており、近代初頭まで存続していた近世遺構と考えられる。これらの例から近代初頭の間、陸軍は徳川家（近世）の遺構をそのまま、もしくは改修を行いながら使用し続けていたと考えられる。また、場合によっては兵舎よりも簡易的な構造物を構築していたと考えられる。

改修を行った例に第7次調査庭園調査区2の築山がある。築山は近世に構築されたと考えられるが、近代に入ると築山の南側を延ばして庭園を東西に分断する土塁に改修された。しかし築山の南斜面には近代以降に景石が据えられており、陸軍が庭園の修景を続けていたことがわかる。土塁は既存の築山を削り土塁としたか、新たに補築したか今回の調査で確認できなかった。

本章第2節であげた第7次調査外縁調査区の黄褐色粘質硬化面、第8次調査外縁調査区5のSD33は小規模な構造物の構築にあたると考えられる。

近代の二之丸庭園

発掘調査の結果、近代の生活面である第Ⅱ層を二之丸庭園北側を除いて概ね確認することができた。第8次調査庭園調査区で標高13.0m、第8次調査外縁調査区1で標高13.2m、外縁調査区2で標高13.1m、外縁調査区4で標高13.1m、外縁調査区6で標高13.0～13.2m、外縁調査区10で標高13.2mから検出しており、標高13.1m付近で平坦な面を構成していたと考えられる。

表 47 近世遺構一覧表

調査 次数	調査区	遺構	年代（構築/廃絶）		根拠	備考
			発掘調査成果	総合的な成果		
7	庭園調査区1	SS4	4層堆積以前	近世/1876年頃	層序	
7	庭園調査区1	景石群5	4層堆積以前	19世紀中葉 /1876年頃	御城二之丸図、金城温古録	
7	庭園調査区1	景石群6	4層堆積以前	19世紀中葉 /1876年頃	御城二之丸図、金城温古録	
7	庭園調査区1	タタキ面	景石群5,6以前	19世紀中葉 /1876年頃	層序	景石群5、6よりも下層 に位置するため
7	庭園調査区2	築山		19世紀前葉 /現存	層序 御城二之丸之図、二之丸御庭 道及踏石図、金城温古録	19世紀前葉以前に遡る 可能性あり
7	庭園調査区2	SK7		19世紀前葉の可 能性/近代か	既往の調査（6次）	
7	庭園調査区2	景石群10 石A～F		19世紀前葉 /現存	御城二之丸之図、二之丸御庭 道及踏石図、金城温古録	19世紀前葉以前に遡る 可能性あり
7	庭園調査区2	景石群10 石H		19世紀前葉 /現存	層序 御城二之丸之図、二之丸御庭 道及踏石図、金城温古録	19世紀前葉以前に遡る 可能性あり
7	外縁調査区	土塀	近世か	近世/現存	層序 徳川慶勝撮影写真	
8	外縁調査区1	石15	近世か	19世紀中葉か /1876年頃	層序 御城二之丸図、御城御庭絵図	
8	外縁調査区4	SS29	近世か	19世紀中葉 /1876年頃	層序 御城二之丸図、金城温古録	
8	外縁調査区7	SS43	近世	19世紀前葉～中 葉/1876年頃	層序、既往の調査 御城二之丸之図、二之丸御庭 道及踏石図、金城温古録	
8	外縁調査区9	SK49	近世か	19世紀前葉か /1876年頃	層序	
8	外縁調査区9	石50	近世か	19世紀前葉 /1876年頃	層序 御城御庭絵図、二之丸御庭道 及踏石図	19世紀前葉以前に遡る 可能性あり
8	外縁調査区10	SK51	不明	近世か /1876年頃	層序 既往の調査（第2次）	
8	外縁調査区10	SS52	不明	近世か/1876年 頃	層序 既往の調査（第2次）	
8	外縁調査区10	石53	近世	19世紀中葉 /1876年頃	層序、既往の調査（第2次） 御城御庭絵図、二之丸御庭道 及踏石図	
8	外縁調査区10	SD54	不明	19世紀中葉 /1876年頃	層序、既往の調査（第2次） 御城御庭絵図、二之丸御庭道 及踏石図	
8	外縁調査区10	壱円礫敷	不明	19世紀中葉以前 /19世紀中葉	層序 既往の調査（第2次）	

発掘調査成果から近代に構築されたと推定した遺構は29箇所、表48の通りである。表48中の資料1は『歩兵第六聯隊歴史』の挿図「歩兵第六聯隊配置図」、資料2は博物館 明治村所蔵の『名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊』（図版1）に収録されている600分の1図面、資料3は1955年発行の名古屋市の都市計画図である。資料1～3は『特別史跡名古屋城跡未告示地区（二之丸）第3次・第4次』で調査成果と照らし合わせた際に一定の精度を持つ図面と評価されている。これらを用いて遺構を復元し、図63に示した。

発掘調査成果と資料を照らし合わせた結果、第8次調査のSB12、SB18は第2次調査にて出土した煉瓦基礎と合わせて同一の建物であることがわかった。建物は資料1によると2MG及び5中隊兵舎、資料2によると第五六中隊兵舎と記載されている。資料2に付属している各建物図面によると建物の規模は南北40間（72.72m）、東西8間（14.54m）で2階建ての建物である。名称は両者で異なるが、配置から同じ建物を指していることがわかる。この建物の周囲に位置する柵13、柵19、管20～23は資料2で確認することができ、これらの遺構は第五六中隊兵舎の周囲を圍繞している。第8次調査のSB25は資料2によると洗面所である。洗面所の規模は資料2によると南北2間（3.64m）、東西10間（18.18m）である。SB25はSB12、SB18と比べると幅が細いが、建物が小規模で単層であるためと考えられる。小規模な建物は洗面所の他に第2次調査では厠、第4次調査では弾薬填替所が確認されている。どちらも煉瓦基礎を確認した。

第8次調査のSB30は資料2によると歩兵砲隊兵舎である。コンクリート敷とその下層のタタキ敷を確認した。端部を確認していないため、出土したSB30が歩兵砲隊兵舎のどこにあたるか明確ではないが、図63には測量図である資料3を用いて当てはめた。SB30の下層にSD33が存在する。新旧関係からSD33は二之丸庭園廃絶～歩兵砲隊兵舎建設までの間（19世紀後葉）の遺構と考えられる。

第8次調査のSB34とSB35は資料1～3によると第五六中隊兵舎（2MG及び5中隊兵舎）と同規模の建物である。資料1では6・7中隊兵舎、資料2によると第七中隊・第二機関銃隊兵舎と記載されている。SB35が外壁、SB34が内壁である。これら遺構に並行するSB36と管37は向かいに位置する第五六中隊兵舎で確認できず、据付けられている層が第Ⅱ面より上層であることから後補材と考えられる。しかし管37は資料2で見られる第七中隊・第二機関銃隊兵舎を圍繞する配管と位置が重なることから同じ位置に同様の遺構が近代に構築され、名古屋大学に移管後も修復や付け替えを行っていたと考えられる。

表 48 近代遺構一覧表

調査次数	調査区	遺構	資料1	資料2	資料3
7	庭園調査区1	SK3	×	×	×
7	庭園調査区2	景石群10石G	×	×	×
7	庭園調査区2	景石群11石J、L、M、N	×	×	×
7	外縁調査区	黄褐色粘質硬化面	×	×	×
8	御殿調査区	SK1	×	×	×
8	庭園調査区	柵5	×	△	×
8	庭園調査区	管6	×	△	×
8	庭園調査区	管7	×	×	×
8	庭園調査区	SD8	×	×	×
8	外縁調査区1	SB12	○	○	○
8	外縁調査区1	柵13及び土管	×	○	×
8	外縁調査区2	SK16	×	×	×
8	外縁調査区2	SB18	○	○	○
8	外縁調査区2	柵19	×	○	×
8	外縁調査区2	管20～23	×	○	×
8	外縁調査区3	SB25	×	○	△
8	外縁調査区5	SB30	○	○	○
8	外縁調査区5	SB32	×	×	×
8	外縁調査区5	SD33	×	×	×
8	外縁調査区6	SB34	○	○	○
8	外縁調査区6	SB35	○	○	○
8	外縁調査区6	SB36	○	○	○
8	外縁調査区6	管37	×	○	×
8	外縁調査区7	タタキ面	×	×	×
8	外縁調査区7	管42	×	△	×
8	外縁調査区8	SK47	×	×	×

第8次調査の榦5と管6は戦後の遺構と考えられるが、管37と同様に資料2で図示されている排水管及び榦と重なる位置で確認した。同じ位置に同様の遺構が近代に構築され、名古屋大学に移管後も修復や付け替えを行っていたと考えられる。

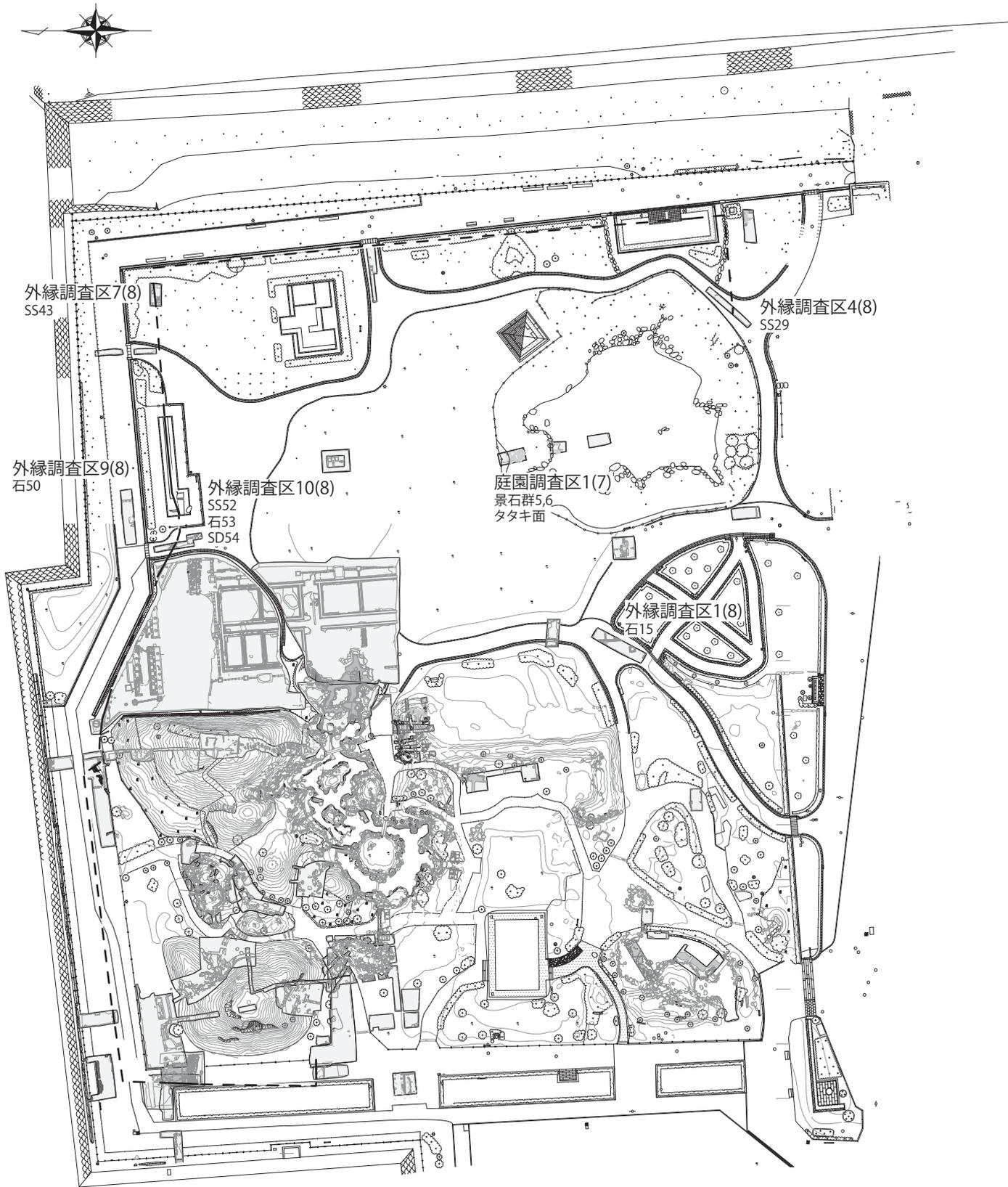
第7次調査外縁調査区は資料1～3によると拡張区を除いた全体が演武場の内部に位置している。しかし演武場に関する遺構は確認できず、黄褐色粘質硬化面が面的に広がっていた。黄褐色粘質硬化面は19世紀後葉と考えられる一方で、演武場は資料3から昭和30（1955年）以後も存在していたことが分かる。黄褐色粘質硬化面は演武場構築以前の陸軍による生活面と考えられる。なお、黄褐色粘質硬化面は出土遺物から少なくとも明治22年（1889）頃までの地表面であるため、演武場は明治22年（1889）以降に構築されたと考えられる。

まとめると、二之丸には1873年（明治6）に陸軍が、戦後に名古屋大学が入り、退去するまでの期間で3つの段階を設定することができた。

最初の段階は近世の遺構をそのまま、もしくは改修を行いながら使用し、場合によっては簡易的な構造物を構築していた時期である。近世遺構の再利用の例に既往の調査成果である庭園北側の暗渠や二之丸南側の石組溝がある。近世遺構を改修した例に第7次調査庭園調査区2の築山がある。新たに構造物を構築した例に第8次調査外縁調査区5のSD33と第7次調査外縁調査区の黄褐色粘質硬化面がある。この段階は基本的には明治6年（1873）から明治9年（1876）と考えられるが、兵舎（演武場）の構築が遅れる第7次調査外縁調査区付近では明治22年（1889）頃まで地表に露出していたと考えられる。

次の段階は兵舎群が構築された明治9年（1876）から陸軍が退去する昭和20年（1945）である。図63で示した遺構がこの段階に該当する。ただし、演武場の例のように兵舎群が一度に立ち並んだわけではないため、この段階に入る年代は二之丸の各箇所では異なっている。このときの生活面が標高13.1m付近に広がる第Ⅱ層である。

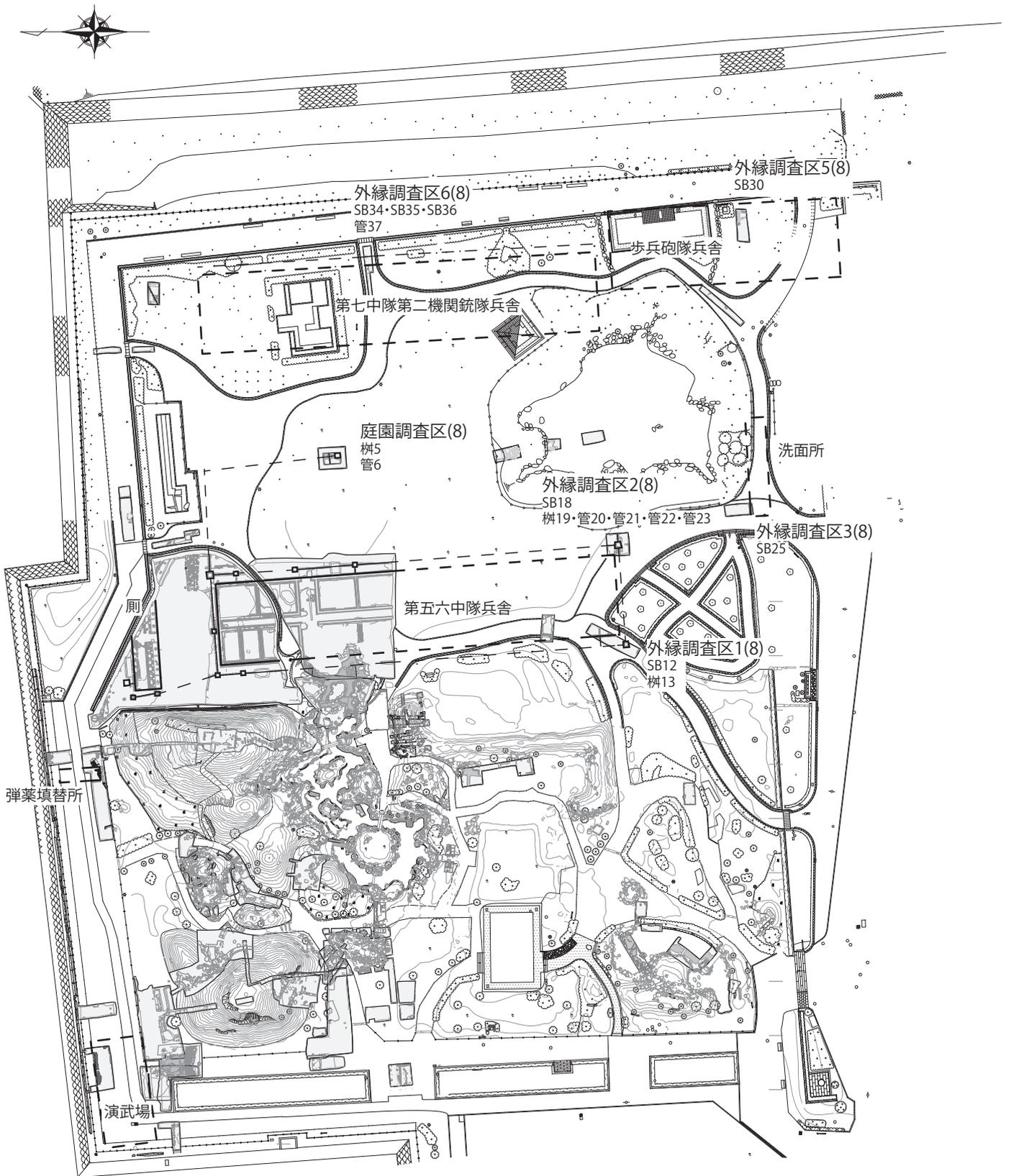
最後の段階は戦後、陸軍に代わって名古屋大学が二之丸に入った時期に前後して第Ⅱ面は廃絶し、新しい生活面が形成されたと考えられる。兵舎群は引き続き大学として使用され、榦5や管37等の遺構が更新されていたと考えられる。



実線は検出した遺構、破線は推定線を示す
 ()内は調査回数

0 (S=1:1000) 50m

図62 近世遺構集成



実線は検出した遺構、破線は推定線を示す
 ()内は調査回数

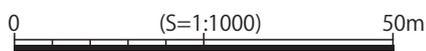
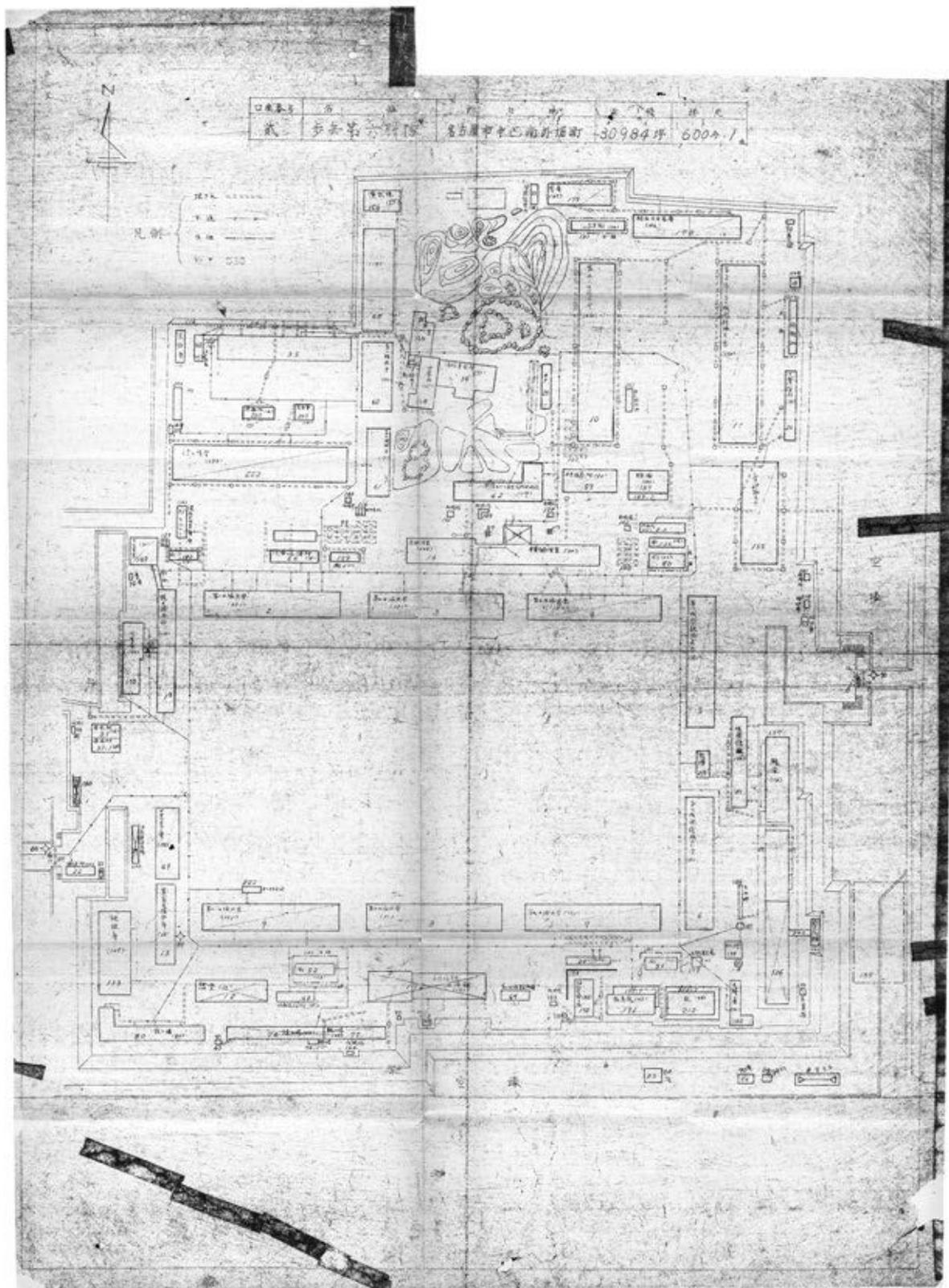


図63 近代遺構集成



名古屋城二之丸平面図 歩兵第六聯隊 (博物館 明治村蔵)

図版 2



第7次 庭園調査区1 1区 景石G,H,I 北から



第7次 庭園調査区1 1区 SS4 南から



第7次 庭園調査区1 1区 景石G,H,I 東から



第7次 庭園調査区1 2区 景石B,C,D 南東から



第7次 庭園調査区1 3区 タタキ面 南から



第7次 庭園調査区2 6区 東から



第7次 庭園調査区2 石B 南から



第7次 外縁調査区 北東拡張区 南から



第8次 御殿調査区 SB2 石L,O,P 抜き取りk SS3 西から



第8次 庭園調査区 0501出土状況 北から



第8次 外縁調査区4 SS29 西から



第8次 外縁調査区1 石15 北から



第8次 外縁調査区5 SD33 南から



第8次 外縁調査区3 SB25 南西から



第8次 庭園調査区6 SB35 東から



第8次 外縁調査区4 SS29 北東から

図版 4



第8次 外縁調査区7 SS43 西から



第8次 外縁調査区 9 SK49,石50 東から



第8次 外縁調査区9 石50 北から



第8次 外縁調査区10 SD54 北から



第8次 外縁調査区10 SS52 北から



第8次 外縁調査区10 SD54 南から



第8次 庭園調査区10 礫敷 北から



0101



0102



0103



0208



0203



0202



0204



0302



0111



0114



0110



0108



0309



0311



0109

图版 6



0501



0502



0503



0504



0505



0804



1401



1201



1301



0803



0901



0805



1302



1101



1202



0601



0516



0306



0302

图版 8



1403



0514



1303



0513



0603



0517



1204



0806



9901



0518



第7次調査外縁調査区出土 隠頭灯



表 22 掲載 銃弾

報告書抄録

ふりがな	めいしょうなごやじょうにのまるていえんはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書							
副書名	第7次・第8次							
シリーズ名	名古屋城調査研究報告9 埋蔵文化財調査報告6							
編著者名	高橋圭也・花木ゆき乃・今和泉大							
発行機関	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター							
所在地	〒460-0031 愛知県名古屋市中区本丸1番1号 TEL 052-231-2481							
資料の保管機関	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所							
発行年月日	2024（令和6年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めいしょうなごやじょう 名勝名古屋城 にのまるていえん 二之丸庭園	あいちけん 愛知県 なごやしなかく 名古屋市中区 にのまるばんばん 二の丸1番・2番	23100	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号 007001	35° 11' 05"	136° 54' 10"	2019/12/12 } 2020/3/27 2021/1/13 } 2021/3/23	212.39m ²	名勝整備
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城跡	城館	近世・近代		池・築山・塀・石 組溝ほか		瀬戸・美濃製陶磁器 瓦（施釉瓦を含む）ほか		—
要約	<p>名勝名古屋城二之丸庭園内に調査区を15か所設定し、近世における二之丸庭園の範囲と築山（北池南側の築山）、池（南池）の構築時期を確認した。</p> <p>近世における二之丸庭園の南境界と推定される石列を確認し、既往の調査成果と合わせて庭園が二之丸北側一帯で東西約150m、南北約130mの範囲で広がっていたと推定した。</p> <p>築山の構築時期は不明だが、近世～近代まで改修されながら維持され続けていたことが明らかになった。</p> <p>池からタタキ、景石、飛石を確認した。構築時期は不明で廃絶は近代の初頭である。</p>							

名古屋城調査研究報告9
埋蔵文化財調査報告書6

名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書

第7次・第8次

令和6年3月31日

編集・発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター

印刷 共生印刷株式会社